千葉県文化財センター

研　究　紀　要

14

財団法人 千葉県文化財センター

永田16号窯跡窯体検出状況

吉川窯跡遺物検出状況

上名主ヶ谷窯跡出土遺物

永田17号窯跡出土遺物

永田14号窯跡出土遺物

石川窯跡出土遺物

中原窯跡出土遺物

宇津志野窯跡出土遺物

発　刊　の　辞

財団法人千葉県文化財センターは、昭和49年11月の創立以来、埋蔵文化財に関する数多くの調査、研究および普及活動を実施してまいりました。その成果は、多くの発掘調査報告書等に発表されているとおりですが、研究活動につきましては、研究紀要の刊行をはじめとして独自の調査・研究事業を行ってまいりました。

研究事業の中心である研究紀要は昭和62年度から、第Ⅲ期計画として「房総における生産遺跡の研究」という統一した主題を選定し、瓦、玉、須恵器および埴輪の4回に分けて調査研究することとしました。これは、県内から出土した資料を収集し、調査・研究するとともに各生産遺跡相互の、あるいはまた、生産と消費のかかわりを解明することを目的とするもので、平成2年度に瓦、3年度に玉をテーマにそれぞれ刊行しました。

今回はその3冊目として「須恵器」について、当文化財センターが調査した遺跡の出土資料を中心に県内の出土例を集成し、いくつかの視点から検討を行いました。

大規模な集落遺跡にくわえて、窯跡の調査例が増加している今日、日常生活に密着した最も普遍的な資料の一つである須恵器をとりあげ、その生産と消費の実態に迫る試みはまことに時宜を得たものと考えております。

本書が、考古学の研究はもとより、埋蔵文化財調査の技術向上のための資料として広く活用されることを期待します。

平成5年12月

財団法人　千葉県文化財センター

理事長　奥　山　　浩

目　次

生産遺跡の研究 3

——須　恵　器——

発刊の辞 ……理事長　奥　山　　浩

はじめに

I　序　論 …… 3

1．県内須恵器研究の沿革…… 3

（1）県内須恵器窯跡の調査研究…… 3

（2）土器研究に占める須恵器の位置…… 5

（3）集落遺跡における在地産須恵器のあり方…… 5

2．研究の目的と方法…… 6

II　基礎資料 …… 7

1．県内須恵器窯跡の集成…… 7

（1）大和田窯跡…… 9

（2）永田・不入窯跡…… 9

（3）石川窯跡……37

（4）上名主ヶ谷窯跡……43

（5）南河原坂窯跡、坂ノ越窯跡……54

（6）下片岡窯跡……60

（7）中原窯跡……62

（8）宇津志野窯跡……74

（9）吉川窯跡……83

（10）八辺窯跡……90

2．胎土分析試料の概要……91

3．文献目録 ……101

III　各　論 ……106

1．須恵器生産の変遷 ……106

（1）古墳時代 ……106
（2）奈良・平安時代 ……112
2．須恵器生産の特徴と問題点 ……128
（1）県内須恵器窯跡の類型化と生産体制 ……128
（2）ロクロ土師器と須恵器 ……132
3．須恵器産地推定と胎土分析結果 ……133
Ⅳ　まとめ ……137
Ⅴ　特　論 ……139
千葉県内の2・3の窯跡、および遺跡出土須恵器の蛍光X線分析 ……139
図　版 ……157

〔研究ノート〕……201
1．服部哲則　「出土遺物脱塩処理法再検討のための実験研究」 ……201
2．島立　桂　「西南日本における細石刃文化の起源と展開」 ……213
3．小林清隆　「村田川の6～7世紀の土師器の再検討」 ……231

挿図目次

第１図　房総における窯業関連遺跡分布図……8
第２図　大和田窯跡、永田・不入窯跡、石川窯跡位置図（１：25,000　鶴舞）……10
第３図　大和田遺跡遺構位置図……11
第４図　大和田窯跡平面・断面図……12
第５図　大和田窯跡出土遺物……13
第６図　永田・不入窯跡確認トレンチ配置図……15
第７図　永田・不入、石川、上名主ヶ谷窯跡土器分類（１）……17
第８図　永田・不入、石川、上名主ヶ谷窯跡土器分類（２）……18
第９図　永田・不入、石川、上名主ヶ谷窯跡土器分類（３）……19
第10図　永田・不入、石川、上名主ヶ谷窯跡土器分類（４）……20
第11図　永田・不入、石川、上名主ヶ谷窯跡土器分類（５）……21
第12図　永田17号窯跡、１・２号溝、灰原Ａ・Ｂ位置図……23
第13図　永田17号窯跡、１・２号溝、灰原Ａ・Ｂ平面・断面図……23
第14図　永田17号窯跡出土遺物（１）……24
第15図　永田17号窯跡出土遺物（２）……25
第16図　永田５号窯跡平面・断面図……26
第17図　永田５号窯跡２次出土遺物……27
第18図　永田５号窯跡３次出土遺物……28
第19図　永田５号窯跡４次出土遺物……28
第20図　永田15号窯跡平面・断面図……30
第21図　永田15号窯跡出土遺物……31
第22図　不入１・２・４号窯跡平面・断面図……32
第23図　不入２号窯跡窯底、壁出土遺物……33
第24図　不入２号窯跡灰原出土遺物……33
第25図　永田16号窯跡平面・断面図……34
第26図　永田16号窯跡出土遺物……35
第27図　石川窯跡グリッド配置図……38
第28図　石川窯跡遺構位置図……39
第29図　石川窯跡遺構土層断面図……40
第30図　石川窯跡出土遺物（１）……41

第31図　石川窯跡出土遺物（２）……42
第32図　上名主ヶ谷窯跡位置図（１：25,000　木更津）……44
第33図　上名主ヶ谷窯跡遺構周辺地形および調査区位置図……45
第34図　上名主ヶ谷窯跡遺構周辺地形測量図……45
第35図　上名主ヶ谷窯跡遺構位置図……46
第36図　上名主ヶ谷２・４・５号窯跡平面・断面図（１）……47
第37図　上名主ヶ谷２・４・５号窯跡平面・断面図（２）……48
第38図　上名主ヶ谷４号窯跡出土遺物……48
第39図　上名主ヶ谷５号窯跡出土遺物（１）……49
第40図　上名主ヶ谷５号窯跡出土遺物（２）……50
第41図　上名主ヶ谷１号窯跡平面・断面図……51
第42図　上名主ヶ谷１号窯跡出土遺物……52
第43図　上名主ヶ谷１号窯跡灰原上出土遺物……53
第44図　南河原坂窯跡・坂ノ越窯跡位置図（１：25,000　東金）……54
第45図　南河原坂窯跡遺構分布図……55
第46図　南河原坂窯跡出土遺物（１）……58
第47図　南河原坂窯跡出土遺物（２）……59
第48図　下片岡窯跡位置図（１：25,000　蘇我）……61
第49図　下片岡窯跡出土遺物と窯体断面図……62
第50図　中原窯跡・宇津志野窯跡位置図（１：25,000　千葉東部）……63
第51図　中原窯跡確認トレンチ配置図……65
第52図　中原１号窯跡平面・断面図……67
第53図　中原２号窯跡平面・断面図……68
第54図　中原窯跡出土遺物（１）……69
第55図　中原窯跡出土遺物（２）……70
第56図　中原窯跡出土遺物（３）……71
第57図　中原窯跡出土遺物（４）……72
第58図　宇津志野窯跡確認トレンチ配置図……75
第59図　宇津志野１Ａ窯跡平面・断面図……77
第60図　宇津志野１Ｂ窯跡平面・断面図……78
第61図　宇津志野窯跡出土遺物（１）……80
第62図　宇津志野窯跡出土遺物（２）……81
第63図　吉川窯跡位置図（１：25,000　酒々井）……83

第64図　吉川窯跡確認トレンチ配置図……85
第65図　吉川１号窯跡平面・断面図……87
第66図　吉川窯跡出土遺物……88
第67図　八辺窯跡位置図（１：25,000　八日市場）……90
第68図　八辺窯跡出土遺物……91
第69図　胎土分析試料須恵器実測図……93
第70図　草刈六之台遺跡出土の須恵器と須恵器手法土器……107
第71図　八代宮ノ谷窯跡出土遺物……108
第72図　大和田窯跡と同様の溝を有する窯跡……110
第73図　大和田窯跡と同様の溝を有する窯跡出土遺物……111
第74図　永田・不入、石川窯跡須恵器変遷（案）……115
第75図　永田14号窯跡出土遺物……119
第76図　永田窯跡ＦⅡ～ＨⅡグリッド時期別窯跡分布図……121
第77図　永田・不入窯跡ＤⅢ・ＤⅣグリッド時期別窯跡分布図……122
第78図　削り出し高台を有する須恵器……123
第79図　東城寺寄居窯跡出土遺物……125
第80図　鹿の子Ｃ遺跡146号住居跡出土遺物……126
第81図　新木東台遺跡013Ａ住居跡出土遺物……127
第82図　宇津志野窯（千葉市）出土須恵器のRb－Sr分布図……140
第83図　吉川窯（富里町）出土須恵器のRb－Sr分布図……140
第84図　中原窯（千葉市）出土須恵器のRb－Sr分布図……140
第85図　石川窯（市原市）出土須恵器のRb－Sr分布図……140
第86図　上名主ヶ谷窯（木更津市）出土須恵器のRb－Sr分布図……142
第87図　千葉群と石川群の相互識別（K、Ca、Rb、Sr因子使用）……142
第88図　千葉群と上名主ヶ谷群の相互識別（K、Ca、Rb、Sr因子使用）……143
第89図　石川群と上名主ヶ谷群の相互識別（K、Ca、Rb、Sr因子使用）……143
第90図　岐阜群の須恵器のRb－Sr分布図……145
第91図　木葉下群の須恵器のRb－Sr分布図……145
第92図　久我台遺跡（東金市）出土須恵器のRb－Sr分布図……145
第93図　小屋ノ内遺跡（四街道市）出土須恵器のRb－Sr分布図……145
第94図　花前Ⅰ遺跡（柏市）出土須恵器のRb－Sr分布図……146
第95図　寺沢遺跡（富里町）出土須恵器のRb－Sr分布図……146
第96図　新橋遺跡（富里町）出土須恵器のRb－Sr分布図……146

第97図　妙経遺跡（東金市）出土須恵器のRb－Sr分布図……146
第98図　内野遺跡（茂原市）出土須恵器のRb－Sr分布図……147
第99図　不明となった須恵器のクラスター分析（K、Ca、Rb、Sr、Na因子使用）……147
第100図 不明の須恵器のRb－Sr分布図……148

表目次

第１表　大和田窯跡出土遺物法量表……9
第２表　永田・不入窯跡出土遺物法量表……36
第３表　石川窯跡出土遺物法量表……43
第４表　上名主ヶ谷窯跡出土遺物法量表……53
第５表　南河原坂窯跡出土遺物法量表……60
第６表　中原窯跡出土遺物法量表……73
第７表　宇津志野窯跡出土遺物法量表……82
第８表　吉川窯跡出土遺物法量表……89
第９表　胎土分析試料カード例……95
第10表　須恵器分析試料一覧（１）……96
第11表　須恵器分析試料一覧（２）……97
第12表　須恵器分析試料一覧（３）……98
第13表　須恵器分析試料一覧（４）……99
第14表　須恵器分析試料一覧（５）……99
第15表　須恵器分析試料一覧（６）……100
第16表　永田・不入窯跡杯・椀類技法分類表……113
第17表　永田・不入窯跡別器種構成表……114
第18表　胎土分析値……149
第19表　遺跡出土須恵器の産地推定……154

図版目次

巻頭図版１（上）永田16号窯跡窯体検出状況
（下）吉川窯跡遺物検出状況
巻頭図版２（上）上名主ヶ谷窯跡出土遺物
（下）永田17号窯跡出土遺物
巻頭図版３（上）永田14号窯跡出土遺物
（下）石川窯跡出土遺物
巻頭図版４（上）中原窯跡出土遺物
（下）宇津志野窯跡出土遺物

図版１（上）大和田窯跡窯体および焼台検出状況
（下）大和田窯跡煙道部および天井部残存状況
図版２（上）永田窯跡遠景
（下）永田17号窯跡窯体断面
図版３（上）上名主ヶ谷窯跡窯体検出状況
（下）下片岡窯跡窯体断面
図版４（上）宇津志野窯跡窯体検出状況
（下）吉川窯跡窯床検出状況
図版５　大和田窯跡出土遺物（１～４）・永田17号窯跡出土遺物（５～11）
図版６　永田17号窯跡出土遺物（12～19）
図版７　永田17号窯跡出土遺物（20～22）・永田５号窯跡出土遺物（23～30）
図版８　永田14号窯跡出土遺物（31～40）
図版９　永田15号窯跡出土遺物（41～46）・不入２号窯跡出土遺物（47～49）・永田16号窯跡出土遺物（50～52）
図版10　永田16号窯跡出土遺物（53～60）
図版11　石川窯跡出土遺物（61～70）
図版12　石川窯跡出土遺物（71～77）
図版13　上名主ヶ谷窯跡出土遺物（78～86）
図版14　上名主ヶ谷窯跡出土遺物（87～91）
図版15　中原窯跡出土遺物（92～103）
図版16　中原窯跡出土遺物（104～115）

図版17　中原窯跡出土遺物（116～121）
図版18　宇津志野窯跡出土遺物（122～130）
図版19　宇津志野窯跡出土遺物（131～138）
図版20　吉川窯跡出土遺物（139～144）
図版21　吉川窯跡出土遺物（145～148）

はじめに

調査研究部長　高木博彦

財団法人千葉県文化財センターは、創立以来、埋蔵文化財の発掘調査とともにこれに係わる研究活動を主要な業務として積極的に対応してきた。個々の研究は日々、各々の調査現場、また報告書の作成等それぞれの場において常に行われているが、それとともに当文化財センターとして一定のテーマのもとに共同研究を行ってきた。この共同研究の成果は『千葉県文化財センター研究紀要』（以下研究紀要と略す）として逐次刊行され一定の評価を得ているものと自負するところである。研究紀要は文字どおり職員の研究成果を世に問うもので、昭和51年に第1号を刊行して以来今回で14号をかぞえる。この間、昭和61年3月刊行の創立10周年記念号を記念論文集として刊行したのを除いて特定テーマによるシリーズとして刊行され、第Ⅰ期（第1号～第5号）は『考古学から見た房総文化の解明』という主題のもとに5冊にわたっていわゆる原始古代の房総文化の解明を試み、あるいはまたそのための資料の集成を行った。第Ⅱ期は『自然科学の手法による遺物・遺跡の研究』として自然科学的分析の考古学分野への応用に関する問題について研究しその成果を第6号から第11号まで、昭和56年度から昭和61年度までの間に刊行した。

昭和62年度からは『生産遺跡の研究』をシリーズの統一テーマとして掲げ共同研究活動を実施してきている。『生産遺跡の研究』は瓦、玉、須恵器、埴輪の個別の主題について各々担当者をきめて調査研究にあたりその成果はすでに研究紀要12号として「瓦編」を、13号として「玉編」をそれぞれ刊行してきた。

須恵器については、平成2年度以来研究部（平成5年度からは調査研究部資料課）の兼務業務として、別に記す職員を中心に鋭意調査・研究を重ねてきたところであるが、今回その成果をまとめて研究紀要14号としてここに上梓するにいたった。

ここで改めて言及するまでもないが、須恵器は古墳時代から奈良・平安時代まで、伝統的な土師器とともに当時の社会にあって最も基本的な什器であった。須恵器を今般のテーマである『生産遺跡の研究』という視点からとらえた場合、窯という特定の構造を有する施設が不可欠であること、またそれぞれの窯に特有の特徴が抽出でき、消費の場から生産窯の特定が可能なことなど生産と消費の関係をとらえるには格好の対象ということができる。

千葉県において、現段階で存在が確認されている須恵器窯跡は、市原市永田・不入窯跡はじめ11か所をかぞえ、その分布は北は富里町、南は木更津市まで知られているが市原市と千葉市、

別の言い方をすると上総国、下総国の接点を中心とする地域に比較的集中している傾向がみてとれる。この傾向は今後、新たな資料の発見を見込んでも基本的には大きく変化をみせることはないであろう。

今回の研究の視点として、生産の場である須恵器窯を集成しその総合的検討を試みると同時に、各窯の製品である須恵器について考古学的観察と比較をつうじてその供給先について可能な限り追跡を試みた。消費の場は、通常の集落は言うにおよばず上総国分寺などの古代寺院まできわめてひろい範囲におよんでいるが、これらの須恵器を既知の須恵器窯跡およびそこで生産されたものに的をしぼって資料を収集し、調査・研究したものである。

市原市大和田窯跡は6世紀後半から7世紀前半に位置づけられており、現在知りうる房総地方における最も古い須恵器窯である。このほかにも古墳時代の須恵器の生産をうかがわせる断片的な資料はいくつか知られているが須恵器生産と消費の実態はまだ今後の研究にまつところが多いようである。上総国における須恵器生産の次の画期を、天平13年(741) の聖武天皇の詔勅に端を発する上総国分寺の創建に関連して求めることは十分な蓋然性をもちうるといえよう。現在のところ上総国では、市原市の永田・不入窯跡が奈良時代の須恵器窯跡として最も古い段階とされており、この窯の須恵器と上総国分寺の創建期の資料との関係に大いに関心がもたれるところである。しかし、両者の詳細な検討を踏まえるとき上総国における奈良時代の須恵器生産の始期に関して微妙な問題が提起されてくるようである。

須恵器窯跡の詳細な検討および出土資料の比較研究という考古学的手法に加えて、今回は胎土の分析比較という自然科学的手法にも注目し斯界の権威である奈良教育大学三辻利一教授に分析を依頼し、その成果についてレポートをいただき本編を飾ることができた。

本編の刊行、それに先行する共同研究において、永田・不入窯の資料について千葉県立房総風土記の丘から特段の便宜をいただいた。そのほか、今回の須恵器の研究にあたっては多くの関係機関および個人の方々のご指導とご協力をいただいた。次に機関名・ご芳名を掲げ各位のご協力について深く感謝の意を表するものである。

〈機関等〉(順不同)

千葉県立房総風土記の丘　市原市教育委員会　富里町教育委員会　(財) 千葉市文化財調査協会　(財) 長生郡市文化財センター

〈個　人〉(五十音順)

青沼道文、飯村　均、石田明夫、今泉　潔、大原正義、尾野善裕、川井正一、木元元治、倉内郁子、倉田義広、黒田隆志、後藤建一、酒井清治、阪田正一、篠原　正、須田　勉、清藤一順、高橋照彦、高橋康男、田所　真、田辺昭三、巽　淳一郎、津田芳男、津野　仁、中原幹彦、英　太郎、菱田哲郎、平野幸伸、堀越知道、宮内勝己、村田六郎太、望月精司、山下亮介、横田　宏、吉田恵二、吉田博行、渡辺　一、渡辺博人

本編が県内外を問わず今後の須恵器とその生産についての研究にいささかなりとも卑益するところがあるとすれば幸いである。各位からのご指導とご鞭撻を期待するとともに広く活用されることを願うものである。

なお、本編の担当者、執筆分担は以下のとおりである。

〈担当者〉

平成２年度　奥田正彦、郷堀英司、小林信一

平成３年度　谷　　旬、郷堀英司、小林信一

平成４年度　谷　　旬、郷堀英司、小林信一

平成５年度　谷　　旬、郷堀英司、小林信一

〈執筆分担〉

谷　旬　　Ⅰ、Ⅱ-２・３

郷堀英司　　Ⅱ-１・３、Ⅲ、Ⅳ

小林信一　　Ⅱ-１・３、Ⅲ、Ⅳ

三辻利一　　Ⅴ

本編には共同研究の成果に加えて『研究ノート』として、かつて在籍した職員による下記の３編の論考を掲載した。多忙を極める本務のかたわら示唆に富む論考を寄せられた諸氏の意欲を多とするとともに広く大方のご指導とご叱声を期待するものである。

なお、本編の構成・編集および平成２年度から今年度までの間の共同研究のとりまとめについては調査研究部資料課主任研究員（平成４年度までは研究部長補佐）渡辺智信があたった。

小林清隆　「村田川流域の６～７世紀の土師器の再検討」

島立　桂　「西南日本における細刃器文化の起源と展開」

服部哲則　「出土遺物の脱塩処理法再検討のための実験研究」

生産遺跡の研究 3

― 須恵器 ―

Ⅰ 序　　論

1．県内須恵器研究の沿革

県内における須恵器生産にかんする研究は、窯跡群の調査例が少ないことや大規模な発掘調査を経ていないことなどから、現段階ではやっとその端緒についたばかりで、決して活発な議論が交わされてきたものではない。ここでは、まず窯跡調査研究の経緯から小史を起こすこととするが、奈良・平安時代の土器研究に占める須恵器の位置付けについてもあわせて概観することが千葉においては理解されやすいと考える。

（1）県内須恵器窯跡の調査研究

須恵器そのものにいまだ関心のなかった大正時代に、笠井新也氏等は「古代製陶所」遺跡にかんする報告を『考古学雑誌』に立て続けに発表した（文献２・３）。これよりさきに大西源一氏は『延喜式』や『和名抄』によって、「上古の製陶所」の存在を指摘しているが（文献１）、笠井氏等は踏査により近畿地方を中心とした遺跡の分布調査をおこない、これら窯跡から発見される「古代陶器」に注意を喚起した（文献３）。

こうした窯跡の分布を中心とした調査研究の成果は、数十年の後、小山富士夫氏の集大成ともいうべき地名表にまとめられて行くが、千葉県においてはこの時期にいたるまでわずかに「上総国周准郡」内に所在する可能性が指摘されているに過ぎない（文献８）。

また一方では地道な分布調査は研究者に刺激をあたえ、窯跡自体に目を転じさせて行くこととなる。石川恒太郎氏は発掘調査の実績を基に、1944年「須恵器窯址考」をまとめ、地形・形式・名称や窯構造などに踏み込んだ研究成果を披瀝した（文献７）。

これをうけて、各地においても発掘調査が行われ、窯構造や年代観に示唆をあたえるものがでてきて、用語・個別名称などを統一しようとする動き（文献10）や窯業を行うに当然付属すべき施設の発掘調査の提唱など今後の研究の道筋をつける論考が多く発表された（文献11）。

つぎに、大規模な発掘調査による窯跡群の発見が相次ぐ時期が到来する。猿投山窯跡群（文献30）や陶邑窯跡群（文献17）の調査である。この調査によって、古墳時代中頃からの初期須恵器の様相や奈良・平安時代にいたる大方の変遷に決定的な裏付けが得られ、型式編年が確立されることとなった。

これと同時に、大量生産され、商品として流通した須恵器のもつ斉一性から、日本全体を見据えた編年の尺度として、1960年代末から1970年代にかけて各地方における窯跡の調査研究がさかんに行われるようになる。

岩手県瀬谷子（文献12）や福岡県牛頚（文献13）窯跡群では、住居跡や土坑など付属施設の

発見が相次ぎ、東京都南多摩地区（文献28）、埼玉県南比企地区（文献69）では広範な地域にわたることが確認された。個別窯跡群の学術調査も、北は山形県から九州まで広く行われ、千葉県の永田・不入窯跡（文献20）もこの時期から県内産須恵器のメルクマールとして注目されることになる。

1980年代にはもうひとつの動きがみられる。熊本県において生産遺跡の基本調査（文献32）が実施されたのを皮切りに、埼玉県（文献69）・千葉県（文献64）などでも全県的な取り組みとして詳細な分布調査が試みられている。また一方では、福島県大戸（文献76）・静岡県湖西（文献98）など大規模な窯跡群の詳細な遺構所在確認も勢力的に行われ、地域一帯の保存を含めた取り組みがみられる。

千葉県においても現地踏査の成果に基づいて、須恵器窯跡の研究が開始されたことは前述したとおりであるが、1960年代から本格的な窯跡研究の時代となる。

とくに窯跡の新たな発見と、その性格の把握に大きな前進がみられる。木更津市矢那における2基の瓦窯跡の発見（文献9）や市原市石川採集の土器の報告（文献54）などが、さらに千葉市やその周辺において中原窯跡・宇津志野窯跡（文献43）、吉川窯跡（文献33）が相次いで発見された。また下総東部地区でも、はじめて八辺窯跡（文献50）の資料が紹介された。

また、以前からその存在が知られていた永田・不入窯跡の國士館大学による確認調査が行われるに至って、発掘調査による窯跡の解明に着手されるようになった。1982年には大規模な発掘調査によって、千葉市南河原坂遺跡群のなかに土器生産遺跡の所在が明らかにされた（文献56）。

このような個別調査の成果に基づいて、千葉県教育委員会では、1986年に前述した悉皆調査を実施し、1987年からは毎年度、重要遺跡確認調査の長期計画の一環として須恵器窯跡の学術調査を実施中である。

まずはじめに石川窯跡が調査され、窯跡3基の他住居跡も確認された（文献75）。次の年には木更津市上名主ケ谷窯跡を調査し、瓦窯や瓦陶兼用窯とともに無階無段の窖窯の好例が追加された（文献80）。1988年から3年間は中原窯跡（文献87）、吉川窯跡（文献90）、宇津志野窯跡（文献93）といった下総地域の窯跡群が調査され、1基から2基程度の小規模な一群の存在が明らかにされた。1992年には三度目の学術調査となる永田窯跡の発掘が実施され、窯跡群の広がりがさらに拡大し、操業期間もかなり長期にわたることが判明した（文献102）。

この一連の確認調査によって、窯構造がわずかながらでも明らかにされつつあり、窯体内からの資料を得ることができたことは、千葉県の窯跡研究を飛躍的に進展したといってよいであろう。

こうした背景の基にいくつかの重要な研究がなされた。1987年の房総歴史考古学研究会の須恵器生産遺跡の論考により、上総・下総の実体がほぼ明らかにされ（文献67）、1989年には田

所　真氏により須恵器窯跡の詳細な研究史がとりまとめられ（文献81)、今後の研究に多大な貢献をのこしたものといえる。

（2）土器研究に占める須恵器の位置

戦前に杉原荘介氏によって、古墳時代から歴史時代に掛けての土器編年が提唱されている。まず、市川市域などの調査成果から、前野町式－鬼高式－須和田式の編年を表し（文献５)、次に「原史学序論」のなかに和泉・鬼高・真間・国分式の序列表を掲載した（文献６)。

その後、しばらくのあいだ土器編年に対する研究は、あたらしい知見を加えることなく1970年代を迎え、高島忠平氏による平城京の調査成果を基にした施釉陶器の実年代が発表されることによって、相対な年代観から一気に実年代に踏み込むことが可能になった（文献14)。一例として西野　元氏（文献15）や星野達雄氏（文献22）の「国分式土器」の分析、研究をみることができ、その集大成が杉原荘介・大塚初重両氏による『土師式土器集成』である（文献16)。

ここまでは集落遺跡から出土した土師器と施釉陶器を基にした土器編年であり、須恵器を主題として取り上げることはほとんどなされていない。生産遺跡の調査例に乏しかった時期においては、いたしかたないことではあるかもしれない。

こうした状況のなかで松村恵司氏は、山田水呑遺跡において個別集落の出土土器の分類と共伴関係を緻密に分析し、編年研究につなげる方法を確立した（文献23)。

1981年、酒井清治氏は集落遺跡出土の須恵器から、在地生産を推定する手法で今後の研究の進め方を予察している（文献35)。この段階で発掘調査により判明した永田・不入窯跡群の資料を定点におきながら、「同心円叩き甕」などの分布からそれ以前－古墳時代－の下総地方における須恵器生産の可能性に言及している。

おなじころ、関東地方の土器編年の研究成果が、相模国と周辺地域中心に集大成された（文献34)。また房総地域では佐久間豊氏の綿密な須恵器杯等の分類により、下総・上総地域の差異が認識されるようになり（文献45)、さらに集落および永田・不入窯跡出土の土器編年を「房総における奈良・平安時代の土器」において提示し、この差異を確認するに至った（文献46)。

この認識にたって、房総歴史考古学研究会による研究成果が発表されたなかで、須恵器生産遺跡の実態も同じ土台の上で論じられることによって、房総におけるさらに細かな地域性とともに生産遺跡からみた土器研究の真価が問われることとなった（文献67)。

（3）集落遺跡における在地産須恵器のあり方

永田・不入窯跡発掘調査の結果、ようやく在地産須恵器の分布－供給範囲－が実態をもって大きなテーマとして取り上げられるようになってきた。1970年代後半には、すでに市原市における坊作遺跡（文献72)、東金市山田水呑遺跡（文献23）などに永田・不入窯産の須恵器の存

在が認識された。

また、近年の集落遺跡発掘調査報告書のなかには、須恵器の産地推定により時期編年をより明らかにしようとする試みが認められるものも多くなってきた。

東金市久我台遺跡では、平安時代の須恵器について、その大半が千葉市域からもたらされたものとして、中原・宇津志野窯産の存在を明らかにしている（文献77)。佐原市吉原三王遺跡においては、奈良時代、平安時代前期を中心に常陸産の須恵器に注目している（文献86)。

別の視点からこの問題に取り組んだものに胎土分析がある。千葉県文化財センターは、その『研究紀要８』で出土遺物の胎土分析の一つとして、県内須恵器窯跡出土のものを蛍光X線による分析を行い、印旛郡・千葉市・市原市の３地域に大別できることを明らかにした（文献57)。この成果は、今後集落遺跡の須恵器の分析から、産地推定が可能になったことを意味する。

２．研究の目的と方法

生産遺跡の研究の第三段として須恵器生産を取り上げた背景には、やはり全国的な調査研究の著しい進展がある。北海道・南西諸島を除き日本列島のどの地域からも窯跡の存在が知られ各々の地域で須恵器の生産と流通・消費が解明されるようになってきたのが現状である。

千葉県においては、現在11か所の窯跡または窯跡群が発見されており、前述したように計画的に調査がなされ、窯本体の資料はもちろんのこと遺物の数量もかなりのものとなってきた。全国と比較してみれば、遺跡数もその規模も非常に見劣りすることは事実ではあるが、今後著しく事例が増加するとの見通しは期待できず、現段階での総括を行うこととした。

本書では、各窯跡の概要をとりまとめて基礎資料として提供することがまず第一の目的である。また窯跡出土の須恵器と集落遺跡出土のものを、科学的分析結果と視覚的観察の双方からみることで、より確実で解りやすく比較できる方法を模索することをもう一つの目的と考え、胎土分析を、奈良教育大学三辻利一教授に委託して実施した。

II　基礎資料

1．県内須恵器窯跡の集成

県内の須恵器窯跡は、第1図に示したように東京湾に流入する養老川・村田川・矢那川の各水系域に分布する上総地域の諸窯、印旛沼に流入する鹿島川・高崎川の水系と太平洋に流入する栗山川水系に位置する下総地域の須恵器窯がある。なお、この窯業関連遺跡分布図は、国郡域については竹内理三編『荘園分布図』（文献18）を、遺跡分布は『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』（文献64）をもとにして作成した。

上総地域には、古墳時代の須恵器窯として唯一調査の手が加えられている大和田窯跡と、県内最大の規模を誇る永田・不入窯跡群や南河原坂窯跡群が存在しており、小規模な操業となる下総地域の諸窯ときわだった違いをみせている。

県西部地域では須恵器窯は検出されておらず、旧下総国結城郡に位置する茨城県三和町に尾崎浜ノ台窯跡（文献96）等が存在するが、いずれも小規模な操業であり、下総地域では須恵器生産の痕跡がきわめて限られたものとなっている。

ここでは、須恵器生産遺跡として確認できている県内の11窯跡について、その概要をまとめた。

上総地域では古墳時代の所産である大和田窯跡を除いて、永田・不入窯跡・石川窯跡・上名主ヶ谷窯跡の遺物の特徴が同系列としてとらえられ、窯体内資料も充実したものが多いことから、これら三窯跡の遺物について共通の分類基準を設けている。

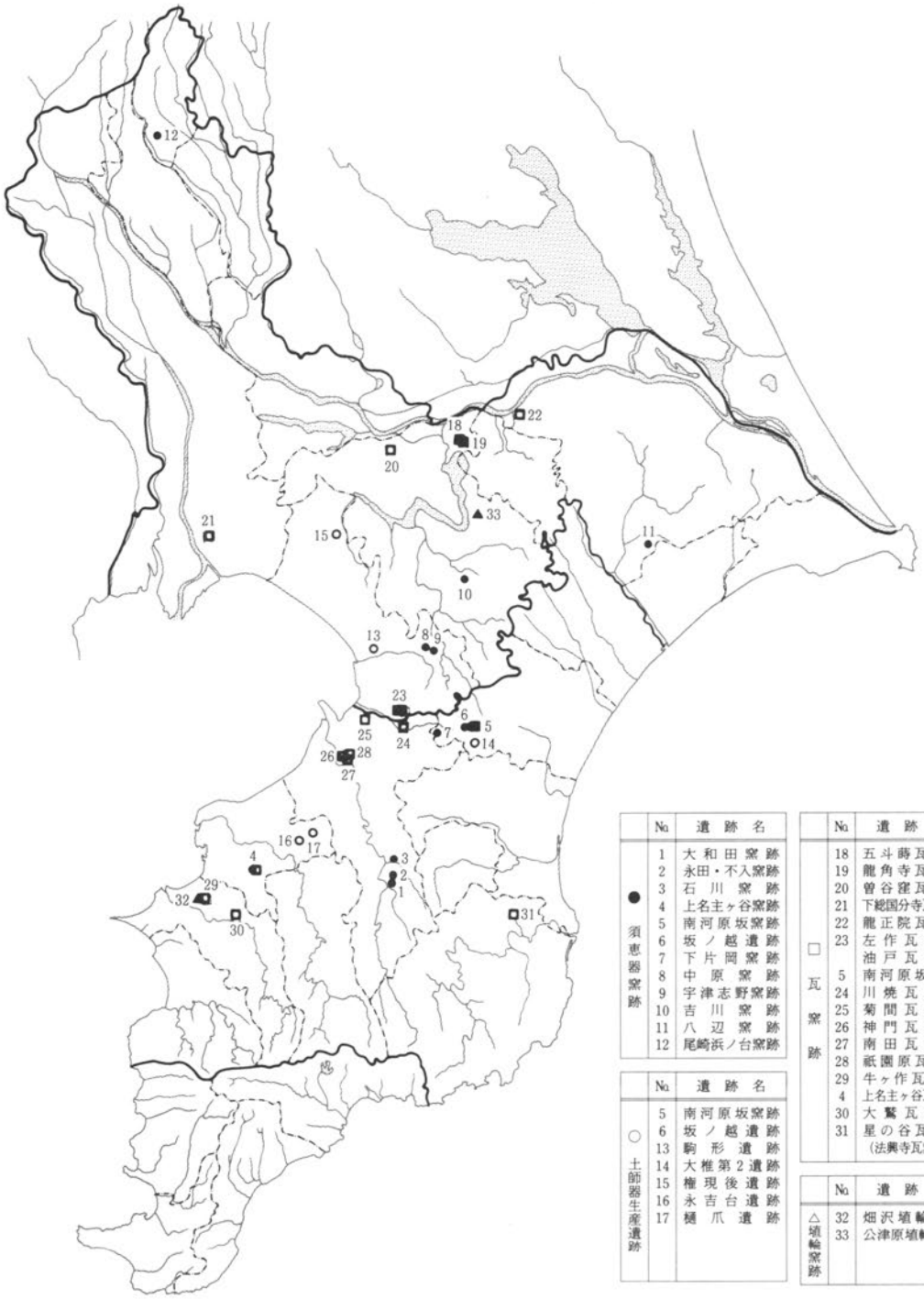
南河原坂窯跡・坂ノ越窯跡については現在整理作業中であるため、これまでに公表されている調査概報や現地説明会資料によっている。また、下片岡窯跡は窯体断面が露頭しているだけの未調査遺跡である。

下総地域では吉川窯跡・中原窯跡・宇津志野窯跡の調査が実施されているが、いずれも小規模な確認調査であり、八辺窯跡は未調査遺跡である。このため、資料の提示方法については統一することができなかった。

また、法量値についても報告書中に掲載されていないものもあるために、掲載図から計測したものもあることを断っておく。

基礎資料として以下に集成する各窯跡の資料は、本文中に引用した各文献から加筆・転載し、遺物の縮尺については原則として杯類1/3、甕類1/6として掲載している。

今後正式報告書など刊行された際に、追加・訂正の必要が生じるであろうことは充分予想され、あくまでも現段階の認識であることをつけ加えておく。



	No.	遺跡名
● 須恵器窯跡	1	大和田窯跡
	2	永田・不入窯跡
	3	石川窯跡
	4	上名主ヶ谷窯跡
	5	南河原坂窯跡
	6	坂ノ越遺跡
	7	下片岡窯跡
	8	中原窯跡
	9	宇津志野窯跡
	10	吉川窯跡
	11	八辺窯跡
	12	尾崎浜ノ台窯跡

	No.	遺跡名
○ 土師器生産遺跡	5	南河原坂窯跡
	6	坂ノ越遺跡
	13	駒形遺跡
	14	大椎第2遺跡
	15	権現後遺跡
	16	永吉台遺跡
	17	樋爪遺跡

	No.	遺跡名
□ 瓦窯跡	18	五斗蒔瓦窯跡
	19	龍角寺瓦窯跡
	20	曽谷窪瓦窯跡
	21	下総国分寺瓦窯跡
	22	龍正院瓦窯跡
	23	左作瓦窯跡
		油戸瓦窯跡
	5	南河原坂窯跡
	24	川焼瓦窯跡
	25	菊間瓦窯跡
	26	神門瓦窯跡
	27	南田瓦窯跡
	28	祇園原瓦窯跡
	29	牛ヶ作瓦窯跡
	4	上名主ヶ谷瓦窯跡
	30	大鷲瓦窯跡
	31	星の谷瓦窯跡（法興寺瓦窯跡）

	No.	遺跡名
△ 埴輪窯跡	32	畑沢埴輪窯跡
	33	公津原埴輪窯跡

第1図　房総における窯業関連遺跡分布図

（1）大和田窯跡（第2～5図）

市原市大和田字緑岡371－16に所在する古墳時代後期の須恵器窯跡であり、県内で確認されている須恵器窯跡の最古の窯跡である。大和田窯跡（文献78）は、養老川中流域東岸の台地上に立地し、この台地は小谷によって開析され、痩せ尾根が連続してみられる。台地の南側前面には、養老川沖積地が広がり、非常に見晴らしがよい場所である。

調査は市原市の市道建設にともない、1896年7月20日～1987年2月21日まで行われ、1,800㎡の調査面積のなかから、土壙1基、竪穴住居跡1軒、溝1条、古墳3基、横穴墓16基と須恵器窯跡1基が検出された。なお、後述する永田・不入窯跡群は本遺跡から7～800mの距離にみられる。また、西方に約1km離れた地点には本窯跡と同時期の番後台遺跡がある。

大和田窯跡は標高60mほどの斜面にトンネル式にくり貫かれた窯であり、窯体の下半は後世の切り通しによって破壊されており、煙道部を含めても約3.5mの残存である。しかし、煙道部付近の遺存状態は良好であり、天井が残存しており、煙道部上方から東下方には排水溝と考えられる溝が検出された。遺物は窯体内から3個体、溝底面から8個体の実測可能な須恵器が出土した。いずれも焼成が不十分で、暗灰色または暗褐色であり、軟質で生焼けの感がある。杯は口径が13.6cm、最大径が16cmで、底部外面にはヘラ切り痕が残存する。蓋は口径が15.4cmと大型で、杯の蓋と考えられるものと口径が10.9cmの蓋が出土している。また、短頸壺がみられ、甕の破片も出土している。甕の内面には同心円文の当て具痕跡がみられ、それらはわずかにナデられている。

なお、遺跡内の横穴墓は、この須恵器窯とほぼ同時期のものであると考えられるが、本窯跡の製品はそのなかには認められない。

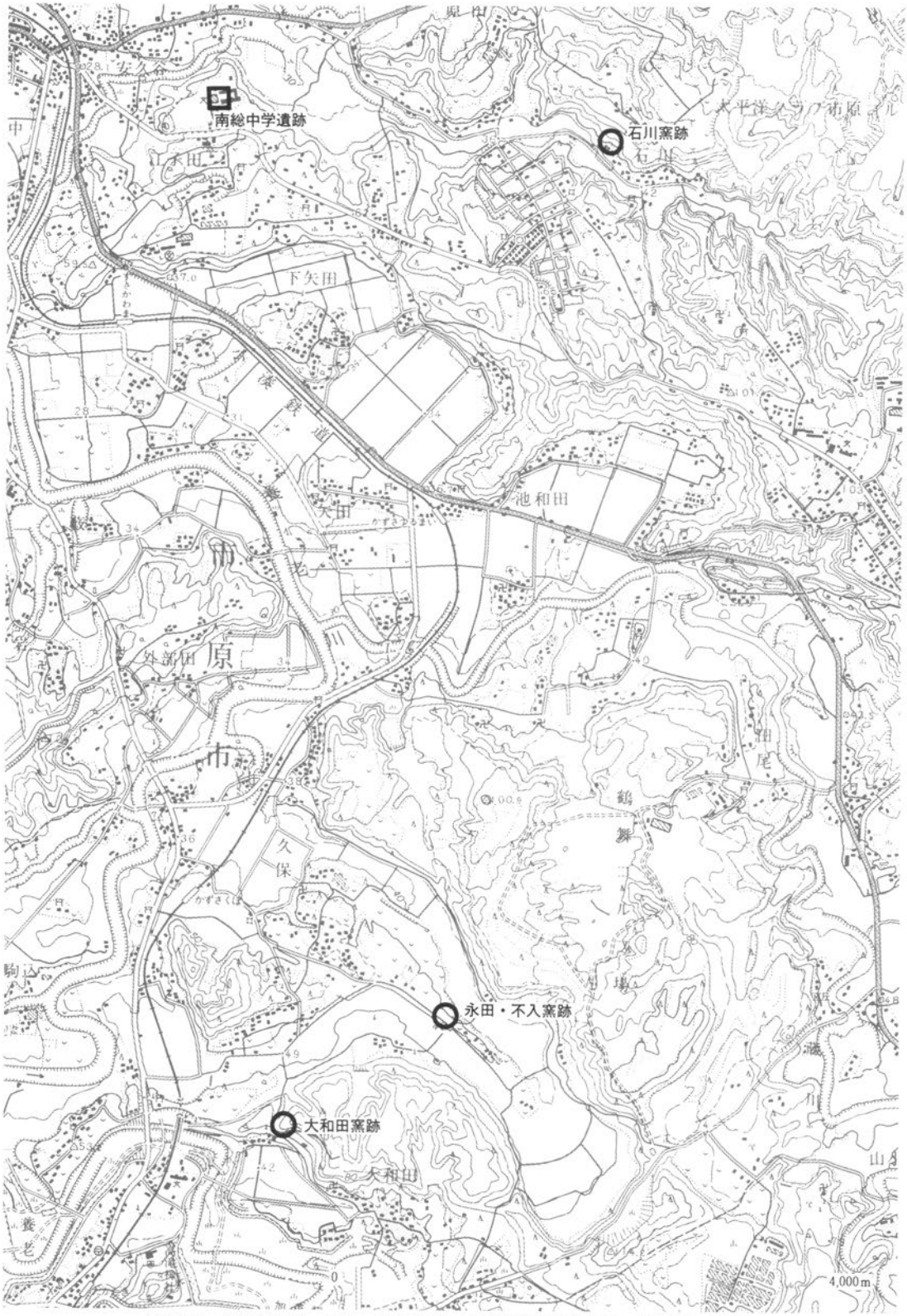
第1表　大和田窯跡出土遺物法量表　（　）は推定値

番号	器種	口径	器高	底径	分類	出土地点	図版
1	蓋	15.4	5.0			溝出土	4-1
2	杯	13.6	4.8			〃	4-2
3	蓋	15.4	4.2			〃	
4	椀	16.7	7.1			〃	4-3
5	壺	10.6	17.2			〃	
6	〃	11.0	16.7	11.0		〃	4-4
7	壺					溝出土	
8	〃					〃	
9	〃			10.8		窯内	
10	〃	(10.8)				〃	
11	蓋	(10.9)				〃	

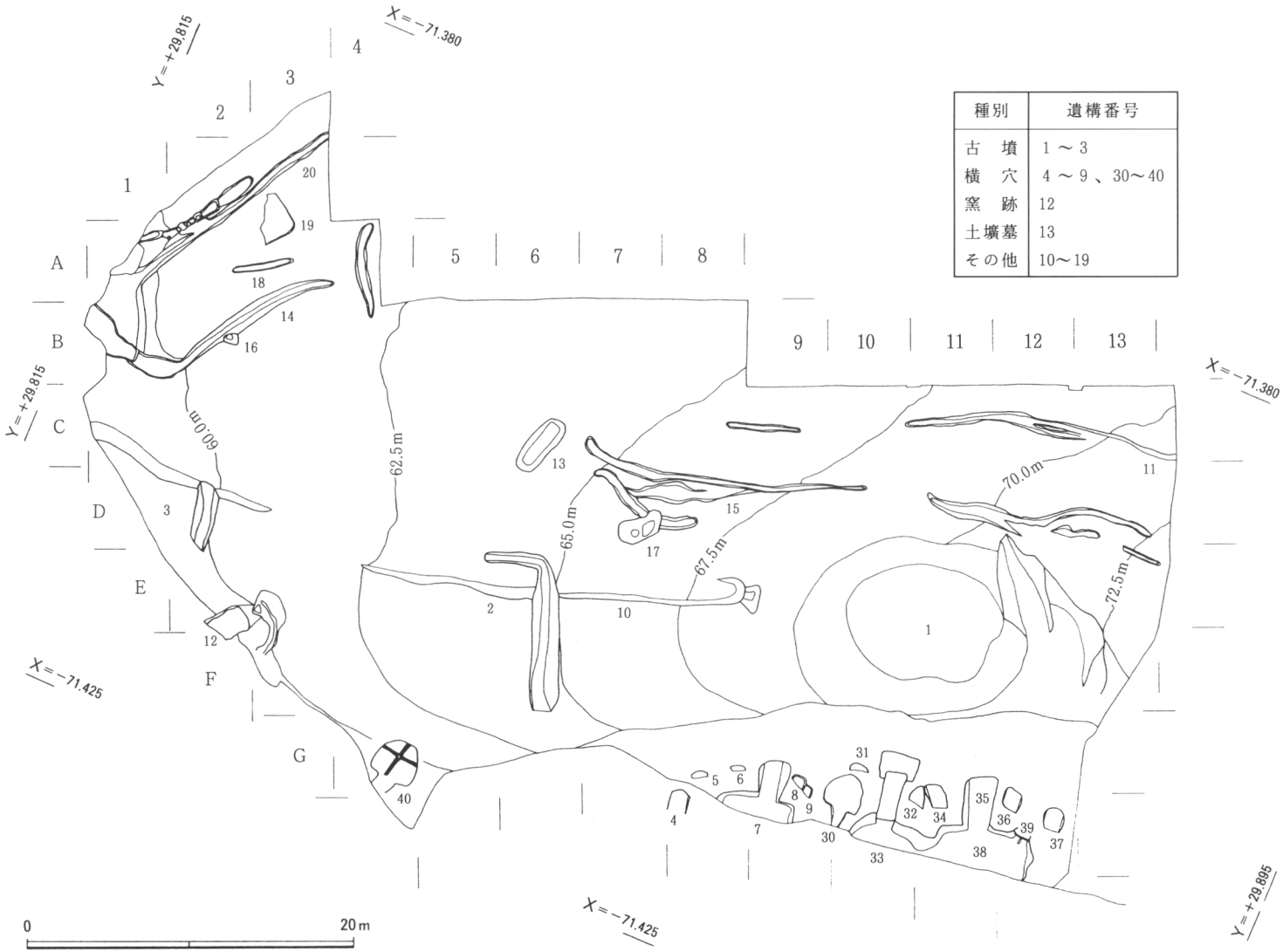
（2）永田・不入窯跡（第2・6～26図）

市原市久保697－13他に所在する須恵器窯跡群である。

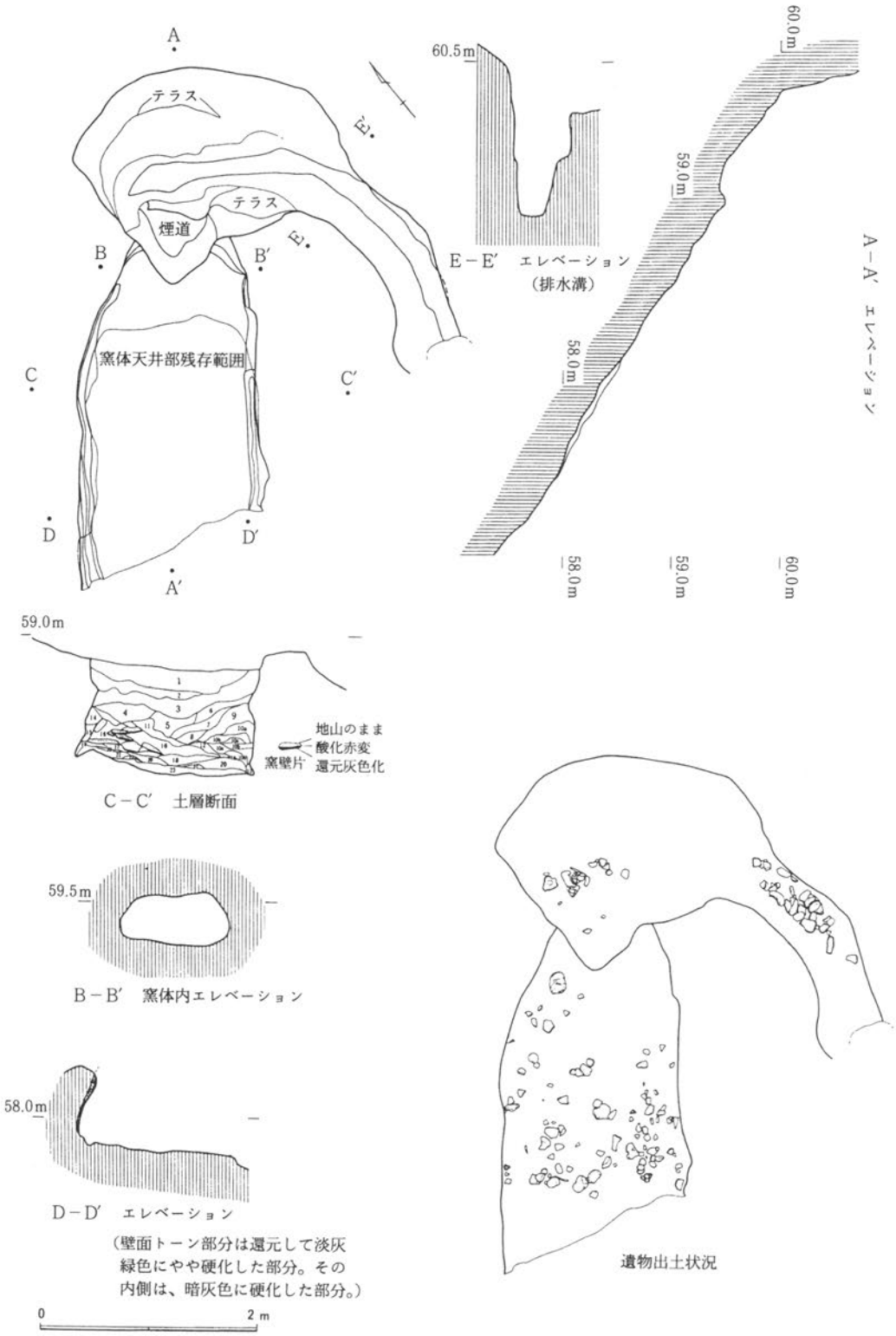
遺跡は養老川の中流域東岸の河岸段丘上に所在し、段丘面は周囲を古い川跡によって囲まれ、典型的な曲線・短絡地形である。永田窯跡群はこの南側斜面に立地し、標高は48～50m前後である。本遺跡の北側斜面には不入窯跡群があり、本来、この二つの窯跡群は一つの大きな窯跡群として捉えられるものである。



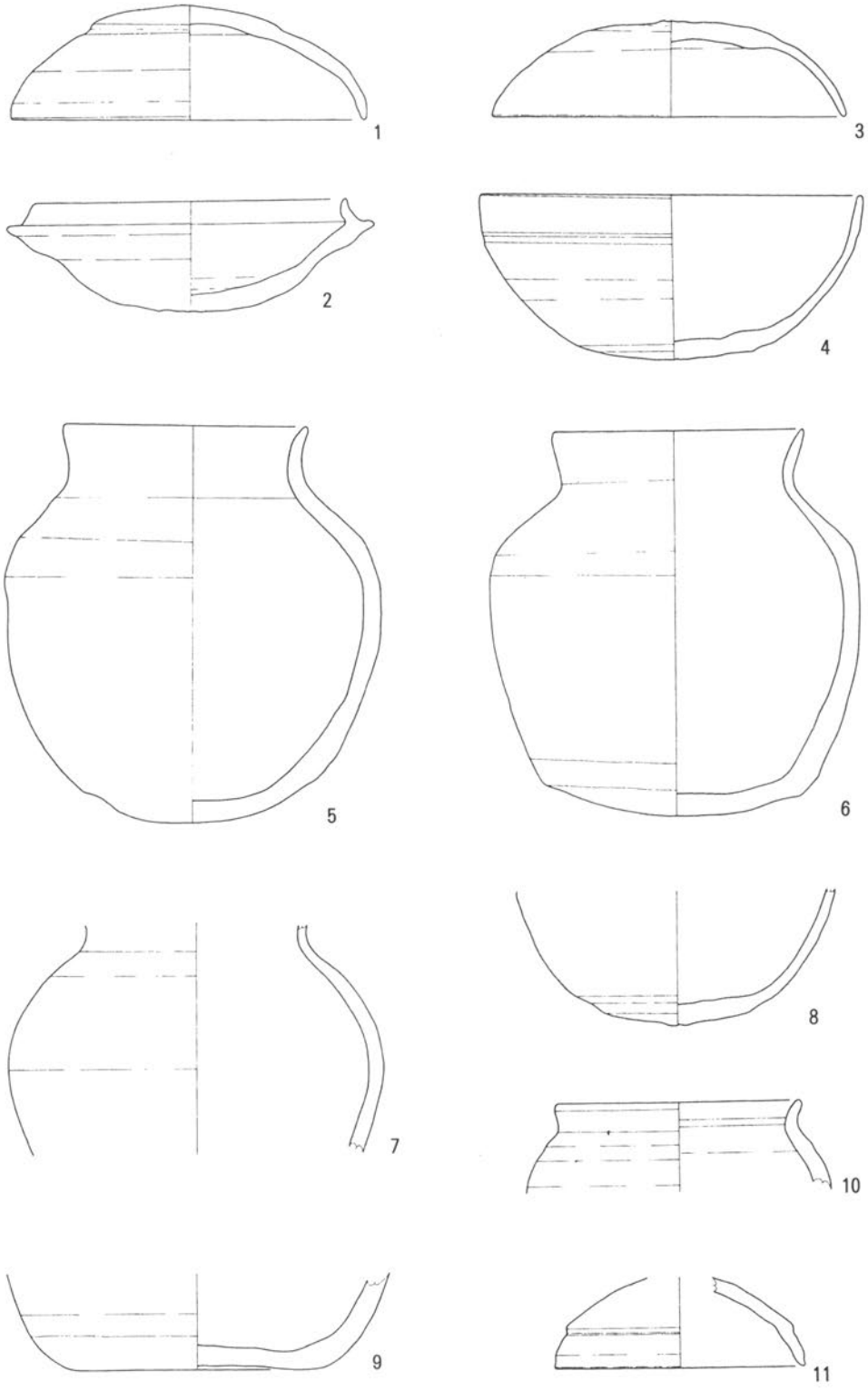
第２図　大和田窯跡、永田・不入窯跡、石川窯跡位置図（１：25,000　鶴舞）



第3図　大和田遺跡遺構位置図



第4図　大和田窯跡平面・断面図



第５図　大和田窯跡出土遺物

遺跡の周辺には2か所の須恵器窯跡がみられる。本遺跡の南西約800mの地点には7世紀前半の須恵器窯跡を含む大和田遺跡（ほかに古墳、横穴がみられる）があり、本遺跡の北約3.5kmには石川窯跡が存在し、上総地域のなかでも窯業が盛んであった地域として評価される。また、永田窯跡群と同時期の遺跡としてはほかに、南総中学遺跡（文献26）が挙げられる。この遺跡は集落遺跡であり、永田・不入窯跡、石川窯跡の製品と考えられるものが出土している。

これまでの主な研究を紹介すると、まず、千葉県教育委員会の依頼によって國士舘大学考古学研究室によって1974年に発掘調査が実施され、調査の結果、この調査報告書の小結（文献20）では永田・不入窯跡群の変遷を次のようにとらえている。操業開始期を永田3・14号窯、全盛期を永田1・5号窯、不入4号窯、終末期を永田13号窯、不入3・4号窯とみなし、全盛期に8世紀末から9世紀初頭の年代を与えている。

また、1977年に須田　勉氏は上総国分尼寺に隣接する坊作遺跡調査概報（文献25）のなかで、永田・不入窯跡群成立の背景について「国分寺造営事業の一環として把え」、窯跡群成立年代の上限を国分寺建立の詔が発布された天平13年（741）とした。そして生産組織については「国分寺における造瓦組織と切り離しては考えられないものを内包している。」とした。

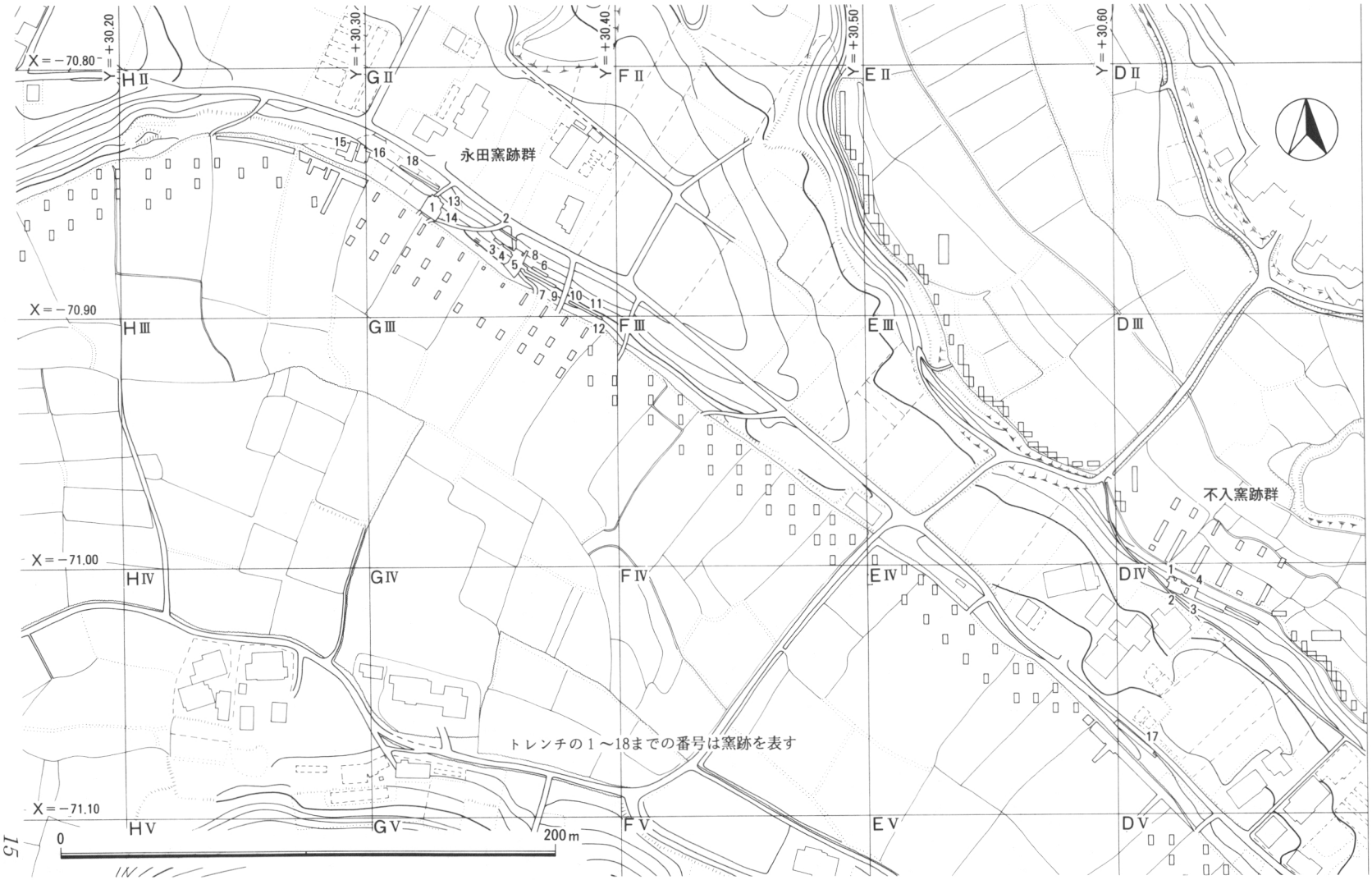
1978年に刊行された山田水呑遺跡の調査報告書（文献24）のなかで金子真土氏は、回転糸切り離しによる良質な須恵器の一群について、市原市に存在する窯跡の製品の可能性を指摘し、編年第Ⅳ群の土器群に位置づけ、8世紀前半に永田・不入窯跡が成立した可能性を示唆した。

1981年、國平健三氏は「相模国の奈良・平安時代集落構造（上）」のなか（文献34）で永田・不入窯の分析を行い、その年代と性格さらには石川窯について次のように言及している。

年代については、遺構の切り合い関係と焼成床面ごとの遺物の対比を行い、武蔵の窯資料と検討したうえで、8世紀第2四半期後半から第3四半期前半に位置づけ、石川窯跡については9世紀初頭以降と考えた。また、永田窯と不入窯との焼成器種の違いに着目して、不入窯をより官窯的性格を強くおびた窯と認識している。なお、この「官窯」の製品の供給先として、国府や国分寺などを挙げている。

1983年には、「房総における奈良・平安時代の土器」のシンポジウムが開催され、そのなかでも永田・不入窯跡の年代は、国分寺造営の絡みと埼玉県前内出窯跡の年代観から8世紀第3四半世紀に比定（文献46）されている。

1987年にはこのシンポジウムをうけて「房総における歴史時代土器の研究」のシンポジウムが開催され、永田・不入窯跡群についてのいくつかの問題提議がなされた。まず、高橋康男氏（文献70）が永田・不入窯跡を各窯跡の器種構成から3期の時期に区分し、いずれの時期も杯などの日常雑器を中心に焼成されているとした。そして、仏器や硯などの国分寺に関係ありそうな遺物の焼成はこれらの変遷の後半になされていることを指摘し、国分寺契機説への疑問を投げかけた。また、国平氏が述べた官窯の問題を取り上げ、官・民窯の区別が不明瞭で、永田



第６図　永田・不入窯跡確認トレンチ配置図

と不入窯跡との終焉の様相が同様であることから、両者の性格的な違いは認められず官窯とは認め難いことを指摘した。永田・不入窯の操業の終焉と相前後して、石川窯の操業が派生する可能性が強いことを示唆した。

また、田所　真氏は市原市坊作遺跡の土器の時期区分（文献72）を行い、そのなかで「上総国分尼寺の造営を目的として成立した坊作遺跡の第１期土器群において、概に、通有な形態の、永田・不入窯跡産須恵器が認められるという意味において、その生産の開始が、国分寺造営詔に先行する。」と述べ、永田・不入窯跡の国分寺契機説への反証を提示した。そして、さらに田所氏は、1989年に「上総須恵器考」のなかで（文献81）永田・不入窯跡群の成立時期や契機を再検討する必要があることを提言した。

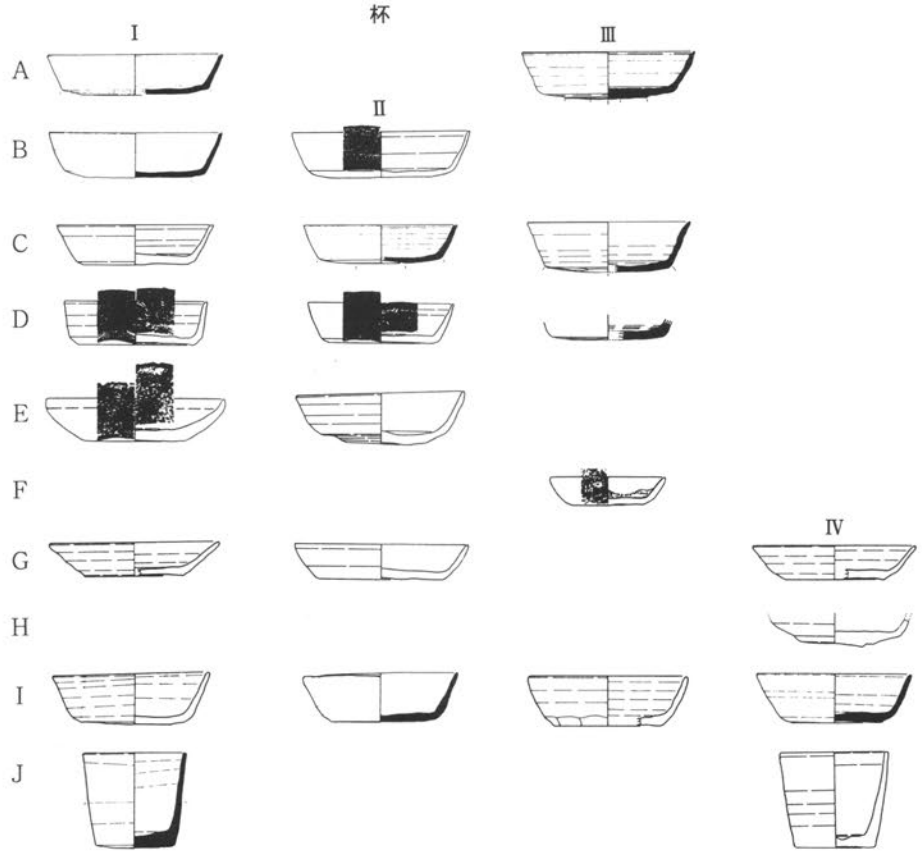
永田・不入窯跡の発掘調査は、1974年に実施されたのち、市原市文化財センターにより３次にわたる範囲確認調査（1984・1986・1987年度）が行われた（文献61・82）。さらに1992年に千葉県文化財センターによって永田窯跡の発掘調査が行われ（文献102）、その結果、これまでに確認された窯体は永田窯跡18基、不入窯跡４基であり、永田・不入窯跡の合計で22基となった。また、これら窯跡以外の灰原３か所も窯跡の基数に入れると25基は確実に存在すると考えられ、このほかにも焼土遺構など不確実なものを含めると窯跡の基数は30基以上に膨れ上がるものと推察される。従来、いわれてきた小規模な窯跡群という評価は覆されてよいとおもわれる。

窯跡群の広がりについては、1992年の調査によってこれまでの窯跡の分布範囲よりも相当に拡大することが判明した。いままでの調査で最も台地の西寄りに位置すると考えられてきた永田１号窯跡よりもさらに西北40mの地点から15号窯跡（ＨⅡ区）が検出された。またこの15号窯跡の南東400mの地点からも17号窯跡（ＤⅣ区）が確認されたことにより永田窯跡群は直線距離にして400m以上の分布範囲を有することが確実となった。また、窯構造としては、地下式となる窯跡と地下式から半地下式につくり替えられているもの、半地下式の窯跡があるが、この違いは時期的な差に起因していると考えられる。そして、永田・不入窯跡の窯の特徴の一つとしては暗渠を有するものの存在が挙げられる。

窯跡群の平坦面部についてはいくつか調査が行われているが、須恵器の工房と考えられるものは、竪穴住居跡から粘土溜まりが検出されたものが数えられるのみである。しかしながら、この平坦面の調査面積は窯跡群が広がる範囲のごく僅かであり、今後の調査でロクロピットなどを備えた工房跡が検出される可能性は強いと考えられる。

永田・不入窯跡については、基数も多く上総地域の中心的な窯跡群であり、また、房総地域地域の中では比較的長い間操業がなされていたので、いくつかの代表的な窯跡を提示しておくことにしたい。なお、永田・不入窯跡はすべて須恵器のみを焼成した窯と考えられる。

なお、土器の分類については上総地域の永田・不入窯跡、石川窯跡、上名主ケ谷窯跡についてはほぼ同系列の窯跡群であると捉えられるので、ここでまとめて説明しておく。（第７～11図参照）



第7図　永田・不入、石川、上名主ケ谷窯跡土器分類(1)

まず、杯・椀・皿類は底部の切り離し及びその後の調整で次のように分類できる。

I類：底部全面回転ヘラ削りのもの

II類：底部回転糸切り後に外周を回転ヘラ削りするもの

III類：底部に手持ちヘラ削りするもの

IV類：底部回転糸切り離しのみのもの

以下、細部の形態や大きさの違いからアルファベットで表示する。

杯　いずれの窯跡でも主体を占める器種である。

A　口径が14cm前後、薄手の作りで、器高が低いもの

B　口径が14cm前後で、深い形態なもの

C　口径が12～13cm前後で口縁部が直線的に立ち上がるもの

D　底部が大きく、箱形の形態のもの

E　底部から丸味を持って立ち上がり、口縁端部が内弯気味のもの

F　小型で丸味をもって立ち上がるもの

G　器高が低く、口縁部が大きく開くもの

H　底部中央部外面が突出するもの

I　器高が高く、底径が口径に比べて小さいもの

J　コップ形で口縁部が直立し、口径が８～９cm前後のもの

高台付杯　窯跡の時期により増減がみられる。

A　口径が14～15cm前後で器高が低く、端正なつくりのもの

B　口径が13～15cm前後で、器高が低いもの

C　口径が13～15cm前後で、器高が高いもの

D　口径が13～15cm前後で、口縁部に稜を有するもの

E　口径が11cm前後で、器高が低いもの

F　口径が10.5～13cm前後で、器高が高いもの

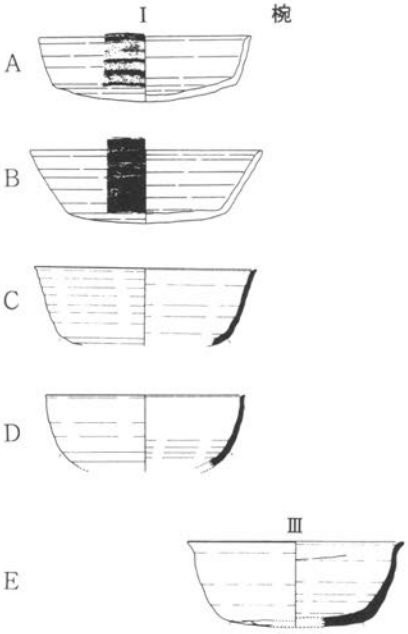
G　復元口径が10cm未満の小型のもの

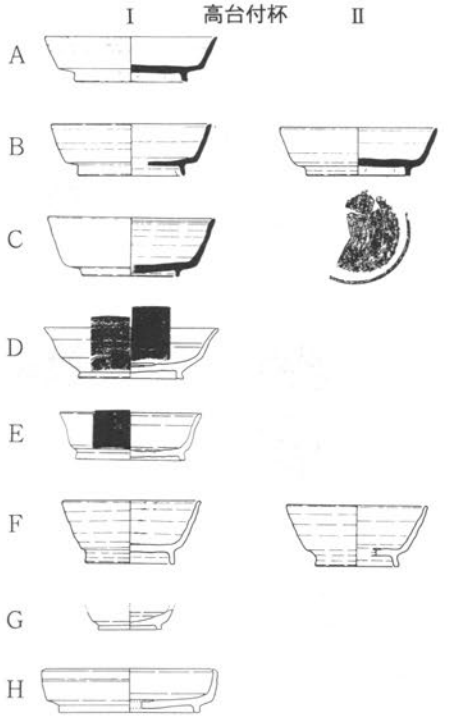
H　器高が低く口縁端部が内弯するもの

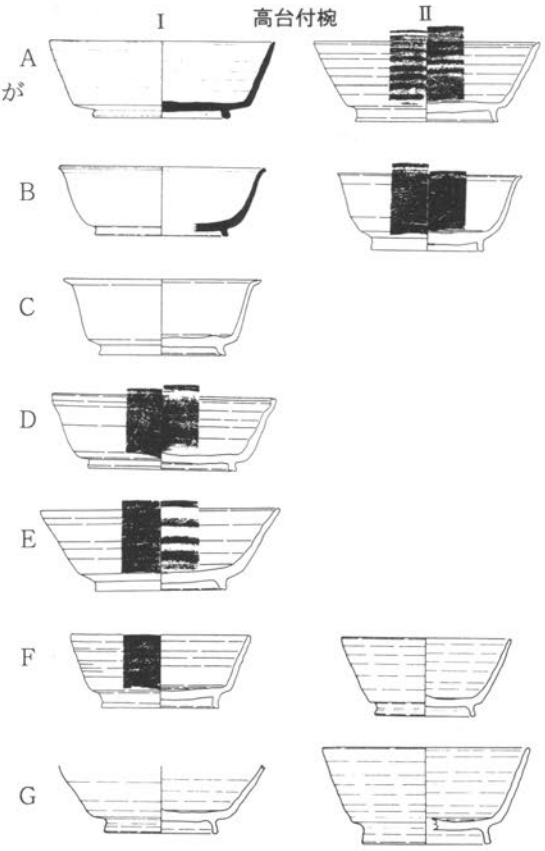
椀

A　口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部が外反するもの

B　口縁部が逆ハの字状に開くもの







第８図　永田・不入、石川、上名主ケ谷窯跡土器分類(2)

C　平底ではあるが底部からの立ち上がりが丸味をおびるもの

D　丸底の底部を有するもの

E　口縁部上半が大きく外半するもの

高台付椀

A　大振りで底部から口縁部が直線的に立ち上がるもの

B　典型的な白銅椀模倣の椀であり、立ち上がりは丸味をおび、口縁端部が外反するもの

C　口縁部が直線的に立ち上がり、口縁端部が大きく外反するもの

D　口縁端部が内湾するもの

E　口縁部が大きく逆ハの字状に開くもの

F　口径が14cm前後で、器高が高いもの

G　口径が16cm前後で、器高が高いもの

皿

A　底部径が大きいもの

B　底部径が小さいもの

蓋

A　口径が17cm以上で、器高が高いもの

B　口径が17cm以上で、器高が低いもの

C　口径が15cm前後のもの

D　口径が13cm前後のもの

E　口径が13cm前後で器高が低いもの

F　口径が８cm前後で杯Ｊの蓋となるもの

G　口径が９cm前後で杯Ｊの蓋となるもの

H　短頸壺の蓋で天井部と口縁部に稜を有するもの

I　短頸壺の蓋で天井部と口縁部の境に丸味を有するもの

J　短頸壺の蓋で器高が低いもの

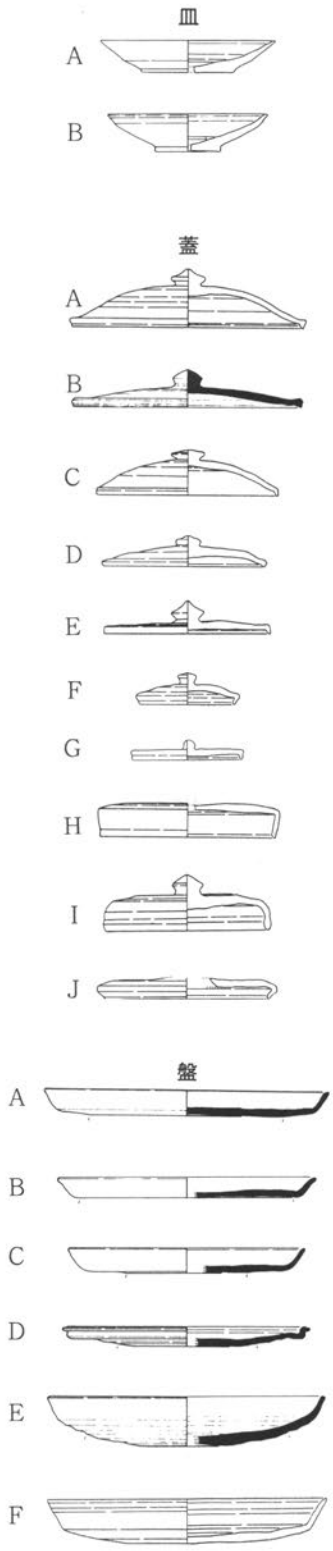
盤

A　素口縁で器高が低く、口径が22cm前後のもの

B　素口縁で器高が低く、口径が20cm前後のもの

C　素口縁で器高が低く、口径が19cm前後のもの

D　折り返し口縁を有するもので、高盤Ａの盤部と同形態のもの



第９図　永田・不入、石川、上名主ケ谷窯跡土器分類(3)

E　素口縁で器高が高く、底部に丸味を有するもの

F　素口縁で器高が高く、平底のもの。

高盤

A　口径が21cm前後のもの

B　口径が17cm前後のもの

C　口径が14cm前後のもの

高台付盤

A　高台部が角形のもの

B　高台部の端部が鋭角のもの

長頸壺

A　大型のもの

B　小型のもの

水瓶

頸部が細長いもの

短頸壺

A　大型で肩部がなだらかなもの

B　肩部に稜を有するもの

C　小型なもの

壺

A　丸胴のもの

B　肩部に稜を有するもの

多口壺

中央に大きな口があり、その四囲に各１個、計５個の口頸があるもの

鉢

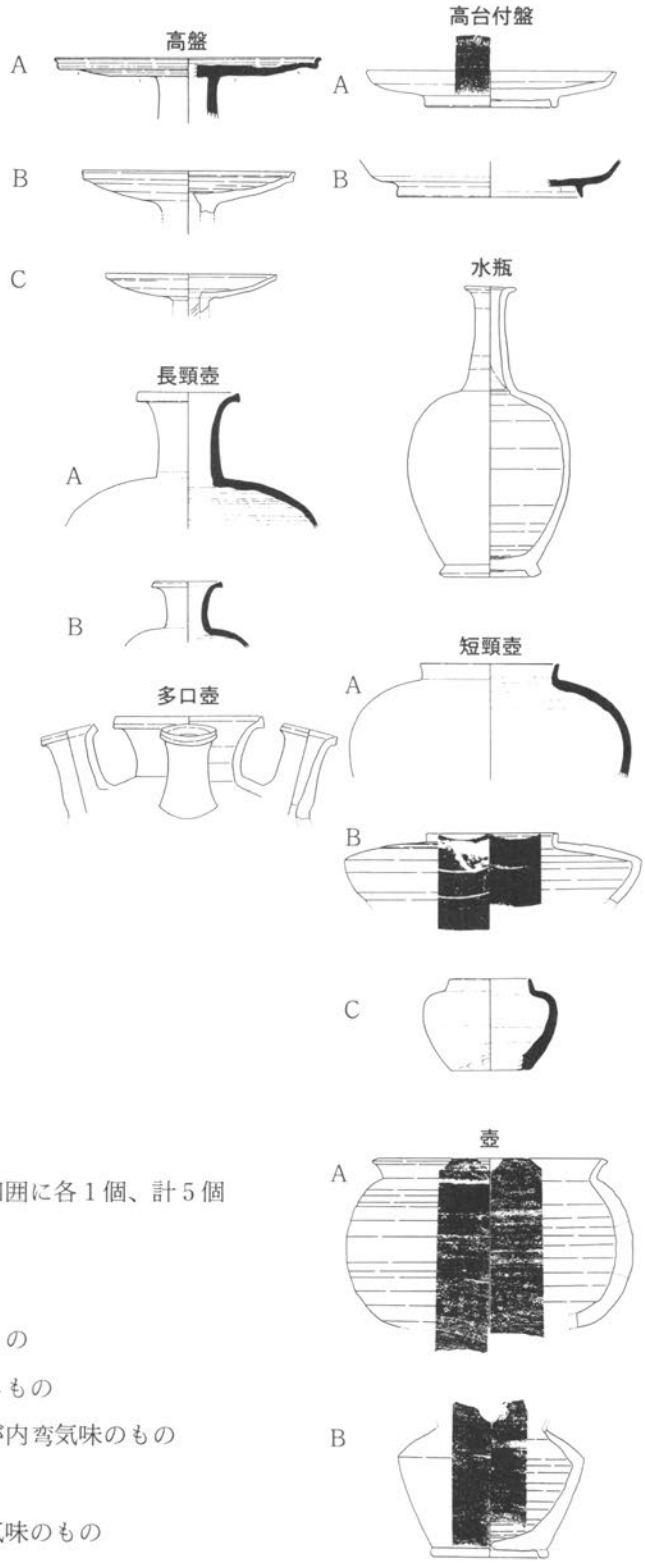
A　底部から直立的に立ち上がるもの

B　底部から外反気味に立ち上がるもの

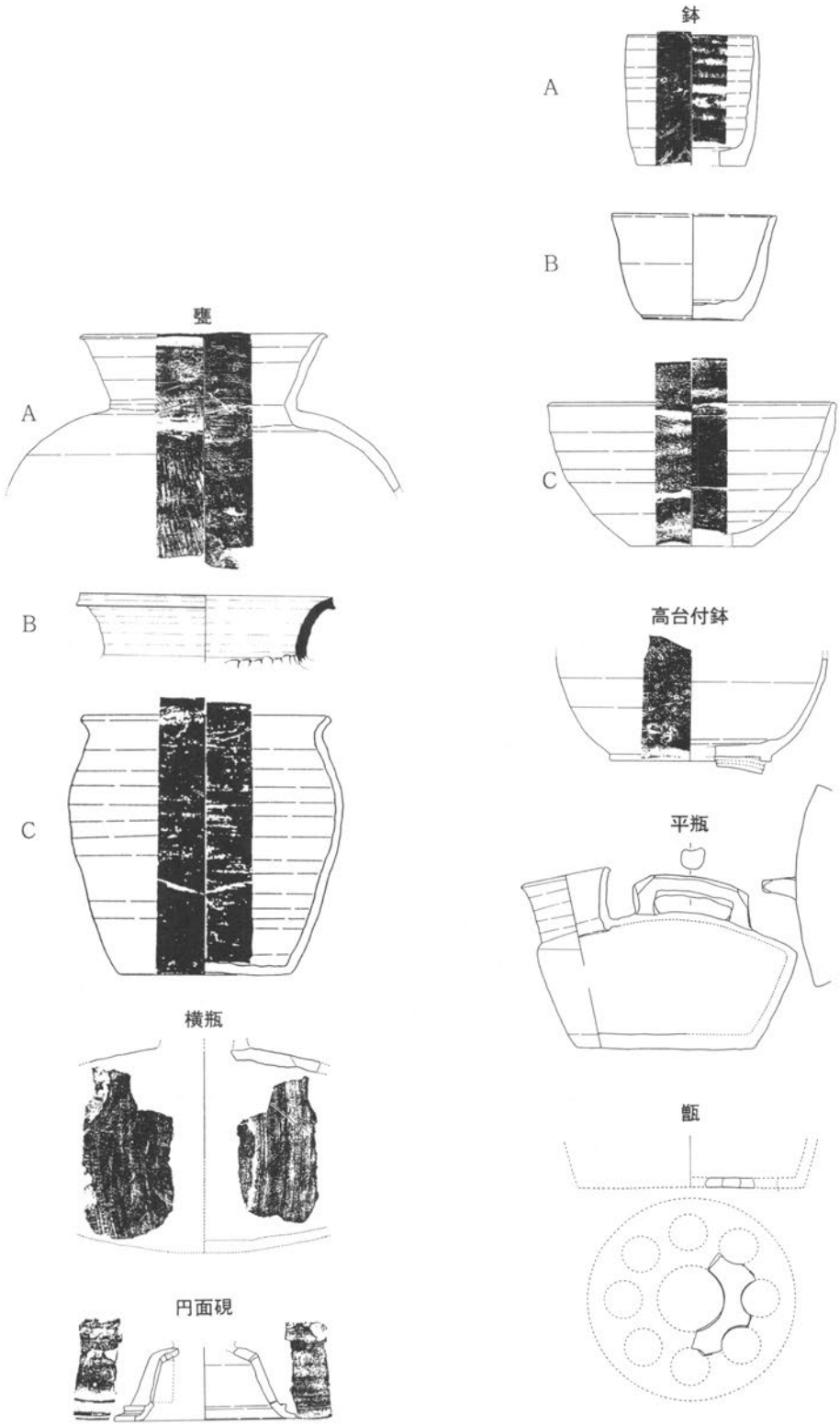
C　大型で底部からの立ち上がりが内弯気味のもの

高台付鉢

底部からの立ち上がりが内弯気味のもの



第10図　永田・不入、石川、上名主ケ谷窯跡土器分類(4)



第11図　永田・不入、石川、上名主ケ谷窯跡土器分類(5)

甕

A　素口縁で口縁部が逆ハの字状に開くもの

B　折り返し口縁で口縁部が逆ハの字状に開くもの

C　長胴で口縁部が短いもの

横瓶

外面に平行タタキ痕が残存するもの

平瓶

無高台で大型のもの

円面硯

窓を有するもの

甑

多孔式のもの

以上が、三つの窯跡群の須恵器の分類である。

永田17号窯跡（第12～15図）

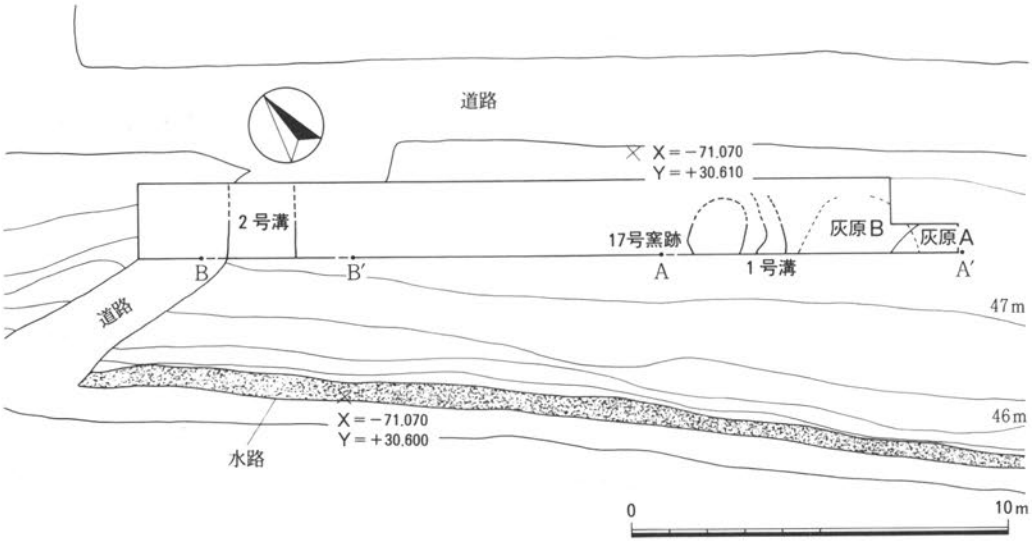
本窯跡は不入窯跡群の反対斜面にみられ、1992年に千葉県文化財センターが調査した地下式の窯跡である。こののちに述べる永田15・16号窯跡は千葉県文化財センターが1992年度時調査、永田５号窯跡、不入２号窯跡は1974年に國士舘大学の発掘調査によって検出された遺構である。

17号窯跡は地山の裁ち割り調査を行った結果検出された地下式の窯跡である。窯は上半が明黄褐色シルト、下半が砂質岩盤をくり抜いてつくられており、窯体の東には幅60cmで深さ20cmの溝がみられる。窯の長軸の規模はわずか１m幅の断ち割り調査であったため不明である。調査した部分の傾斜角は25°前後である。焼成面は２面が検出され、下面からは杯片がわずかに検出されたのみであったが上面からは多くの須恵器が検出された。１次面（下面）の窯床の幅は1.6m、２次面は幅1.7mであり、両方とも側壁の断面形は「ハ」の字状である。

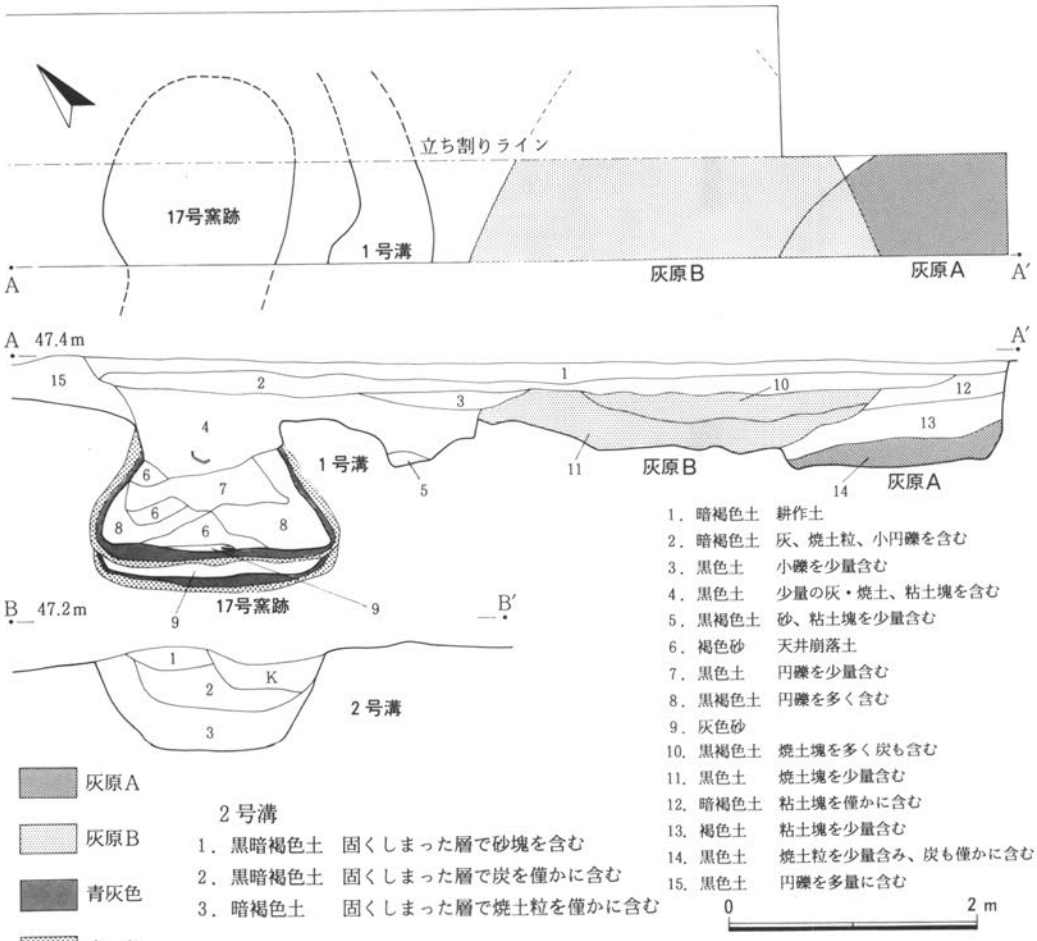
なお、本窯跡の西1.5mと４mには本窯跡とは別の灰原が検出されている。

17号窯跡の出土遺物は永田窯跡のなかでも端正なつくりのものであり、杯・椀類は底部外面に丁寧な回転ヘラ削りが施され、器厚は薄手なものが多い。

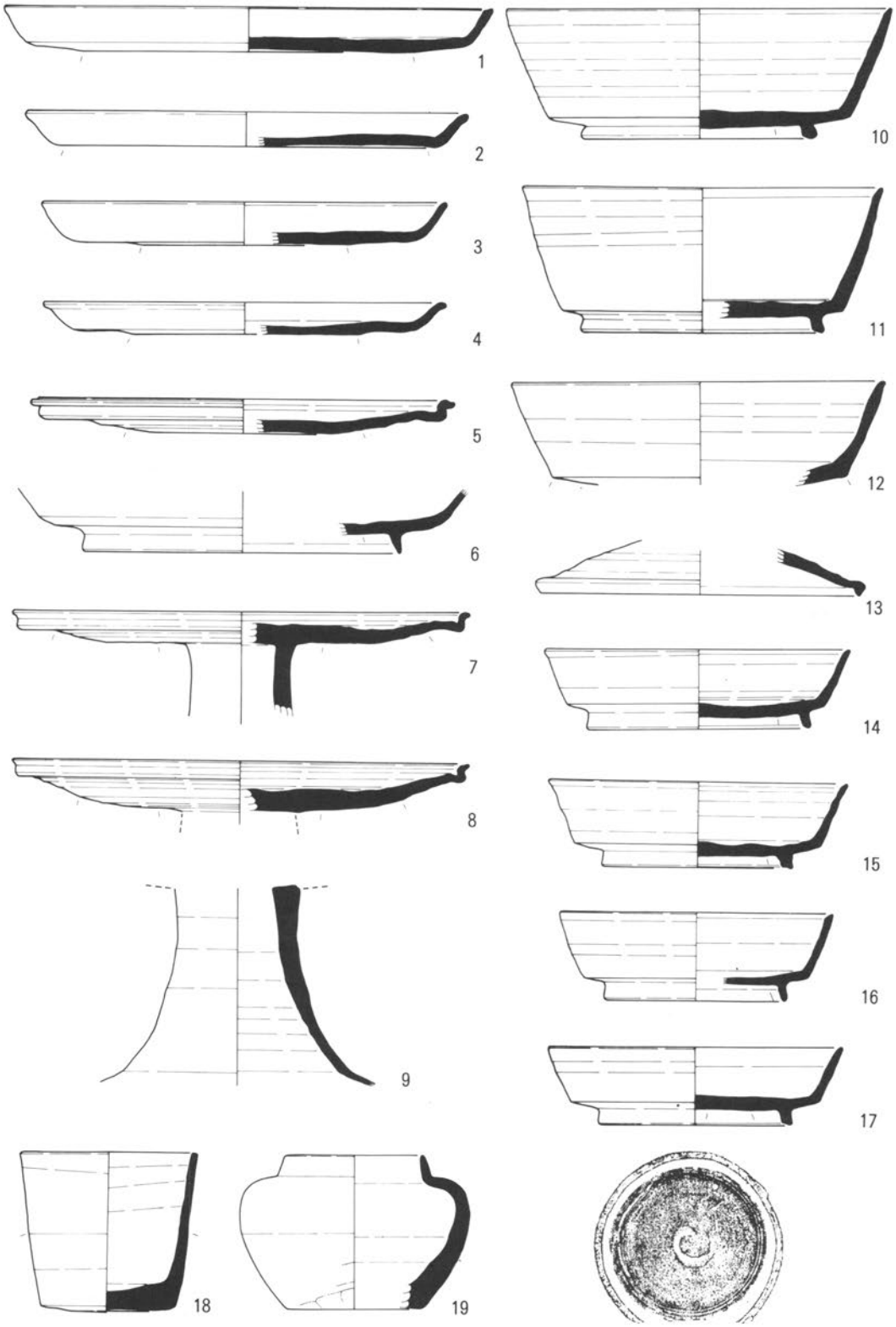
盤を中心に高台付杯が多くみられる。盤はA～Dが認められ、口径が22cm台のA（１）、20cm台のB（２）、19cm台の（３）のように同一形態・技法で法量分化しているものがみられ、注目される。盤D（５）は高盤A（７・８）と類似した口縁端部を有する。杯はＩA（24・25）・ＩB（23・26）とコップ形のＩJ（18）がみられるが、数量的には高台付杯のほうが多く、ＩA（14・15・17）・ＩB（16）が認められる。また、高台付杯のなかには17のように底部外面の中央部にヘラ切り痕が残存しているものが４点存在する（図版６－16・18）。本窯跡の杯については糸切り痕と考えられるものが認められないので、杯類のロクロ台からの底部の



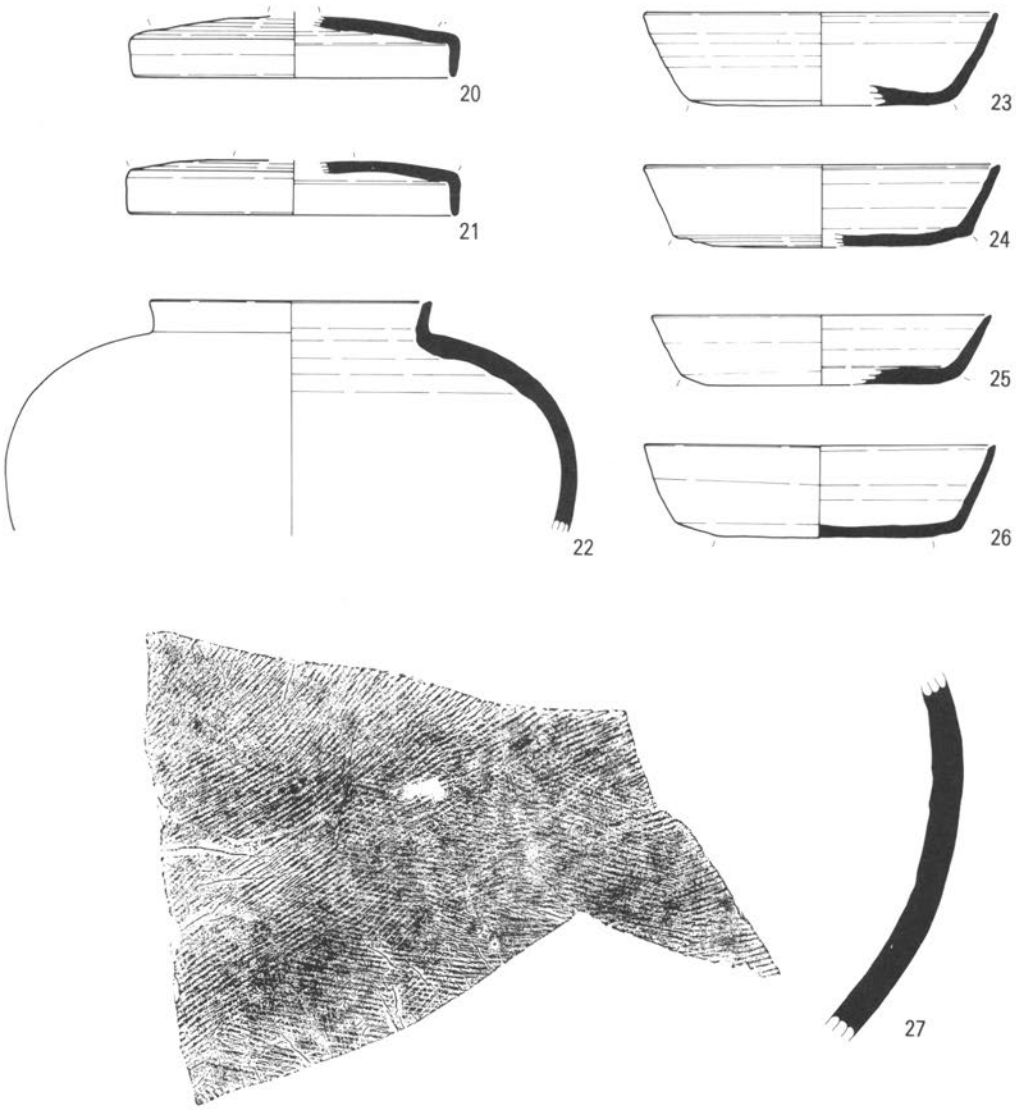
第12図　永田17号窯跡、1・2号溝、灰原A・B位置図



第13図　永田17号窯跡、1・2号溝、灰原A・B平面・断面図



第14図　永田17号窯跡出土遺物(1)



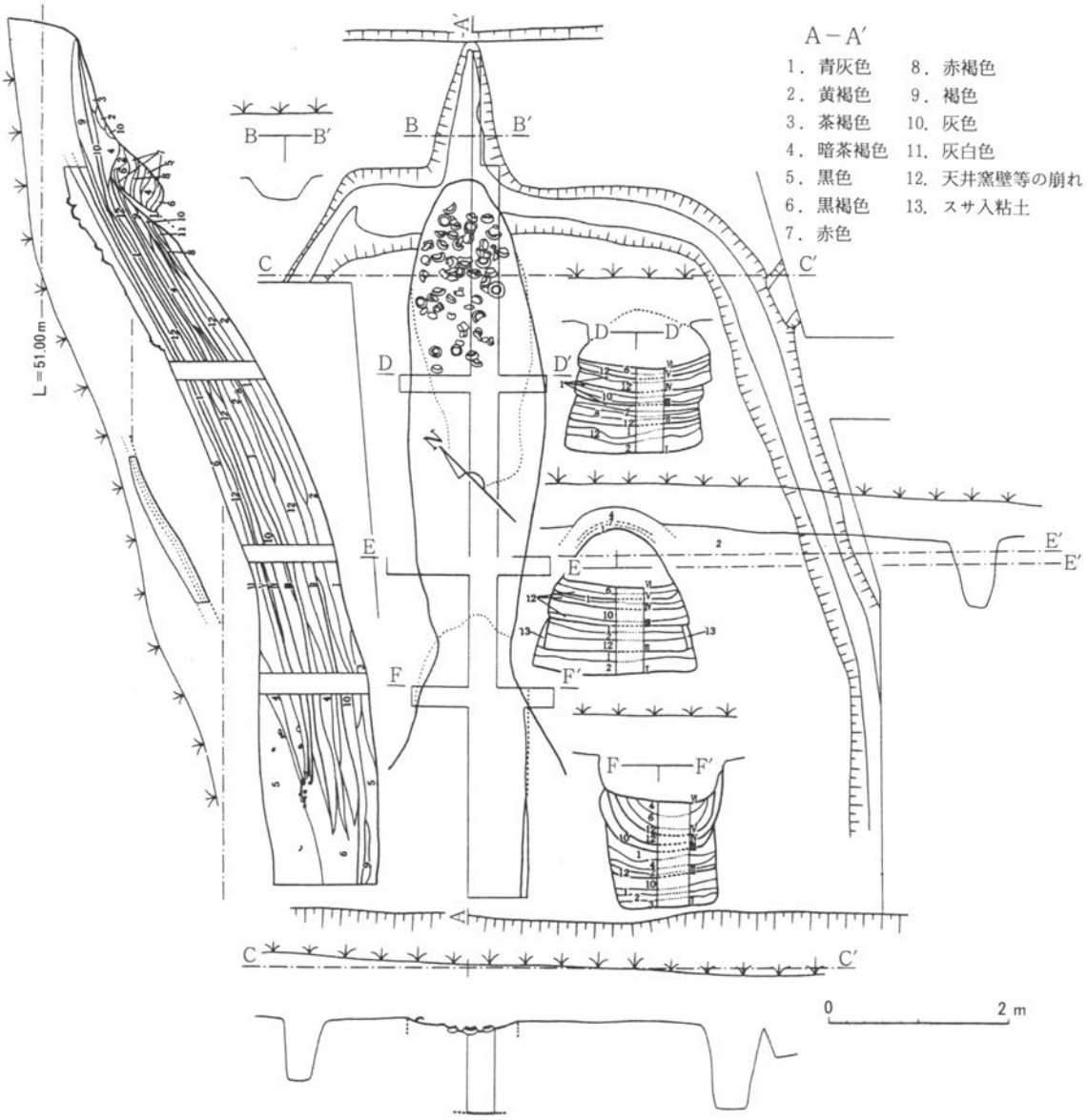
第15図　永田17号窯跡出土遺物(2)

切り離しはヘラ切りと考えざるを得ない。しかし、底部外面に全面回転ヘラ削りが施され、切り離し技法が不明となっている盤のなかに底部外面が内側に窪んだものが認められ、糸切り技法が併用して用いられていた可能性も残される。

このほかには、高台付椀A（10・11）、蓋C（13）、短頸壺A（22）・C（19）、短頸壺Aの蓋H（20・21）、甕が出土している。甕の外面には平行タタキが施され、内面は無文の当て具痕がみられる。本窯跡群の甕類はすべてこの整形技法を採用している。

永田5号窯跡（第16～19図）

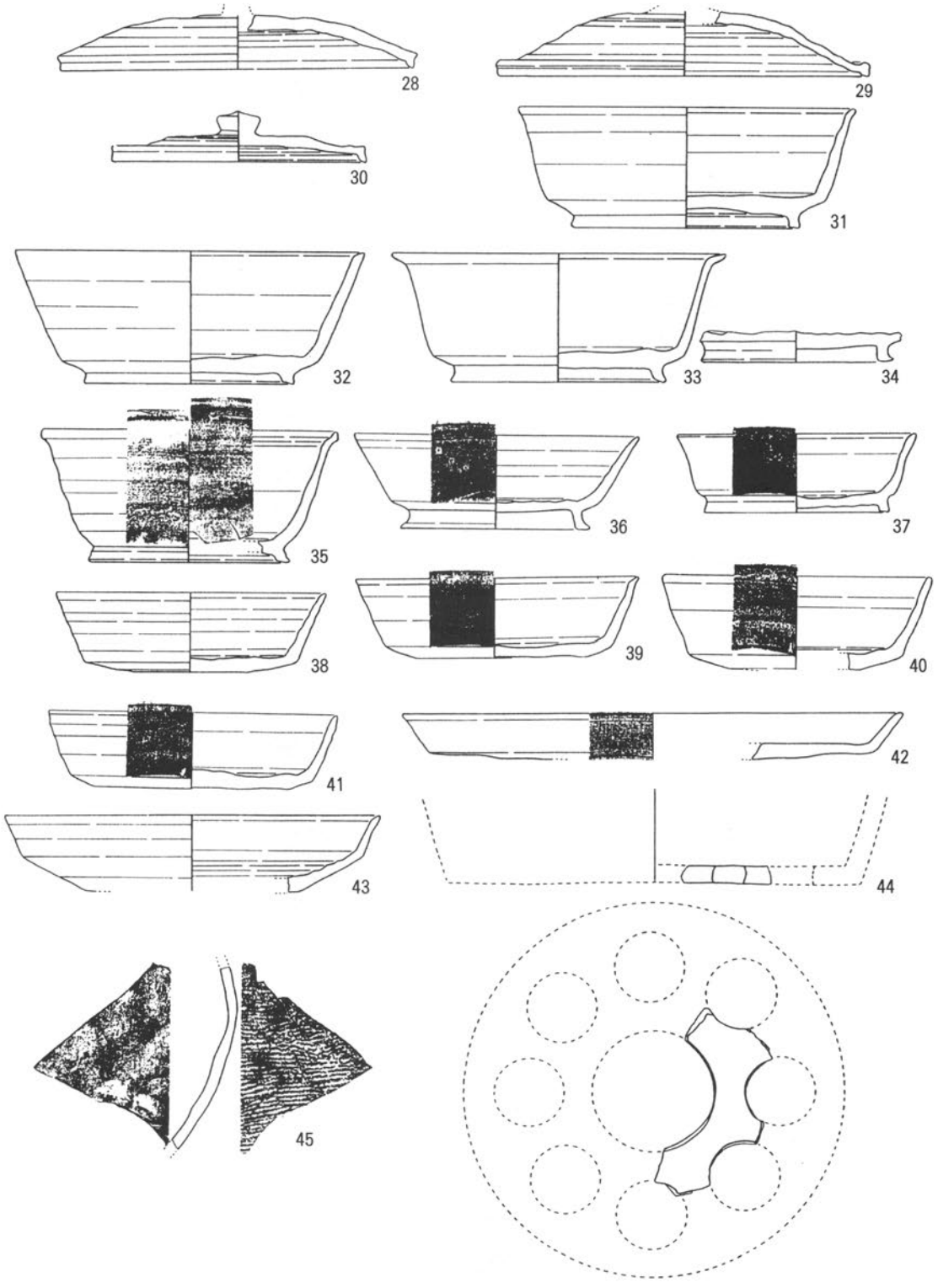
本窯跡は永田窯跡群のほぼ中央部に位置する窯跡である。当初は地下式無階無段の窖窯であったがその後、天井部の破壊によって半地下式の窯となった。窯尻付近に側溝がめぐり、右側



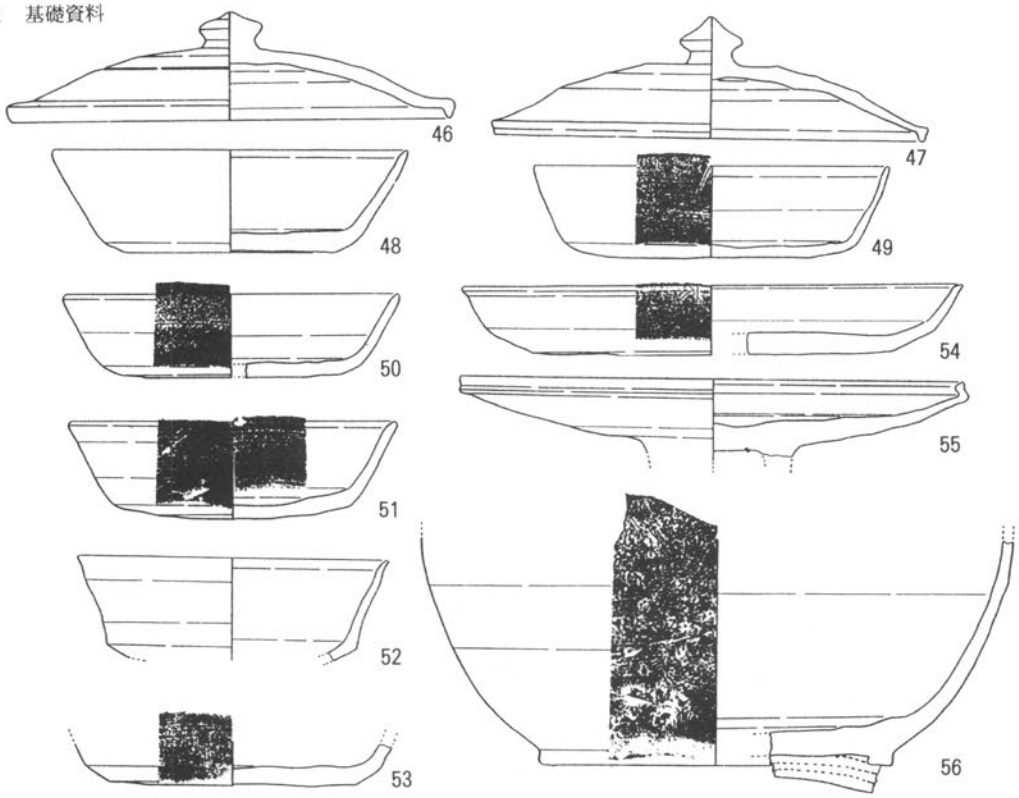
第16図　永田５号窯跡平面・断面図

溝は永田８号窯跡の左側溝と合流している。主軸はN－35°－Eにあり、長軸は約5.1m、焼成部の中央部の幅は1.5mを測る。本窯跡は６次にわたる改造が認められ、１～４次窯までは地下式無階無段で５・６次窯は半地下式の無階無段窯であり、焼成部の角度は１～６次窯とも10～15°である。

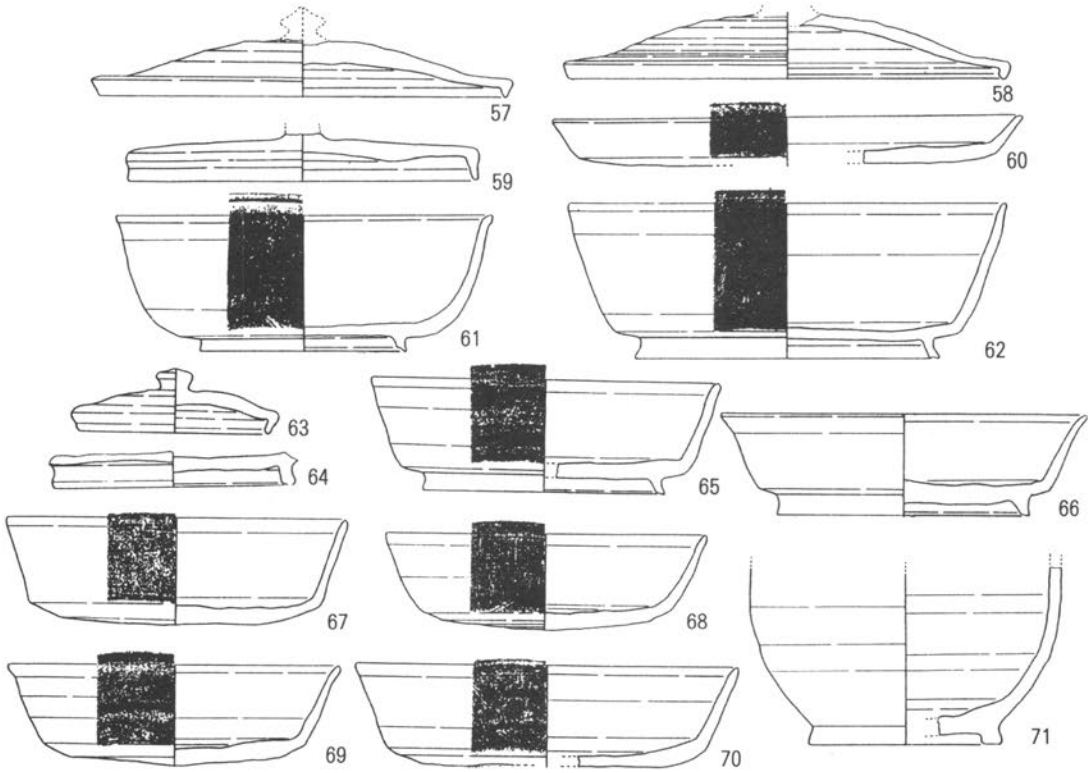
本窯跡の製品は17号窯跡に比べると器肉が厚くなっており、杯類の底部切り離し技法はヘラ切りと考えられるものも僅かにみられるが、回転糸切り離し技法が主体を占めている。器種は豊富である。本窯跡は非常に遺物量が多く、すべてを紹介できないので２次～４次窯の遺物に限って説明する。



第17図　永田５号窯跡２次出土遺物



第18図　永田５号窯跡３次出土遺物



第19図　永田５号窯跡４次出土遺物

2次窯では蓋A（28・29）・E（30）、高台付椀ＩA（31・32）ＩC（33）や高台付杯ＩB（36）や杯ＩB（41）やＩC（38・39・40）、盤A（42）・F（43）、甑（44）、甕（45）がみられる。

3次窯では蓋A（46・47）、杯ＩB（51・53）や底部に外周回転ヘラ削りが施され、底部中央に回転糸切り痕が残存する杯IIB（49・50）、盤F（54）、高盤A（55）、高台付鉢（56）がみられる。また、この3次窯からは削り出し高台と考えられる椀の底部が検出されており注目される。

4次窯からは蓋A（57・58）・H（59）、杯Jの蓋と考えられるF（63）、盤B（60）、高台付椀ＩA（62）・ＩB（61）、高台付杯ＩB（65・66）、杯ＩB（67・70）・ＩC（69）、壺（71）がある。

5号窯跡ではこのほかの器種としては灰原から鉢Bと底部外面手持ちヘラ削りで小型の杯IIIFが出土している。永田・不入窯跡では手持ちヘラ削り技法のものは全体でも数例であり、例外的なものである。

永田15号窯跡（第20・21図）

本窯跡はこれまでに検出された窯跡のなかで最も西北に位置している。

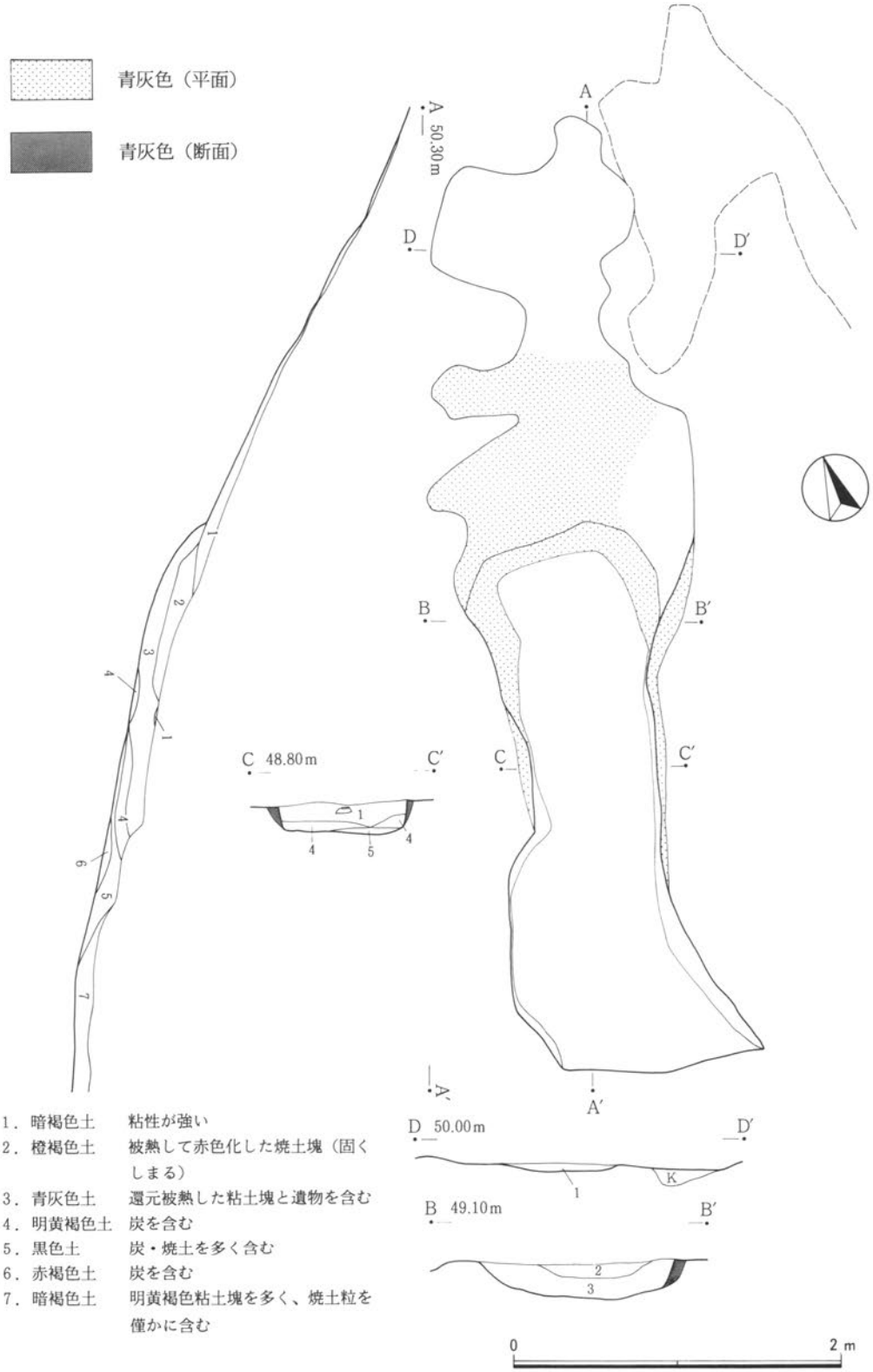
半地下式の窖窯であり、標高は焚口床面で48.3m、窯尻と考えられる部分で50.2m、窯体の主軸方位はN－18°－Eである。窯跡の上は水田におりるための道がとおっており、窯跡の遺存状況はわるく窯床部分のみの残存である。形態については不明確なものとなっているが、焚口から焼成部にかけてはやや絞りこまれた形状である。窯体の長さは推定で4.7m前後であり、焚口は床幅で0.75mであり、側壁は最も残りのよい部分で22cmを測る。傾斜角は12°である。

焼成部の最大幅は推定で1.4mであり、焼成部には1段の段を有する。床面は1枚のみで、貼床も認められず、窯は地山の明白色のシルト層を掘り込んでつくられている。焼成面は青灰色である。

出土した器種は蓋A（72）、高台付椀A（74）・B（73）、底部外面中央部に回転糸切り痕を残す高台付杯IIB（75）、高台付杯ＩG（76）、杯ＩC（77～79）、杯IIC（80）と甕の破片がみられ、焼成不良の製品もみられるが大半は良好な製品で占められている。本窯跡は無高台の杯を主体に焼成がなされていたと考えられ、一般の集落から出土する典型的な永田・不入窯跡の製品である。

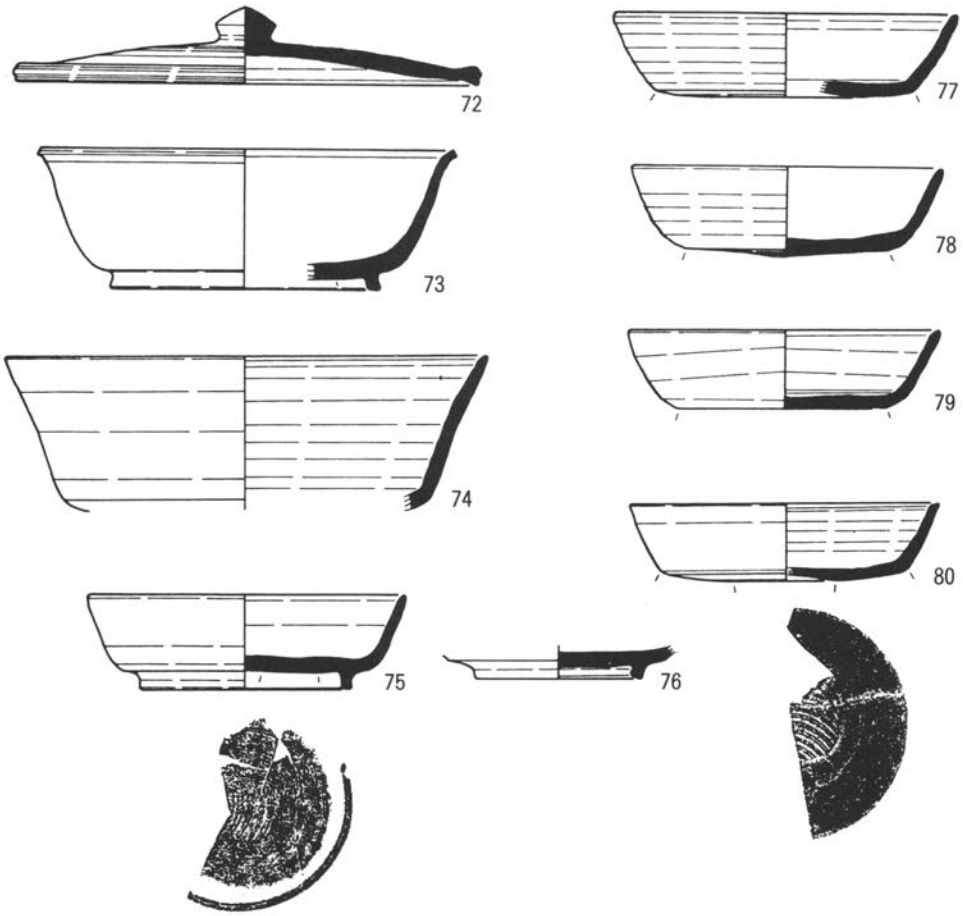
不入2号窯跡（第22～24図）

半地下式の無階無段の窖窯と考えられる。本窯跡の灰原の下部には不入4号窯跡が存在し、これにより本窯跡は4号窯跡よりも新しい窯であることがわかる。焚口から燃焼部にかけての部分発掘なので全体の規模は判然としないが主軸はN－28°－Eと考えられる。この窯の中軸線より西へ2.3mのところに軸を同じくして幅約50cm、深さ10～25cmの溝がのびている。さら



1．暗褐色土　粘性が強い
2．橙褐色土　被熱して赤色化した焼土塊（固くしまる）
3．青灰色土　還元被熱した粘土塊と遺物を含む
4．明黄褐色土　炭を含む
5．黒色土　炭・焼土を多く含む
6．赤褐色土　炭を含む
7．暗褐色土　明黄褐色粘土塊を多く、焼土粒を僅かに含む

第20図　永田15号窯跡平面・断面図



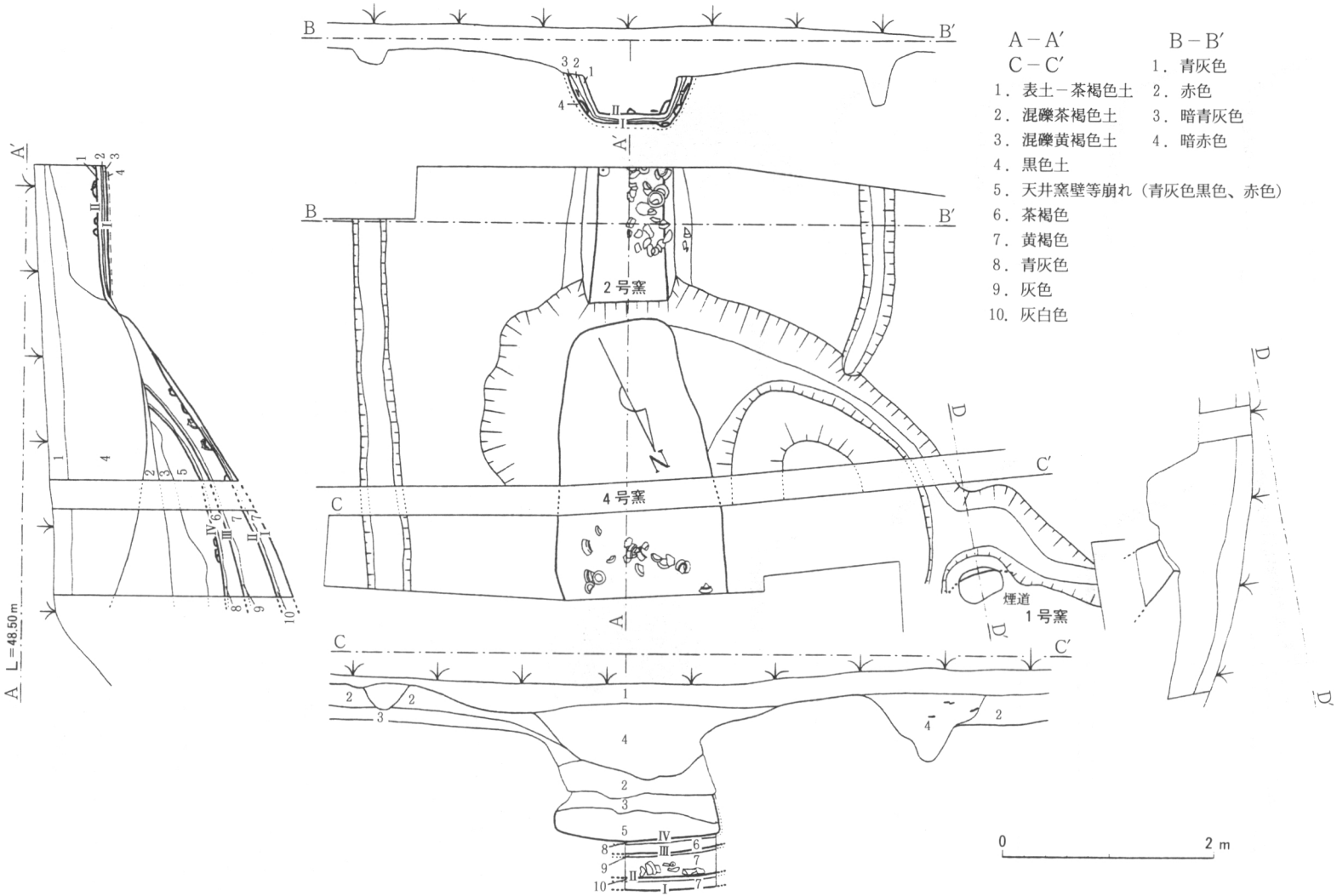
第21図　永田15号窯跡出土遺物

に反対の東側にも約2.2mのところに同様な溝がみられ、これは35～45cmの深さがあり、焚口前の窪みの右に１号窯跡煙道方のほうへのびる溝に接続する。そして、その溝は１号窯跡の側溝へ接続している。

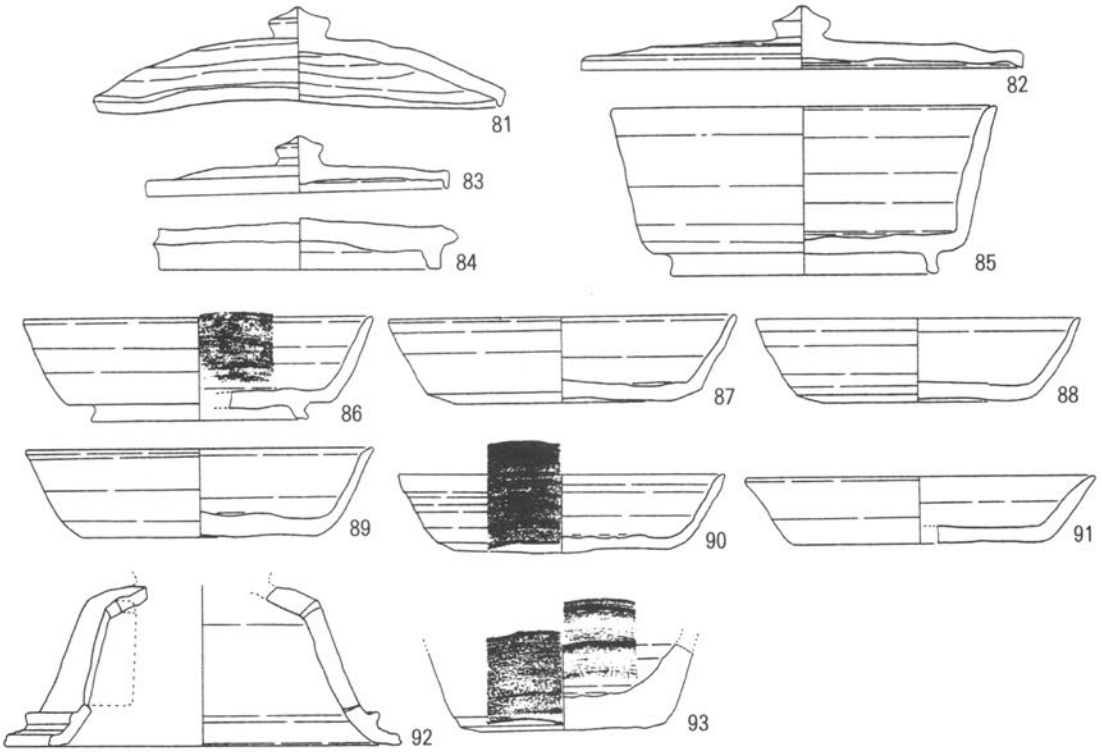
燃焼部は、両壁を約15cm、底部を10cm程度粘土を貼って厚くしており、２時期の操業がなされた可能性が考えられる。焚口外には窪みがあり、同所は灰原となっていた。

遺物は、窯底および壁補修部分から出土のものは蓋Ａ（81）・Ｂ（82）・Ｅ（83）、高台付椀ＩＡ（85）、高台付杯ＩＢ（86）、杯ＩＢ（87）・ＩＧ（91）・ⅡＢ（89）・ⅡＣ（90）がみられ、これらの杯類は典型的な永田・不入窯跡の製品として評価されるものである。このほかには、円面硯の破片（92）と鉢Ａ（93）が出土している。鉢は厚みのある底部で、外周の周縁は削り出しの高台を思わせるが、高低差はわずかなものである。

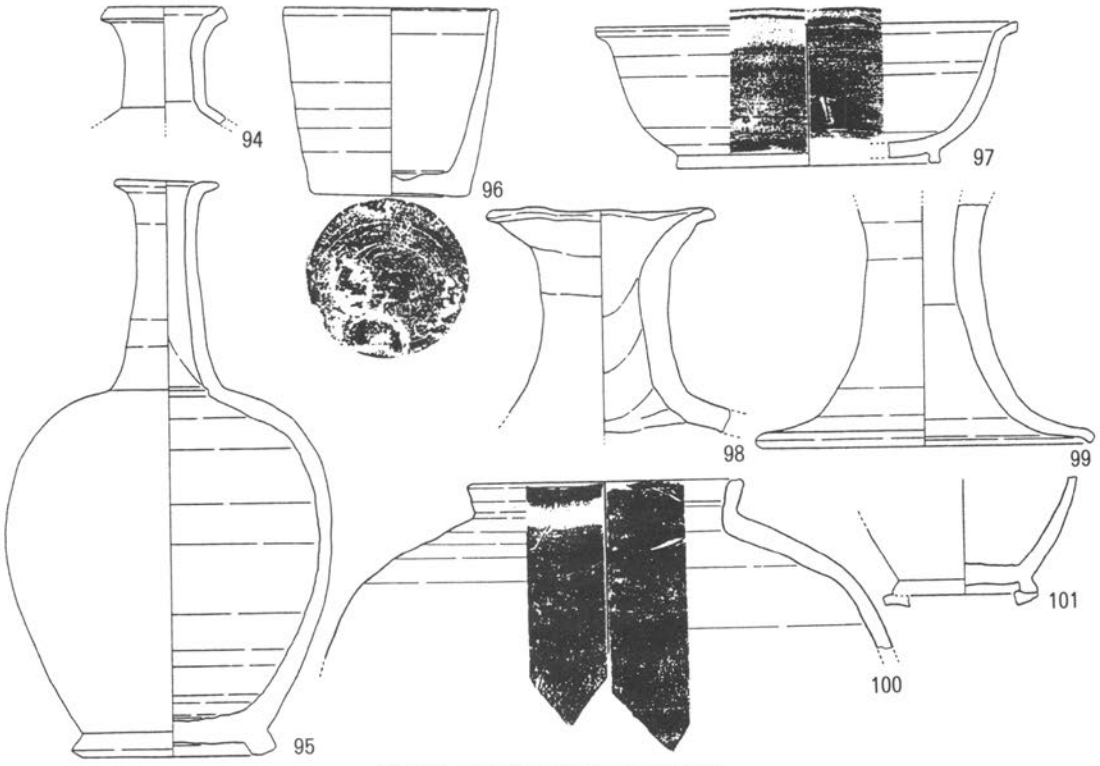
灰原からは水瓶（95）、長頸壺Ａ（98）・Ｂ（94・101）、底部回転糸切り無調整の杯ⅣＪ（96）、高台付椀Ｂ（97）、高盤（99）、短頸壺Ａ（100）が認められ、このほかにも鉢Ａ・Ｂ、甕、平瓶などがある。ほかの窯と異なり壺類が多く、水瓶や円面硯・平瓶など特殊なものを焼



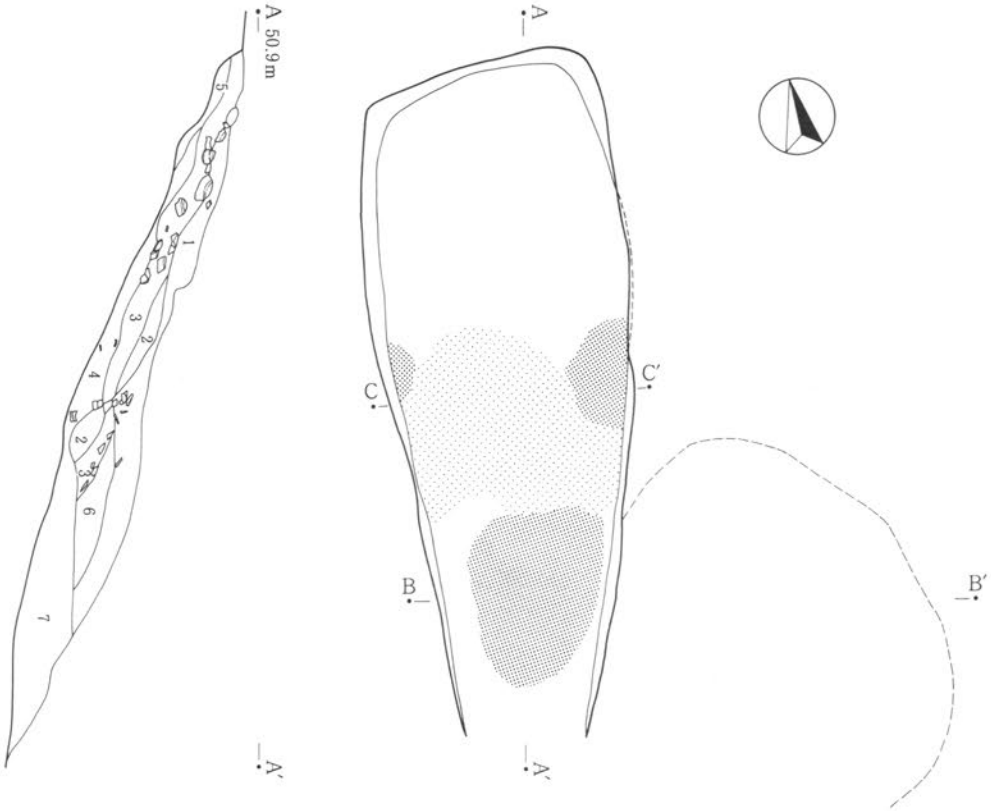
第22図　不入1・2・4号窯跡平面・断面図

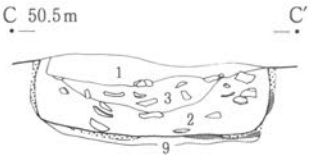


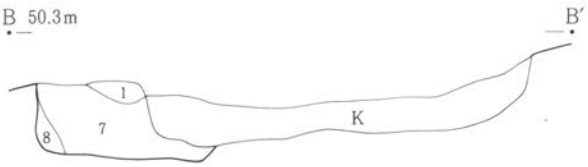
第23図　不入２号窯跡窯底、壁出土遺物



第24図　不入２号窯跡灰原出土遺物



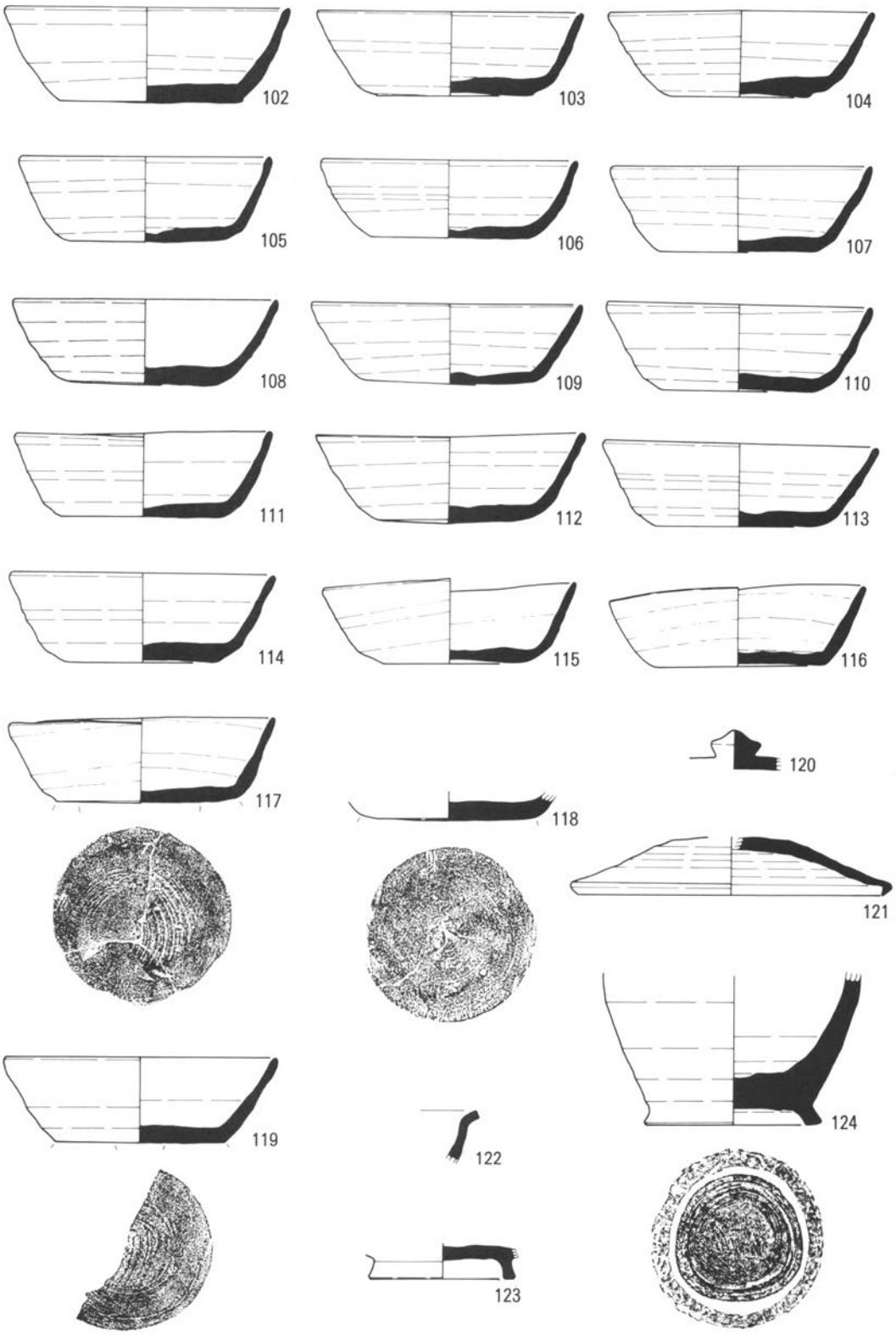




1．黒褐色土　焼土粒、炭化粒を僅かに含む
2．暗褐色土　焼けた粘土塊を多量に含む、遺物が多い
3．褐色土　遺物を多量に含む
4．黒褐色土　遺物を多く含む
5．暗黄褐色土　粘土粒を少量含む
6．黒色土　焼土粒を僅かに、遺物を少量含む
7．黒色土　粘土粒と炭を少量含む
8．黒色土　焼土粒と炭を多く含む
9．黒色化シルト

0　2 m

第25図　永田16号窯跡平面・断面図



第26図　永田16号窯跡出土遺物

成した窯である。

永田16号窯跡（第25・26図）

永田15号窯跡の東約2.5mの位置に所在する半地下式の無階無段の窖窯である。窯の体長は3.77mであり、主軸はN－5°－Eにみられる。標高は焚口床面で49.5m、窯尻床面で50.7mを測る。窯尻部から方形に膨れ、焚口部に向かってすぼまる形態であり、あまり変化のないものとなっている。窯体内には多数の遺物が認められた。焚口部の床幅は0.62mで、側壁は右壁が後世の抜根によって破壊され、8cm程度しか残存していないが、左壁は35cm残存している。床面は窯床中央部が赤化している程度であり、焚口の傾斜角は5°である。焼成部の床幅は1.2m前後であり、側壁は40cm前後の遺存である。床面は1枚のみであり、裏込めは検出されなかった。焼成面は、下部に赤褐色の酸化面と青灰色の還元面が認められ、断面でも酸化・還元面は部分的に観察できた。傾斜角は24°である。なお、窯尻部には部分的にくぼみが存在する。

遺物の出土状況から、窯が焼成時につぶれたものと考えられ、部分的には窯詰めに近い状況で遺物が残存していた。本窯の焼成器種は杯が主体となり、その多くが逆さに伏せられた状態で出土した。数枚が重ねられた上にさらに同じ杯類を組違いに底部を逆さまにしてに重ね、ピラミッド状に積み上げ、窯詰めしたものと考えられる。また、本窯跡の製品は火襷（わら状のもの）痕が多くの遺物にみられ、なかには「わら」状の繊維が残存しているものが認められる。

遺物は底部回転糸切り離しの杯ⅣⅠ（102～116）が主流を占め、底部外周回転ヘラ削りの杯ⅡⅠ（117・119）と杯ⅠⅠ（118）がわずかに出土した。そのほかには、高台付杯ⅡG（123）、高台付椀Bの口縁部破片（122）、壺（124）、蓋C（121）が出土している。

本窯跡の製品は石川窯跡の製品とほぼ同時期かもしくはそれより後出する可能性がある。

第2表　永田・不入窯跡出土遺物法量表　（　）は推定値

番号	器種	口径	器高	底径	分類	出土地点	図版
1	盤	(22.8)	2.1	(15.5)	A	永田17号窯	6-17
2	〃	(20.8)	1.7	(17.8)	B	〃	6-15
3	〃	(19.0)	2.0	(10.6)	C	〃	
4	〃	(18.8)	1.5	(10.5)	〃	〃	6-14
5	〃	(19.8)	1.6	(8.5)	D	〃	6-13
6	高台付盤			(14.9)	B	〃	6-12
7	脚付盤	(21.4)			A	〃	5-6
8	〃	(21.4)			〃	〃	
9	〃					〃	
10	高台付椀	(18.0)	6.1	10.1	ⅠA	〃	5-10
11	〃	(16.7)	(6.8)	(11.4)	〃	〃	5-11
12	高台付椀	17.5				〃	
13	蓋	(14.8)			C	〃	5-5
14	高台付杯	14.3	3.7	10.5	ⅠA	〃	5-8
15	〃	(14.0)	4.0	(9.0)	〃	〃	5-9
16	〃	(12.8)	4.1	(8.6)	ⅠB	〃	
17	〃	(13.8)	3.7	9.1	ⅠA	〃	6-18
18	杯	8.3	7.6	6.3	ⅠJ	〃	6-19
19	短頸壺	(6.4)	7.4	(6.4)	C	〃	
20	蓋	(13.0)			H	永田17号窯	7-20
21	〃	(13.1)			〃	〃	7-21
22	短頸壺	(11.1)			A	〃	7-22
23	杯	(14.0)	3.7	(10.4)	ⅠB	〃	
24	〃	(14.1)	3.2	11.8	ⅠA	〃	5-7
25	〃	(13.4)	2.8	9.1	〃	〃	
26	〃	13.9	3.8	8.7	ⅠB	〃	
27	甕					〃	
28	蓋	(16.8)			A	永田5号2次	
29	〃	(17.7)			〃	〃	
30	〃	12.2	2.4		E	〃	
31	高台付椀	16.0	5.7	11.0	ⅠA	〃	
32	〃	16.6	6.4	10.0	〃	〃	
33	〃	16.0	6.2	10.3	ⅠC	〃	
34	高台付杯			9.3	Ⅰ	〃	
35	高台付椀	(14.2)	(6.3)	(9.7)	B	〃	
36	高台付杯	13.5	4.5	9.0	ⅠB	〃	
37	〃	11.3	3.8	8.9	E	〃	
38	杯	12.8	3.8	10.2	ⅠC	〃	

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	分　類	出土地点	図　版
39	杯	13.5	3.8	8.2	I C	永田5号2次	
40	〃	(13.0)	(4.5)	(6.3)	〃	〃	
41	〃	13.8	3.6	9.3	I B	〃	
42	盤	(23.9)			A	〃	
43	〃	(17.8)			F	〃	
44	甑					〃	
45	甕					〃	
46	蓋	17.6	4.3		A	永田5号3次	
47	〃	17.2	4.8		〃	〃	
48	杯	14.2	4.2	8.4	B	〃	
49	〃	14.3	3.7	8.3	II B	〃	
50	〃	(13.5)	(3.4)	(8.8)	〃	〃	
51	〃	13.2	3.9	9.5	I B	〃	
52	〃	(12.5)			C	〃	
53	〃			9.9	I B	〃	
54	盤	(20.0)	(2.8)	(14.4)	F	〃	
55	高　盤	(20.3)			A	〃	
56	高台付鉢			(14.2)		〃	
57	蓋	16.3	(3.6)		A	永田5号4次	
58	〃	(17.5)			〃	〃	
59	〃	14.2			H	〃	
60	盤	(18.8)			B	〃	
61	高台付椀	15.2	5.5	8.3	I B	〃	
62	〃	17.5	6.3	12.3	I A	〃	
63	蓋	7.7	2.6		F	〃	
64	高台付杯			9.6	I	〃	
65	〃	(14.0)	(4.4)	(9.8)	I B	〃	
66	〃	14.7	4.1	10.2	〃	〃	
67	杯	13.7	4.4	9.0	〃	〃	
68	〃	12.9	3.9	8.5	C	〃	
69	〃	13.3	4.1	8.4	I C	〃	
70	〃	(15.3)	(4.1)	(9.5)	I B	〃	
71	壺			(7.8)		〃	
72	蓋	(18.4)	3.0		A	永田15号窯	9-14
73	高台付椀	(16.6)	5.6	(10.7)	B	〃	9-43
74	〃	(19.0)			A	〃	
75	高台付杯	(12.6)	3.8	8.4	II B	〃	9-44
76	〃			6.6	I G	〃	
77	杯	(13.6)	3.3	(10.9)	I C	〃	9-42
78	〃	(12.4)	3.6	8.1	〃	〃	9-45
79	〃	12.4	3.2	8.3	〃	〃	9-46
80	〃	(12.3)	3.1	(9.4)	II C	〃	
81	蓋	16.2	3.8		A	不入2号窯	
82	蓋	17.7	2.5		B	不入2号窯	
83	〃	12.0	2.3		E	〃	
84	高台付椀			11.3	II	〃	
85	〃	15.5	6.8	10.8	I A	〃	
86	高台付杯	(14.0)	(4.1)	(8.7)	I B	〃	
87	杯	13.9	3.9	8.7	〃	〃	
88	〃	13.0	3.4	8.0	C	〃	
89	〃	13.9	3.6	9.4	II B	〃	
90	〃	13.2	3.2	8.6	II C	〃	
91	〃	(14.0)	(2.7)	(10.0)	I G	〃	
92	円面硯			(16.0)		〃	
93	鉢			8.2	A	〃	
94	長頸壺	4.5			B	〃灰原	
95	水　瓶	4.2	23.4	8.1		〃 〃	
96	杯	8.7	7.5	6.4	IV J	〃 〃	
97	高台付椀	(17.0)	(5.7)	(10.7)	B	〃 〃	
98	長頸壺	9.0			A	〃 〃	
99	高　盤			13.3		〃 〃	
100	短頸壺	11.0			A	〃 〃	
101	長頸壺			5.9	B	不入2灰原	
102	杯	13.4	4.5	8.6	IV I	永田16号窯	
103	〃	12.4	4.1	6.5	〃	〃	
104	〃	12.4	3.9	7.2	〃	〃	
105	〃	11.8	4.0	7.3	〃	〃	
106	〃	12.0	3.7	7.3	〃	〃	
107	〃	12.2	4.0	7.2	〃	〃	10-53
108	〃	12.4	4.1	6.9	〃	〃	10-55
109	〃	12.7	3.7	7.9	〃	〃	10-57
110	〃	12.3	4.1	7.1	〃	〃	
111	〃	12.1	4.1	7.9	〃	〃	
112	〃	12.6	4.2	7.3	〃	〃	
113	〃	12.9	3.8	7.6	〃	〃	
114	〃	12.4	4.2	7.1	〃	〃	10-58
115	〃	11.9	4.1	6.6	〃	〃	10-56
116	〃	12.0	4.0	7.7	〃	〃	10-54
117	〃	12.4	4.0	8.4	II I	〃	10-59
118	〃			8.1	I I	〃	10-60
119	〃	(12.8)	4.0	8.0	II I	〃	
120	蓋					〃	
121	〃	(14.2)			C	〃	9-50
122	高台付椀				B	〃	
123	高台付杯			6.8	II G	〃	9-51
124	壺			8.6		〃	9-52

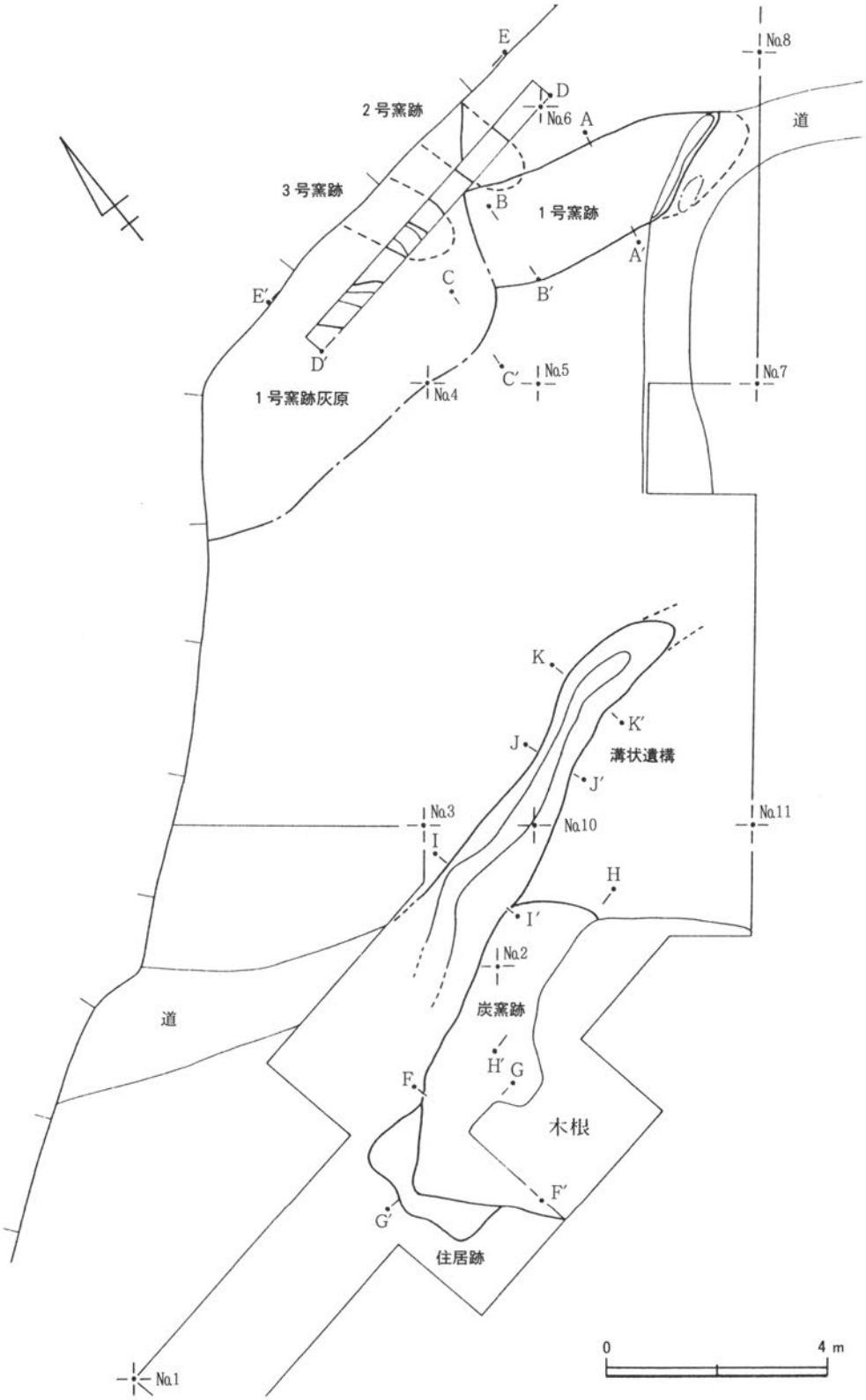
（3）石川窯跡（第2・27～31図）

市原市石川581－1他に所在する須恵器窯跡群である。

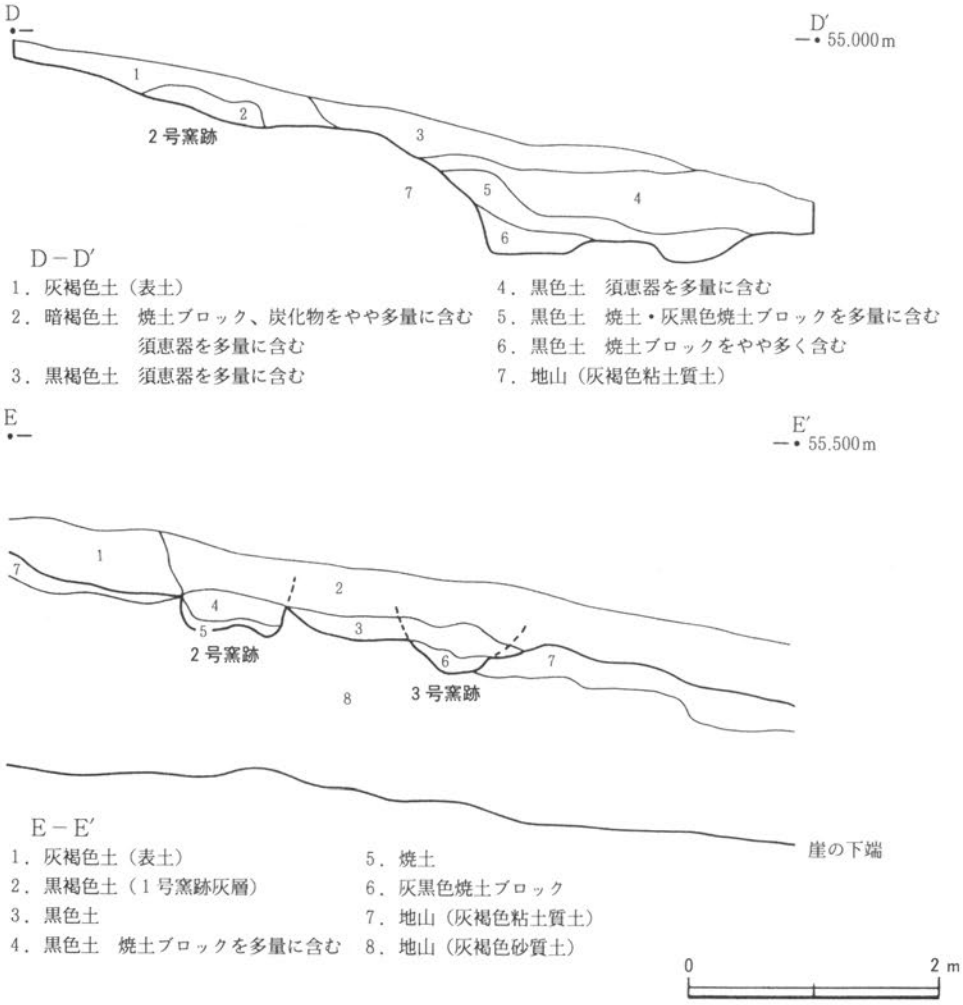
遺跡は養老川の支流の内田川とその支流である石川川に挟まれた丘陵部で、石川川にのぞむ尾根状丘陵の北側斜面に立地し、標高は80m前後である。本遺跡の南約3.5kmには、永田・不入窯跡群が存在する。

石川窯跡の調査は1987年に千葉県教育委員会の依頼により千葉県文化財センターによって確認調査（文献75）が行われ、3基の窯体と竪穴住居跡1軒、炭窯跡1基、溝1条が検出された。3基の窯跡はいずれも半地下式の窯である。

第27図　石川窯跡グリッド配置図



第28図　石川窯跡遺構位置図



第29図　石川窯跡遺構土層断面図

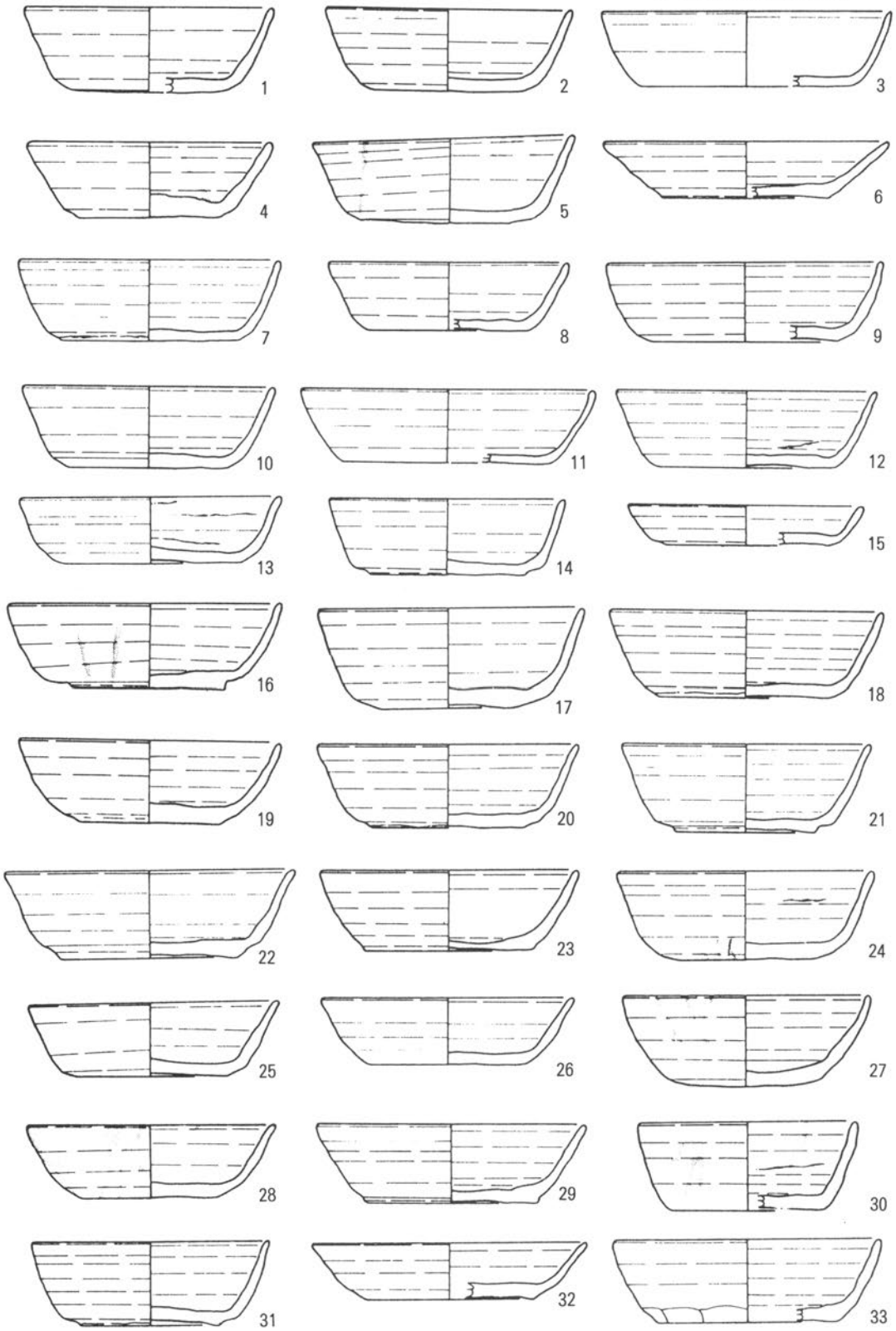
1号窯跡は2・3号窯跡を切って存在しており、本遺跡で最も新しい窯跡である。この1号窯跡は、道路によって窯尻部分が削平されており、全体の窯長は推定で7m前後と考えられる。焼成部の幅は1.8mである。窯体の傾斜角は14°前後で、窯底までの深さは確認面から約40cmの深さである。1号窯跡の灰原は、深さ30～70cmの堆積である。

遺物は、瓦片が1片が認められるが、これは焼き台の可能性が強く、ほかはすべて須恵器であり、本窯跡群は須恵器のみを焼成した窯跡と考えられる。

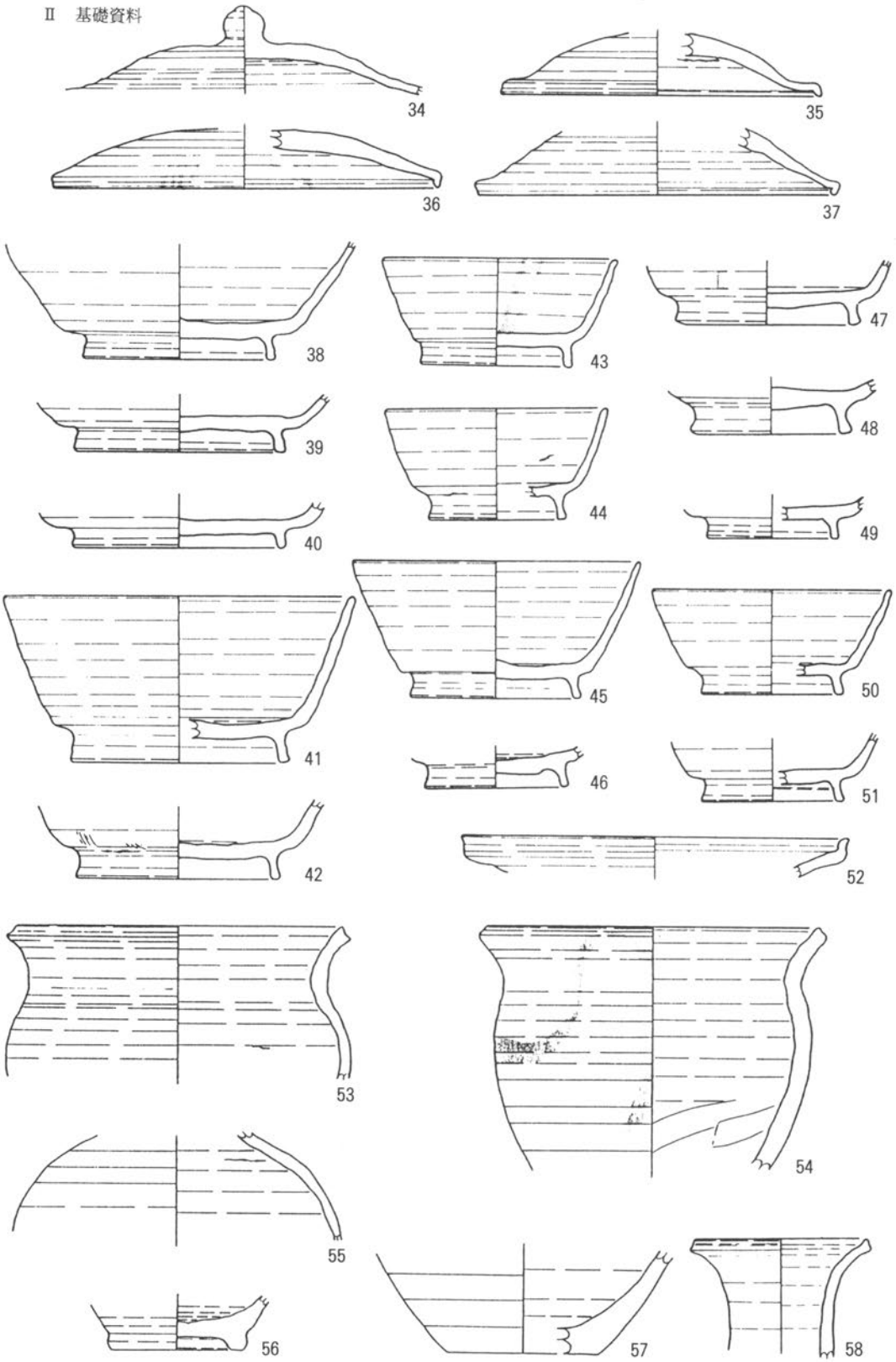
器種は杯を主体として高台付椀・高台付杯・蓋、甕・壺等がみられ、杯の切り離しはすべて回転糸切り離し技法である。

以下に述べるものは、1号窯跡およびその灰原のものが大部分を占める資料である。

杯の主体は回転糸切り離し無調整の杯ⅣⅠ（16～31）であり、実測個体（123個体）中の60%弱を占めている。底部外周回転ヘラ削りの杯ⅡⅠ（7～14）は30%弱、底部全面回転ヘラ削り



第30図　石川窯跡出土遺物(1)



第31図　石川窯跡出土遺物 (2)

技法の杯ＩＩ（１～５）が12％を占め、そのほかにはＩＧ（６）・ⅡＧ（15）・ⅣＧ（32）がわずかに、そして底部に手持ちヘラ削りがなされる杯ⅢＩ（33）が１個体検出されている。高台付杯は器高が高いＩＦ（43・48）・ⅡＦ（46・50・51）がみられ、高台付椀にはＩＦ（47）・ⅡＦ（45）、ＩＧ（38・39）・ⅡＧ（41・42）が認められる。蓋は蓋Ａ（34・36・37）・Ｃ（35）が認められるが、高台付椀と同様に数量的にとぼしい。壺は長頸壺（58）が存在し、甕は「く」の字状の口縁部を有するＣ（54）がわずかに出土している。また、盤と考えられる口縁部破片も出土している。この形状のものは上名主ケ谷窯跡からも出土しており注目される。おそらくは高台付盤であろうと思われる。

この１号窯跡の製品は永田16・18号窯跡とほぼ同時期かわずかに遡るものと考えられる。

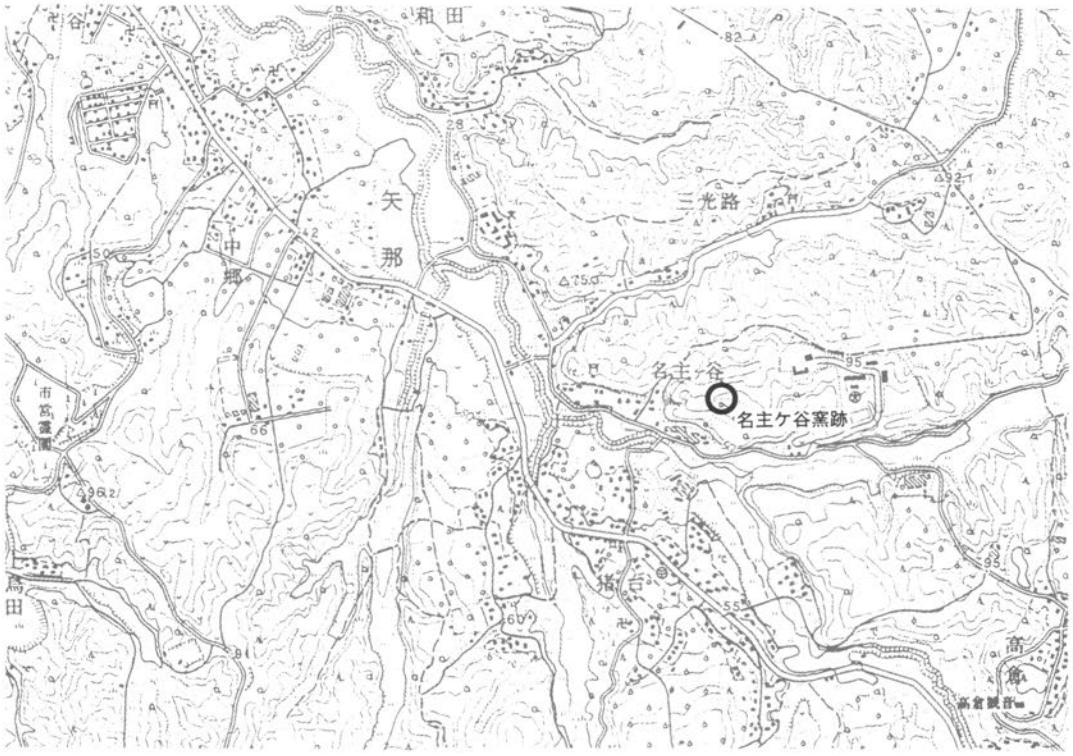
第３表　石川窯跡出土遺物法量表　　（　）は推定値

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	分　類	出土地点	図　版
1	杯	(12.0)	4.1	(7.4)	ＩＩ	１号窯・灰原	
2	〃	(12.0)	3.9	(7.2)	〃	〃	
3	〃	(14.0)	3.6	(10.2)	〃	〃	
4	〃	(11.8)	3.6	(6.6)	〃	〃	
5	〃	12.7	4.3	8.2	〃	〃	12-71
6	〃	(13.8)	2.7	(8.0)	ＩＧ	〃	
7	〃	(12.6)	3.9	(8.4)	ⅡＩ	〃	
8	〃	(11.6)	3.2	(7.6)	〃	〃	
9	〃	(13.4)	3.8	(8.8)	〃	〃	
10	〃	(12.2)	3.9	7.6	〃	〃	
11	〃	(14.2)	3.5	10.4	〃	〃	
12	〃	(12.6)	3.7	(8.4)	〃	〃	
13	〃	(12.6)	3.2	8.4	〃	〃	
14	〃	(11.4)	3.6	(7.6)	〃	〃	
15	〃	(11.4)	1.9	(7.8)	ⅡＧ	〃	
16	〃	13.2	4.1	7.4	ⅣＩ	〃	11-69
17	〃	(13.2)	4.8	(6.4)	〃	〃	
18	〃	(13.2)	4.1	(7.8)	〃	〃	11-66
19	〃	(12.6)	3.9	6.6	〃	〃	
20	〃	(12.6)	3.9	(7.0)	〃	〃	
21	〃	(12.0)	4.2	(6.6)	〃	〃	11-65
22	〃	(14.0)	4.2	(8.4)	〃	〃	
23	〃	(12.4)	3.8	(8.2)	〃	〃	
24	〃	(12.4)	4.3	6.4	〃	〃	11-70
25	〃	(14.0)	4.2	(8.4)	〃	〃	11-61
26	〃	(12.2)	3.4	(7.4)	〃	〃	
27	〃	(12.0)	4.3	(7.2)	〃	〃	
28	〃	12.0	3.6	6.4	〃	〃	11-64
29	〃	(13.0)	3.9	8.4	〃	〃	
30	杯	(10.6)	4.3	(7.4)	ⅣＩ	１号窯・灰原	
31	〃	(11.7)	(4.0)	6.8	〃	〃	
32	〃	(13.2)	2.7	(7.8)	ⅣＧ	〃	
33	〃	(13.8)	2.7	(8.0)	ⅢＩ	〃	
34	蓋				Ａ	〃	
35	〃	(15.6)			Ｃ	〃	
36	〃	(18.6)			Ａ	〃	
37	〃	(16.8)			〃	〃	
38	高台付椀			(9.2)	ＩＧ	〃	
39	〃			(10.2)	〃	〃	
40	高台付杯			(10.2)		〃	
41	高台付椀	(16.8)	7.8	(10.4)	ⅡＧ	〃	12-73
42	〃			(9.8)	〃	〃	
43	高台付杯	11.2	5.1	7.2	ＩＦ	〃	12-74
44	〃	(10.6)	5.2	(6.6)		〃	
45	高台付椀	(13.8)	6.4	8.2	ⅡＦ	〃	
46	高台付杯			(6.8)	〃	〃	
47	高台付椀			(8.8)	ＩＦ	〃	
48	高台付杯			(7.6)	〃	〃	
49	〃			(6.2)		〃	
50	〃	(11.4)	4.9	(6.8)	ⅡＦ	〃	
51	〃			(6.8)	〃	〃	
52	盤	(18.4)				〃	
53	甕	(22.0)	(19.2)	(22.9)	Ｃ	〃	
54	〃	(21.2)	(19.0)	(20.3)	〃	〃	12-75
55	壺					〃	
56	〃			(8.4)		〃	
57	甕			9.6		〃	
58	長頸壺	(8.2)				〃	12-77

（４）上名主ケ谷窯跡（第32～43図）

木更津市矢那字上名主ケ谷1,000他に所在する須恵器・瓦窯跡群（文献80）である。須恵器窯跡３基、瓦窯跡２基、須恵器と瓦を焼成した窯跡１基が千葉県教育委員会の依頼を受けて千葉県文化財センターが実施した確認調査によって検出されている。

遺跡は東京湾に注ぐ矢那川河口より約７km入った中流右岸の台地に存在し、矢那川の小支流



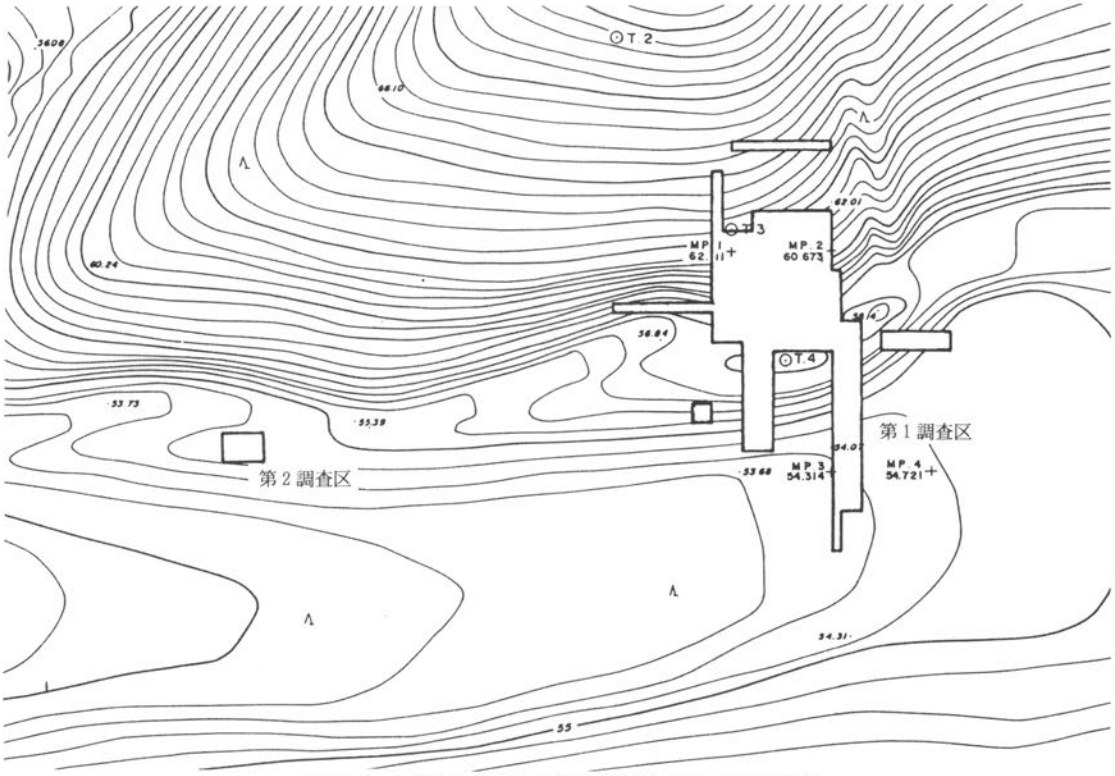
第32図　上名主ケ谷窯跡位置図（1：25,000　木更津）

が形成した支谷にほぼ南面した傾斜角25°の台地斜面に位置している。標高は焚口部で60m前後である。遺跡の北西約100mにはこれとは別に「木更津矢那瓦址」と呼称される瓦窯跡（文献9）が認められる。ほぼ完掘されており、3次にわたる窯の構築がなされ、地下式無階有段から地下式無階無段、半地下式無階無段の窖窯へと変遷している。時期は「女瓦の製法が凸面型造りによる」こと（文献48）から8世紀後半に比定されている。

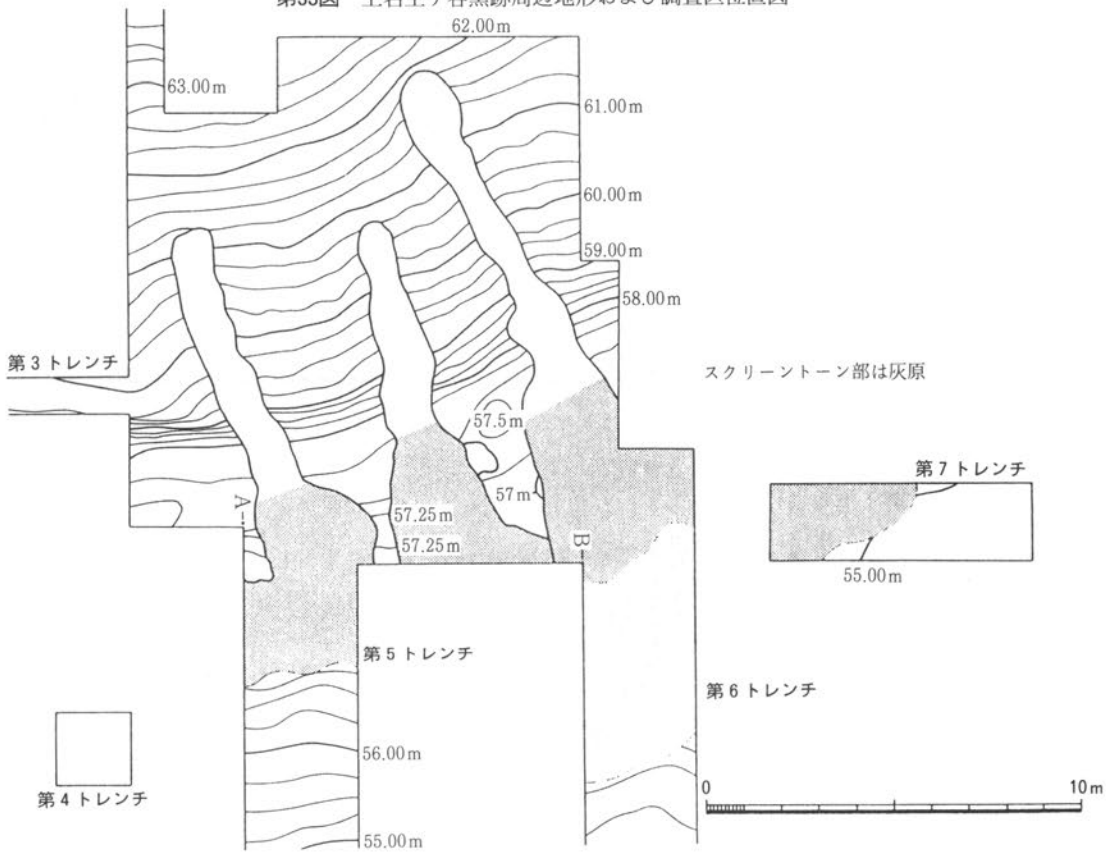
本窯跡群の窯構造は確認調査のみで完掘されたものがないので判然としないが、地下式のものが多く、半地下式のものも存在する可能性がある。確認面で判断される窯体全長は一部分しか残存しない4号窯跡を除いて、おおよそ5～7mの範囲のものと考えられる。

築窯の順としては、斜面の低い方から上部の方にいっているようで、重複および構築方法・形態から4・6→5→1→2・3号窯跡と変遷したと考えられている。この変遷をもとに焼成器種をみると須恵器の焼成が行われたのちに瓦が焼成されており、須恵器専用窯から須恵器・瓦窯、そして瓦窯へと変化した可能性が強い。

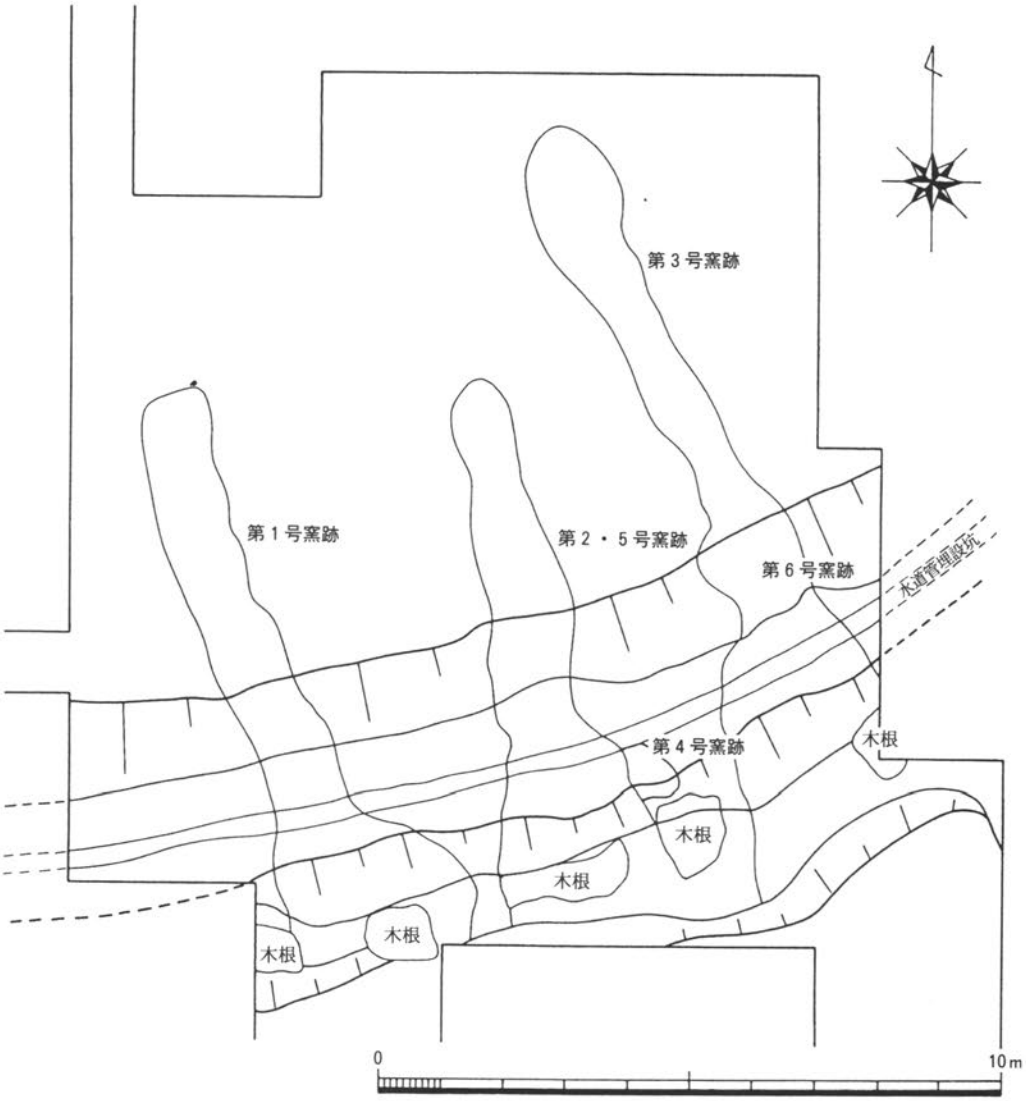
基本となる杯の製作技法については、底部の切り離しは回転糸切り技法であり、その後に底部全面または外周に回転ヘラケズリが施されている。手持ちヘラケズリのものや、回転糸切り離しのみのものもわずかではあるが出土している。全体的に永田・不入窯跡の製品と類似し、胎土・焼成も同様なものがみられ、永田・不入窯跡の製品と区別することが難しい。技法的に



第33図　上名主ケ谷窯跡周辺地形および調査区位置図



第34図　上名主ケ谷窯跡遺構周辺地形測量図



第35図　上名主ケ谷窯跡遺構位置図

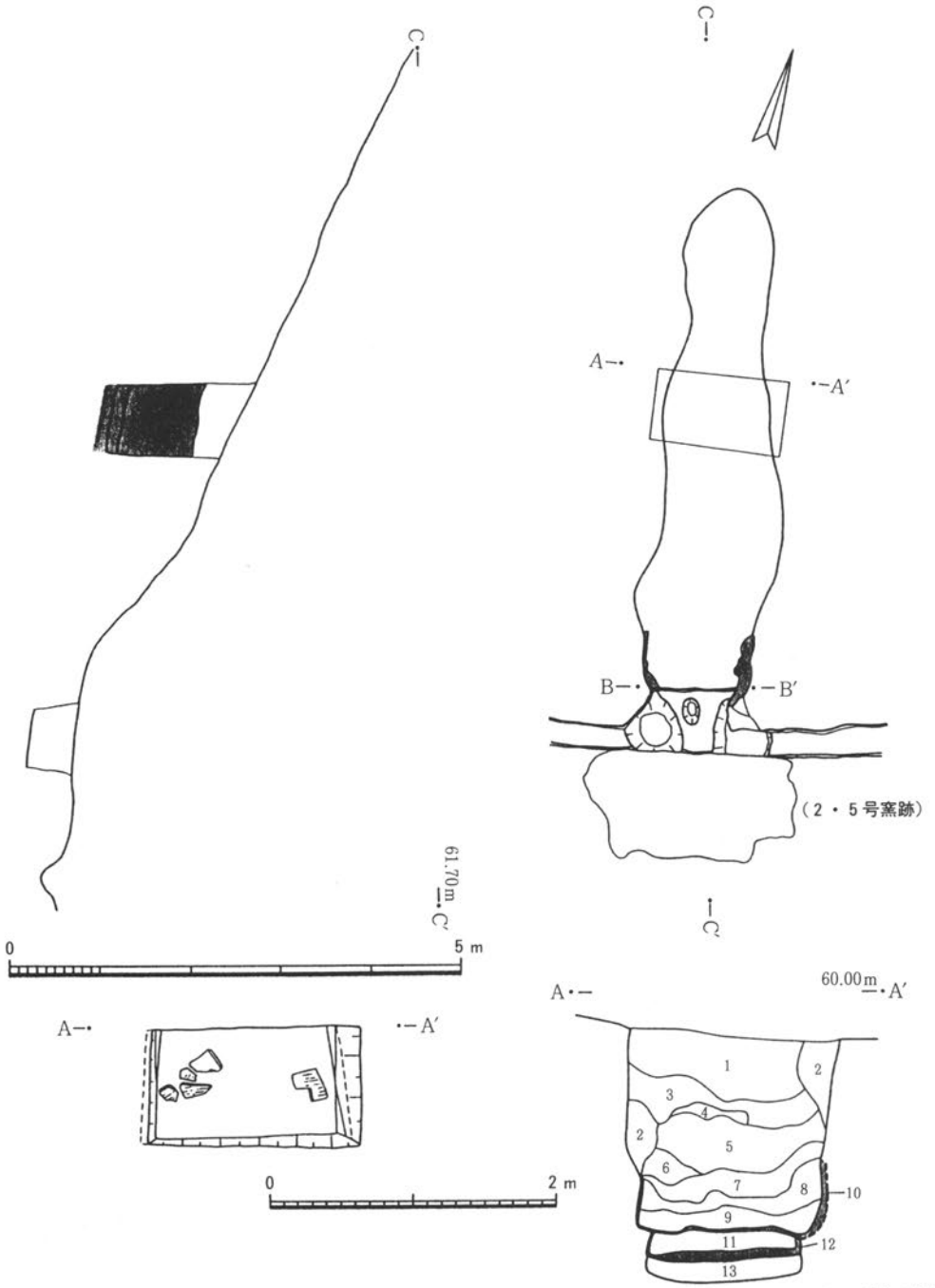
も同様であり、両遺跡は工人の交流があった可能性が考えられる。

４号窯跡（第36～38図）

本窯跡は２・５号窯跡の灰原の下から検出された窯跡であり、林道等によって焼成部の一部を残して全壊しており、残存部は奥壁に近い部分と想定されている。焼成面は１枚であった。窯体内からは椀の蓋と考えられる蓋Ａ（６・７）、杯ⅢＣ（４）、高台付杯ＩＢ（１・２）、底部が丸い椀ＩＤ（５）、短頸壺Ａ（８）・甕Ｂ（９）が出土している。

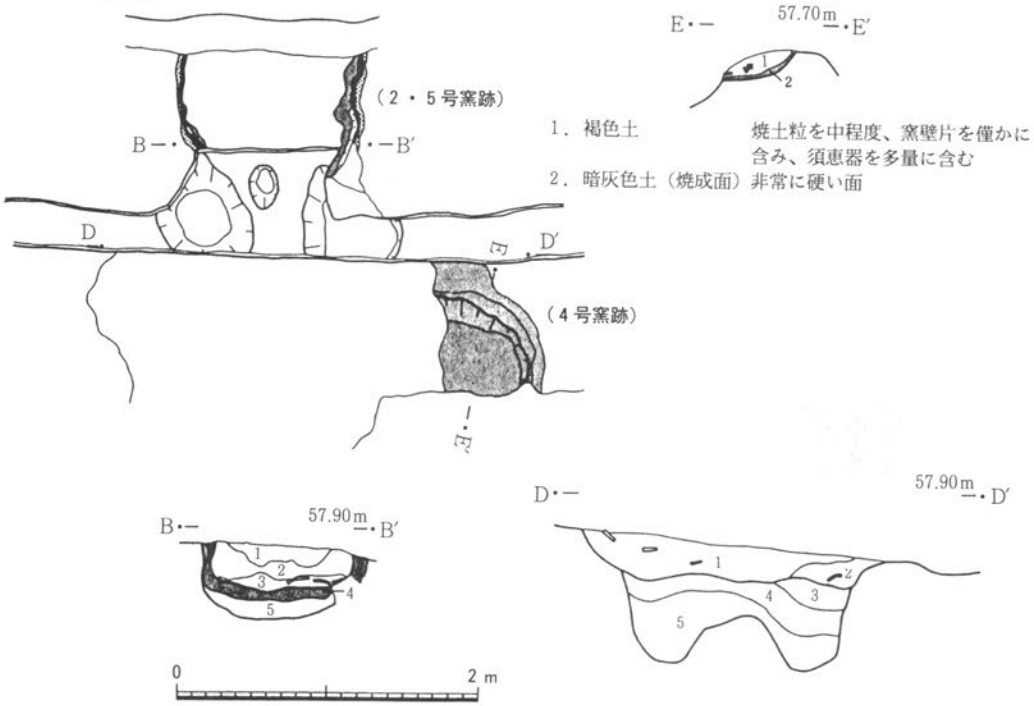
５号窯跡（第36・38～40図）

本窯跡は瓦窯と考えられる２号窯跡に切られて存在する地下式の窯跡であり、窯跡群の中央に位置する。窯体の主軸は２号窯跡と同じくＮ－12°－Ｅ前後である。窯体の全長は推定で５

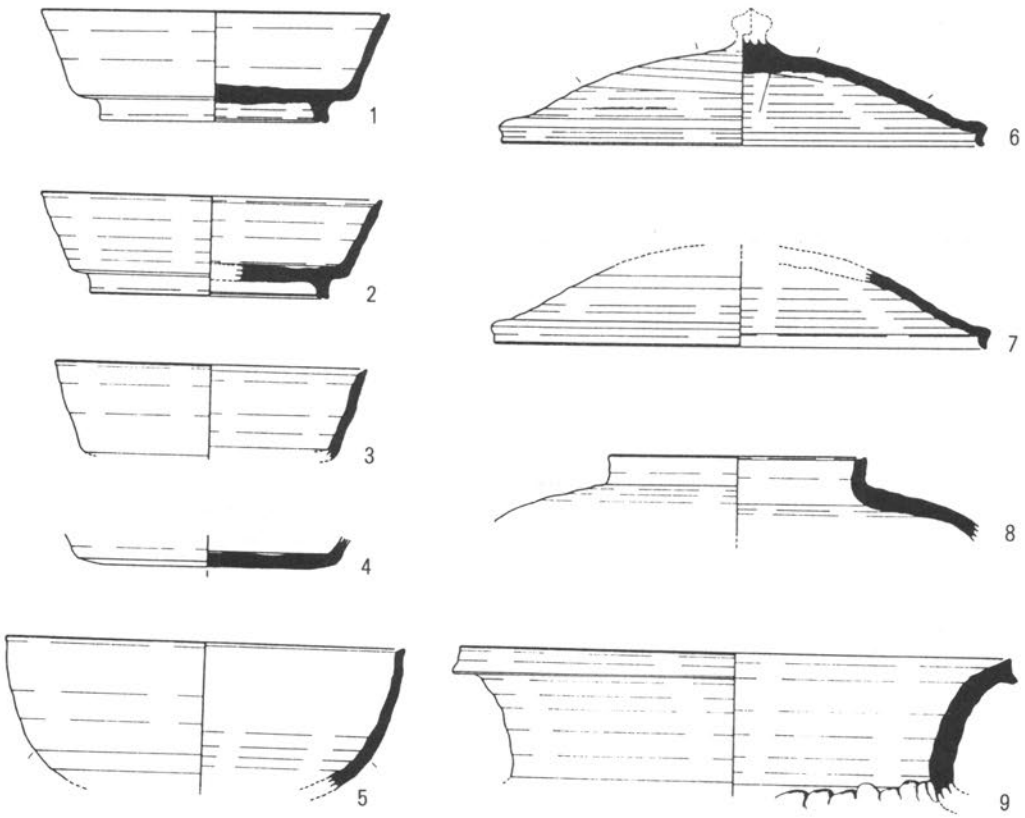


1．暗褐色土　（地山崩落土）黄褐色スコリアが僅かに混入する
2．明褐色土　（地山崩落土）
3．褐色土　（地山崩落土）僅かに暗褐色土を含む
4．暗褐色土　（地山崩落土）1よりも暗い暗褐色土が多量に含まれる
5．褐色土　（地山崩落土）3よりも僅かに暗く、小石を含む
6．明褐色土　（地山崩落土）褐色土の中に黄褐色土が混入する
7．暗黄褐色土（地山崩落土）黄褐色土と褐色土が半々の土、窯壁片が僅かに混入する
8．暗赤褐色土（天井崩落土）暗赤褐色の窯壁片の中に暗黄褐色土が少量混入する
9．黒褐色土　炭片を主体とし、細かな焼土が混在する
10．暗赤褐色土（2号焼成面）焼土粒を主体とする粘性のない土、上面より多量の瓦が出土し、須恵器の小破片がみられる
11．黄褐色土　（2号貼床）細かな焼土粒と黒色小石を含む
12．暗赤褐色土（5号焼成面）赤褐色と青灰色土の硬質面に黄褐色土と焼土塊が混入
13．白色粘土　（5号貼床）しまりがある

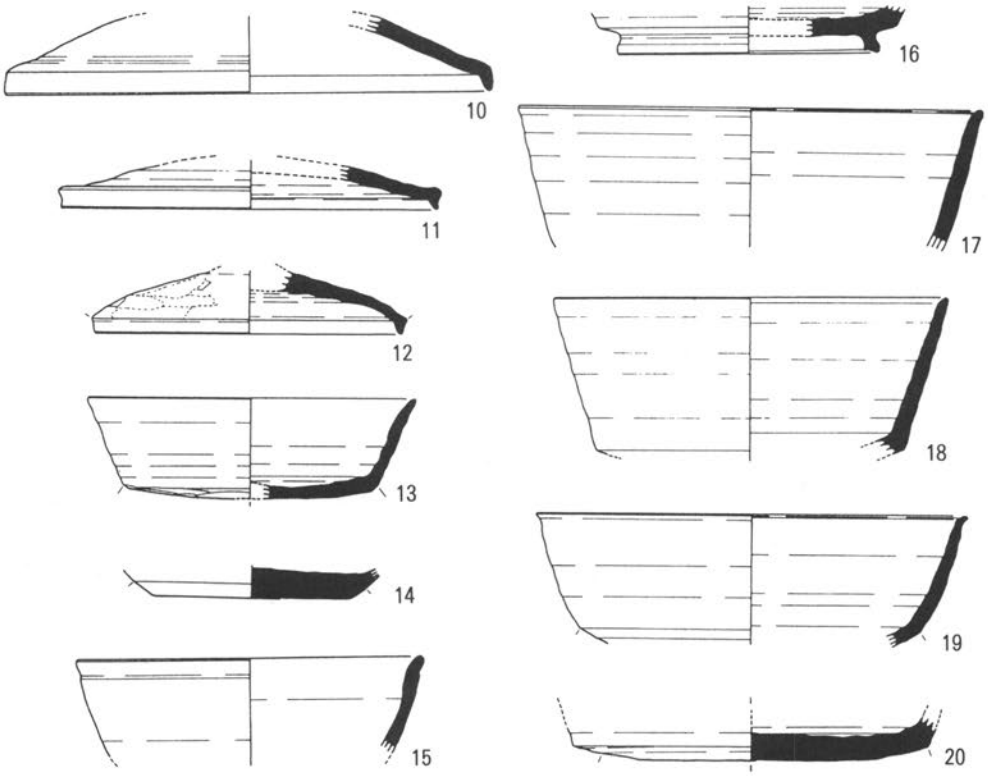
第36図　上名主ケ谷2・4・5号窯跡平面・断面図(1)



第37図　上名主ケ谷2・4・5号窯跡平面・断面図(2)



第38図　上名主ケ谷4号窯跡出土遺物

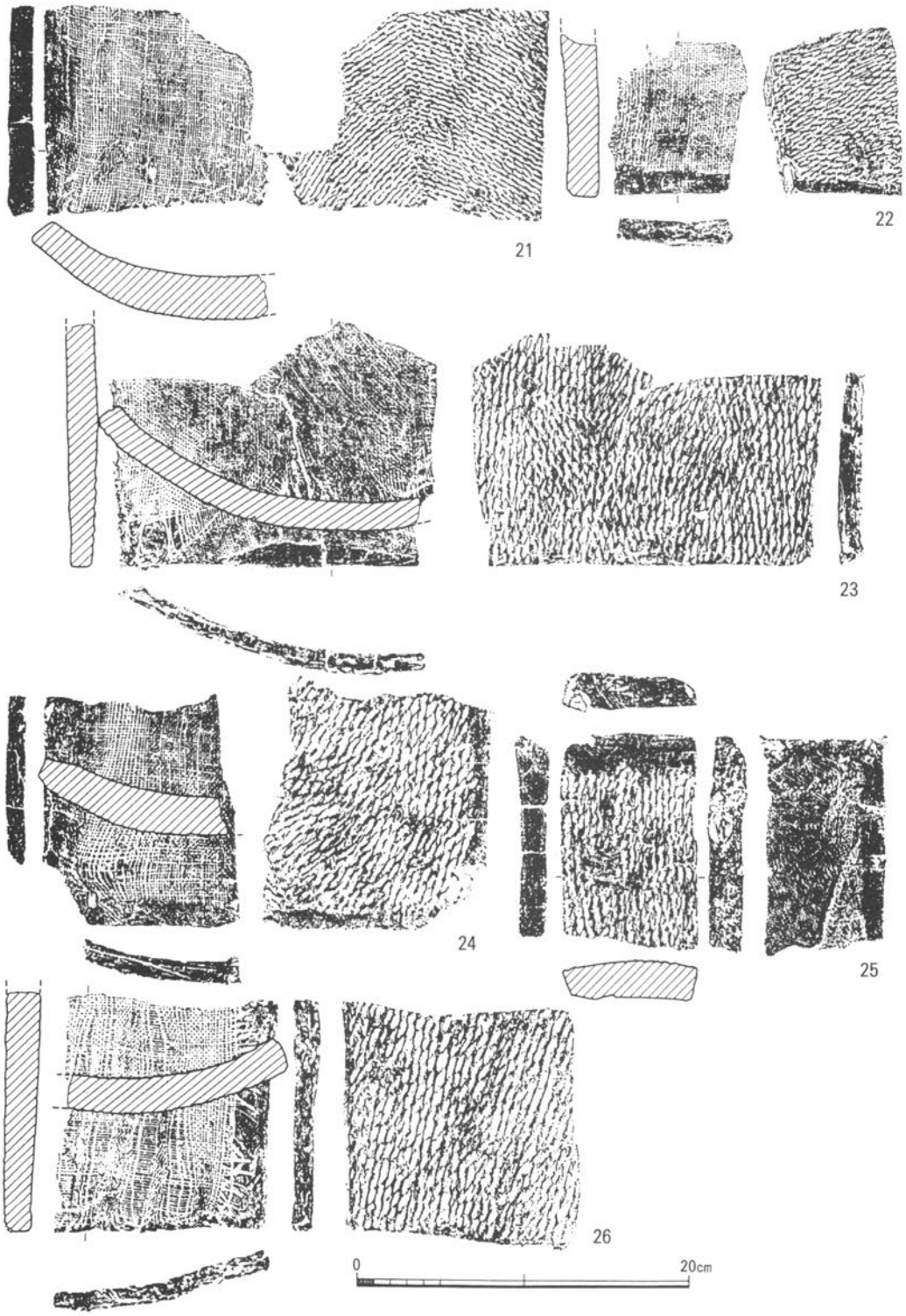


第39図　上名主ケ谷５号窯跡出土遺物(1)

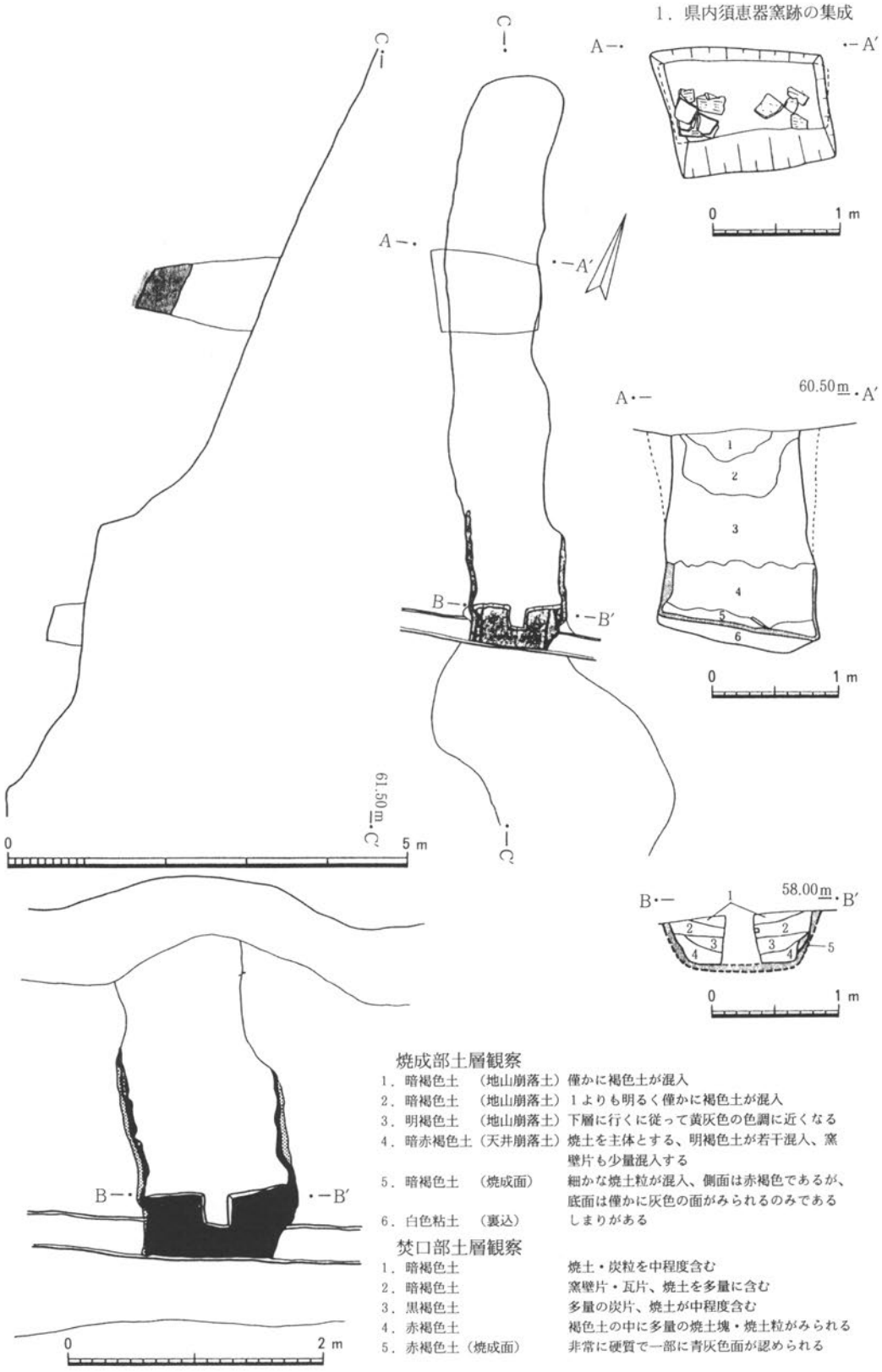
mで、焼成部は試掘坑部分の床幅で１mであり、地山面から1.7mの深さで窯床が検出され、その部分の傾斜角は13°であった。窯床は白色粘土を貼ってつくられており、側壁は直線的に立ち上がっている。焼成面は１枚であった。焚口部分には窯の主軸上に20×15cm、両わきに60×80cmの規模の土坑が検出された。蓋は蓋A（10）・C（11）・D（12）がみられ、蓋Dは天井部外面全面に手持ちヘラ削りを施したあとにナデがなされている。杯ⅢC（13）、高台付杯（16）、椀（18）が出土するとともに、灰原土坑内から平瓦・熨斗瓦（21～26）が検出されている。

１号窯跡（第41～43図）

窯跡群の西に位置する窯であり、焚口付近の標高は57.5mである。窯体の主軸はN－20°－Eにある。地下式の窯と考えられ、窯体の全長は推定で6.5mである。焼成部は試掘坑部分の床幅で1.25mを測り、地山面より深さ1.6mに窯床面がみられた。窯床は25°の角度であり、白色粘土が貼られていた。側壁は床面から直線的に立ち上がっている。窯体内からは、隅切平瓦・熨斗瓦・平瓦・丸瓦（27～31）が出土しているが、この瓦類については床面補強ないし焼台として、他の窯跡で焼成されたものが持ち込まれた可能性が考えられている。灰原は前庭部から続く台地斜面に不整形に広がっており、中腹で止まっている。灰原の厚さは厚いところで45cm



第40図　上名主ケ谷５号窯跡出土遺物(2)



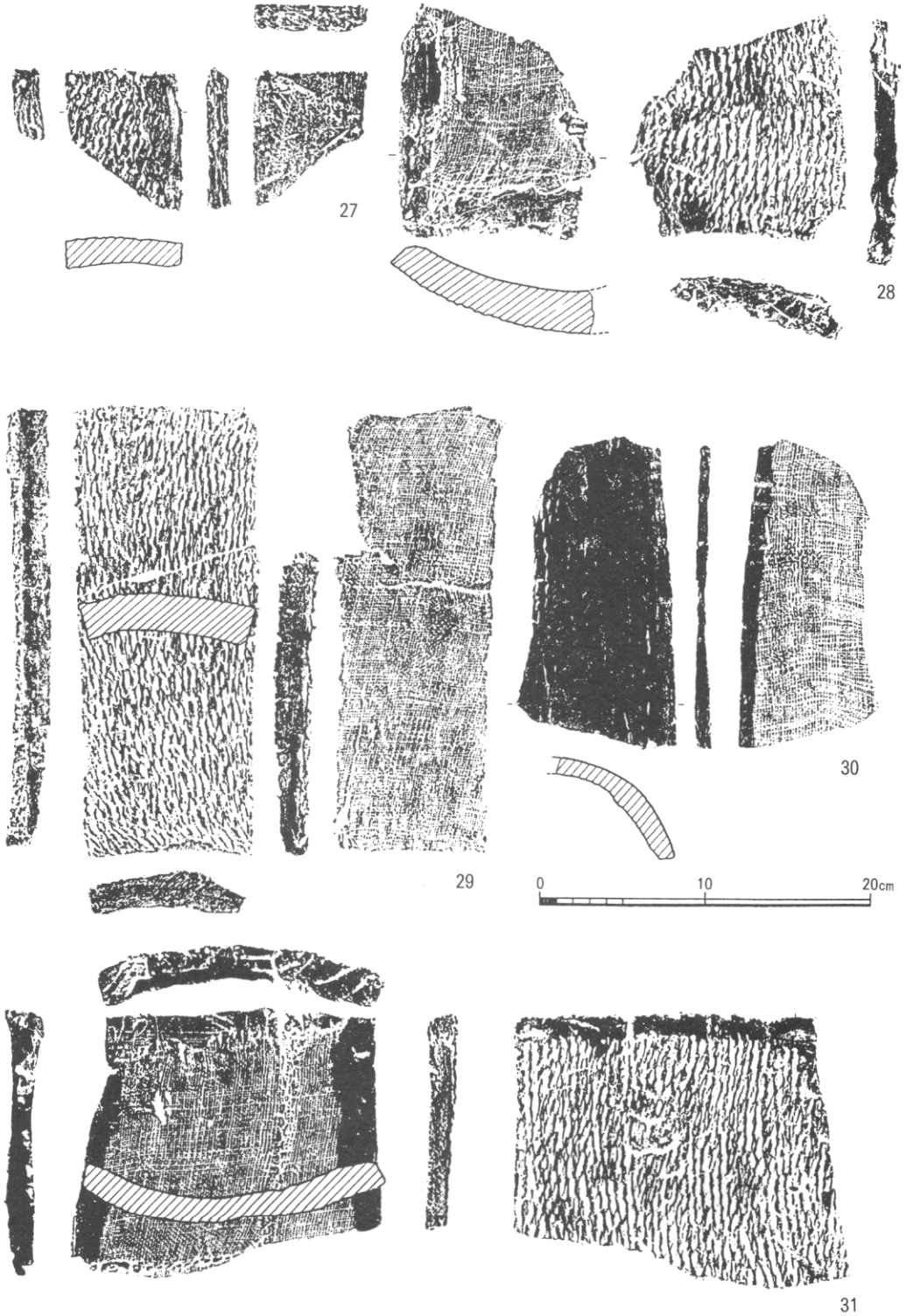
焼成部土層観察

1．暗褐色土　（地山崩落土）僅かに褐色土が混入
2．暗褐色土　（地山崩落土）1よりも明るく僅かに褐色土が混入
3．明褐色土　（地山崩落土）下層に行くに従って黄灰色の色調に近くなる
4．暗赤褐色土（天井崩落土）焼土を主体とする、明褐色土が若干混入、窯壁片も少量混入する
5．暗褐色土　（焼成面）　細かな焼土粒が混入、側面は赤褐色であるが、底面は僅かに灰色の面がみられるのみである
6．白色粘土　（裏込）　しまりがある

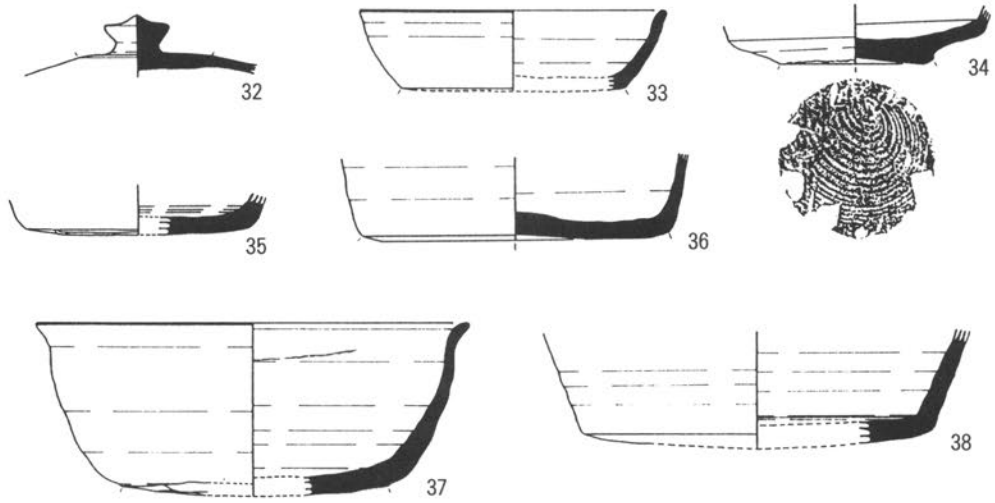
焚口部土層観察

1．暗褐色土　焼土・炭粒を中程度含む
2．暗褐色土　窯壁片・瓦片、焼土を多量に含む
3．黒褐色土　多量の炭片、焼土が中程度含む
4．赤褐色土　褐色土の中に多量の焼土塊・焼土粒がみられる
5．赤褐色土（焼成面）　非常に硬質で一部に青灰色面が認められる

第41図　上名主ケ谷1号窯跡平面・断面図



第42図　上名主ケ谷１号窯跡出土遺物



第43図　上名主ケ谷１号窯跡灰原上出土遺物

である。灰原上面から蓋（32）、杯ⅣＨ（34）やⅢＤ（35）、椀ⅢＥ（37）などが出土しており、須恵器焼成専用の窯とも考えられるが、灰原内からも瓦片が出土していることから両者を焼成した窯と判断される。

なお、２・３号窯跡からは多量の瓦が出土しており、熨斗瓦・丸瓦・平瓦・隅切平瓦が出土し、３号窯跡はとくに生焼けの瓦が多く出土している。両窯ともに須恵器杯類がわずかに検出されているが、この窯跡に伴うものかどうかは判然としない。ただし、その量の多さから考えて、主体的に瓦を焼成した窯であることは間違いのないものといえる。

本窯跡群の須恵器の器種構成は上記の器種のほかに盤の破片が１片みられる程度であり、蓋、杯類で占められ、甕類の出土が極端に少ないことと金属器模倣の椀が多いこと、そして永田・不入窯跡にはほとんどみられない手持ちヘラ削り技法の杯・椀が存在することが特徴的である。また、瓦については軒先瓦の出土がみられず、寺院の補修瓦を焼成していた可能性が示されている。

この窯跡群の操業時期であるが、操業そのものについては須恵器の形態差があまりみられないことから比較的短期間であったものと考えられ、その形態から永田窯跡の５号窯跡よりもわずかに後出する時期の遺物と判断される。

第４表　上名主ヶ谷窯跡出土遺物法量表（　）は推定値

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	分　類	出土地点	図　版
1	高台付杯	13.8	4.3	9.1	ＩＢ	４号窯	13-80
2	〃	13.5	4.0	(9.5)	〃	〃	18-81
3	〃	12.3				〃	
4	杯			10.2	ⅢＣ	〃	
5	椀	(15.8)			ＩＤ	〃	
6	蓋	19.1			Ａ	４号窯	13-78
7	〃	(19.4)			〃	〃	
8	短頸壺	(7.2)			〃	〃	13-86
9	甕	(21.8)			Ｂ	〃	13-85
10	蓋	(19.4)			Ａ	５号窯	

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	分　類	出土地点	図　版
11	蓋	(15.0)			C	5号窯	
12	〃	(12.2)			D	〃	
13	杯	(13.0)	3.9	(10.0)	Ⅲ C	〃	
14	〃			(7.8)		〃	
15	〃	(13.8)				〃	
16	高台付杯			(10.4)		〃	
17	椀	(19.4)				〃	
18	高台付椀	(15.6)				〃	
19	椀	(17.1)			Ⅰ D	〃	

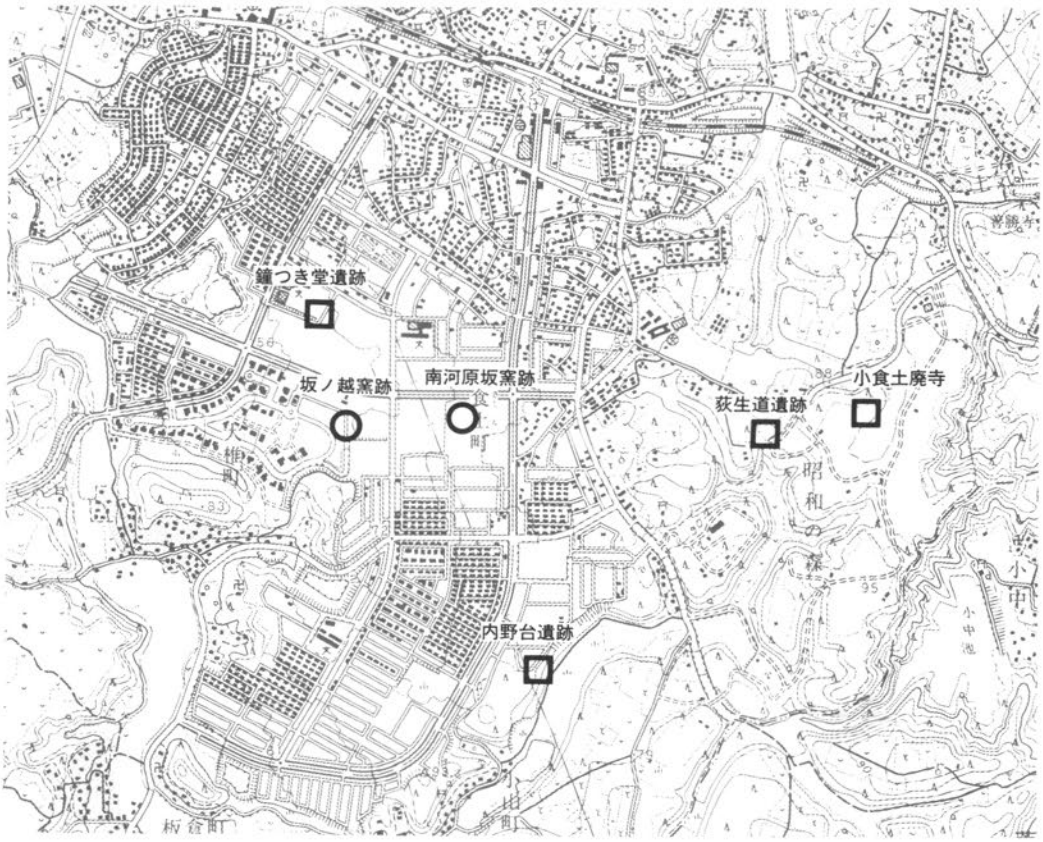
番号	器　種	口　径	器　高	底　径	分　類	出土地点	図　版
20	椀			14.0	Ⅰ	5号窯	
32	蓋					1号窯	
33	杯	(12.2)		(8.8)		〃	
34	〃			6.2	Ⅳ H	〃	13-84
35	〃			(8.8)	Ⅲ D	〃	
36	椀			12.2		〃	
37	〃	(17.2)	6.9	(10.5)	Ⅲ E	〃	13-83
38	〃			(13.8)		〃	

（5）南河原坂窯跡、坂ノ越窯跡（第44～47図）

南河原坂窯跡、坂ノ越窯跡は東京湾に流入する村田川によって開析された支谷の台地および斜面に存在するもので、北西から入り込む谷を挟んで対峙している。所在地は南河原坂窯跡が千葉市緑区小食土1178－10他、坂ノ越窯跡が千葉市緑区小食土町1175他である。

両窯跡の周辺には東に小食土廃寺（文献66）、荻生道遺跡が、南に内野台遺跡（文献31）、北西に鐘つき堂遺跡（文献37・40・53）等の奈良・平安時代の遺跡が数多く存在している。

南河原坂窯跡では標高70～90mの間に窯業関連遺構が多数検出され、須恵器窯のほかに、粘



第44図　南河原坂窯跡・坂ノ越窯跡位置図（1：25,000　東金）

第45図　南河原坂窯跡遺構分布図

土採掘坑、工房跡、土師器窯等の窯業生産にかかわる一連の遺構が伴っている。このような窯業生産の一連の工程が検出された遺跡は千葉県内では本遺跡だけであり、きわめて重要な遺跡である。

これまでの調査で窖窯13基、有牀式平窯６基、土師器窯19基、竪穴住居跡45軒（内工房跡６軒）、掘立柱建物跡６棟、粘土採掘坑４か所以上が検出されている。

現在報告書作成中であるために、その詳細については1984年の概報（文献56）と1989年の現地説明会資料（文献83）に頼るしかない。以下、概報で明らかになっている１号窯部分についてまとめてみる。なお、遺物については1987年倉田義広氏によって分類されている（文献68）。

１号窯（第46図）

全長7.6m、前庭部を含めて9.2mとなる半地下式無階無段窖窯である。焚口幅75cm、焼成部は幅0.8～１m、長さ１mで西側壁は２回、東側壁は３回の補修がなされている。焼成部は幅0.8～1.5mの長楕円形を呈しており、最低２回以上の操業が想定される。このII次窯床では平瓦が敷き詰められており、焼き台として利用されている。また、煙道部には平瓦３枚の被覆が認められる。

１号窯灰原遺物

杯、高台付杯、高台付椀、蓋、高台付盤、高盤、甕、鉢、軒丸瓦、軒平瓦、熨斗瓦等があるが隣接して別の窯体が存在することもあり、すべてが１号窯の所産とする事は難しい。

杯類は切り離しおよびその後の調整で次のように分類できる。

I類：底部回転ヘラ切り、底部及び体部下端回転ヘラ削り

II類：底部回転ヘラ切り、底部手持ちヘラ削り

III類：底部回転糸切り、底部及び体部下端回転ヘラ削り

IV類：底部回転糸切り、底部及び体部下端手持ちヘラ削り

器形ではおおむね４種類に分けることができる

A　体部は底部からやや内弯して立ち上がり、口縁部は外反するもの（１）

B　体部は直線的に立ち上がり、口底径比は1.7前後、径高指数34前後となるもの（２～５）

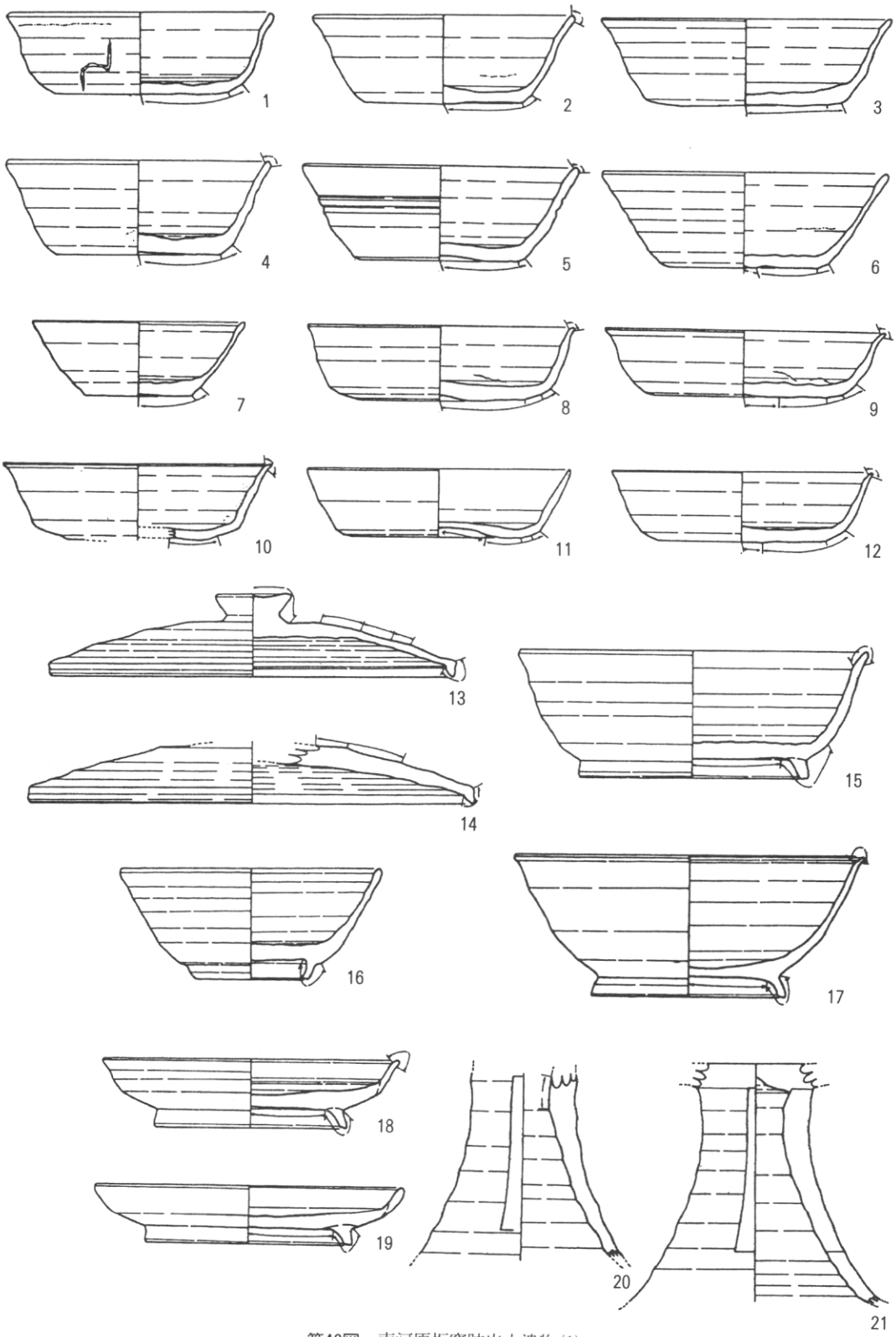
C　直線的な体部から口縁部は肥厚するもので、口径は底径の２倍近くなるもの（６・７）

D　器高は３cmを越える程度の偏平なもので、永田・不入分類のC類に相当する（８～12）

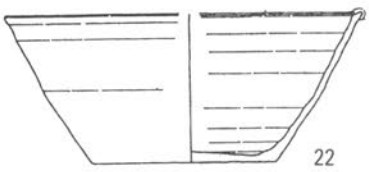
蓋は口径20cm前後の大型のものとなる（13・14）。

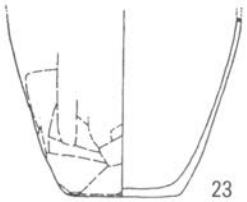
高台付杯は口径13cm前後で、逆「ハ」字状の高台がつくものである（16）。

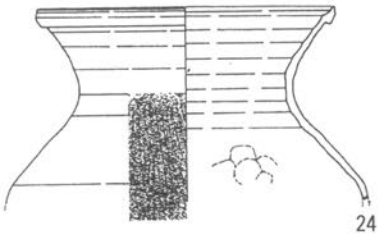
高台付椀はと口径16cm前後の大型のもので、高台径が大きく、腰部の張り出しのやや強いもの（15）と、高台径が小さく、体部が弯曲しながら立ち上がるもの（17）の２種がある。後者は年代的に後出的な形態を示しており、１号窯灰原が単一時期だけのものではないことを示す資料である。

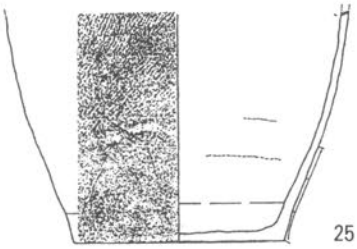


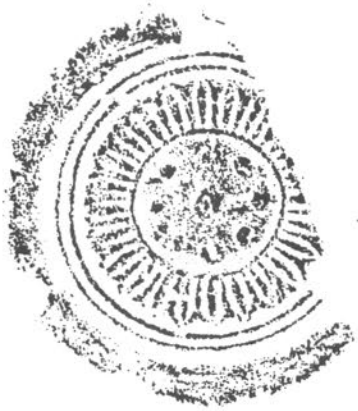
第46図　南河原坂窯跡出土遺物(1)

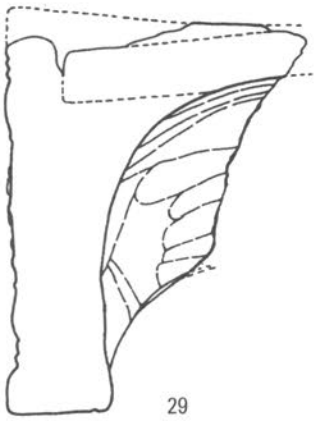












第47図　南河原坂窯跡出土遺物(2)

18・19は有台の盤、20・21は高盤の脚部である。この脚部には透かしが施されている。高盤は永田・不入窯でも焼成されているが、透かしを施したものはない。近県では茨城県木葉下窯跡に透かしを持つものが存在する。

鉢は口径30cm近い大型のものである（22）。

甕類には須恵器本来の特徴をもつものと土師器的色彩の強いものの２種類認められる。

A類：広口壺ともいうべきもので、折り返し口縁となり、胴部は平行タタキが施される（24）

B類：胴部にはヘラ削りを施すもの（23）

瓦には特殊なヘラ書き文様の軒平瓦（26～28）、上総国分寺創建瓦や小食土廃寺と同型の素縁二十四葉単弁蓮華文軒丸瓦（29）、熨斗瓦（30）が認められる。

南河原坂窯跡の資料はきわめて断片的であるが、杯ⅠA・ⅠB・ⅠC・ⅡB・ⅡC類のような下総産須恵器に共通する調整、形態を示すものと、杯ⅢD・ⅣD類のような永田・不入的特徴の糸切りが並存すること、瓦生産も行われていること、焼成瓦の供給先である上総国分寺や小食土廃寺との関係、ロクロ土師器生産との関係など、県内の窯業生産を考える上で欠かせない重要な問題を内包している遺跡といえよう。

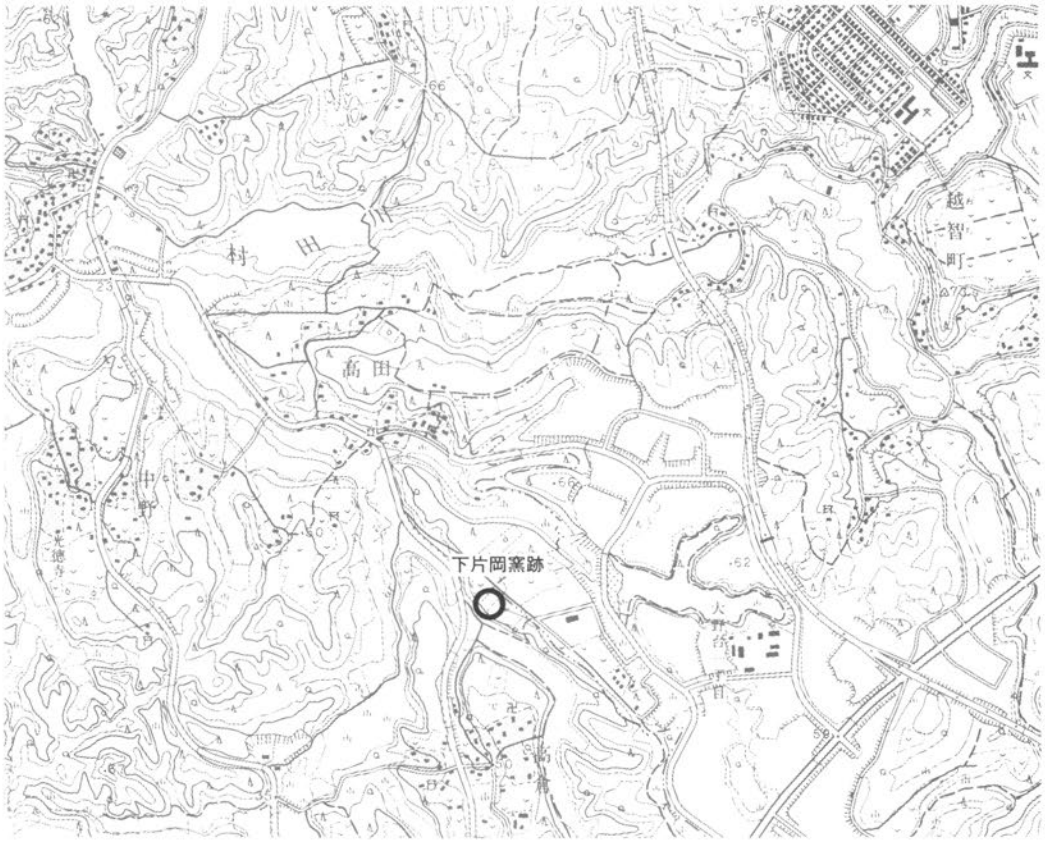
坂ノ越遺跡は標高90m前後の舌状台地に立地している。平安時代の小型の窖窯２基の他、竪穴住居跡６軒、土器焼成坑16基、工房跡14軒、粘土採掘坑１か所等が検出されている（文献62）。窖窯では杯、土器焼成坑では杯・皿・高台付皿、工房跡からは杯・皿・高台付皿のほかに甕類が出土している。現在報告書作成中であり、その詳細は刊行まで待たねばならないが、南河原坂窯跡に後続する遺跡と考えられている。

第５表　南河原坂窯跡出土遺物法量表

番号	器種	口径	器高	底径	分類	出土地点	図版
1	杯	12.4	3.4	8.0	ⅠA	１号窯灰原	
2	〃	12.3	4.2	7.4	ⅠB	〃	
3	〃	13.4	4.1	7.6	〃	〃	
4	〃	12.2	4.4	7.8	ⅡB	〃	
5	〃	12.8	4.4	7.5	〃	〃	
6	〃	13.3	4.4	6.9	ⅠC	〃	
7	〃	10.0	3.5	5.0	ⅡC	〃	
8	〃	12.4	3.5	7.6	ⅢD	〃	
9	〃	12.0	3.1	8.0	〃	〃	
10	〃	12.5	3.6	7.0	〃	〃	
11	〃	12.2	3.2	7.8	〃	〃	
12	〃	12.2	3.2	7.8	ⅣD	〃	
13	蓋	19.1	3.9			〃	
14	〃	21.0	(3.0)			〃	
15	高台付椀	16.5	6.1			〃	
16	高台付杯	12.3	5.3			１号窯灰原	
17	高台付椀	16.6	6.7			〃	
18	高台付盤	14.0	3.2			〃	
19	〃	14.7	2.8			〃	
20	高盤		(9.0)			〃	
21	〃		(11.4)			〃	
22	鉢	28.0	12.0	9.5		〃	
23	甕		(14.5)	9.0	B	〃	
24	〃	23.0	(15.0)		A	〃	
25	〃		(18.0)	(17.0)	〃	〃	
26	軒平瓦					〃	
27	〃					〃	
28	〃					〃	
29	軒丸瓦					〃	
30	軒斗瓦					〃	

（６）下片岡窯跡（第48・49図）

市原市高田字下片岡396－２に所在する。東京湾に流入する村田川の支流によって開析され



第48図　下片岡窯跡位置図（1：25,000　蘇我）

た支谷の標高約40mの南西斜面に存在している。本窯跡の所在する台地上は千葉市西大野第一遺跡にあたり、谷を隔てた南側は市原市高倉内畑遺跡である。

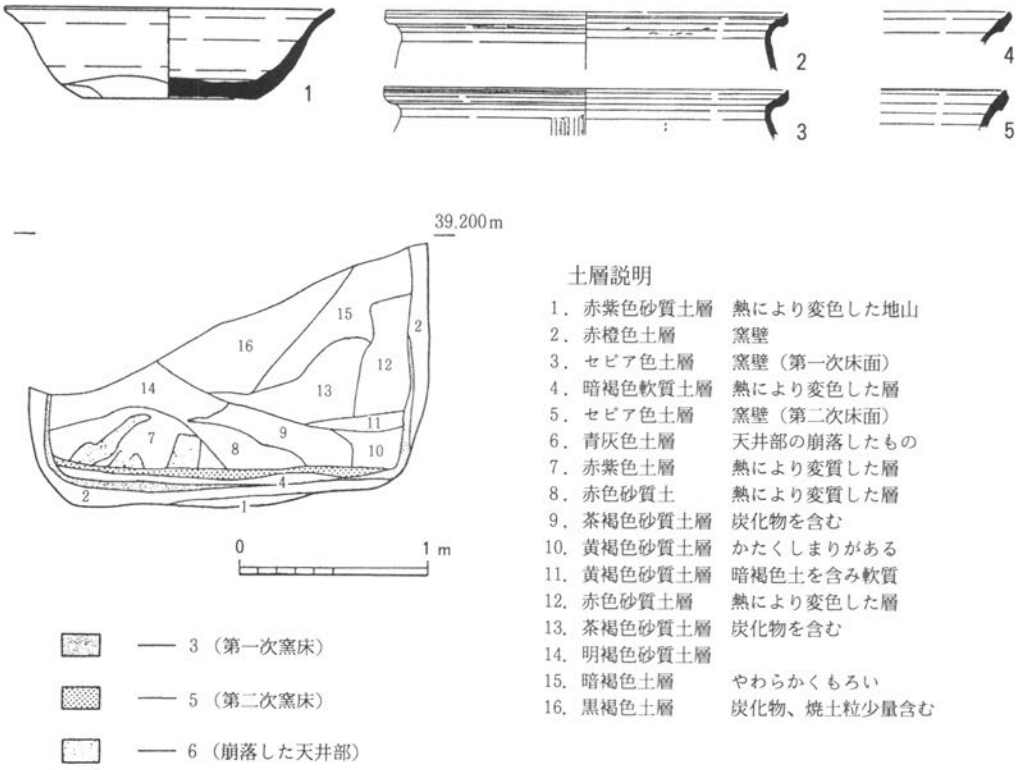
本窯跡は1989年1月、台地斜面に露頭した窯体断面の発見によって存在が明らかになったもので、半澤幹雄氏によって資料が紹介されている（文献88）。

窯体の断面観察から半地下式の窖窯で窯床は2枚認められる。

窯に関係する遺物は酸化焔焼成の杯1点だけである。これは口径13.2cm、底径6.8cm、器高3.6cmを測る。底部および体部下端は手持ちヘラ削りが施され、口縁部は強く外反している。中原窯杯M類、宇津志野窯杯D類に該当するものである。その他の壺・甕は周辺遺跡からの採集品である。

周辺の地形からみて、このほかに2・3基の窯が存在する可能性が指摘されているが、おそらく大規模な生産は行われていなかったものと考えられる。

断片的な資料からの類推しかできないが、中原・宇津志野窯とほぼ同時期に操業した窯跡群と考えられ、杯・甕類を主体に生産したものではないだろうか。



第49図　下片岡窯跡出土遺物と窯体断面図

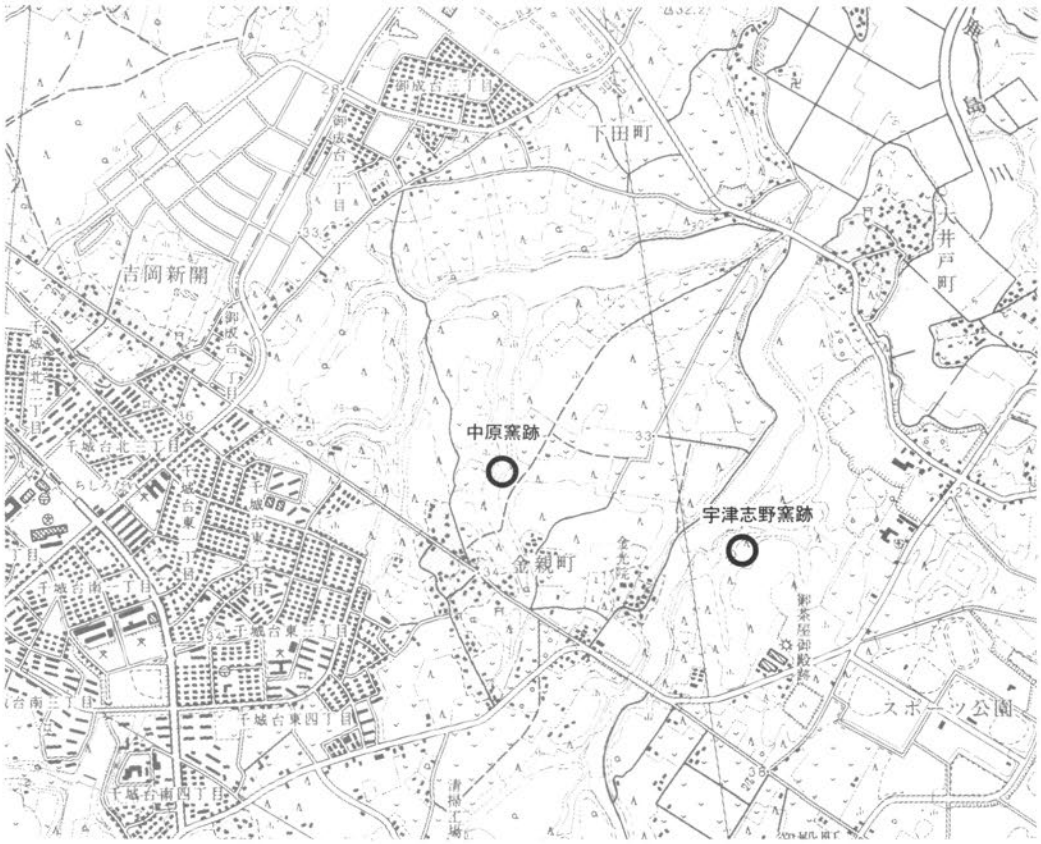
（7）中原窯跡（第50～57図）

千葉市金親町字中原754に所在する。印旛沼に流入する鹿島川の支流によって開析された標高35mの西向きの台地緩斜面上に立地している。低地面との比高は約10mである。

中原窯の発見は1974年のことで、武田宗久氏によって「瓦などの出土する地点あり」の教示をうけた千葉市職員が現地踏査および試掘を行った結果、灰層を確認している。この試掘によって出土した遺物は倉田義広氏によって紹介されている（文献43）。このなかで詳細な分析を加え、須恵質土器・くすべ焼成土器・土師質須恵器等のさまざまな名称を与えられている土器群をすべて須恵器としてとらえている。そして、このようにさまざまな名称をを与えられる土器群が「使用粘土の耐火度に主に起因する」との重要な指摘をしている。また、宇津川徹氏による胎土分析も行われている（文献39）。

その後、須田　勉氏や倉田義広氏によって中原窯の年代について言及されている（文献64）。

発掘調査は千葉県文化財センターによって1989年10月３日から10月31日に実施され、窯体２基、灰原２か所を検出している。その結果から中原窯は５～８基で構成された窯跡群と考えられている（文献87）。



第50図　中原窯跡・宇津志野窯跡位置図（1：25,000　千葉東部）

1号窯（第52図）

ローム層を掘り込んだ無階無段の半地下式窖窯で、窯体は黄褐色の砂質粘土で構築されている。窯尻部は丸みを持ち、焼成部は幅1.2m、焚口部はやや絞り込まれて幅0.7mを測る。焚口からの全長は6.6mで前庭部はこの焚口から大きく広がるようである。窯床は1枚で、焼成部の傾斜は14°である。

窯体内の遺物は須恵器甕破片と杯破片に瓦片3点を含むが、これらは焼き台として使用されたものと考えられる。

2号窯（第53図）

1号窯の上位部に構築されるもので、ローム層を掘り込んだ半地下式窖窯となり、丸みをおびた窯尻から幅1.4mの焼成部にいたり、焚口部につながっている。焚口の絞り込みはほとんど認められないが径40cm程の浅い窪みが形成されている。焼成部から煙道部にいたる部位には高さ20cmほどの段が認められる。焚口から窯尻までは約6m、焼成部の傾斜角度は16°となり、窯床は1枚である。

遺物は杯・甕・高台付椀・短頸壺・瓦で構成されている。焼成部と燃焼部の床面には甕体部

の破片を主体として、敷きつめられていた。これらの一部は焼き台として使用された可能性がある。

灰原Aは2号窯との重複関係が明確ではなく、また灰原Bとともに他に窯体が存在する可能性を示すものである。出土遺物は杯・皿・甕・瓦からなっている。

中原窯の焼成品は杯・甕が主体で、高台付椀、蓋、無高台皿、有台皿、短頸壺、羽釜が少量である。また瓦は焼き台使用と考えられるもので、須恵器専用窯として操業したものであろう。

杯類はすべて回転ヘラ切りで、体部下端および底部は手持ちヘラ削りと回転ヘラ削りの両方が採用されている。この調整の組み合わせについては報告書から読みとることはできない。ただし、前述の倉田義広氏が紹介した資料を見る限り、次の4種類が存在している。

Ⅰ類：底部は全面回転ヘラ削り、体部下端回転ヘラ削り

Ⅱ類：底部は一方向の手持ちヘラ削り、体部下端手持ちヘラ削り

Ⅲ類：底部は直行する二方向の手持ちヘラ削り、体部下端手持ちヘラ削り

Ⅳ類：底部は不定方向の手持ちヘラ削り、体部下端手持ちヘラ削り

Ⅱ～Ⅳ類は底部の手持ちヘラ削りの方向と回数が異なるだけで、同一の技術の範疇でとらえることができよう。

器形および口底径比、径高指数からみた分類では数多くのバラエティが認められる。

A　底径8cmを越える大きな底部から、体部は直線的に立ち上がる。口底径比1.6、径高指数31前後である（1・2）

B　口底径比、径高指数はAとほぼ同じであるが、体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部は外反する（3）

C　A類同様体部は直線的に立ち上がり、逆台形を呈するもので、底径は7.5cm前後と小さくなる。口底径比1.8、径高指数30前後のものが多い（4～20）

D　体部は弯曲して立ち上がり、器高は4cmをこえるもの（21～25）

E　D類よりも径高指数が35以上と高くなり、器高が4.5cmをこえるものが多い（26～30）

F　E類と同じく器高は4.5cm前後となる深みのタイプだが、口径は底径の2倍前後となるもの（31～36）

G　体部は直線的に立ち上がり，器高は3.5cm前後を測る。C類をやや偏平にした形状となる（37～40）

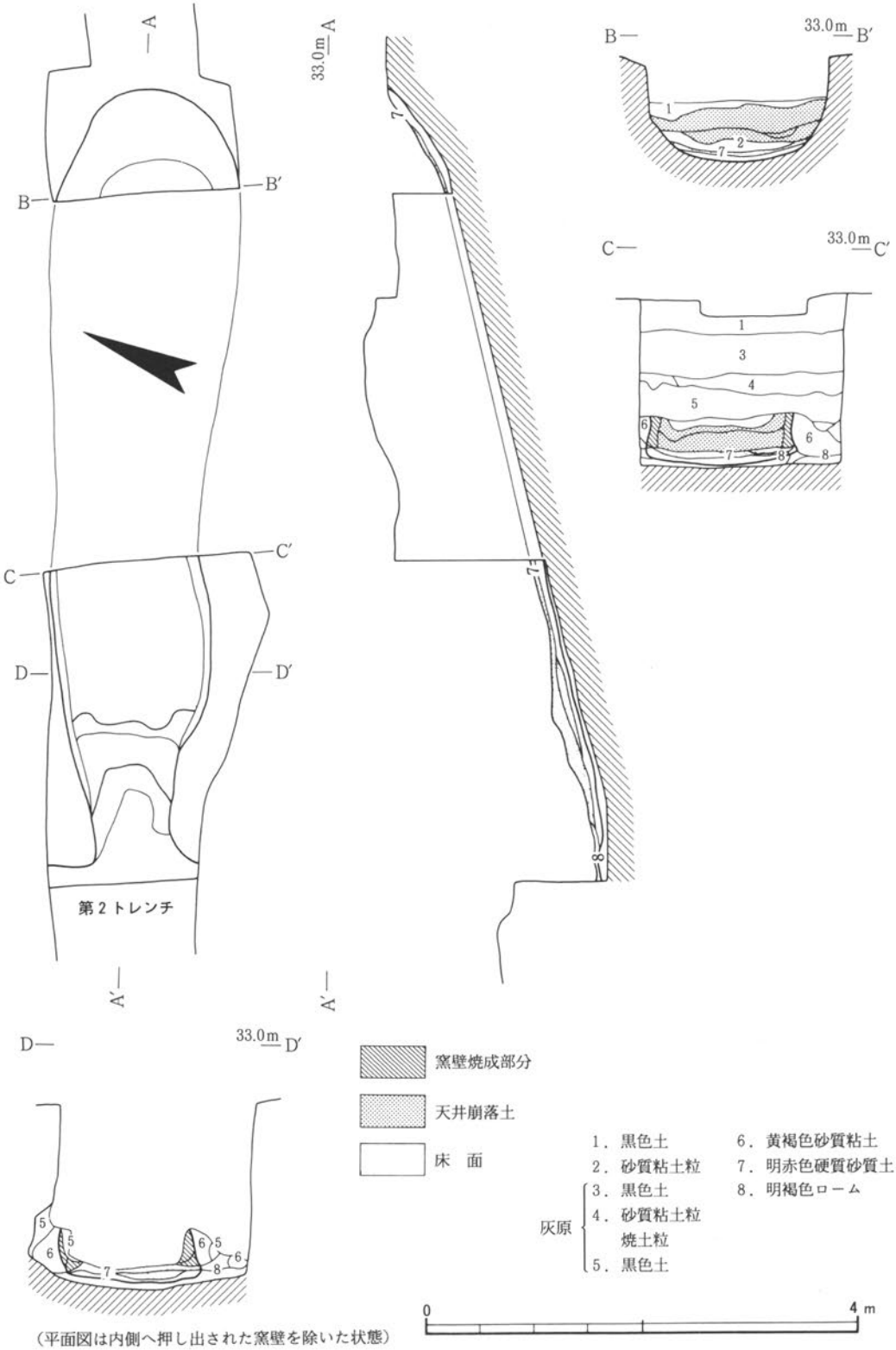
H　体部は底部からやや内弯して立ち上がり口縁にいたるもの（41～45）

I　体部の立ち上がりはH類と似るが、口縁部が強く外反する。口底径比1.8、径高指数29となる（46～48）

J　底部から弯曲して立ち上がり、体部中位から直線的に口縁にいたるもの（52・53）

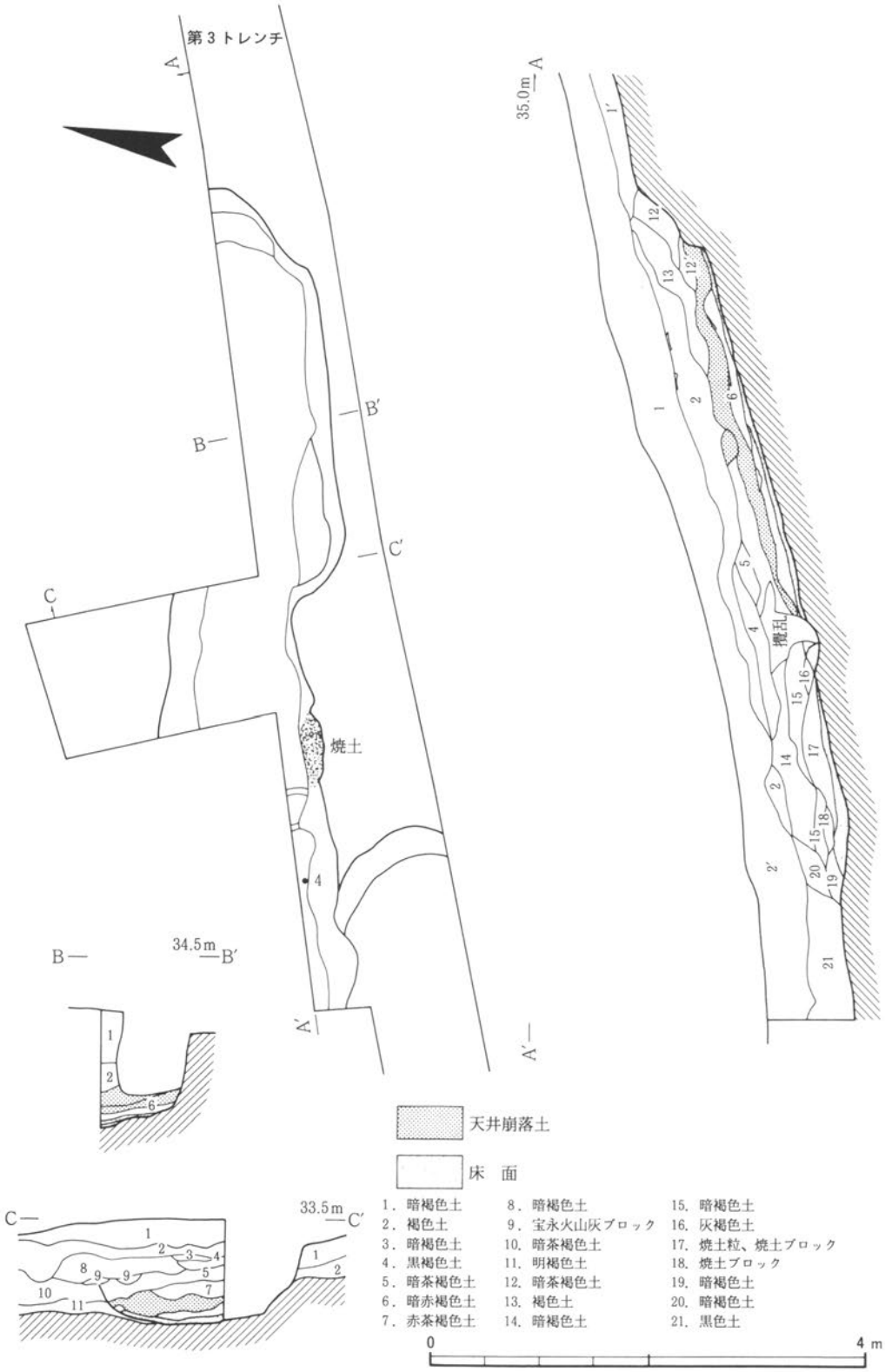
K　直線的な体部から口縁は強く外反するため、そのカーブの変換点が稜線をなすものできわめて特異なタイプである。器高の高いもの（55・56）と低いもの（51～54）の2種がある

第51図　中原窯跡確認トレンチ配置図

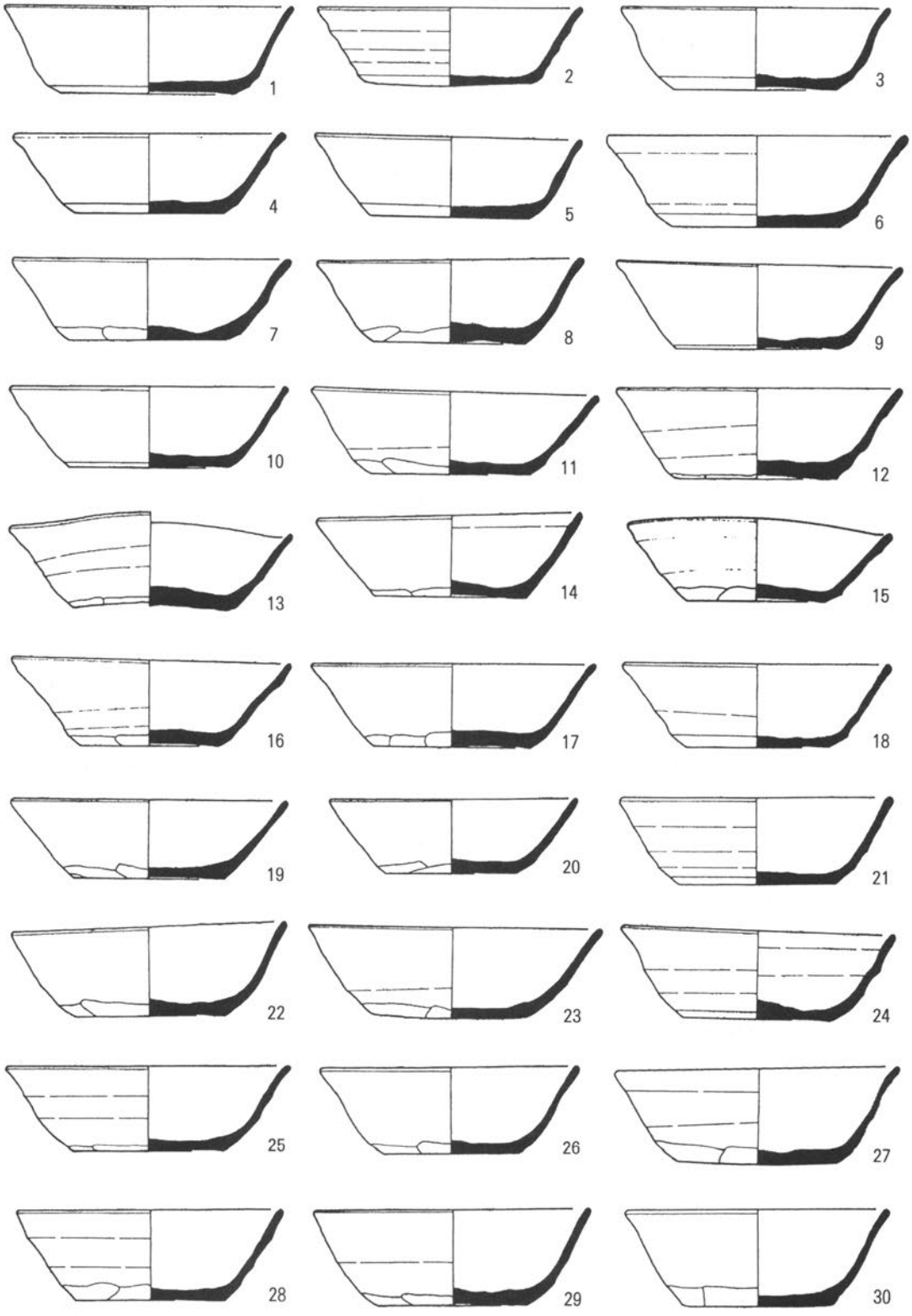


（平面図は内側へ押し出された窯壁を除いた状態）

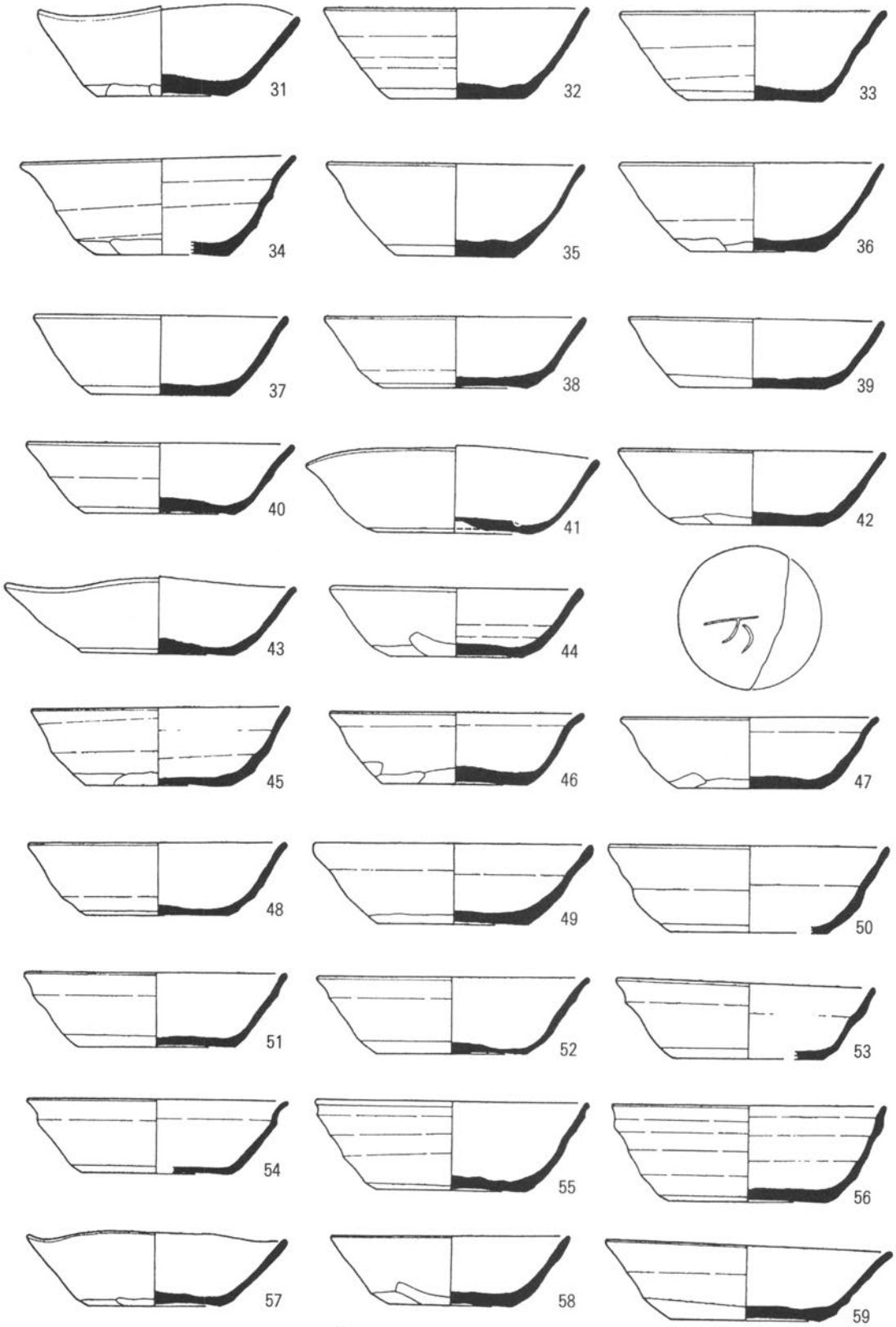
第52図　中原1号窯跡平面・断面図



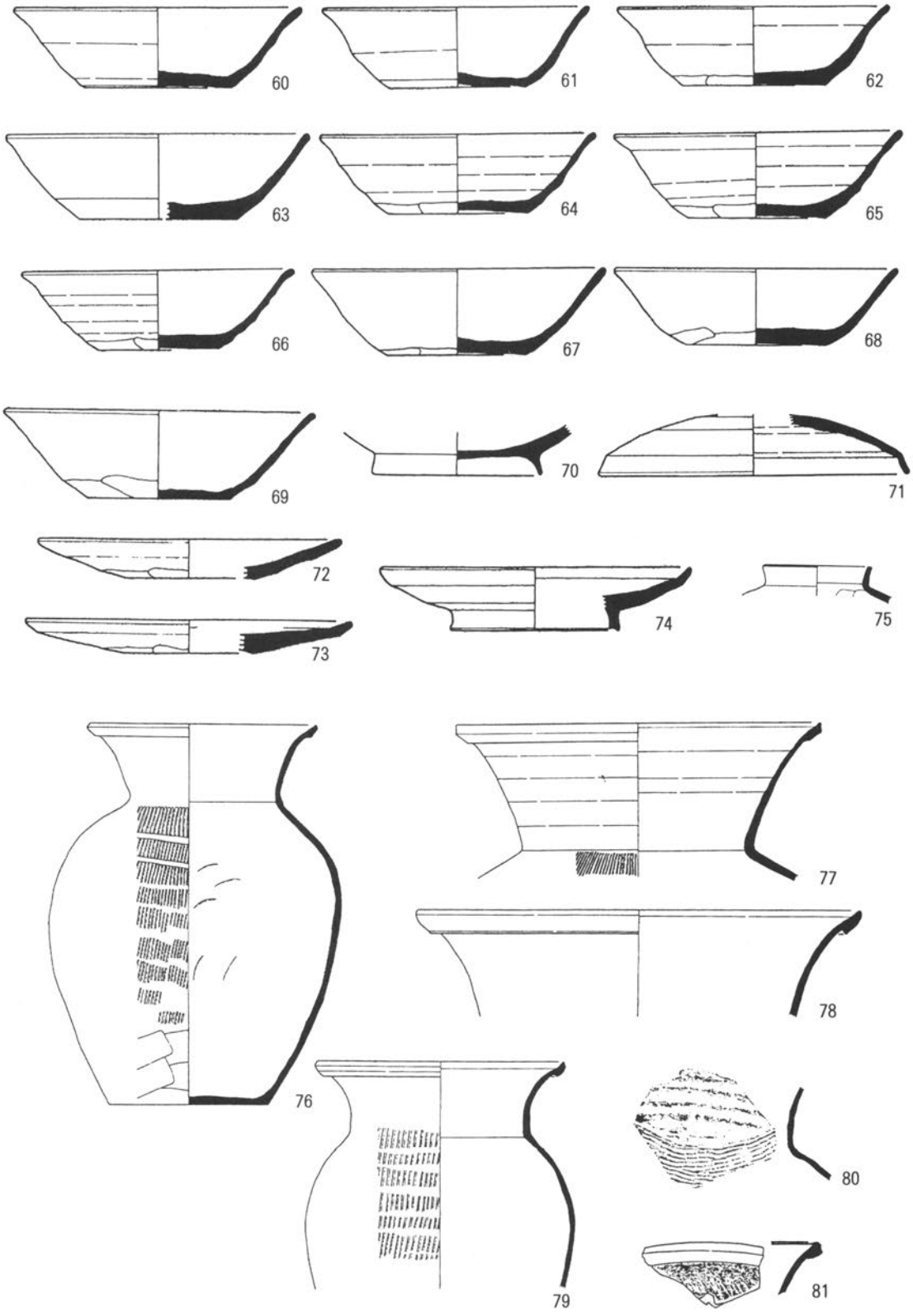
第53図　中原2号窯跡平面・断面図



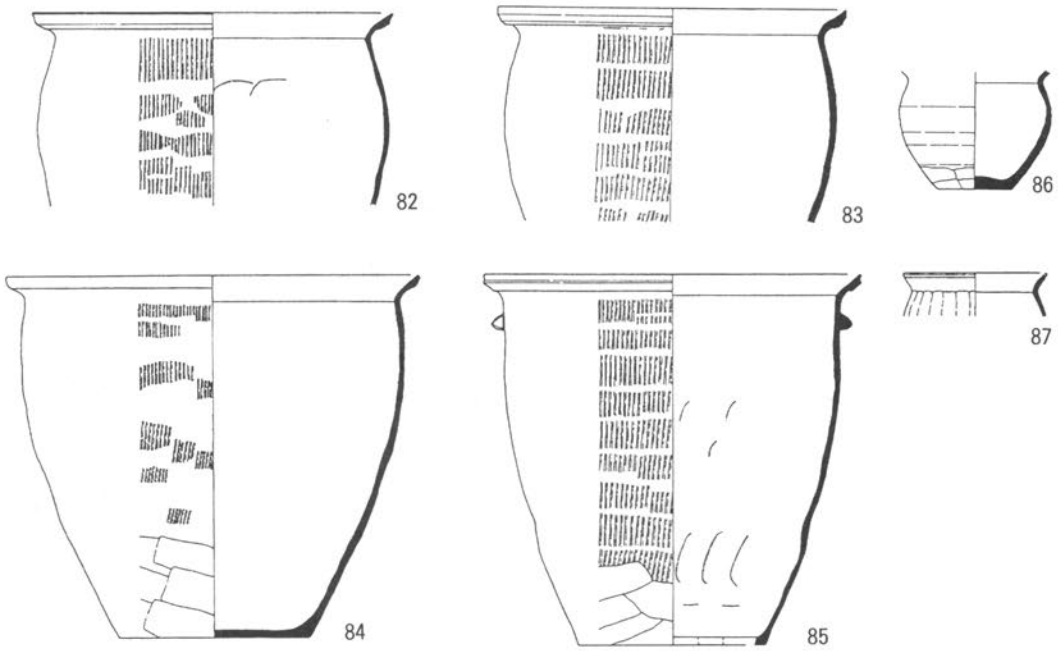
第54図　中原窯跡出土遺物(1)



第55図　中原窯跡出土遺物(2)



第56図　中原窯跡出土遺物(3)



第57図　中原窯跡出土遺物(4)

L　口径12cm前後の小さなもので、体部は直線的に立ち上がる。口底径比は2倍近くなる（57・58）

M　口径14cm前後の比較的大型のものが多く、口縁部はわずに外反する。口底径比は2倍前後となり、径高指数は30前後である（59～69）

高台付椀はその全体を知ることはできないが、薄手の「ハ」の字状にひらく高台が付くものである。(70)

蓋は口縁部が外方へ長く延びるタイプのものである。(71)

皿は無台の偏平な形態を示しているが、口縁部まで直線的になるもの（72）と口唇部が立ち上がるもの（73）がある。

高台付盤は高台端部に凹線がめぐる、しっかりとした高台となっている。(74)

短頸壺は口径10.4cmを測り、口頸部はわずかに外方へひろがる。(75)

甕類は器形及び口縁形態・調整で次のように分類できる。

A類：丸みをおびた胴部から頸部を絞り込み、口頸部は逆「ハ」字状に大きく開き広口壺とでも言うべきもので口縁の形態や調整および文様でさらに細分される。

a　折り返し口縁で肥厚し、端部がわずかにつまみ上げられるもので、胴部は平行叩きを施す本窯跡の主体となるタイプのものである。口径が40cmを越える大型も存在している。また、折り返しの度合いによってさらに細分もできる（76～77）

b　胴部の叩きがヨコタタキとなるものでa類と区別される（80）

c　口縁形態はａ類と同じであるが、頸部に櫛描波状文を施文するもので、出土量は多くない（81）

B類：口縁部が短く屈曲するもの。

a　胴部が若干ふくらむもので、ヨコタタキも存在する（82～84）

b　胴部は直線的になりバケツ状を呈するもので、甑との識別は難しいが、甑には２個の小さな把手がつくようである（85）

C類：小型甕で、調整によって２種に分けられる。

a　胴部内外面はヨコナデされ、胴部下端は手持ちヘラ削りが施される（86）

b　胴部は縦方向のヘラ削りが施される（87）

このほかに行基丸瓦、縄叩き一枚作りの平瓦が108点出土している。しかしながら、これらの瓦は本窯跡で焼成されたものとは判断できない。おそらく焼き台などに使用されたものであろう。

第６表　中原窯跡出土遺物法量表

番号	器種	口径	器高	底径	分類	出土地点	図版
1	杯	13.5	4.2	(8.2)	A	灰原A	15-92
2	〃	(12.4)	3.8	8.1	〃	灰原B	15-93
3	〃	(12.5)	4.0	7.6	B	灰原A	16-114
4	〃	(12.6)	3.9	(7.0)	C	１号窯	
5	〃	12.4	3.8	7.5	〃	灰原A	
6	〃	(14.0)	4.4	7.9	〃	〃	15-95
7	〃	12.9	3.9	7.4	〃	〃	
8	〃	12.2	4.0	7.1	〃	〃	
9	〃	(13.4)	4.0	7.6	〃	〃	
10	〃	(12.8)	3.9	7.4	〃	灰原B	
11	〃	13.4	4.0	7.6	〃	〃	15-96
12	〃	13.3	4.4	7.6	〃	〃	15-97
13	〃	13.1	4.2	7.2	〃	〃	15-100
14	〃	12.3	3.9	7.2	〃	第２トレンチ	
15	〃	12.3	4.0	6.5	〃	灰原A	15-99
16	〃	12.8	4.0	6.5	〃	〃	
17	〃	13.2	4.0	7.3	〃	〃	15-94
18	〃	12.4	4.0	6.7	〃	灰原B	
19	〃	(12.9)	3.8	7.1	〃	第１トレンチ	
20	〃	11.5	3.6	6.1	〃	第２トレンチ	
21	〃	(12.6)	4.2	7.4	D	灰原B	
22	〃	12.8	4.3	7.1	〃	〃	15-103
23	〃	13.6	4.4	7.3	〃	灰原A	16-104
24	〃	12.8	4.2	7.0	〃	灰原B	16-105
25	〃	(13.2)	4.1	7.1	〃	〃	
26	〃	(12.0)	4.2	6.4	E	第１トレンチ	
27	〃	13.3	4.7	7.6	〃	第15トレンチ	
28	〃	12.3	4.4	7.0	〃	灰原B	
29	〃	(12.8)	4.6	7.0	〃	〃	
30	〃	(12.2)	4.7	7.2	〃	第11トレンチ	
31	〃	12.5	4.4	6.2	F	灰原A	15－98
32	〃	12.7	4.4	6.6	〃	灰原B	
33	〃	12.7	4.4	6.6	〃	〃	15-101
34	〃	13.2	4.6	6.5	〃	２号窯	17-117
35	〃	(12.4)	4.5	5.8	〃	第３トレンチ	
36	杯	12.7	4.3	6.1	F	第15トレンチ	
37	〃	(12.0)	3.9	6.7	G	灰原A	
38	〃	(12.5)	3.5	7.0	〃	〃	
39	〃	12.2	3.4	7.0	〃	〃	
40	〃	(12.8)	3.5	7.2	〃	灰原B	16-109
41	〃	13.8	4.3	7.3	H	〃	16-106
42	〃	(12.7)	3.7	7.0	〃	灰原A	
43	〃	13.9	3.7	7.4	〃	灰原B	16-107
44	〃	(11.9)	3.4	6.4	〃	第11トレンチ	
45	〃	12.3	3.9	7.0	〃	灰原A	16-115
46	〃	12.2	3.6	7.0	I	〃	16-113
47	〃	(12.4)	3.5	(7.0)	〃	第11トレンチ	
48	〃	(12.4)	3.6	6.8	〃	第２トレンチ	
49	〃	(13.4)	4.0	7.3	J	〃	
50	〃	(13.4)	4.3	(7.6)	〃	〃	
51	〃	12.4	3.7	7.5	K	灰原A	16-110
52	〃	(13.1)	3.8	7.2	〃	〃	16-111
53	〃	12.4	3.7	7.2	〃	〃	
54	〃	(12.6)	3.7	(7.2)	〃	〃	
55	〃	13.2	4.4	7.2	〃	灰原B	16-112
56	〃	13.2	4.8	(7.6)	〃	〃	
57	〃	12.4	3.6	6.4	L	灰原A	
58	〃	11.5	3.5	6.0	〃	第２トレンチ	
59	〃	13.8	3.7	7.3	M	灰原A	
60	〃	(13.7)	3.9	7.0	〃	灰原B	
61	〃	12.6	3.9	6.6	〃	〃	16-108
62	〃	13.0	3.9	6.9	〃	第２トレンチ	15-102
63	〃	(14.2)	4.1	(7.6)	〃	第11トレンチ	
64	〃	(13.1)	3.8	6.6	〃	第２トレンチ	
65	〃	(12.9)	3.9	5.8	〃	第11イレンチ	
66	〃	13.5	4.1	6.6	〃	第２トレンチ	17-116
67	〃	14.0	4.3	6.6	〃	第15トレンチ	
68	〃	(13.5)	3.8	6.8	〃	第11トレンチ	
69	〃	(14.6)	4.3	6.8	〃	第１トレンチ	
70	高台付椀	(14.0)	1.9	(6.2)	〃	灰原A	

番号	器種	口径	器高	底径	分類	出土地点	図版
71	蓋	(14.8)	3.0			第2トレンチ	
72	皿	(14.4)	1.9	(6.2)		灰原A	
73	〃	(15.6)	1.6	(6.2)		〃	
74	高台付盤	(14.8)	3.1	(8.0)		灰原B	
75	短頸壺	(10.4)	2.9			2号窯	
76	甕	22.0	37.1	15.4	Aa	第15トレンチ	17-118
77	〃	35.5	15.0		〃	第1トレンチ	
78	〃	(43.0)	10.5		〃	灰原A	
79	〃	(23.8)	22.5		〃	灰原B	

番号	器種	口径	器高	底径	分類	出土地点	図版
80	甕				Ab	灰原A	
81	〃				Ac	第1トレンチ	
82	〃	(28.8)	15.6		Ba	2号窯	
83	〃	(27.8)	17.2		〃	第2トレンチ	
84	〃	(33.0)	29.3	15.2	〃	第15トレンチ	
85	〃	30.0	29.9	(15.0)	〃	2号窯	17-121
86	〃		9.6	5.9	Ca	〃	
87	〃	(11.4)	3.5		Cb	第2トレンチ	

（8）宇津志野窯跡（第50・58～62図）

千葉市更科町10－2に所在する。印旛沼に流入する鹿島川の支流によって開析された谷津の東側斜面に立地している。中原窯とは台地一つ隔てた位置関係にあり、同じ窯跡群の支群の関係とみても良いであろう。窯体は標高28m前後の位置で検出された。

本窯跡も1983年の倉田義広氏による紹介が初出である（文献43）。ただしこの時点では窯体数などの詳細については不明である。中原窯同様、宇津川徹氏によって胎土分析がなされている（文献39）。1986年の『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』のなかで窖窯3基の存在と製作手法が中原窯と共通していることが指摘されている（文献64）。

1987年、倉田義広氏によって初めて実測図が紹介され、器形・調整の特徴から中原窯に後続する窯跡と位置づけられた（文献68）。

1991年10月に千葉県文化財センターによって発掘調査が実施され、窯体2基、土坑3基、溝2条が検出された（文献93）。この調査の際、周辺部のボーリング探査も行われ、他に1基の窯体が存在する可能性も指摘されている（文献99）。

1A号窯（第59図）

半地下式の無階無段窖窯で窯尻から焚口まで約3.6mである。焚口部から燃焼部の絞り込みは強く幅約80cm、焼成部から窯尻までの平面形態は楕円形を呈し、幅約1.8m、傾斜角17°、焼成床面は1枚である。前庭部は5.6mと長大で、幅は平均1.5mを測る。焼成品は杯・甕・甑・鉄鉢形鉢・短頸壺である。

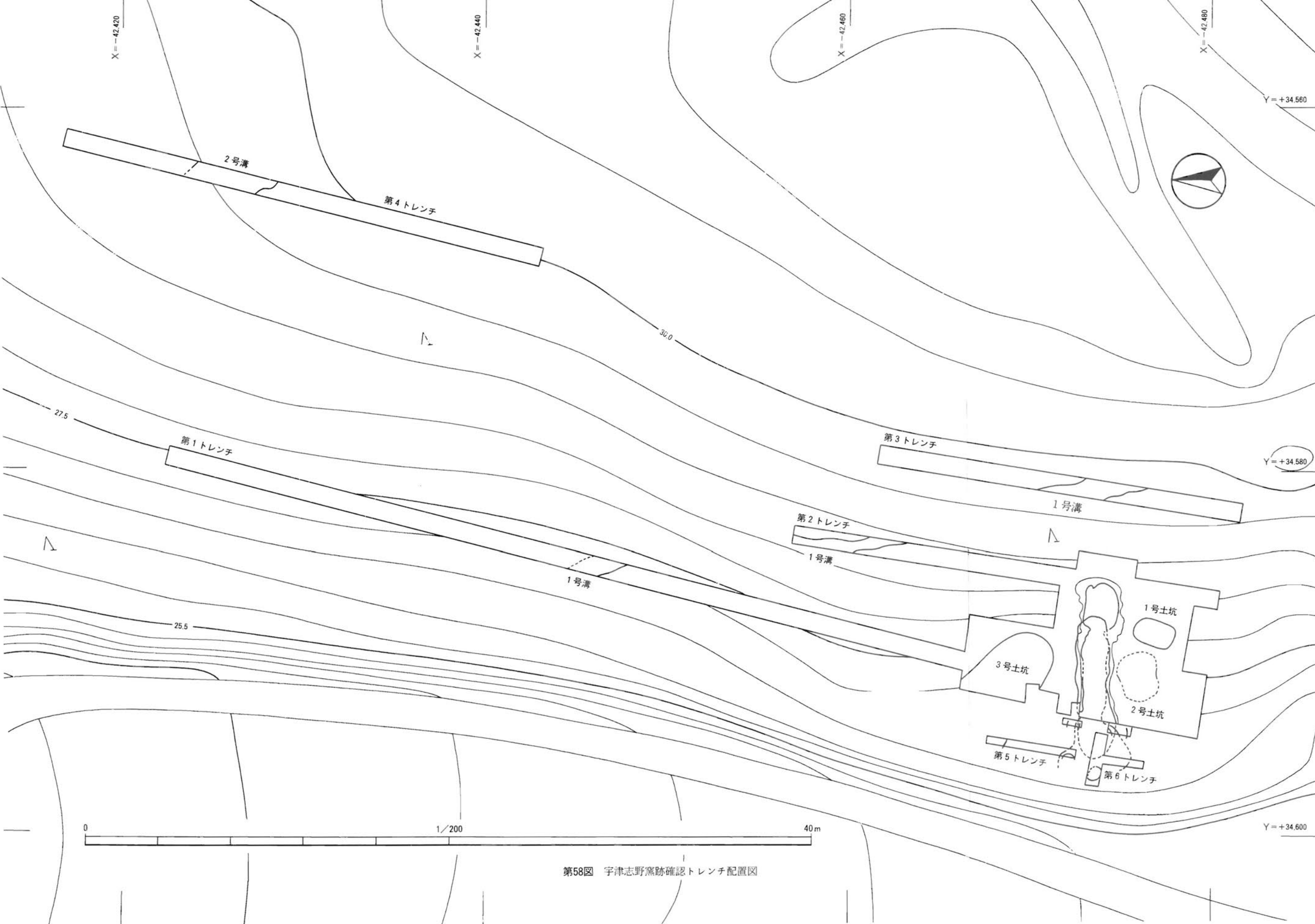
1B号窯（第60図）

1A号窯の下にすっぽりとおおわれるようにして検出された半地下式無階無段の窖窯で、焚口から窯尻までの長さ約5m、焼成部の幅1.8m、傾斜角12°となる。出土遺物には杯・甕・甑が認められた。

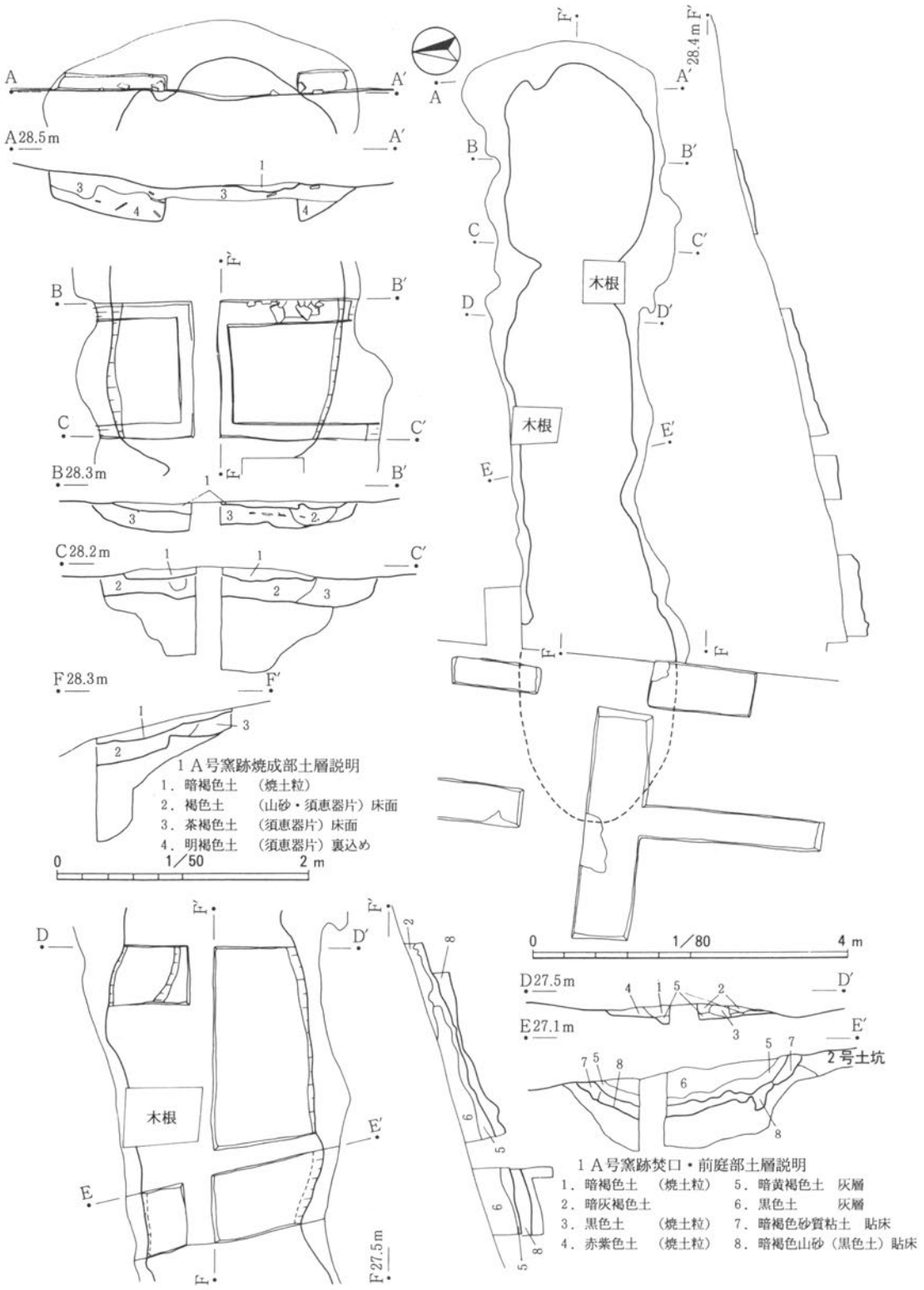
鉢・壺・甕を出土した1号土坑の覆土は1A号窯の灰層に酷似しており、位置的にも焚口脇にあることから1A号窯の掻き出しの際利用された土坑と考えられる。

2号土坑

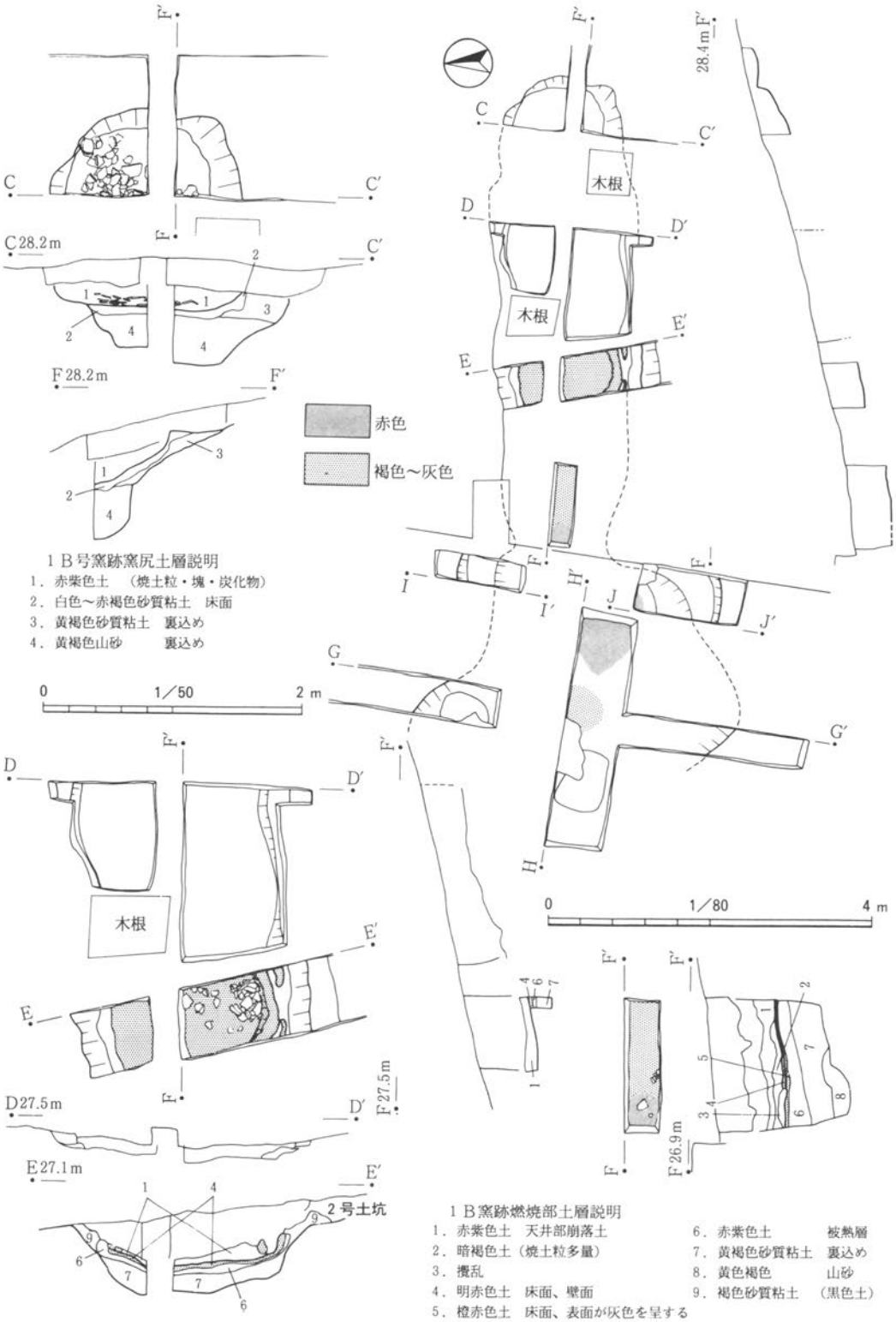
1A号窯前庭部構築の際、不要となった1B号窯の窯壁材等を廃棄した土坑であり、1A号



第58図　宇津志野窯跡確認トレンチ配置図



第59図　宇津志野１Ａ窯跡平面・断面図



第60図　宇津志野１Ｂ窯跡平面・断面図

窯操業時にはその役目は終わっていたものであろう。

遺存状態の比較的良好な遺物が多く、杯・無台の皿・甕・甑が出土している。

3号土坑

1A・B号窯を挟んで2号土坑に対峙する位置に構築されている。覆土中に須恵器が混入するものの、焼土・炭などは含んでおらずその性格は不明である。杯・甕の他に鉄鏃も出土している。

本窯跡の焼成器種は杯、皿、高台付皿、甕、甑、羽釜、鉢、鉄鉢形鉢、短頸壺、円面硯があるが、破片数では杯類が1割、甕類が9割弱となっている。以下器種ごとに概観してみる。

杯はすべて回転ヘラ切りを採用している。切り離し後の調整によって次の4種類に分けられる。

Ⅰ類：底部回転ヘラ削り、体部下端回転ヘラ削り

Ⅱ類：底部手持ちヘラ削り、体部下端手持ちヘラ削り

Ⅲ類：底部回転ヘラ削り、体部下端手持ちヘラ削り

Ⅳ類：切り離し後、無調整

主体となるのはⅡ類であり、そのほか客体的な技法である。

次に器形から分類すると8種類に分けることが可能である。

A　比較的大きな底部から体部は直線的に立ち上がり、器高は4cmをこえる逆台形を呈する。ものである（1・2）。調整はⅡ類で、中原窯C類に近い形態である

B　口底径比はA類と大差はないが器高が3.5cm前後の低いもので調整はⅠ類である（3）

C　B類よりもさらに底部が小さくなり、口径は底径の2倍近くなる。調整はⅠ（5）、Ⅱ（4）、Ⅲ（6）類がある

D　口径14cm前後の比較的大型のもので口縁部が外反する。器高は増して4cmちかいものが多く、口径は底径の2倍前後となる。調整はⅡ類（8～11）のほかにⅣ類が1点（7）だけある。中原窯M類に近い

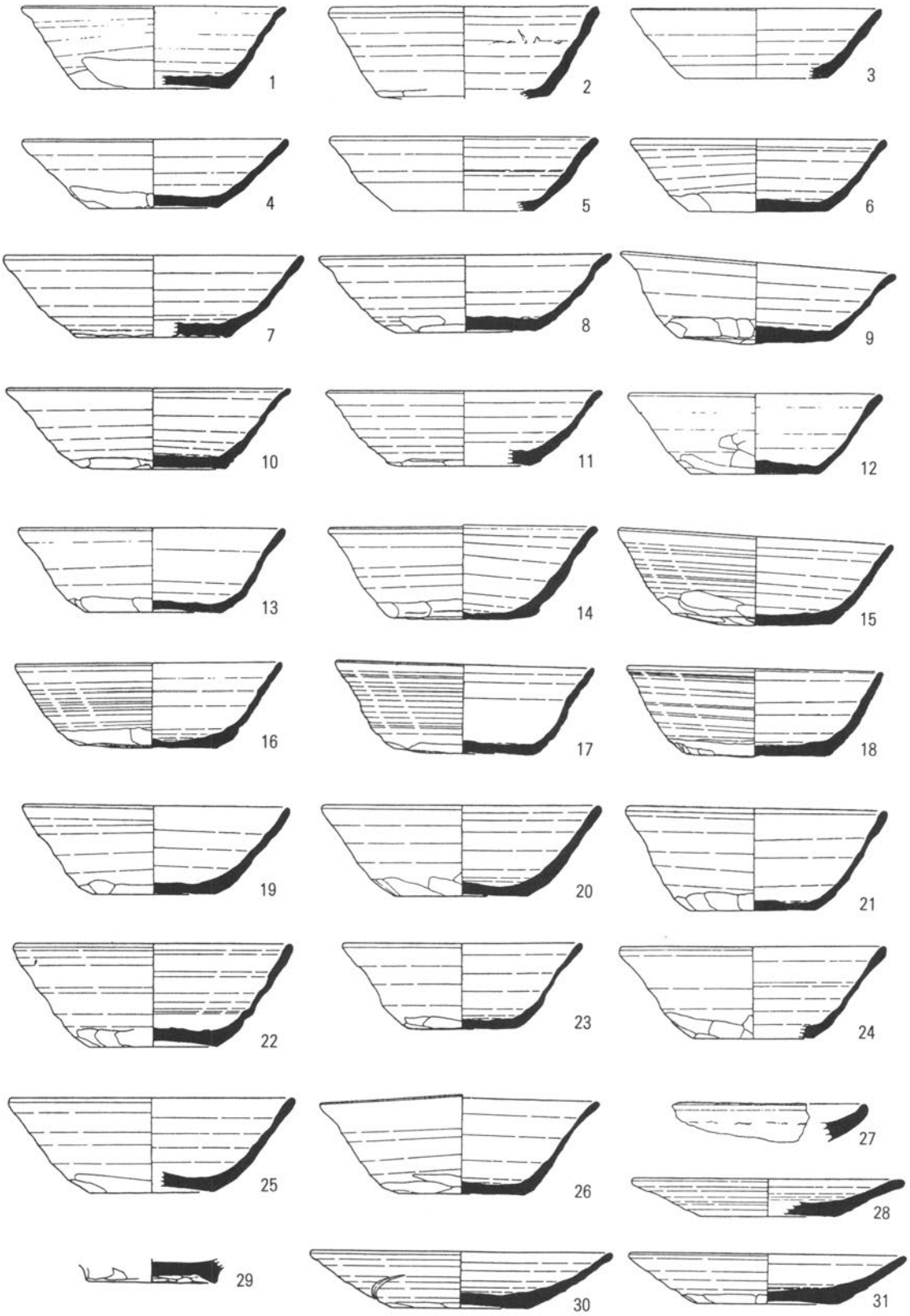
E　器高は4cmをこえ、口径は底径の2倍近くなるもので、口縁部はわずかに外反して肥厚する（12・13）。調整はⅡ類である

F　E類と同じく器高は4cmをこえるが、底径は7cm前後の比較的大きなもので、体部は僅かに弯曲する（14～18）。調整はⅡ類である

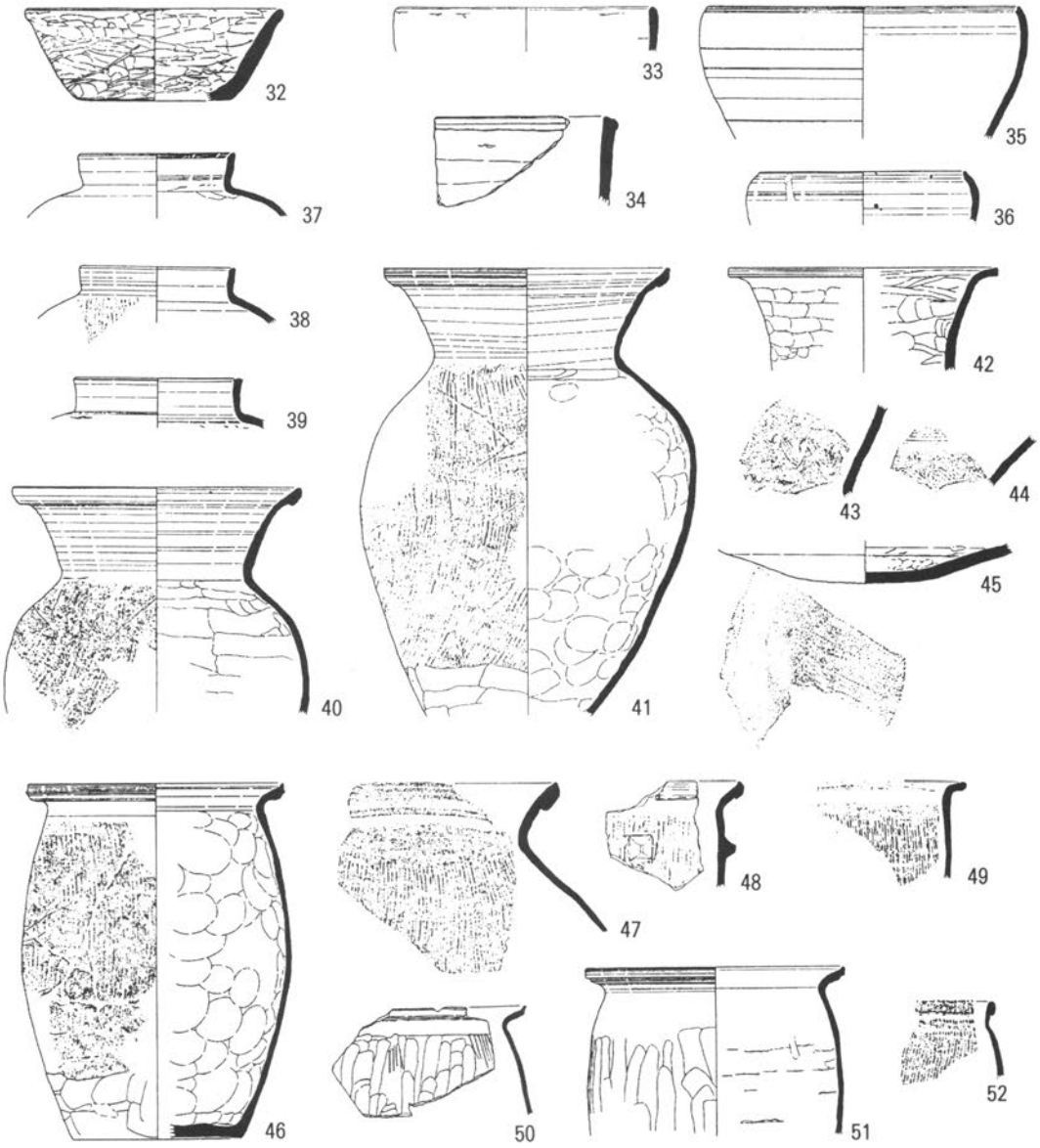
G　E類よりも器高が増し、口底径比が2倍をこえるもの（19・20）。調整はⅡ類である

H　器高はさらに増し5cm近いものがある。口縁部は肥厚する。口径は底径の2倍を越える（21～26）。調整はⅡ類で中原窯F類に近似している

無台の皿は口縁端部が内弯するもの（27）、口縁部は外反するもの（28）とわずかに内弯するもの（30・31）がある。有台の皿は器形全体を知ることはできないが断面三角形を呈した高



第61図　宇津志野窯跡出土遺物(1)



第62図　宇津志野窯跡出土遺物(2)

台となっている（29）。

鉢は内外面ナデ調整で器壁の厚いもの（32）、口縁部が直立するもの（33・34）、鉄鉢型を呈するもの（35・36）の3種類がある。

円面硯は全体の器形を知ることができないが脚部が出土している。

短頸壺の口縁はほぼ直立し、口唇部が内そぎ状となるもの（37・38）と平坦になるもの（39）がある。

甕類は器形、口縁形態および調整、施文によって次のように分類できる。

A類：長い頸部をもつ広口壺タイプのもので、３種に細分できる。

a　折り返し口縁となり、端部がつまみ上げられるもので、胴部には平行タタキを施す。（40・41）。口径40cm近い大型の製品もある

b　口縁端部はわずかにつまみ上げられるものの、折り返し口縁とならないもの（42）。

c　頸部に櫛描波状文を施文するもの（43・44）

B類：口縁部は短く屈曲するもので、３種に細分できるが、甑も含まれる。

a　折り返し口縁となり、胴部が少しふくらむもの（46）

b　胴部は直線的になるもので、小さな把手をもつ甑もある（48・49）

c　折り返し口縁となり、胴部のふくらみが強いもの（47）

C類：口縁端部はつまみ上げられ、胴部は縦方向のヘラ削りを施すもので、形態・手法ともに土師器甕との差異がみいだし難いもの（50・51）。

D類：口縁は短く直立し、端部が丸くおさめられた折り返し口縁となり、胴部は僅かに膨らむもの（52）。

E類：全体の器形は不明だが丸底となるもので、底部にタタキを施す（45）。

甕類の分類は以上であるが、平底となる甕の底部外面には縄目の圧痕（図版19－136・137）やE類と同様に叩きが施されたもの（図版19－138）も認められる。

宇津志野窯跡の焼成製品は中原窯跡同様、杯・甕類に主体をおいたものであるが鉄鉢形鉢や円面硯等の特殊な製品もわずかながら認められことは、中原窯跡との性格の差に起因するのであろうか。また一枚作りの平瓦も１点ではあるが採集されており、前述の特殊製品とともに寺院・官衙への供給を考えて瓦生産も行われていた可能性も示唆されている（文献99）。しかしながら、千葉県内で瓦陶兼業となる遺跡は上名主ヶ谷窯跡と南河原坂窯跡だけであり、中原窯跡との関係を強く持っている本遺跡での瓦生産については否定的な見解をもっている。

第７表　宇津志野窯跡出土遺物法量表

番号	器種	口径	器高	底径	分類	出土地点	図版
1	杯	12.9	4.0	7.2	ⅡA	1B窯	
2	〃	13.2	4.4	8.2	〃	〃	
3	〃	12.2	3.4	6.9	ⅠB	第6トレンチ	
4	〃	12.8	3.4	6.3	ⅡC	1A窯	
5	〃	13.1	3.6	6.8	ⅠC	第6トレンチ	
6	〃	12.5	3.5	6.6	ⅢC	灰原	
7	〃	14.6	4.0	7.4	ⅣD	〃	
8	〃	13.9	4.0	7.0	ⅡD	2号土坑	18-122
9	〃	13.5	4.0	7.3	〃	〃	18-124
10	〃	14.2	3.7	6.7	〃	〃	
11	〃	13.5	3.7	6.4	〃	第6トレンチ	
12	〃	12.2	4.0	6.2	ⅡE	1A窯	
13	〃	13.1	4.1	6.6	〃	1B窯	18-130
14	〃	13.1	4.6	7.2	ⅢF	2号土坑	18-123
15	杯	13.4	4.3	7.2	ⅡF	2号土坑	
16	〃	13.1	4.2	6.7	〃	〃	
17	〃	12.4	4.4	6.7	〃	〃	18-125
18	〃	12.5	4.4	6.7	〃	〃	18-126
19	〃	13.1	4.4	6.0	ⅡG	〃	18-127
20	〃	13.3	4.5	6.4	〃	第5トレンチ	
21	〃	12.8	5.0	6.1	ⅡH	2号土坑	18-129
22	〃	13.7	5.0	6.2	〃	灰原	
23	〃	11.6	4.2	5.2	〃	1A窯	
24	〃	13.0	4.4	5.8	〃	第5トレンチ	
25	〃	13.6	4.8	6.0	〃	第6トレンチ	
26	〃	13.7	4.7	6.1	〃	〃	18-128
27	皿	9.2				2号土坑	
28	〃	13.3	1.9	6.5		第6トレンチ	

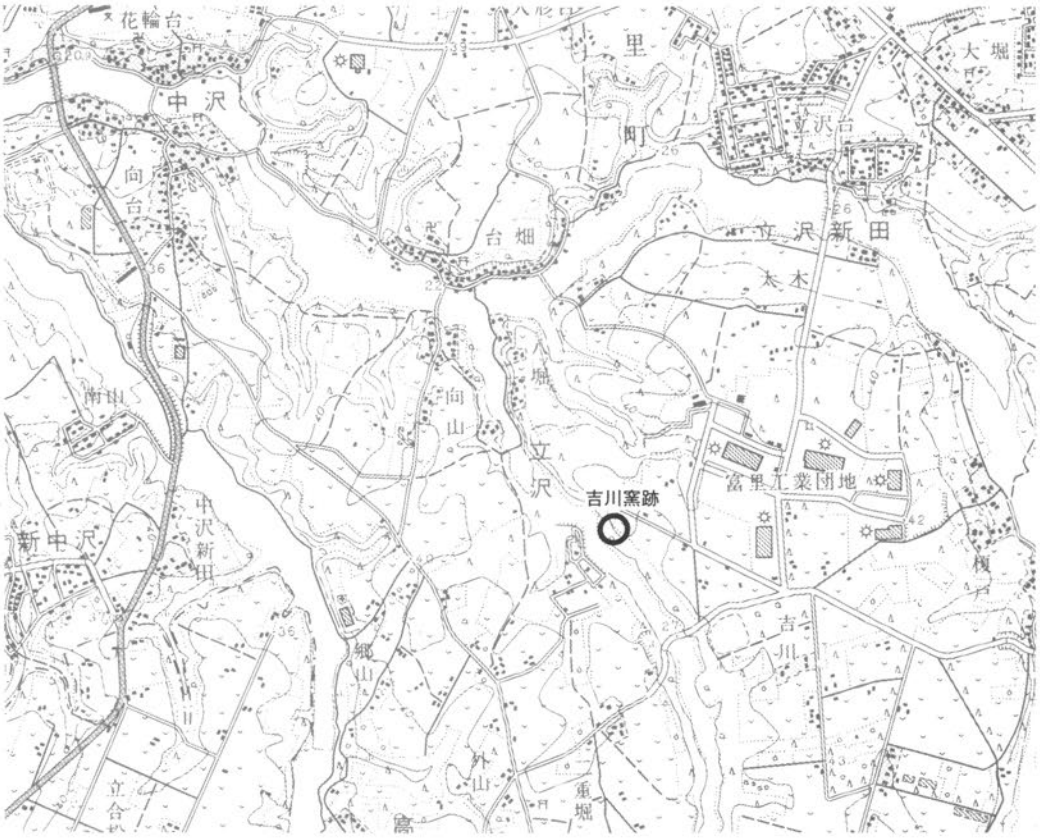
番号	器　種	口　径	器　高	底　径	分類	出土地点	図　版
29	高台付皿			6.1		第6トレンチ	
30	皿	14.7	2.8	6.6		灰原表採	
31	〃	13.6	2.5	6.8		〃	
32	鉢	20.2	7.4	12.3		1号土坑	
33	〃	20.3				第6トレンチ	
34	〃					第5トレンチ	
35	鉄鉢形鉢	25.1				1A窯	
36	〃	16.5				〃	
37	短頸壺	12.7				〃	
38	〃	12.3				第6トレンチ	
39	〃	13.1				〃	
40	甕	22.9			Aa	1A窯	

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	分類	出土地点	図　版
41	甕	22.7			Aa	第5トレンチ	19-131
42	〃	21.5			Ab	1A窯	
43	〃				Ac	1B窯	19-133
44	〃				〃	〃	19-134
45	〃				E	2号土坑	
46	〃	20.8	28.7	13.5	Ba	1B窯	19-132
47	〃				Bc	2号土坑	
48	〃				Bb	〃	
49	〃				〃	1A窯	
50	〃				C	〃	
51	〃	20.7			〃	1号土坑	19-135
52	〃				D	1B窯	

（9）吉川窯跡（第63～66図）

富里町十倉278に所在する、旧下総国の数少ない須恵器窯の一つである。印旛沼に流入する高崎川の小支流によって開析された浅い谷津の西側斜面に立地している。この台地平坦部の標高は41m、現水田面の標高は25m、窯跡の検出された地点は焚口部は標高36m付近である。

この窯の付近は地元の人々によって「バチノス」（鉢の巣か）とよばれていたことや、窯体



第63図　吉川窯跡位置図（1：25,000　酒々井）

と考えられる部分が明瞭に窪んでいたといわれることから、古くからその存在が知られていたようである。その存在が明らかにされたのは1981年富里村教育委員会による富里村埋蔵文化財分布地図のなかであり（文献33)、その後三辻利一氏による胎土分析（文献57)、寺内博之氏による表採資料の紹介（文献65)、倉田義広氏による下総の須恵器窯の分析（文献68）等で取り扱われてきたが、調査による資料でないためにその実体は断片的なものであった。

1990年10月１日から11月６日にかけて千葉県文化財センターによって調査が実施され、窯体１基とそれにともなう灰原、土坑３基を検出している（文献90)。

１号窯（第65図)

半地下式の無階無段窖窯で、窯尻部は丸みをもつものの、窯床の幅は1.1m前後の均一なものとなっている。燃焼部は削平されているため焼成部との境に障壁やくびれを持つかは不明である。現存長は4.1mで、焚口からの推定長は約６mとなるであろう。また焼成部の傾斜角は約15°のゆるやかなもので、窯床面は２面認められている。窯尻を挟んで左右対称に並ぶ径70cm程の土坑も窯体に関係する遺構ととらえられている。

窯体はこの１基だけであり、きわめて小規模な操業であったことがうかがえる。

出土遺物は蓋・皿・杯・壺・甕・甑が認められるが、杯・甕類が主体であり、日常什器の生産を受け持ったものとなっている。

杯類はすべて回転ヘラ切りで、底部と体部下端の調整によって次の５類に分類されるが、Ⅰ類が主体となり、それ以外は極めて少量である。

Ⅰ類：底部および体部下端に回転ヘラ削りを施すもの

Ⅱ類：底部だけに回転ヘラ削りを施すもの

Ⅲ類：底部は回転ヘラ削りで、体部下端は手持ちヘラ削りとなるもの

Ⅳ類：底部は一方向の手持ちヘラ削りとなり、体部下端も手持ちヘラ削りとなるもの

Ⅴ類：底部は切り離し後無調整のもの

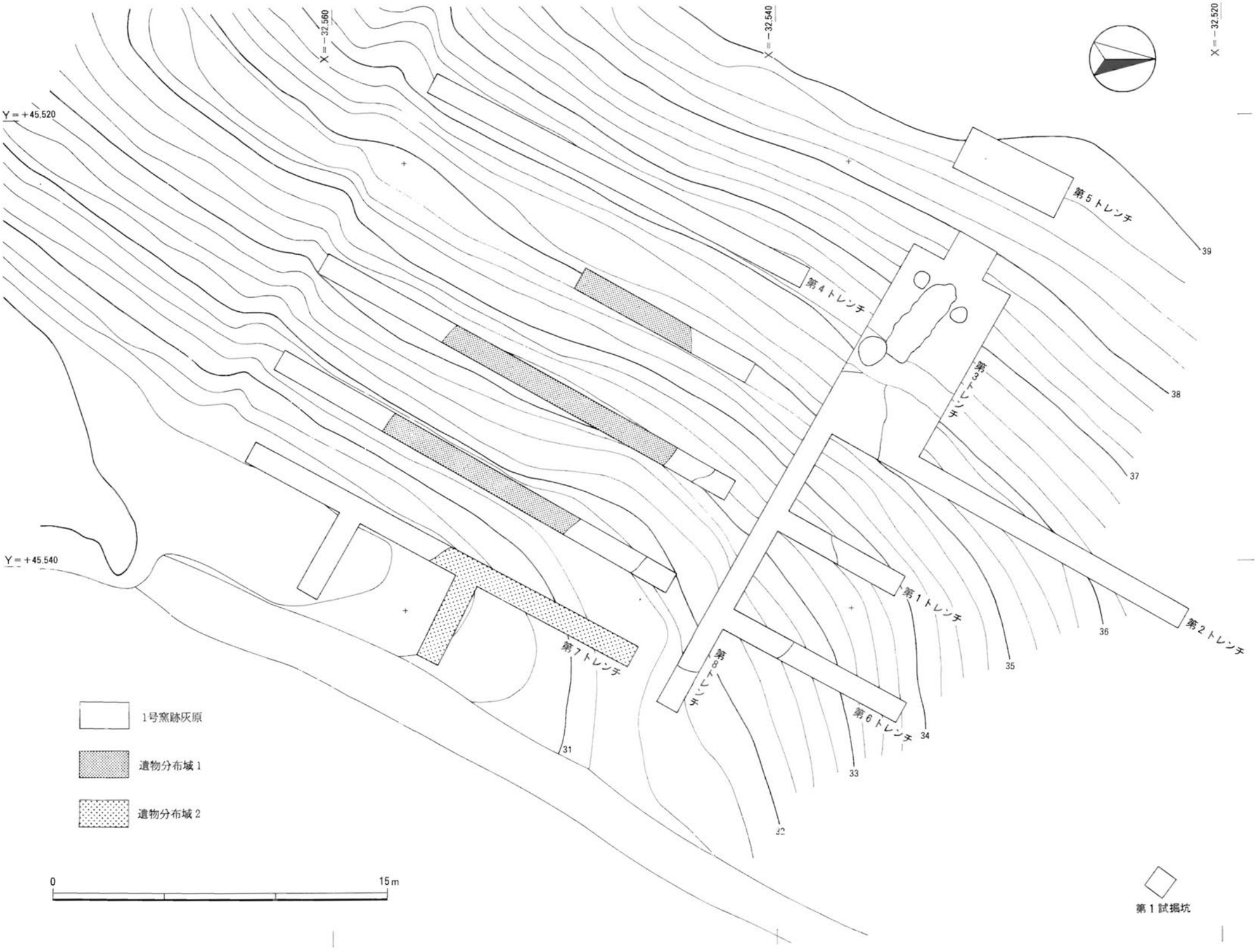
また、調整Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ類は器形および口底径比、径高指数からみて次のように細分することが可能であるが、調整Ⅲ・Ⅳ類は遺存度がわるく器形は不明である。

A　体部は僅かに丸みをもって立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。器壁が厚いことも特徴である。口径が13cm以上のものと、12cm以下の大小２種がある。器高も４cmをこえるものが多く、径高指数は32前後となる（１～４）

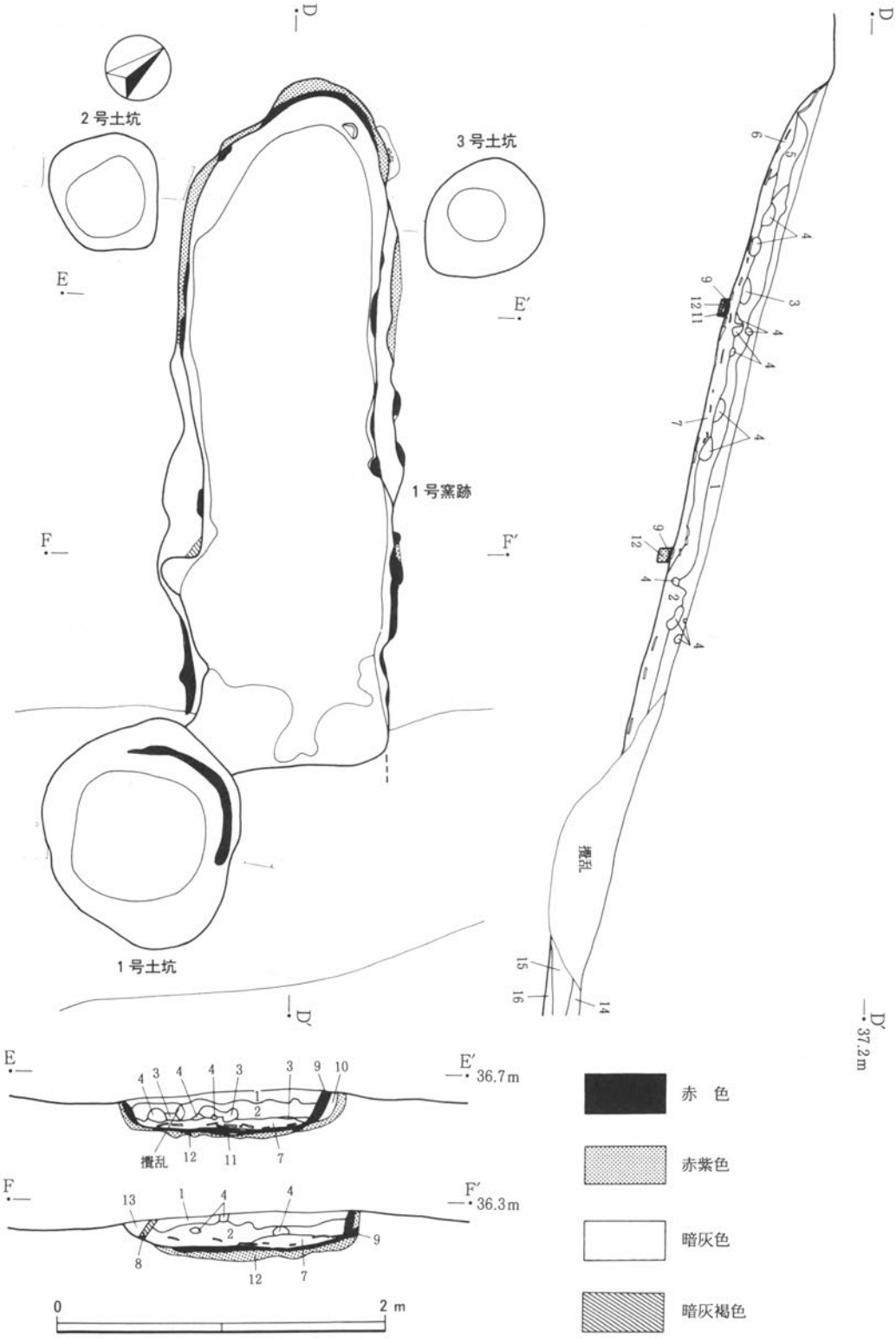
B　体部から口縁部にかけてのプロポーションはA類に似るが、器高が3.5cm前後となり、径高指数が28前後となる。器壁の薄いものと厚いものがある（５～８）

C　体部は直線的に立ち上がり口縁部にいたるもので、逆台形を呈している。径高指数34、口底径比1.7前後となる。B類同様に器壁の薄いものと厚いものがある（９～11)

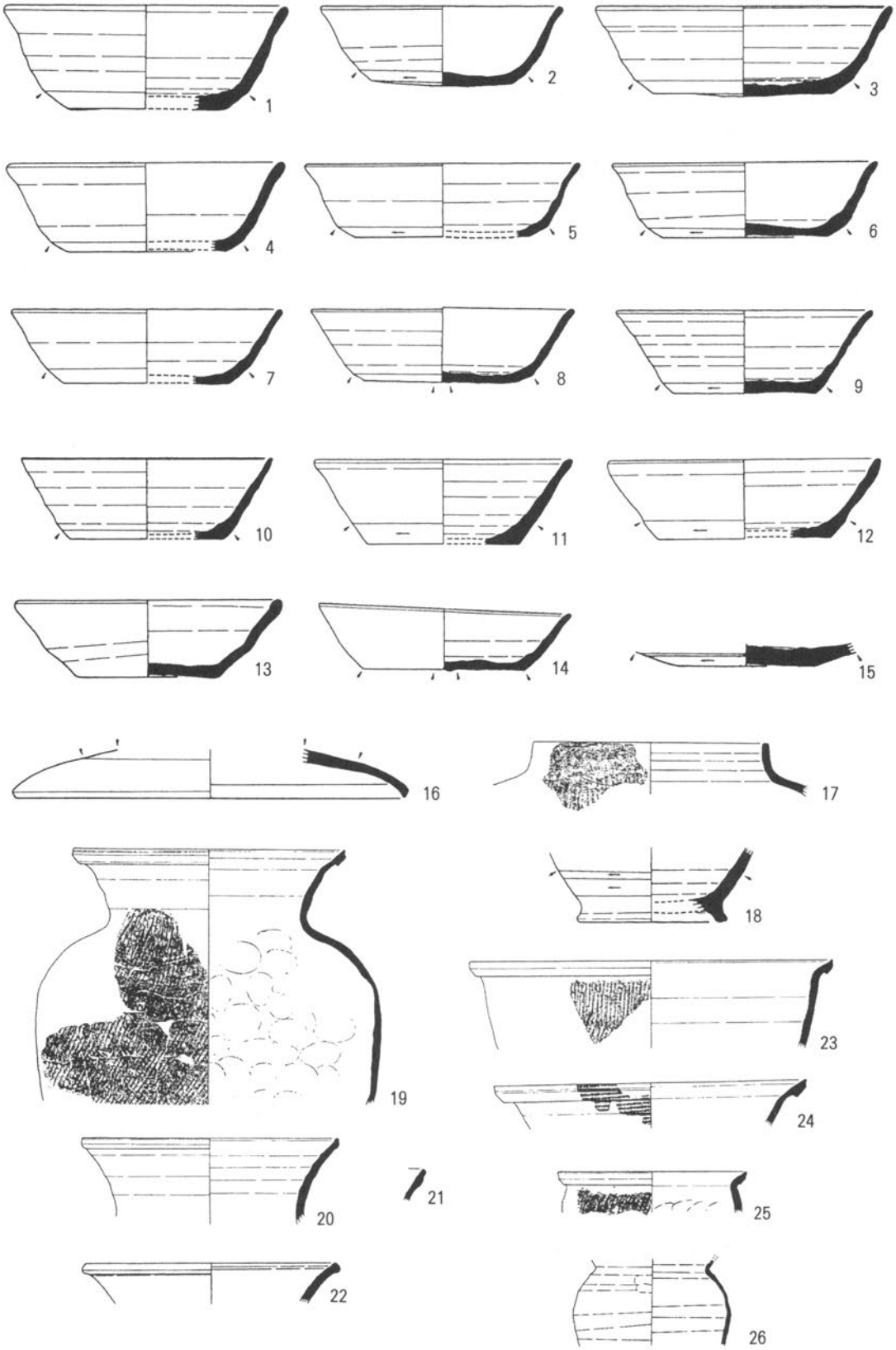
D　直線的な体部からわずかに内弯して口縁部にいたるもので、逆台形を呈する。器壁は厚い。



第64図　吉川窯跡確認トレンチ配置図



第65図　吉川1号窯跡平面・断面図



第66図　吉川窯跡出土遺物

径高指数は29、口底径比1.6となる（12）

E　D類の底径を小さくした形状となるもので口底径比が1.9と大きくなる。調整はV類である（13）

F　D・E類同様、器高の低いもので体部は直線的な立ち上がりを示す。径高指数26、口底径比1.6となる（14）

上記のA～Dはすべて調整I類に認められるもので、調整II～V類は客体的なものであるが、多様な調整方法と器形のバラエティが認められることは、このような小規模生産の窯においても多数の製作工人が存在していたことを示唆しているといえよう。

皿は無高台のもので底部および体部下端部は回転ヘラ削りが施される。(15)

蓋の端部は素口縁となるもので、口径19cmの大型品である。天井部を欠失しているため、つまみの形状は不明である。(16)

短頸壺の口縁端部は平坦になり、胴部は平行タタキが施される。(17)

壺は胴部下半から高台部にかけて遺存するだけで、口頸部の形状を知ることができない。角状の高台は底部および胴部下端に回転ヘラ削りを施した後に貼り付けられている。(18)

甕類は器形および口縁形態・調整で以下のように分類できる。

A類：丸みを帯びた肩部から頸部を絞り込み、口頸部は逆「ハ」字状に大きく開くもので、口縁の形態や調整でさらに細分される。

a　折り返し口縁で肥厚し、端部が僅かにつまみあげられるもので、本窯跡の主体となるタイプである（19）

b　折り返し口縁とならず、端部がつまみ上げられるもの（20）

c　素口縁で口縁部中位が肥厚するもの（21）

B類：口縁部が短く屈曲し、胴部に平行タタキを施す

a　胴部は底部から直線的に立ち上がりバケツ状を呈するもの（23・24）

b　胴部が若干膨らむもの（25）

C類：ロクロ使用の小型甕で、胴部内外面はヨコナデされるもの（26）

この他に、口縁形態は不明だが球状を呈した胴部となる甕も存在する。

窯体内出土の製品は還元焔焼成となっているが、その他の出土製品は黒褐色や橙褐色を呈する酸化焔焼成になるものが多く、土師器との識別が困難なものまでも存在する。

第8表　吉川窯跡出土遺物法量表

番号	器種	口径	器高	底径	分類	出土地点	図版
1	杯	(13.6)	4.9	(7.8)	IA	3号土坑	
2	〃	11.6	3.9	6.7	〃	1号窯周辺	20-139
3	〃	(14.2)	4.3	8.4	〃	〃	20-141
4	〃	(13.4)	4.2	(8.5)	〃	1号窯灰原	
5	杯	(13.2)	3.5	(8.3)	IB	1号窯灰原	
6	〃	13.0	3.6	8.0	〃	遺物分布域	20-142
7	〃	(12.9)	3.6	(7.8)	〃	1号窯灰原	
8	〃	12.6	3.6	7.5	〃	2号土坑	20-140

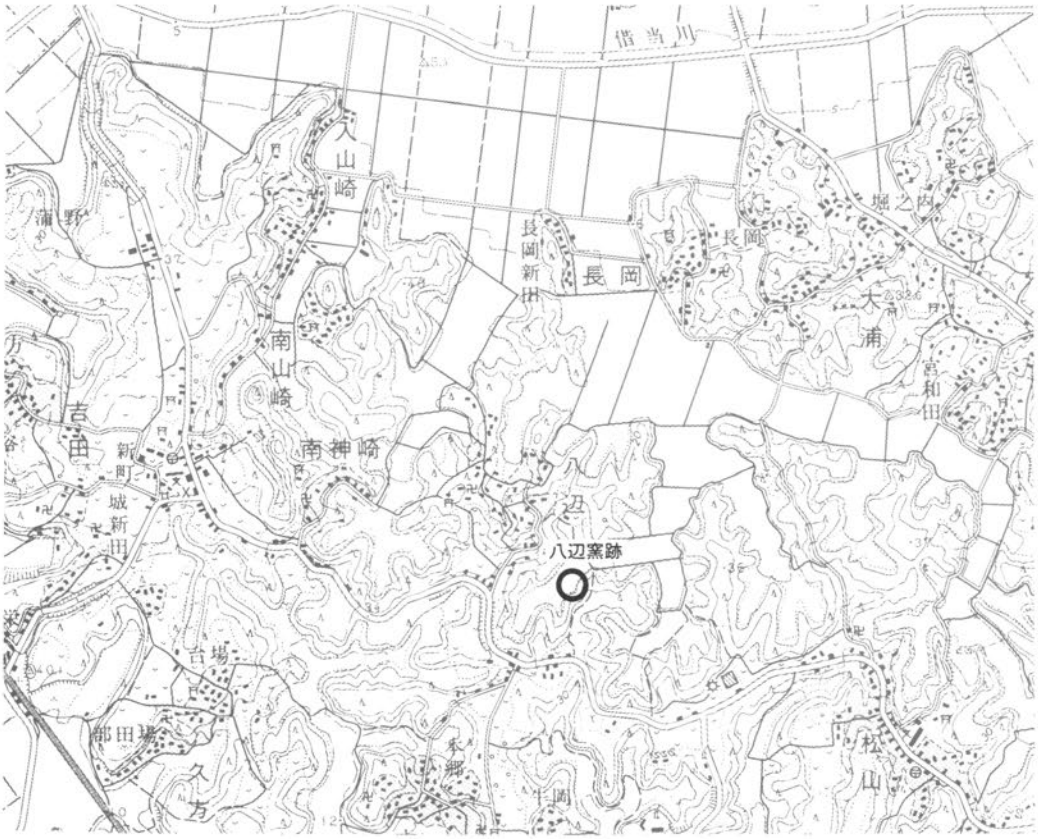
番号	器　種	口　径	器　高	底　径	分　類	出土地点	図　版
9	杯	(12.3)	4.5	(6.8)	ⅠC	1号窯	20-143
10	〃	(12.0)	3.9	(7.4)	〃	1号窯灰原	
11	〃	(12.4)	4.1	(7.2)	〃	1号窯周辺	
12	〃	(13.0)	3.8	(8.2)	ⅠD	1号窯灰原	
13	〃	(12.8)	3.8	6.7	ⅤE	遺物分布域	20-145
14	〃	(12.1)	3.1	(7.8)	ⅡF	1号窯	20-144
15	皿		1.1	6.5		1号窯灰原	
16	蓋	(19.0)	2.4			〃	
17	短頸壺	(22.6)	5.4			1号窯	

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	分　類	出土地点	図　版
18	壺		2.6	(7.2)		1号窯灰原	
19	甕	26.1	24.6		Aa	1号窯	20-147
20	〃	(24.6)	10.4		Ab	1号窯周辺	
21	〃				Ac	1号窯灰原	
22	〃	(24.7)	3.9		Ab	1号窯	
23	〃	(34.6)	8.7		Ba	1号窯灰原	
24	〃	(30.2)	4.4		〃	1号窯	
25	〃	(18.0)	3.1		Bb	1号窯灰原	
26	〃		8.4		C	1号窯	20-148

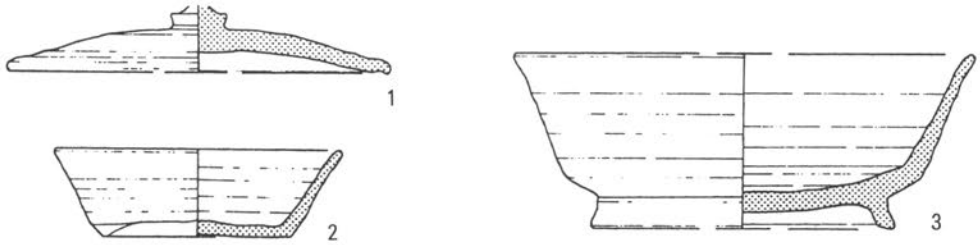
(10) 八辺窯跡（第67・68図）

八日市場市吉田地区八辺に所在し、旧下総国匝瑳郡に位置する。太平洋に流れる栗山川の支流である借当川によって開析された南側台地の裾部に断面が露頭していたものである。現水田面の標高は13mを測り、露頭する断面との比高は約２ｍである。

窯は1982年、地元の小学生によって発見され、翌年、土屋潤一郎氏によって資料紹介がなされている（文献50）。窯体の詳細は不明であるが、白色砂質粘土層に掘り込まれた半地下式の窖窯と考えられる。窯床幅約１ｍで床面は１枚であろう。



第67図　八辺窯跡位置図（１：25,000　八日市場）



第68図　八辺窯跡出土遺物

採集遺物は蓋・杯・甕があるが、甕などは焼き台として使用された可能性が指摘されている。蓋のつまみは宝珠状となり、天井部外面は回転ヘラケズリが施されている。口縁端部の折り返しはほとんどないものである。口径は16cm弱となる。

杯は口径12.0cm、底径7.7cm、器高3.7cmを測る。体部の立ち上がりは直線的で、口縁部はわずかに外反する。ヘラによる切り離しの後、底部全面と体部下端に回転ヘラ削りを施している。口底径比1.56、径高指数31となる。

有台椀は口径19.1cm、高台径12.6cm、高台の高さ1.3cm、器高7.4cmを測る大型のもので、底部は回転ヘラケズリが施されている。

以上のように、資料的にきわめてとぼしいものであることから断定はしがたいが、供膳形態の焼成だけを目指したものとは考えがたく、焼き台の可能性を指摘されている甕類も焼成製品の一部と考えられる。

2．胎土分析試料の概要

今回の胎土分析のため186件の試料を取り上げた。その内訳は、県内須恵器窯跡出土試料77点、県内集落遺跡出土試料50点と、比較試料として茨城県など他地域の窯跡試料も含まれる。ここではこれらの試料を、おもに胎土・焼成と色調について遺跡ごとに概観し、視覚的な観察による特徴を捉えておくこととする。

宇津志野窯跡試料は１～18である。胎土の粗密に余り差異はなく、砂粒や長石の混入がみられる。焼成はいずれも良好である。

色調については表面（外）及び器肉（内）の双方を観察してみたが、いくつかの特徴が表れるようである。内外とも均質で淡灰色から青灰色を呈す一群は４点を数え、これに黒灰色のやや濁りのある色調の２点を加えて、いわゆる従来いい慣わされている須恵器の特徴を備えている。次に表面は均質な黒灰色から青灰色を示すが、器肉は淡褐色を呈するもので、４点ある。この他に内外ともに均質で淡褐色を呈する一群は胎土に混じり気のあるものが多いようである。

試料の13（第69図、以下同）は底径が50mm前後で、口径との差が２倍以上となる極端に開く器形である。体部下端から底部にかけて手持ちヘラ削り調整している。

19～33は吉川窯跡の製品である。胎土はやや粗いものがほとんどであるが、焼成は良好である。検出した窯は1基のみであるにもかかわらず、色調におおきな差異が認められる。器肉が灰色で、表面は青灰色から灰色を呈するものはわずかに3点である。これに器肉が淡灰褐色から濃赤褐色で、表面は黒色や黒灰色から灰褐色を呈する一群が11点を数え、このうち2点は器肉の真ん中のみ鮮やかな灰色のものがある。

実測できた試料はいずれも10分の1程度遺存するにすぎない。19は器高がわずか30㎜しかない、偏平な形をしている。これに対し23は口径104㎜と小さく深い器形を呈する。体下端から底にかけては回転ヘラ削り調整される。

34～47は中原窯跡のものである。ほとんどは胎土が比較的緻密で、砂粒の混入が少ない。また前二者くらべ焼成はかなり良好である。器肉の中央が灰色に近いが外側は淡褐色、器面の色調は均質な青灰色を呈する一群が半数以上あり、この窯の特徴である。

図にした坏は口径120～130㎜の大形でやや深めのものが多く部厚な感があるが、逆にやや小形の41は全体に丁寧な作りである。ヘラ切り離しで、体部下端は回転ヘラ削り調整される。

48～62は石川窯跡のものである。いずれも胎土は緻密で、焼成もとくに良好だが、全体に粉っぽい質感であることがこの窯の特徴ともいえる。62を除き、器肉は均質に濃灰色から灰白色を呈し、器面も同様である。

この窯跡の製品はいずれもかなり高速回転のロクロ目が目立ち、口縁部に丸みのあるものが多い。図化したもののうち、49・52・53は体部が半球形を呈し、口径120～127㎜を計る。底部の遺存する50・61は回転糸切り離しで、体部下端に強いナデが施されているためか底部が突出する。また、53・61には外面に火襷の跡が認められる。

63～77は上名主ケ谷窯跡からのものである。胎土は緻密なものからやや粗いものまであるが、いずれも砂粒をほとんど含まない。焼成・色調によって3種に分けることができる。63・64・66はきわめて良く焼き締められており、青灰色を呈しなかには外面に褐色の発色がみられるものもある。67・68・72～74・76・77は焼成良好で、青灰色から淡灰色を呈する。その他に焼成は良好であるが、やや褐色がみられる一群もある。

図の70は口径180㎜、75は同147㎜と推定される、直線的に開く口縁をもつ高台付坏と思われる。比較的肉厚で、口唇内部に稜線がみられる。64は底径94㎜を計る大形の坏で、体部が直立するように立ち上がる。また図化できなかった63は体部全体に丸みがあり、口縁部が極端に外反し、器肉が薄い特徴があり、いわゆる金属器模倣製品の可能性がある。

つぎに集落遺跡の分析試料について述べる。試料の選択にあたっては、視覚的な観察によりその遺跡に供給されたと思われる窯跡のある地域を推定して、あらかじめその所見を明示したたうえで、分析を依頼した。

137～146は東金市久我台遺跡のものである（文献77）。本遺跡は九十九里平野を望む舌状台

※　番号は分析試料番号を示す。
※　12・13（宇津志野窯跡）、19・21・23・24・26・28・31（吉川窯跡）、34・36・37・38・41・42（中原窯跡）、49・50・52・53・54・61・62（石川窯跡）、64・68・70・75（上名主ケ谷窯跡）

第69図　胎土分析試料須恵器実測図（S＝¼）

地上に展開する古墳時代後期から平安時代にいたる大集落である。とくに奈良・平安時代の住居跡が120余軒発見された。この地域は古代において上総国山邊郡管屋郷に比定され、当該時期の遺跡が集中するところでもある。

試料の139・140は胎土は緻密で、焼成も良く、器表面は淡灰色を呈する。139は蓋天井部の

破片で、やや粉っぽい質感である。永田・不入窯跡産の可能性がある。145・146は胎土中に砂粒や雲母粒を含み、淡灰色を呈する。常陸産かと思われる。その他は胎土に砂粒を多く含み、焼成は良く、胎土の色調は灰褐色で、器表面は淡黒灰色を呈するものが多い。千葉市域産と推定した。

147～152は現在調査を継続中の四街道市小屋之内遺跡である。印旛沼に流れ込む鹿島川の支流に南面する台地上に位置し、多くの掘立柱建物跡を検出した大集落である。試料として取り上げたものはいずれも８世紀中頃に比定される。胎土は比較的緻密で雲母の大粒が多く含まれる。焼成は良好で、器表面は暗灰色か淡い灰褐色を呈する。常陸産と思われる。

153～163は柏市花前Ⅰ遺跡の040号住居跡出土の一群である（文献55）。常磐自動車道路建設に伴う調査のため集落全域が解明されていないが、住居跡25軒、掘立柱建物跡11棟が発見されており、隣接する花前Ⅱ遺跡とともに大集落であったことが窺える。040号住居跡は８世紀後半である。

153は胎土は緻密で、全面灰色を呈し、焼成も良好である。外面に火襷の跡が残る。市原市域産の可能性がある。154～158は胎土に砂粒または雲母粒を含み、焼成は良好である。器面の色調は淡い暗灰色が多く、常陸産と思われる。161～163は黒色の微粒子を含む緻密なもので、焼成もかなり良い。窯跡は不明であるが、在地で生産されたと考えることも可能である。159・160は胎土が緻密で、とくに良く焼成され、全面均質な灰色である。

164～172は富里町新橋に所在する寺沢・新橋遺跡のものである（文献21・27）。調査はともに狭い範囲に限られ、集落の全容は不明である。胎土はやや粗く、焼成は良好である。色調は168を除き、淡褐色から黒灰色を呈し、同町内の吉川窯跡のものと近似する。

173～182は東金市妙経遺跡の試料である。前述した久我台遺跡とともに作田川支流域に立地し、古墳時代後期から平安時代にかけての集落である。現在報告書作成中で、詳細は明らかではないが、奈良時代以降の住居跡は30余軒と推定される。

175は緻密な胎土で、全体に灰白色を呈する。やや粉っぽい質で、市原市域産のものと思われる。176～179は砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は黒灰色から灰褐色を呈し、吉川窯跡を含む千葉市域産の可能性が高い。その他にも常陸産や窯跡不明のものまで多岐にわたることが予想される。

183～186は茂原市内野第Ⅱ遺跡（文献85）のものである。下総台地の南端に位置し、千葉市と境を接し、鹿子第２遺跡と同一台地上にある。183・184は比較的緻密な胎土で、全面均質な黒灰色を呈する千葉市域産と考える一群である。その他は須恵器であると思われるが褐色を呈するもので、窯跡は不明である。

第9表　胎土分析試料カード例

胎土分析試料カード

試料番号	138

試料番号

試料名	須恵器？
時期（型式）	９Ｃ前
器種・部位	坏　体部破片
胎土	密 長石微粒多 内淡灰褐色 外淡褐色
焼成	良好
色調	内淡灰褐色 外淡褐色（胎土のまま）均一
成形～調整	ロクロ 体下端一方向手持ちヘラ削り
その他	１３７と同一個体か
分析者・方法	三辻 利一　　胎土蛍光Ｘ線分析法
分析目的	胎土分析
遺跡・遺構名	久我台遺跡 ３２号住居跡
所在地	東金市松之郷
注記番号	213-001 SI032 4区1層
その他	須恵器技法の土師器か？
文献名	「東金市久我台遺跡」
発行者・年	（財）千葉県文化財センター　　Ｓ６３
掲載頁	なし
備考	

（財）千葉県文化財センター

図面・写真	
所見	K=0.238 Ca=0.438 Fe=3.00 Rb=0.168 Sr=0.486 Na=0.339
	D^2　千葉 24　石川 24　木更津 19　（推定産地千葉群）
分析後の取り扱い	奈三 ﾌﾟﾚﾊﾟﾗｰﾄ・粉末・個体破片保管
	県セ 個体破片保管

第10表　須恵器分析試料一覧（1）

番号	時　期	器　種	出　土　地	注　記　番　号	備　考
宇津志野窯跡　『千葉市宇津志野窯跡確認調査報告書』　千葉県教育委員会　1992					
1	9 C	杯	1—B窯体内	1 B—2 Tヨウ内	
2	〃	杯	1—B窯体内	1 B—2 Tヨウ内	
3	〃	杯	1—B窯体内	1 B—2 Tヨウ内	
4	〃	杯	1—B窯体内	1 B—2 Tヨウ内	
5	〃	甕	1—B窯体内	1 B—2 Tヨウ内	
6	〃	杯	1—A裏込内	1 A—8 Tウラ内	
7	〃	杯	1—A裏込内	1 A—8 Tウラ内	
8	〃	杯	1—A裏込内	1 A—8 Tウラ内	
9	〃	杯	灰原	6 T　8 ソE	
10	〃	杯	灰原	6 T　8 ソE	
11	〃	杯	灰原	6 T　8 ソE	
12	〃	杯	灰原	6 T　8 ソE	
13	〃	杯	灰原	6 T　8 ソE	
14	〃	杯	灰原	6 T　8 ソE	
15	〃	杯	灰原	5 T　3 ソS	
16	〃	杯	灰原	5 T　3 ソS	
17	〃	杯	灰原	5 T　3 ソN	
18	〃	杯	灰原	5 T　3 ソS	
吉川窯跡　『富里町吉川窯跡確認調査報告書』　千葉県教育委員会　1991					
19	8 C後	杯	1号窯体内	1 K体内—12(F)	
20	〃	杯	1号窯	K 1—041	
21	〃	杯	灰原	1 T 2 K—1	
22	〃	杯	灰原	2 T 1灰—1	
23	〃	杯	灰原	3 T 1 K灰—2	
24	〃	杯	灰原	3 T 1 K灰—2	
25	〃	杯	灰原	3 T 1 K灰—1	
26	〃	杯	灰原	6 T 1 K灰—1	
27	〃	杯	灰原	8 T 1 K灰—1	
28	〃	杯	灰原	8 T 1 K灰—1	
29	〃	杯	灰原	8 T 1 K灰—1	
30	〃	杯	灰原	3 T 1 K灰—B 5	
31	〃	杯	灰原	8 T 1 K灰—1	
32	〃	杯	灰原	8 T 1 K灰—2	
33	〃	杯	灰原	8 T 1 K灰—1	
中原窯跡　『千葉市中原窯跡確認調査報告書』　千葉県教育委員会　1990					
34	9 C	杯	2号窯	2—カマ2	
35	〃	杯	2号窯	2—カマ5	
36	〃	杯	2号窯	2—カマ2	
37	〃	高台杯	2号窯	2—カマ2	
38	〃	杯		1 TR—1	
39	〃	杯		10TR—3	
40	〃	杯		10TR—3	
41	〃	杯		10TR—3	
42	〃	杯		10TR—3	
43	〃	杯		10TR—3	

第11表　須恵器分析試料一覧（2）

番号	時　期	器　種	出　土　地	注　記　番　号	備　考
44	9 C	杯		10T R	
45	〃	杯		10T R	
46	〃	杯		10T R	
47	〃	小形甕		10T R	
石川窯跡　『市原市石川窯跡確認調査報告書』　千葉県教育委員会　1988					
48	9 C初	杯		C 2—2	
49	〃	杯		C 2—2	
50	〃	杯		C 2—2	
51	〃	杯		C拡—5	
52	〃	杯		C拡—5	
53	〃	杯		C拡—5	
54	〃	杯		C拡—5	
55	〃	杯		C拡—5	
56	〃	杯		C拡—5	
57	〃	杯		C拡—5	
58	〃	杯		C拡—5	
59	〃	杯		C拡—5	
60	〃	高台杯		C拡—5	
61	〃	杯		D—1	
62	〃	高台杯		D—1	
上名主ヶ谷窯跡　『木更津市上名主ヶ谷窯跡確認調査報告書』　千葉県教育委員会　1989					
63	8 C	高台杯	2号窯焚口	2号焚0010	
64	〃	杯	2号窯焚口	2号焚0010	
65	〃	杯	4号窯体内	4号窯内0004	
66	〃	杯	灰原	2・4・6号灰内0003	
67	〃	蓋	灰原	2・4・6号灰内0003	
68	〃	高台杯	灰原	2・4・6号灰内0003	
69	〃	杯	5号窯体内	5号窯体内0013	
70	〃	鉢	5号窯体内	5号窯体内0013	
71	〃	杯	5号窯体内	5号窯体内0013	
72	〃	杯	5号窯体内	5号窯体内0013	
73	〃	杯	5号窯体内	5号窯体内0013	
74	〃	杯	5号窯体内	5号窯体内0008	
75	〃	高台杯	5号窯焚口	5号焚拡内0014	
76	〃	杯	5号窯焚口	5号焚拡内0014	
77	〃	杯	5号窯焚口	5号焚拡内0014	

第12表　須恵器分析試料一覧（3）

番号	時期	器種	出土地	注記番号	備考
木葉下窯跡　『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書6—木葉下遺跡Ⅰ(窯跡)』 (財)茨城県教育財団　1983					
78	8C	高台杯	B1窯灰原	HB1C7	
79	〃	高台杯	B1窯灰原	HB1C7	
80	〃	壺	B1窯灰原	HB1C6	
81	〃	杯	B1窯灰原	HB1b3	
82	〃	杯	B1窯灰原	HB1a3	
83	〃	杯	B1窯灰原	HB1d9	
84	〃	杯	B1窯灰原	HB1d6	
85	〃	杯	B1窯灰原	BH拡	
86	〃	杯	B1・2窯	B1.2拡	
87	〃	蓋	B1・2窯	B1.2拡	
88					欠番
89	〃	杯	B1窯	B1不明	
90	〃	杯	B1窯	B1不明	
91	〃	杯	C区	C　不明	
92	〃	蓋	C5窯	C5B1Z4	
93	〃	杯	C5窯	C5B1Z4	
94	〃	杯	C5窯	C5B4SX	
95	〃	杯	C5窯	C5TX	
96	〃	杯	C5窯	C5BZY	
97	〃	蓋	C5窯	C5B4SX	
98	〃	高台杯	C5窯	C5SB1V25	
99	〃	高台杯	C5窯	C5B5YN0116	
100	〃	杯	C5窯	C5B5YN0050	
老洞窯跡　『老洞古窯跡群発掘調査報告書』　岐阜市教育委員会　1981					
101	8C	杯	1号窯	1　Ⅰ9Ⅵb	金属器模倣
102	〃	杯	1号窯	1　314—1	金属器模倣
103	〃	高台杯	1号窯	1　G—H8	
104	〃	高台杯	1号窯	1　G—H8	
105	〃	杯	1号窯	1	
106	〃	杯	1号窯	1	
107	〃	杯	1号窯	1	
108	〃	杯	1号窯	1	
109	〃	高台杯	2号窯	2　Ⅰ11Ⅲd	
110	〃	高台杯	2号窯	2　Ⅰ11Ⅲd	
111	〃	高台杯	2号窯	2　Ⅰ11Ⅲc	
112	〃	杯	2号窯	2　Ⅰ11Ⅲd	
113	〃	杯	2号窯	2　Ⅰ11Ⅲc	
114	〃	杯	2号窯	2　Ⅰ11Ⅲd	
115	〃	高台杯	3号窯	3　Ⅰ9Ⅸ	
116	〃	高台杯	3号窯	3　Ⅰ9Ⅸ	
117	〃	高台杯	3号窯	3　Ⅰ9Ⅸ	
118	〃	杯	3号窯	3　Ⅰ9Ⅸ	
119	〃	杯	3号窯	3　Ⅰ9Ⅸ	
120	〃	杯	3号窯	3　Ⅰ9Ⅸ	

第13表　須恵器分析試料一覧（4）

番号	時　期	器　種	出　土　地	注　記　番　号	備　考
朝倉窯跡　岐阜市芥見					
121	8 C	高台杯	表面採集	なし	
122	〃	高台杯	表面採集	なし	
123	〃	高台杯	表面採集	なし	
124	〃	杯	表面採集	なし	
125	〃	杯	表面採集	なし	
126	〃	杯	表面採集	なし	
大洞窯跡　岐阜市					
127	8 C	杯	表面採集	なし	
128	〃	杯	表面採集	なし	
129	〃	杯	表面採集	なし	
130	〃	蓋	表面採集	なし	
131	〃	蓋	表面採集	なし	
須山窯跡　岐阜市					
132	7 C	壺	表面採集	ＢＰ須山１カマ	
133	〃	壺	表面採集	ＢＰ須山１カマ	
134	〃	壺	表面採集	なし	
135	〃	甕	表面採集	なし	
136	〃	？	表面採集	ＢＰ須山１カマ	

第14表　須恵器分析試料一覧（5）

番号	時　期	器　種	出　土　地	注　記　番　号	備　考
久我台遺跡　『東金市久我台遺跡』　千葉県文化財センター　1988					
137	9C前	杯	ＳＩ032(住居跡)	２区２層	土師器・須恵器分類不可
138	9C前	杯	ＳＩ032(住居跡)	４区１層	土師器・須恵器分類不可
139	8C後	蓋	ＳＩ036(住居跡)	1000ベルト南半１層	市原市域
140	8C	杯	ＳＩ238(住居跡)	４区カベ	市原市域
141	9C前	杯	ＳＩ032(住居跡)	不明	千葉市域
142	9C前	杯	ＳＩ001(住居跡)	001	千葉市域
143	9C前	杯	ＳＩ036(住居跡)	1000　３区１層	千葉市域
144	9C前	杯	ＳＩ036(住居跡)	1000　３区１層	千葉市域
145	8C末	杯	ＳＩ064(住居跡)	Pit４一括	常陸産
146	8C末	杯	ＳＩ064(住居跡)	１区カベ	常陸産
小屋之内遺跡　四街道市物井　現在調査中　未報告　千葉県文化財センター					
147	8C中	杯	ＳＩ002(住居跡)	714―１	常陸産Ⅰ
148	8C中	蓋	ＳＩ004(住居跡)	825	常陸産Ⅰ
149	8C中	杯	ＳＩ013(住居跡)	011―４	常陸産Ⅱ
150	8C中	杯	ＳＩ013(住居跡)	002―１	常陸産Ⅱ
151	8C中	杯	ＳＩ013(住居跡)	508	常陸産Ⅱ
152	8C中	杯	ＳＩ013(住居跡)	494	常陸産Ⅱ

第15表　須恵器分析試料一覧（6）

番号	時期	器種	出土地	注記番号	備考
花前Ⅰ遺跡　『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』　千葉県文化財センター　1984					
153	8C後	杯	040(住居跡)	0147	市原市域
154	8C後	杯	040(住居跡)	0186	常陸産Ⅰ
155	8C後	杯	040(住居跡)	0145	常陸産Ⅰ
156	8C後	高台杯	040(住居跡)	0147	常陸産Ⅰ
157	8C後	杯	040(住居跡)	0147	常陸産Ⅱ
158	8C後	杯	040(住居跡)	0191	常陸産Ⅳ
159	8C後	杯	040(住居跡)	0145	武蔵産
160	8C後	杯	040(住居跡)	0013	武蔵産
161	9C	杯	040(住居跡)	0003	在地産？窯不明
162	8C後	杯	040(住居跡)	0146	在地産？窯不明
163	9C	杯	040(住居跡)	0147	在地産？窯不明
寺沢遺跡　印旛郡富里町　『寺沢遺跡』　日本考古学研究所　1977					
164	9C前	杯	トレンチ	T51ウ	千葉市域
165	9C前	杯	トレンチ	T51ウ	千葉市域
166	9C中	杯	トレンチ	T51エ	窯不明
167	9C前	杯	トレンチ	T51エ	窯不明
新橋遺跡　印旛郡富里町　『新橋遺跡発掘調査報告』　富里村教育委員会　1978					
168	9C前	杯	2号住居跡	2住31	常陸産
169	9C前	杯	2号住居跡	2住フクド	吉川窯
170	9C前	杯	2号住居跡	2住236	吉川窯
171	9C前	杯	?	8—8	吉川窯
172	9C前	杯	2号住居跡	2住—?	吉川窯
妙経遺跡　東金市松之郷　現在整理中　未報告　千葉県文化財センター					
173	9C中	杯	SⅠ092C(住居跡)	?	土師器・須恵器分類不可
174	9C中	杯	SⅠ092C(住居跡)	0003	土師器・須恵器分類不可
175	8C中	?	SⅠ059(住居跡)	0002	市原市域
176	9C前	杯	SⅠ092C(住居跡)	0002	吉川窯
177	9C前	杯	SⅠ092C(住居跡)	0137	吉川窯または中原窯
178	9C前	杯	SⅠ092C(住居跡)	0003	吉川窯または中原窯
179	9C前	杯	SⅠ092C(住居跡)	0001	吉川窯または中原窯
180	8C後	盤	SⅠ059(住居跡)	0020	在地産？窯不明
181	9C前	杯	SⅠ059(住居跡)	0002	在地産？窯不明
182	8C後	杯	SⅠ059(住居跡)	0261	常陸産Ⅱ
内野第Ⅱ遺跡　茂原市内野　現在整理中　未報告　長生郡市文化財センター					
183	9C前	杯	トレンチ	Ⅴ　NSトレ	千葉市域
184	9C前	杯	トレンチ	Ⅰ　EWトレ	千葉市域
185	9C前	杯	トレンチ	Ⅲ　NSトレ	窯不明
186	9C前	甕	トレンチ	Ⅳ　NSトレ	窯不明

3．文献目録

須恵器生産にかかわる研究は、田辺昭三氏や中村　浩氏によるすぐれた一連の研究成果がある。ここではこれらの研究以外の、千葉県を中心とした須恵器研究について文献目録として掲載している。

千葉県内の発掘調査では必ずといってよいほどに奈良・平安時代の遺物が出土しており、これらすべての調査報告書を掲載することは煩雑さを増すばかりであると考えたために、生産あるいは編年にかかわるものについて掲載している。

目録は発行年順に掲載し、発行年は西暦表示としている。また、各論の参考・引用文献の番号は、ここにあげた目録の文献番号と一致している。

1　1908　大西源一　「上古の製陶所分布につきて」『考古会』第8巻第3号　東京考古学会

2　1914　笠井新也　「摂津国川辺郡平井山に於ける古代製陶所の遺跡及びその遺物」『考古学雑誌』第5巻第9号　日本考古学会

3　1915　笠井新也　「摂津国多可郡高松山に於ける古代製陶所の遺跡及びその遺物に就いて」『考古学雑誌』第6巻第2号　日本考古学会

4　1927　谷中国樹　「第二編第二章第一節　遺跡」『君津郡誌』上巻　千葉県君津郡教育會

5　1938　杉原荘介・佐藤吉彦　「下総鬼高遺跡調査概報」『人類学雑誌』第53巻第11号　日本人類学会

6　1943　杉原荘介　『原始学序論』　あしかび書房

7　1944　石川恒太郎　「須恵器窯址考」『考古学雑誌』第34巻第6号　日本考古学会

8　1954　小山富士夫　「須恵器の窯跡」『考古学雑誌』第39巻第3号　日本考古学会

9　1967　大川　清　「木更津矢那瓦窯址」『古代』49・50　早稲田大学考古学会

10　1967　大川　清　「古窯跡研究上の問題点」『考古学ジャーナル』4　ニュー・サイエンス社

11　1967　倉田芳郎・坂詰秀一　「二　古代・中世窯業の地域的特質　（1）東北・関東」『日本の考古学』Ⅵ　歴史時代（上）　河出書房新社

12　1970　『瀬谷子窯跡群第2次緊急調査概報』　窯業史研究所

13　1970　『野添・大浦窯跡群』　福岡県教育委員会

14　1971　高島忠平　「平城京東三坊大路東側溝出土の施釉陶器」『考古学雑誌』第57巻第1号　日本考古学会

15　1973　西野　元　「国分式土器について」『三浦古文化』第14号

16　1974　杉原荘介・大塚初重編　『土師式土器集成』

17　1976　『陶邑』Ⅰ　大阪府教育委員会

18　1975　竹内理三編　『荘園分布図』上巻　吉川弘文館

19　1976　大川　清　「北山窯跡」『下野の古代窯業遺跡（本文編Ⅰ）』　栃木県教育委員会

20　1976　『千葉県市原市永田・不入須恵窯跡調査報告書』　千葉県教育委員会

21　1977　『寺沢遺跡』　日本文化財研究所

22　1977　星野達雄　「いわゆる『国分式土器』について－土器の様相からみた律令制下の相・武・下総三国－」『原始古代社会研究』第３巻

23　1977　『山田水呑遺跡』　山田水呑遺跡発掘調査団

24　1977　金子真土　「出土土器に関する二・三の問題」『山田水呑遺跡』　山田水呑遺跡発掘調査団

25　1977　須田　勉　「坊作遺跡の調査」『上総国分寺台発掘調査概報』　上総国分寺台遺跡調査団

26　1978　『千葉・南総中学遺跡』　市原市教育委員会

27　1978　『新橋遺跡発掘調査報告書』　富里村教育委員会

28　1979　『多摩丘陵窯跡群』　東京都教育委員会

29　1979　『陶邑』Ⅳ　大阪府教育委員会

30　1980　『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告』Ⅰ　愛知県教育委員会

31　1980　「内野台遺跡」『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報』昭和55年度　千葉県教育庁文化課

32　1980　『生産遺跡基本調査報告』　熊本県教育委員会

33　1981　『千葉県印旛郡富里村埋蔵文化財分布地図』　富里村教育委員会

34　1981　国平健三　「相模国の奈良・平安時代集落構造（上）」『神奈川考古』第12号　神奈川考古同人会

35　1981　酒井清治　「房総における須恵器生産の予察（Ⅰ）」『史館』第13号　市川ジャーナル社

36　1981　「御子ケ谷遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告書』　藤枝市教育委員会

37　1982　「鐘つき堂遺跡」『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報』昭和57年度　千葉県教育庁文化課

38　1982　『野間窯跡群』　福岡県教育委員会

39　1983　宇津川　徹　「窯跡から出土した須恵器（胎土）の鉱物学的分析について－千葉市・中原窯跡、宇津志野窯跡－」『貝塚博物館紀要』第10号　千葉市加曾利貝塚博物館

40　1983　「鐘つき堂遺跡」『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報』昭和58年度　千葉県教育庁文化課

41　1983　『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書５　鹿の子Ｃ遺跡』　財団法人茨城県教育財団

42　1983　川井正一　「茨城県における八・九世紀の須恵器について」『シンポジウム資料　房総における奈良・平安時代の土器』　史館同人・市立市川考古博物館

43　1983　倉田義広　「千葉市内の平安時代窯跡について－金親町・中原窯跡－」『貝塚博物館紀要』第10号　千葉市加曾利貝塚博物館

44　1983　黒澤彰哉　「常陸における奈良・平安時代の土器について」『シンポジウム資料　房総における奈良・平安時代の土器』　史館同人・市立市川考古博物館

45　1983　佐久間　豊　「千葉県における奈良・平安時代土器の様相(1)」『史館』第14号　市川ジャーナル社

46　1983　佐久間　豊・豊巻幸正・笹生　衛　「旧上総国における奈良・平安時代土器編年試案」『シンポジウム資料　房総における奈良・平安時代の土器』　史館同人・市立市川考古博物館

47　1983　『隼上り瓦窯跡発掘概報』　宇治市教育委員会

48　1983　須田　勉　「関東地方の瓦窯　Ⅰ　瓦窯②」『佛教藝術』148　佛教藝術學会

49　1983　巽　淳一郎　「古代窯業生産の展開－西日本を中心にして－」『文化財論叢』　奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会

50　1983　土屋潤一郎　「八日市場市吉田所在の須恵器窯について」『研究連絡誌』第３号　財団法人千葉県文化財センター

51　1983　服部敬史　「奈良・平安時代の土器生産について」『史館』第15号　史館同人

52　1984　金子真土　「埼玉における古代窯業の発達(6)」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第６号　埼玉県立歴史資料館

53　1984　「鐘つき堂遺跡」『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報』昭和59年度　千葉県教育庁文化課

54　1984　佐久間　豊・井口　崇「千葉県市原市石川窯址における表面採集の須恵器」『史館』　第16号　史館同人

55　1984　『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』　財団法人千葉県文化財センター

56　1984　『南河原坂第４遺跡－調査概要－』　千葉市土気地区遺跡調査会

57　1984　三辻利一　「千葉県内出土須恵器・埴輪・瓦の胎土分析」『研究紀要』８　財団法人千葉県文化財センター

58　1985　「保渡田遺跡」『三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡』　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

59　1985　宇野隆夫　「古代的食器の変化と特質」『日本史研究』280　日本史研究会

60　1985　『千葉県市原市　草刈遺跡』　財団法人市原市文化財センター

61　1985　『千葉県市原市　永田、不入窯跡』　財団法人市原市文化財センター

62　1986　「坂ノ越遺跡」『千葉県遺跡調査研究発表会要旨』　千葉県文化財法人連絡協議会

63　1986　佐久間　豊　「房総をめぐる奈良・平安時代土器生産体制の展開に関する諸問題」『研究紀要』10　財団法人千葉県文化財センター

64　1986　「Ⅳ窯業」『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』　千葉県教育委員会

65　1986　寺内博之　「印旛郡富里村吉川窯跡出土の土器－資料紹介－」『印旛郡市文化財センター紀要』Ⅰ　財団法人印旛郡市文化財センター

66　1986　『千葉市小食土廃寺跡確認調査報告書』　千葉県教育委員会

67　1987　『房総における歴史時代土器の研究』　房総歴史考古学研究会

68　1987　倉田義広　「下総の須恵器窯」『房総における歴史時代土器の研究』　房総歴史考古学研究会

69　1987　『埼玉の古代窯業調査報告書』　埼玉県教育委員会

70　1987　高橋康男　「上総永田・不入窯」『房総における歴史時代土器の研究』　房総歴史考古学研究会

71　1987　高橋康男　「草刈、大和田、永田・不入－市原市における土器研究をめぐる諸問題－」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅰ　財団法人市原市文化財センター

72　1987　田所　真　「Ⅱ　上総国　1　市原市坊作遺跡」『房総における歴史時代土器の研究』　房総歴史考古学研究会

73　1987　服部敬史　「東国における奈良時代前半の須恵器生産とその意義」『信濃』第39巻第7号　信濃史学会

74　1987　『戸津六字ヶ丘古窯跡発掘調査報告書』　小松市教育委員会

75　1988　『市原市石川須恵器窯跡確認調査報告書』　千葉県教育委員会

76　1988　『会津・大戸窯跡群分布調査報告書』　会津若松市教育委員会

77　1988　小林信一　「古墳時代から平安時代にかけての土器について」『東金市久我台遺跡』　財団法人千葉県文化財センター

78　1988　『大和田遺跡』　財団法人市原市文化財センター

79　1989　上原真人　「東国国分寺の文字瓦再考」『古代文化』第41巻第12号　財団法人古代學協會

80　1989　『木更津市上名主ヶ谷窯跡確認調査報告書』　千葉県教育委員会

81　1989　田所　真　「上総須恵器考　須恵器生産遺跡研究略史」『史館』第21号　史館同人

82　1989　『千葉県市原市　永田、不入窯跡』　財団法人市原市文化財センター

83　1989　『千葉市　南河原坂窯跡群　見学会資料』　千葉市教育委員会・千葉市土気南土地区画整理組合・財団法人千葉市文化財調査協会

84　1989　永房　熙　「第3節　駿河地域の窯業遺跡　2.」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会

85　1990　『桂遺跡群発掘調査報告書』　財団法人長生郡市文化財センター

86　1990　『佐原市吉原三王遺跡』　財団法人千葉県文化財センター

87　1990　『千葉市中原窯跡確認調査報告書』　千葉県教育委員会

88　1990　半澤幹雄　「下片岡（しもかとか）古窯跡の発見について」『研究連絡誌』第28号　財団法人千葉県文化財センター

89　1990　菱田哲郎・奥西藤和　「付載　八代宮ノ谷窯跡出土の須恵器」『鬼神谷窯跡発掘調査報告』　兵庫県城崎郡竹野町教育委員会

90　1991　『富里町吉川窯跡確認調査報告書』　千葉県教育委員会

91　1991　『千原台ニュータウンⅣ　中永谷遺跡』　財団法人千葉県文化財センター

92　1991　高橋一夫　「埼玉における古代窯業の展開」『埼玉考古学論集』　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

93　1992　『千葉市宇津志野窯跡確認調査報告書』　千葉県教育委員会

94　1992　『黒笹第11号窯発掘調査報告書』　愛知県三好町教育委員会

95　1992　『古代の土器1　都城の土器集成』　古代の土器研究会

96　1992　「猿島郡三和町尾崎浜ノ台窯跡調査報告」『三和町史　資料編』原始・古代・中世　三和町

97　1992　白井久美子　「第二節　生活文化の変化　新しい焼きもの」『房総考古学ライブラリー古墳時代（2）』　財団法人千葉県文化財センター

98　1992　後藤建一　「研究報告（紙上報告）　湖西古窯跡群」『大戸窯検討のための「会津シンポジウ

ム」東日本における古代・中世窯業の諸問題』 大戸古窯跡群検討会・会津若松市教　育委員会

99　1992　渡邊高弘　「千葉市宇津志野窯跡の分布調査」『研究連絡誌』第36号　財団法人千葉県文化財センター

100 1992　中村　浩　『須恵器の分布と変遷』 雄山閣出版

101 1993　川井正一　「常陸国における古代窯業遺跡－新治窯跡群を中心として－」『茨城歴史館報』第20号　茨城県立歴史館

102 1993　『市原市永田窯跡群発掘調査報告書』 千葉県教育委員会

103 1993　酒井清治　「土器と瓦の生産と交易－利根川流域の事例から－」『河川をめぐる歴史像－境界と交流－』 地方史研究協議会

104 1993　花谷　浩　「寺の瓦作りと宮の瓦作り」『考古学研究』第40巻第２号　考古学研究会

III 各　　論

1．須恵器生産の変遷

（1）古墳時代

先の基礎資料の項で各窯出土の須恵器について概観したが、ここでその変遷について考えてみる。古墳時代のあきらかな須恵器窯跡は市原市大和田窯だけであるが、「草刈型土器」（文献60・71）とも呼ばれる土器群や、君津市練木に所在したと言われる「周准古窯址群」（文献4）から、古墳時代の須恵器生産に関係した資料が若干みられる。

「草刈型土器」は5世紀後半に生産された酸化焔焼成のきわめて良好な作りの土器で、回転ヘラ削り・叩き調整・櫛描き波状文などの成・整形技術や器形からみるかぎり須恵器ともいうべき土器である（第70図）。「草刈型土器」という用語としてはまだ定着しておらず、「須恵器手法土器」という名称を用いることもある（文献97）。このような呼称がとられているのは、この土器群の焼成遺構が検出されていないこと、酸化焔焼成となること、焼成前に赤彩されるものが多いことから、須恵器・土師器の区別が不明瞭となっていることに起因している。ただし、胎土分析の結果から在地の粘土を使用していることがあきらかになっており（文献91）、須恵器製作に深く関与した工人が在地で製作した土器といえるであろう。この土器群は広範な地域で認められているわけではなく、県内でも限られた地域での出土である。このような酸化焔焼成の須恵器ともいうべき土器群は他県でもほぼ同時期のものが認められており、その出現期間も長期的な継続性が認められないことから、当時の須恵器工人が定着することなく移動して、このような土器を生産していたことをうかがわせる。

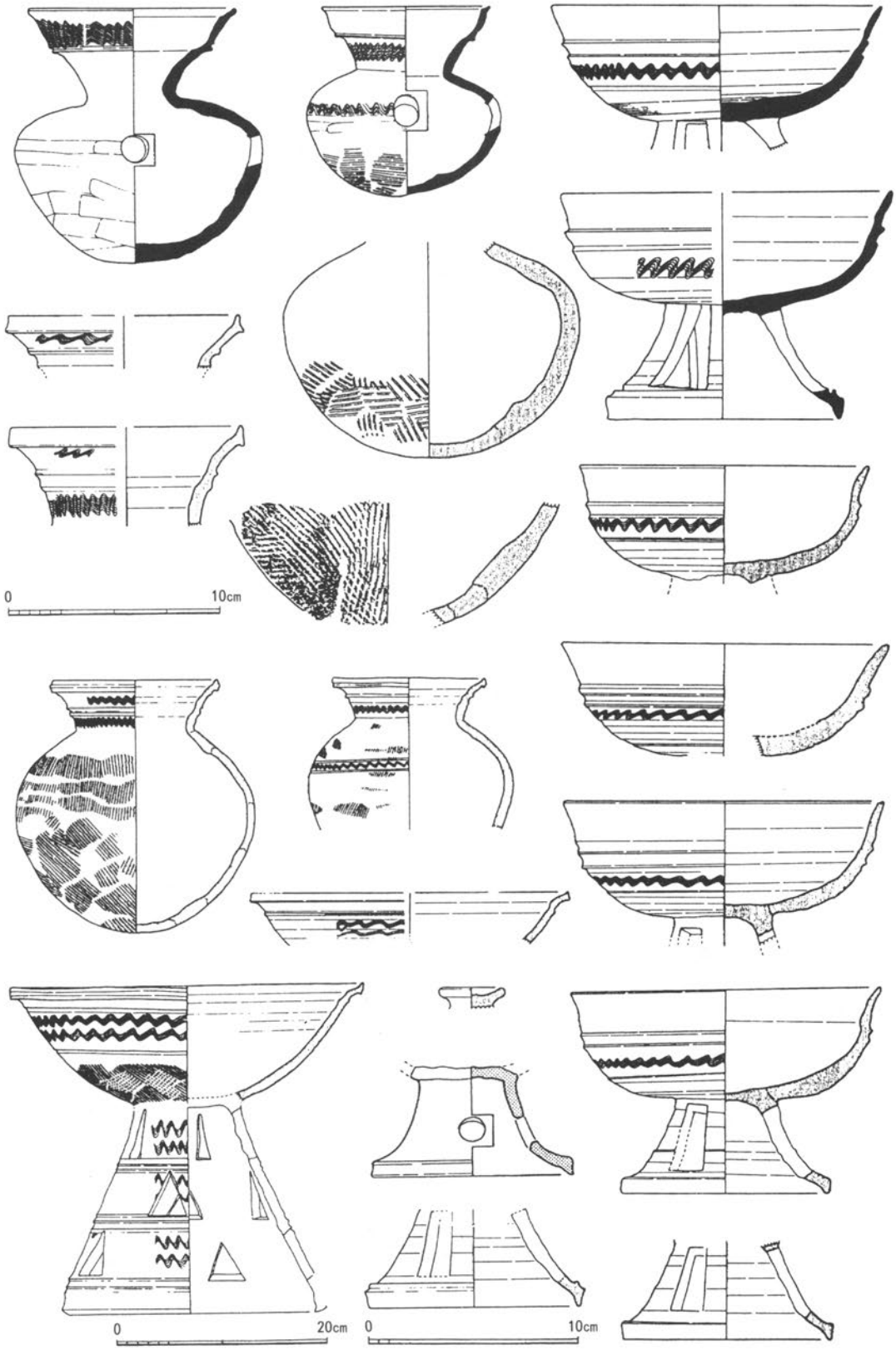
周准古窯址群は明らかに7世紀代の所産であり、既に破壊されたものと言われており実体は不明となった遺跡である（文献11）。このため、その具体的な様相について述べることはできないが、周辺にはこの遺跡と連続する時期の窯跡群は存在しておらず、単発的かつ小規模な操業であったものと考えられる。

現段階では、古墳時代の須恵器窯としてあきかなものは大和田窯だけであるが、酒井清治氏は県内出土須恵器の地域色を抽出して、房総における須恵器生産については6世紀前半、遅くとも中頃に開始され、その後断続的な生産が8世紀前半まで行われていたと指摘している（文献35）。

おそらく、県内における古墳時代の須恵器生産はきわめて短期間の単発的操業となっていたのであろう。以下、大和田窯の性格と年代観について検討する。

大和田窯跡の性格と年代観

本窯跡から出土した須恵器の年代観については多くの研究者のなかで見解が分かれるところ



第70図　草刈六之台遺跡出土の須恵器と須恵器手法土器

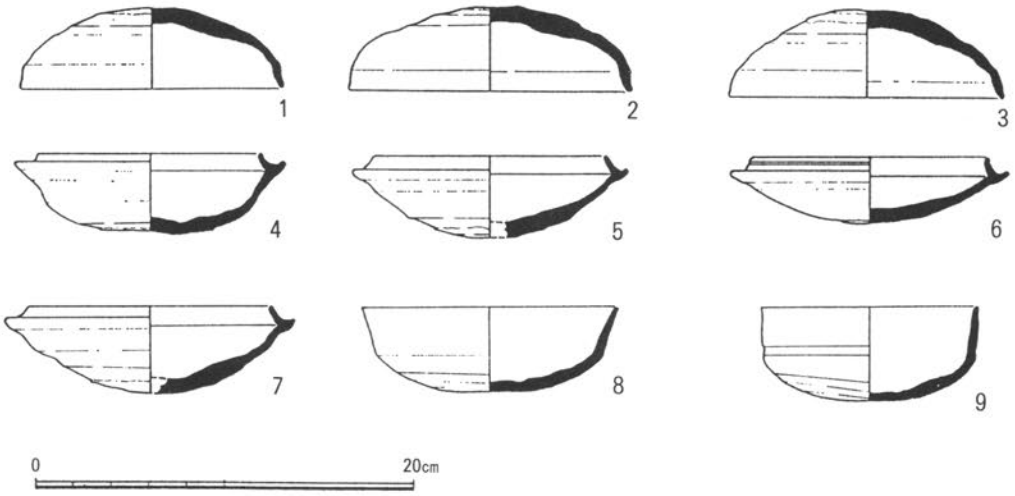
であり、遺跡の報告書でも6世紀後半～7世紀前半と幅をもたせて考えている。

本窯跡の製品の古い様相としては大きさがあげられる。蓋の口径が15.7cm、杯の口径が13.8cm、最大径は16.8cmもあり、6世紀代後半と考えられている陶邑の高蔵43型式の遺物のようにみうけられる。新しい要素としては、口径15.8cmの大型の金属器模倣の椀の存在が挙げられ、高蔵217型式かそれ以降の時期が考えられる。このように型式に差異がみられることは、一時期のものと考えるよりも数時期にわたる操業の結果、古い遺物と新しいものが混在しているものとみなすこともできるかもしれない。しかしながら、本窯跡の操業期間は比較的短いものと想定され、出土している須恵器の焼成をみるならば、みな焼きが甘く同様な焼成を示しており、これらのものについては同時に焼成された感が強い。

そして、遺物を観察すると口径が大きな蓋・杯に関しても時期的に新しい要素がみいだせる。第1に形態については、ヘラ切りの際にできた段をそのまま残しており、底部中央部だけ盛り上がっているような形態であり、明らかに京都府の幡枝窯跡の製品と同様に高蔵43型式よりも後出する形態を示す。第2に、底部および天井部中央はヘラ切り痕がナデまたはきわめて粗い削りによって消されているのみであり、技法的にも退化傾向が窺える。ちなみに、須恵器の先進地域である畿内地域では、口径が15cmに達するような大型の蓋・杯には回転ヘラ削りが施されており、畿内地域で回転ヘラ削りがなくなるのは口径が10cmぐらいに縮小した段階である（註）。

このような技法の簡略化は大和田窯跡の地方窯としての特徴の一つとしてとらえられるものであろうが、これのみをもって時期を下げて考えることは若干の疑問が残るところである。

しかしながら、陶邑以外の地方窯をみると、この大和田窯跡の製品と同様なものがいくつか認められる。ここに兵庫県城崎郡日高町の八代宮ノ谷窯跡出土（文献89）の一群の須恵器を挙げておく。この窯跡の窯体の残存状況は良く、窯尻付近は天井も残存し、窯体内の床面上には



第71図　八代宮ノ谷窯跡出土遺物

多数の須恵器が取り残されていた。窯体内の須恵器は、崩落した天井の下に重なるような状態で検出されている。焼成が良好であるものが多い点からみて、焼成終了直前に天井が落ちたものと考えられており、遺物は同一時期の好資料である。

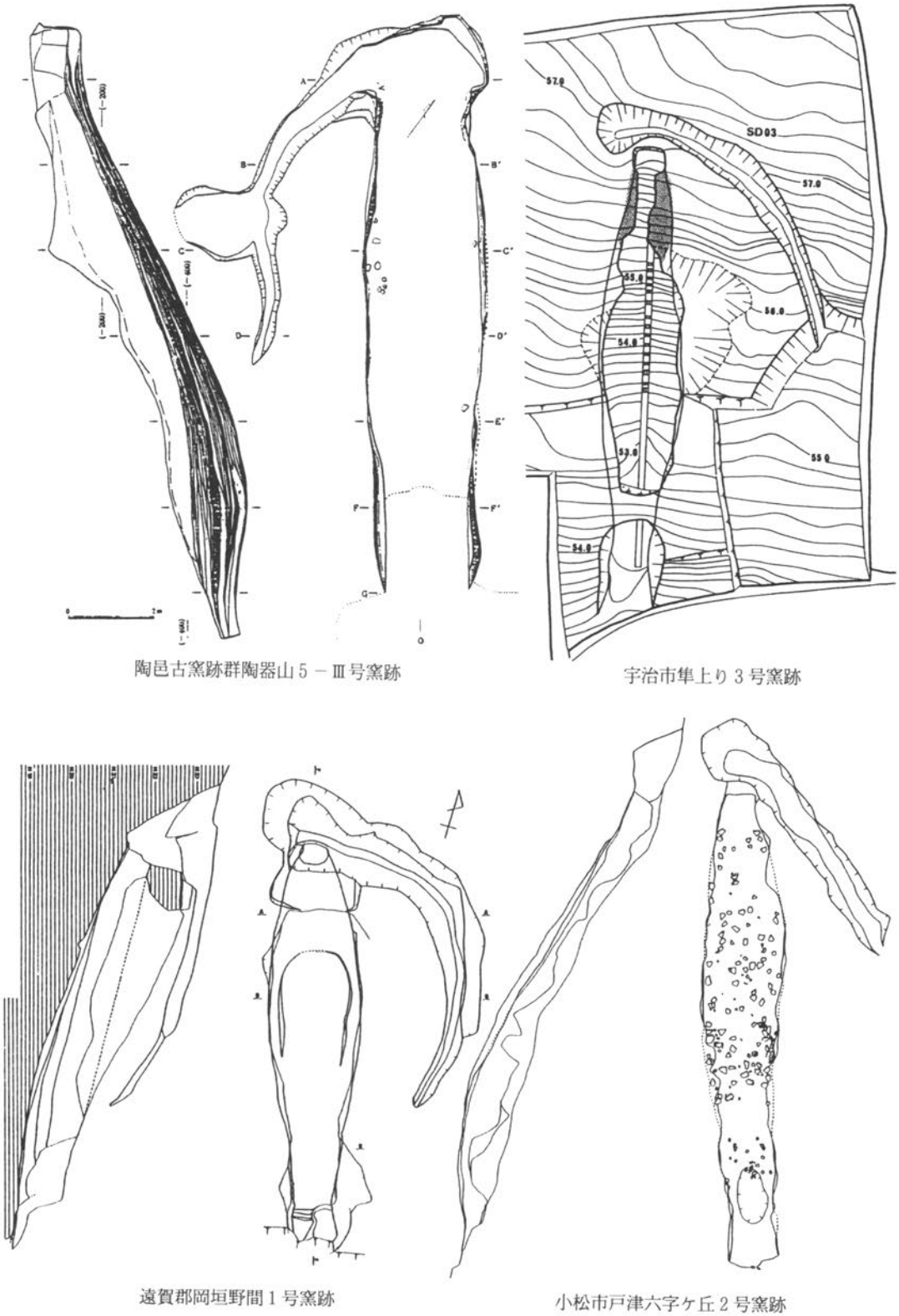
出土の遺物をみると本遺跡の遺物との共通点がみいだせる。口径が13cmの大型の杯（4～7）で、ヘラ切り前に補助のヘラ削りを施し、その後は底部にナデを行うのみのものが出土している。また、蓋も14～15cmで、ヘラ切り前に補助ケズリを施し、その後に天井部にナデを施すのだけで、ヘラ切りの際にできた段が大和田窯跡のものと同様に明瞭に残るものが存在する。これら大型の杯類は大和田窯跡の杯よりも7～8㎜小さいという差があるが、同様な技法・形態がみられることからほぼ同時期のものであると考えられるであろう。そして、重要なことはこの八代宮ノ谷窯跡の製品のなかにも金属器模倣の深手で外面に沈線をめぐらした椀（9）が存在することである。前述のようにこの窯跡の製品は良好な一括遺物と評価されており、この中に金属器模倣の椀が確実にあるということは、大和田窯跡出土の金属器模倣の椀も大振りの杯類と共伴してもなんら問題はないことになる。

したがって、大和田窯跡の場合については最も新しい要素である椀の年代観から大振りの蓋・杯の時期を決定することが妥当となり、あきらかに大和田窯跡の杯・蓋については陶邑などに比較して口径の縮小の時期が遅れているとみることができる。そして、このことはそれらに回転ヘラ削り技法が欠如していることからも補強されるのである。

さて、陶邑での金属器模倣の須恵器椀の出現は陶邑高蔵209型式からであり、大和田窯跡の時期はそれよりも下る可能性を有する。ちなみに、本遺跡と同様な様相の八代宮ノ谷窯跡の製品の中の金属器模倣の椀は菱田哲郎氏によれば、陶邑高蔵217号窯跡からほぼ同様なものが出土しているとのことである。本窯跡は、高蔵209～217型式のなかの時期の所産と考えられ、本窯跡と同様な大型の椀が出土している京都の幡枝窯の時期により近い可能性が指摘できるであろう。年代的なことは確証はないが、7世紀前半代まで下降することは動かないものと考えられる。

また、窯構造からみた場合はどのようなことがいえるであろうか。大和田窯跡は地下式の構造で、煙出しから右側に溝が垂れ下がってのびるという特徴を有するが、このような形態のものは各地でみられる。列挙すれば、まず大阪府陶邑窯跡群（文献17）、京都府宇治市隼上り瓦窯跡2号・3号窯跡（文献47）、福岡県遠賀郡野間1号窯跡（文献38）、石川県小松市戸津六字ケ丘2号窯跡（文献74）等の地域にみられる。これらの窯跡の時期については7世紀初頭～中葉にかけてのものと考えられており、上記の年代観と矛盾するものではない。

このような形態の窯跡は陶邑窯跡群では小数で、しかも単発的な状況を示しており、主流となるものではなく、陶邑以外の畿内周辺域に系譜が求められる窯形態と考えられている。いずれにしても大和田窯跡はその出土資料のなかに当時先進の流行であった金属器模倣の椀がみら



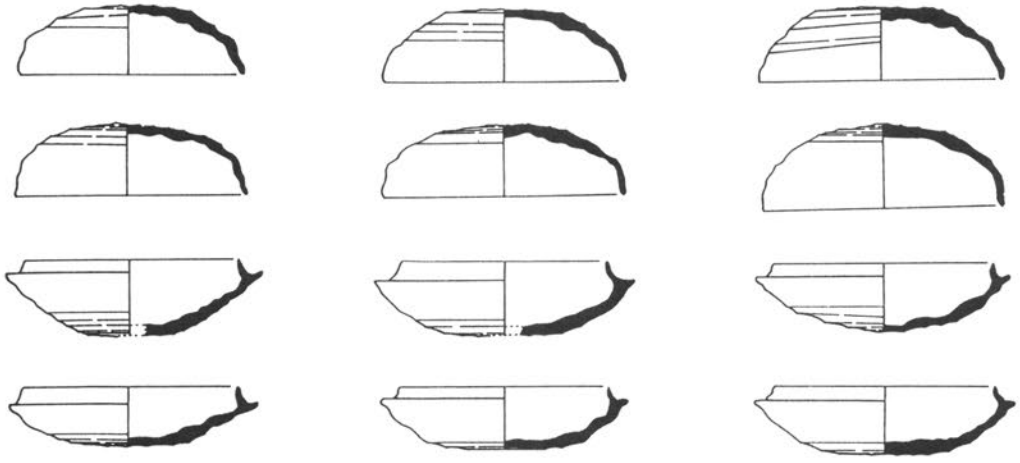
陶邑古窯跡群陶器山５－Ⅲ号窯跡

宇治市隼上り３号窯跡

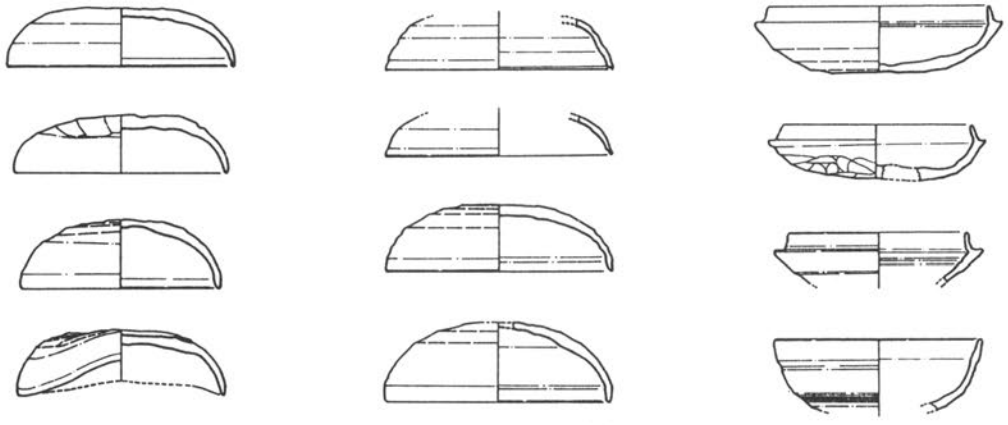
遠賀郡岡垣野間１号窯跡

小松市戸津六字ケ丘２号窯跡

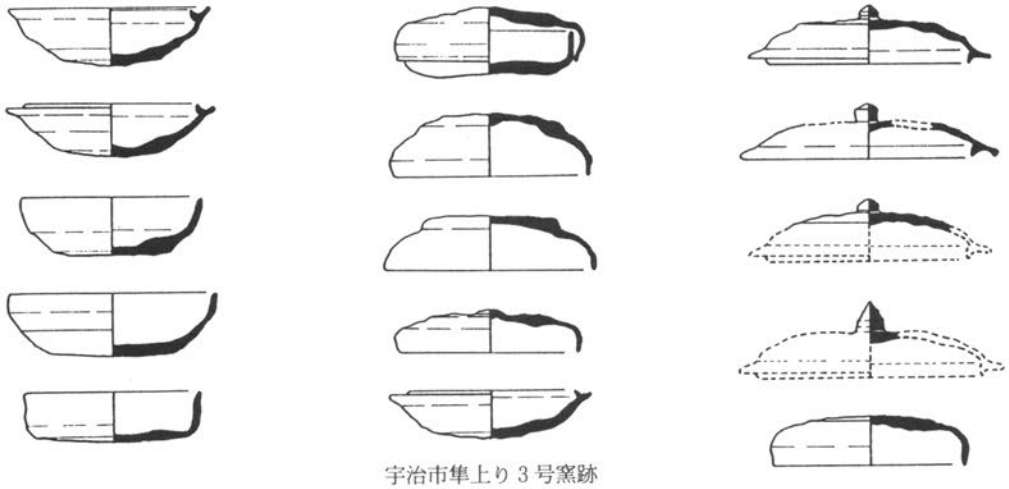
第72図　大和田窯跡と同様の溝を有する窯跡



陶邑古窯跡群陶器山５－Ⅲ号窯跡



遠賀郡岡垣野間１号窯跡



宇治市隼上り３号窯跡

0　20cm

第73図　大和田窯跡と同様の溝を有する窯跡出土遺物

れることや、独特の窯構造を有し、各地の窯との結びつきが想定できることから、房総地域独自の地方窯と考えるよりもある程度中央の影響をこうむって操業されていた可能性が認められるであろう。今後、各地で出土例が増えるにしたがって、大和田窯跡の系譜や性格がさらにあきらかになってくるものと思われる。

（註）菱田哲郎氏のご教示による。

（2）奈良・平安時代

奈良・平安時代で最もその実体があきらかになっている窯跡は市原市永田・不入窯跡である。上総地域の須恵器生産の中核となる永田・不入窯跡群を探ることによって自ずから他の窯跡群の位置づけも定まると考えられることから、ここでは同窯跡群の変遷および性格についてまず検討する。

永田・不入窯跡群を中心とした上総諸窯の変遷と年代観

本窯跡群の編年研究については、多くの論考が提出されており、またその性格についても議論の的となってきたが、遺物自体の具体的な技術・形態に関する記載がとぼしく、これが同窯跡の変遷を考えるときの分かりずらい点となっているといえる。そこで今回の変遷を考えるにあたっては、千葉県立房総風土記の丘に保管されている國士舘大学が発掘調査した資料と1992年に千葉県文化財センターが発掘調査した須恵器を再整理し、分類することが必要となり、借用し分類作業を行った。

遺物の変遷を考える視点でもっとも重視したものは須恵器そのものの製作技術であった。第2に重視した点は全体の形態および細部の形状であり、第3の点としては窯跡ごとの器種であった。今回、このように製作技術を第1と考えたのは、各窯跡の発掘が確認調査という限定的なもので、窯全体を調査したものが少なく、当然器種の欠落などの可能性がみられるからである。そして、破片でも識別可能で、窯ごとの流れをもっとも的確に追えるのがヘラ削り技法と判断したためである。

このような視点に立脚して考えた窯跡の時期は、石川窯跡も含めて大まかに4期に区分できた。

まず、変遷を述べるまえに第16・17表の説明をしておきたい。第16表はそれぞれの窯ごとの杯・椀類の底部外面の調整技法表である。この表では底部中央が残存しているものを数えている。不明となっているものは、底部外面にほかの製品が融着したものや自然釉で底部中央が不明となっているもの、焼きが悪く軟質で底部外面が摩耗して技法がわからなくなっているものである。全ヘラは底部外面全面回転ヘラ削り、外ヘラは外周回転ヘラ削り、糸切りは回転糸切り離し無調整の略である。なお、全面回転ヘラ削りのなかには全面手持ちヘラ削りのものが1個体含まれている。有台の杯・椀で糸切りと表示しているものについては、底部回転糸切り後

第16表　永田・不入窯跡杯・椀類技法分類表

		無台杯・椀				有台杯・椀				皿			
		全ヘラ	外ヘラ	糸切	不明	全ヘラ	外ヘラ	糸切	不明	全ヘラ	外ヘラ	糸切	不明
I 期	永田17	5				13							
II 期	永田5	181	16	1	18	89	7		7				
	〃 7	1				5							
	〃 8	1				1							
	不入4	26	1			19							
III 期	永田1	16	9		2	6	3	1	1				
	〃 2	6	3			4	1						
	〃 11	1											
	〃 13					2							
	〃 15	17	18			1	1						
	不入1	3	1		1	1							
	〃 2	28	15		1	10	1		1				
	〃 3	18	9	1	4	13	2	3	2				
IV 期	永田16	3	7	472				5					
	〃 18			45									
時期不明	永田3	1										2	
	〃 9	1	1										
	〃 12	1	1		1								
	〃 14	2				20						3	4

全ヘラは底部全面回転ヘラ削りのもの
外ヘラは底部外周回転ヘラ削りで中央部に回転糸切り痕が残存するもの
糸切は底部回転糸切り離し無調整のものであり、有台杯・椀については、底部回転糸切り後に底部にヘラ削りを施さずに高台を張り付けたと考えられるもの

にヘラ削りをせずにそのまま底部に高台を張り付け、その後に高台周辺のみにナデが施されたと考えられるものである。

なお、杯・椀の個体数の算定は、破片でも底部中央から外周部まで残存し、技法がわかるものについては1個体として数量化した。しかし、永田16・18号窯跡の底部回転糸切り離し無調整の杯については個体数が非常に多く、しかも類似したものが多いので1点ずつの個体を判別することは不可能に近いことから、杯底部の個体数を、完形、1/2、2/3、1/3、1/4の残存ごとに数えた。そして、それらを1/2＋1/2＝1個体、2/3＋1/3＝1個体というように底部が1/1になるまで合計した数をもって個体を算出した。

第17表は各窯別の器種構成表である。この表については市原市文化財センターの高橋康男氏が以前に市原市文化財センター研究紀要Ⅰ（文献71）のなかで千葉県立房総風土記の丘保管の永田・不入窯跡出土須恵器の器種組成表を作られていたので、これを参考としてさらに1992年に千葉県文化財センターが確認調査を行った窯の遺物を含め、時期別にした表である。なお、

第17表 永田・不入窯跡別器種構成表

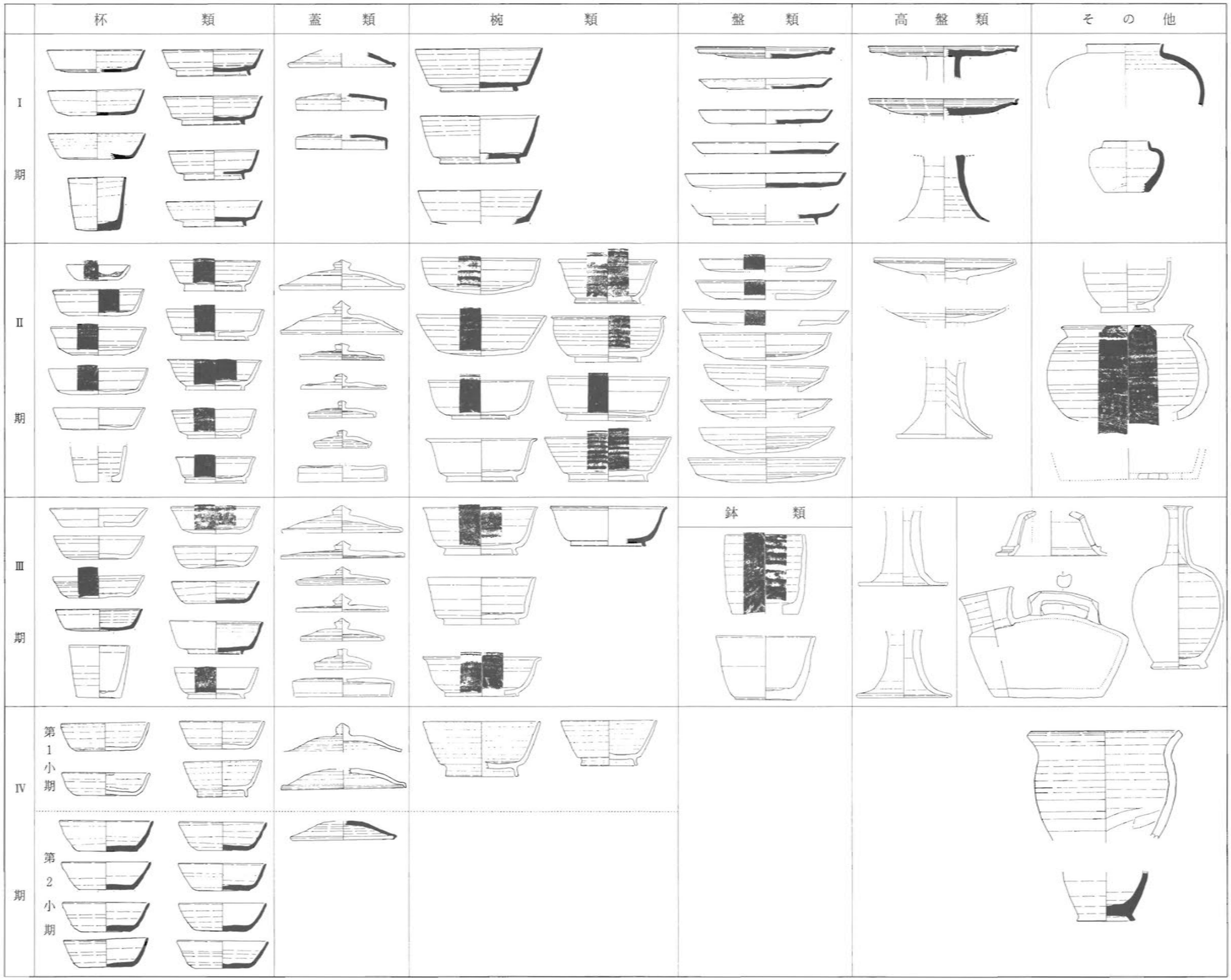
		台付杯 台付椀	無台杯 無台椀	杯	杯計	蓋	有台盤	無台盤	皿	高盤	壺・瓶	甕	杯J 鉢A・B	その他	小片	不明
Ⅰ 期	永田17	34	7	11	52	5	1	31		6	2	1	1			
Ⅱ 期	永田5	227	342	662	1231	204		48		10	43	21	2	甑・小蓋	111	14
	〃 7	3	2		5			1			3					1
	〃 8		1		1	1										
	不入4	43	59	54	156	3		4			3	1			6	
Ⅲ 期	永田1	18	33	37	88	11		1		1	8	5	1		4	3
	〃 2	8	9	1	18											
	〃 10		1		1	1							1			
	〃 11		1		1	1							1			
	〃 13	2			2	1										
	〃 15	14	106		120	23						3				10
	不入1	1	10	7	18	1		1				1			7	
	〃 2	23	58	97	178	22				10	27		2	小蓋		
	〃 3	56	38	136	230	63				4	30	6	2		11	28
Ⅳ 期	永田16	6	482		488	3					2	3				
	〃 18		45		45											
時期不明	永田3		1		1		1		2		2			横瓶		
	〃 4															
	〃 6					1										
	〃 9		2		2											
	〃 12		2		2											
	〃 14	38	4	38	80	57	8		13	16	9					

永田5号窯跡については高橋氏が分類した時点で未了なのもわずかに存在したので、これをたした数字となっている。また、永田11号窯跡についても千葉県立房総風土記の丘保管のなかに認められたので追加した。そして今回作成した表では、皿となっていたものを、さらに有台盤・無台盤・皿に細分した。杯J、鉢A・Bはコップ形のものであり、いずれも高橋氏の分類では鉢となっていたものである。個体数の算出については16・18号窯跡については上記のように底部の破片を1/1になるまで合算した数値である。

変遷（第74図）

第Ⅰ期 永田17号窯跡を標式とする。

この時期の技法的な特徴としては、杯の底部切り離し技法にヘラ切りが存在することが挙げられる。従来、永田・不入窯跡の杯類の底部切り離し技法は糸切りが採用されたものとしていたが、初期にはヘラ切りが重要な位置を占めていることが明確となった。また、第16表からもわかるように杯類の底部外面の調整はすべて全面回転ヘラ削りが施されており、全体的に薄手で端正な作りとなっている。



第74図　永田・不入、石川窯跡須恵器変遷（案）

口径14cm前後で高台付杯ＩＡおよび盤Ａ～Ｄを主体とした生産がなされ、杯よりも高台付杯が多い時期である。また、高盤Ａやコップ形の杯ＩＪ、高台付椀ＩＡなどの供膳形態の器種が多様な時期であり、杯類の端部は金属器な鋭さを意識して作られている。なお、盤については同一形態・技法のなかでの法量分化が窺える。これらの盤・高盤類は上総地域の一般集落跡からの出土がまれで、杯類も端正なつくりであり、官衙など特定の場所に供給されていた可能性がみられる。

この時期のものと考えられるものは窯体内の資料では17号窯跡のみである。

年代観については、その製品が暦年代と直接結びつく資料は皆無であり、実年代の想定は困難である。とくにＩ期については、消費遺跡からの出土が極めてまれであり、時期決定が非常に難しいが、Ｉ期の器種構成をみると・杯・高台付杯・高台付椀・盤・高盤など供膳形態の器種が豊富であること、盤は同一形態・技法での法量分化の傾向がみられることから、平城Ⅲ期の土器様相に近いものが読み取れる。不確実ながら８世紀第２四半世紀を中心とする時期に比定しておきたい。

第Ⅱ期　永田５号窯跡を標式とする。

杯についてはヘラ切り技法のものがわずかに認められるが、切り離しの大半は回転糸切り技法となっている。杯の底部調整は全面回転ヘラ削り以外に、わずかに外周回転ヘラ削りのものが出土する。無台の杯と高台付杯の出土比率はわずかに無台のものが多くなっている。盤の出土はみられるがＩ期よりも少なくなっている。器種的はＩ期に引き続いて多種である。

本期に含まれる窯跡は永田５・７・８号窯跡、不入４号窯跡である。

この時期から、一般の集落跡にも製品がみられるようになる。８世紀第３四半世紀前半を中心とする時期に比定される。

第Ⅲ期　永田15号・不入２号窯跡を標式とする。

杯の底部切り離し技法は回転糸切りのみになり、底部調整は全面回転ヘラ削り技法と外周回転ヘラ削り技法との比率が２対１もしくは１対１程度となり、底部中央に回転糸切り痕が残存するものが多くなる時期である。杯類は無台の杯が多く出土するようになり、口径12～13cm前後の杯ＩＣが主体を占める。高盤は出土するが小型化し、盤はほとんどみられなくなり、供膳形態の器種が減少する。

上総地域の集落にも一般的に製品が供給される時期の遺物であるが、窯によっては水瓶・平瓶・円面硯などの特殊なものが焼成された時期でもある。

本期に含まれる窯跡は永田１・２・13・15号窯跡、不入２・３号窯跡であり、出土点数が少なくて判然としないが永田11号窯跡及び不入１号窯跡も本期に含まれると考えられる。

８世紀第３四半世紀後半を中心とする時期と考えられる。

第Ⅳ期

Ⅳ期は2時期に細分できる。

第1小期 石川窯跡1号窯跡および灰原出土遺物を標識とする。

主体となる杯に底部回転糸切り離し無調整のものがみられるようになる時期である。

回転糸切り離し無調整と全面または外周に回転ヘラ削りが施されるものの比率は6対4程度であり、杯・椀類はⅢ期よりも小振りとなり、器高が高くなっている。また、Ⅲ期よりも器種がさらに減少し、杯ⅣⅠ・ⅡⅠを主体として、杯ⅠⅠ・ⅢⅠ・ⅠG・ⅣG、蓋A、高台付杯ⅠF・ⅡF、高台付椀ⅠF・ⅡF・ⅠG・ⅡGがあり、わずかに壺、甕Cなどがみられる程度となる。

第2小期 永田16・18号窯跡を標識とする。

杯の底部は大部分のものが回転糸切り離し無調整になる時期であり、杯ⅣⅠを主体とし、わずかに杯ⅠⅠ・ⅡⅠ、高台付杯ⅡFや壺が焼成されている。

Ⅳ期については、上総地域の9世紀代のロクロ土師器との関係から9世紀初頭前後に比定しておきたい。なお、Ⅲ期とⅣ期のあいだにはかなりの技法・形態差が認められる。

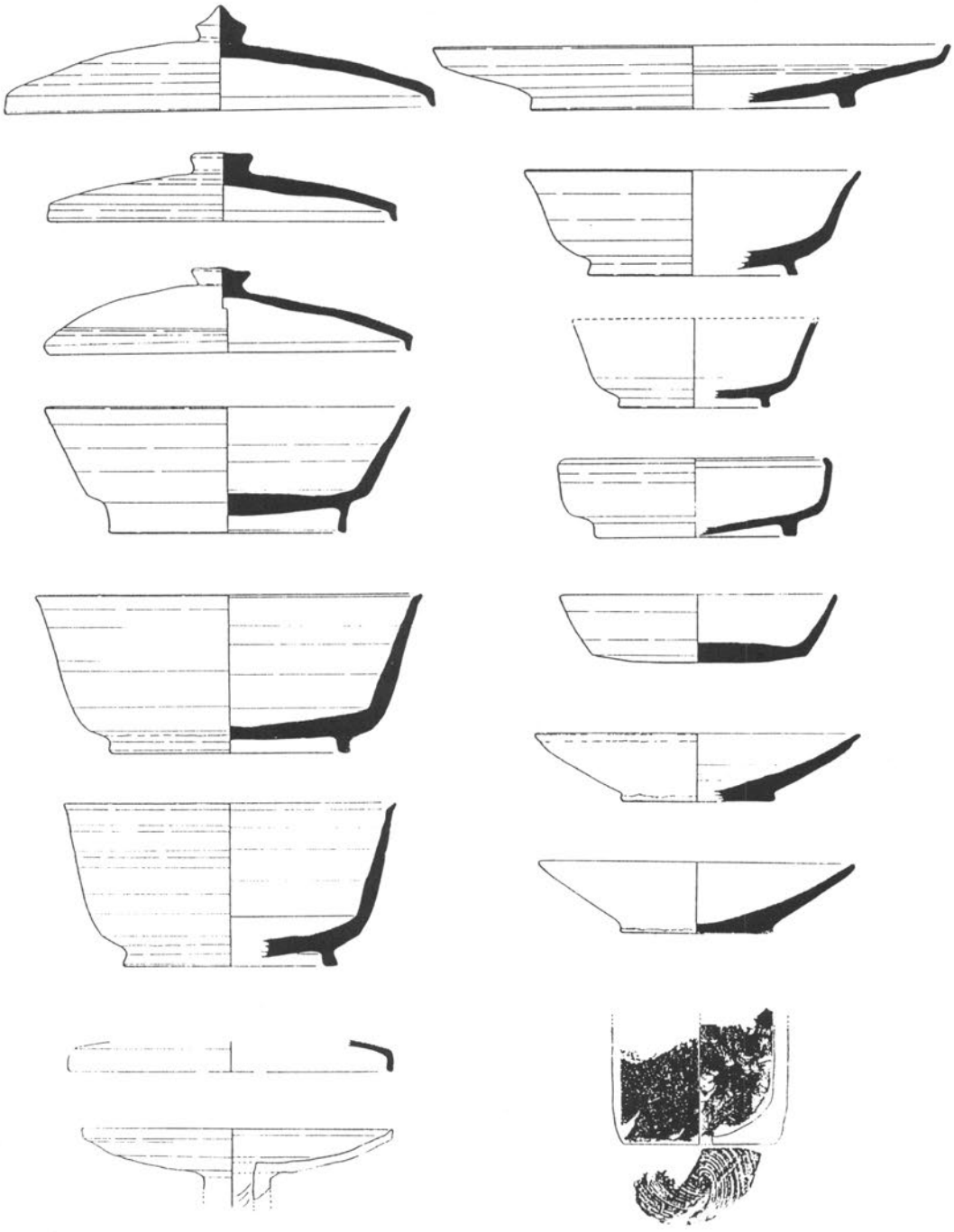
以上、永田・不入窯跡、石川窯跡の製品を4期に区分したが、これ以外に永田・不入窯跡については時期不明の窯跡がかなり存在することになってしまった。時期不明とした永田3・4・6・9・12・14号のうち、永田4・6・9・12号については遺物量が非常に少ないうえに技法等も不明瞭であり、総合的な判断ができなかったものである。この中であえて時期を当てはめるならば、永田9号窯跡については遺物の法量などからⅡ期の範疇に入る可能性があり、永田12号窯跡についてはⅡ・Ⅲ期のいずれかのものであろう。

永田3・14号窯跡については糸切り離し無調整の皿、角形の高台の高台付盤Aなど、ほかの窯跡にみられない器種が存在することや主体となる高台付杯ⅠDがほかの窯にみられないものであり、永田17号→5号→15号→16・18号窯跡と変遷する系譜とは異なるものという認識が強いことからここでは不明として扱うことにした。

この中で永田14号窯跡（第75図）の製品の古い要素を挙げるとすれば、高台付杯ⅠDの口径が14cm台と大型であり、杯類に底部全面回転ヘラ削り調整がなされるものが多いこと、杯と比較して高台付杯の出土比率が多いことが挙げられる。

新しい要素としては高台付杯ⅠDが17号窯跡の14cm台の高台付杯ⅠAと比較するとかなり弛れた観があり、これは両窯の高台付椀を比較しても同様な傾向が窺われる。そして、皿・杯などにみられる底部切り離し技法に回転糸切り技法が採用されていること。14号窯跡のコップ形の杯Jは回転糸切り離し無調整であり、技法的に簡略化されたものであることが挙げられる。

これらの要素を勘案すると17号窯跡よりも新しくなる可能性が強いであろう。しかしながら、なお言及すれば、17号窯跡の製品は器厚が薄く、次の5号の段階には厚手のものに変容してい



第75図　永田14号窯跡出土遺物

るのにもかかわらず、14号窯跡の製品は非常に器厚が薄く、古い要素となり得る可能性があることなど疑問点が多いのも事実である。今回の変遷では杯類の底部切り離し技法がヘラ切りから糸切りに変容したという考え方を重視して、永田３・14号窯跡についてはII期に並行する可能性を指摘するにとどめたい。

さて、永田・不入窯跡の窯跡の配置状況を変遷順にスクリーントーンで表したのが第76・77図である。第76図は永田窯跡の中核をなす部分の図であり、第６図（永田・不入窯跡確認トレンチ配置図）のＦⅡ～ＨⅡグリッド部分である。120mの範囲に17基の窯跡が群集しており、ほかに焼土遺構やこれらの窯跡以外の灰原の存在を加えると、この部分だけでも20基以上の窯跡が存在すると考えられる。５～10mに１基の割合で窯跡がみられ、非常に集中していることがわかる。

この区域ではⅠ期の窯は検出されておらず、Ⅱ期の窯が区域中央部分に３基並列でみられ、これを挟むように３基の窯が展開する。そして、最も西側までⅢ期の窯がみられ、西寄りの部分にⅣ期の窯が２基並んで検出されている。この配置状況を考えると、５・８・７号窯跡から東と西にしだいに窯跡が広がっていったことが看取できる。そして、西・東部分ともにさらに窯跡群が広がる可能性が認められる。

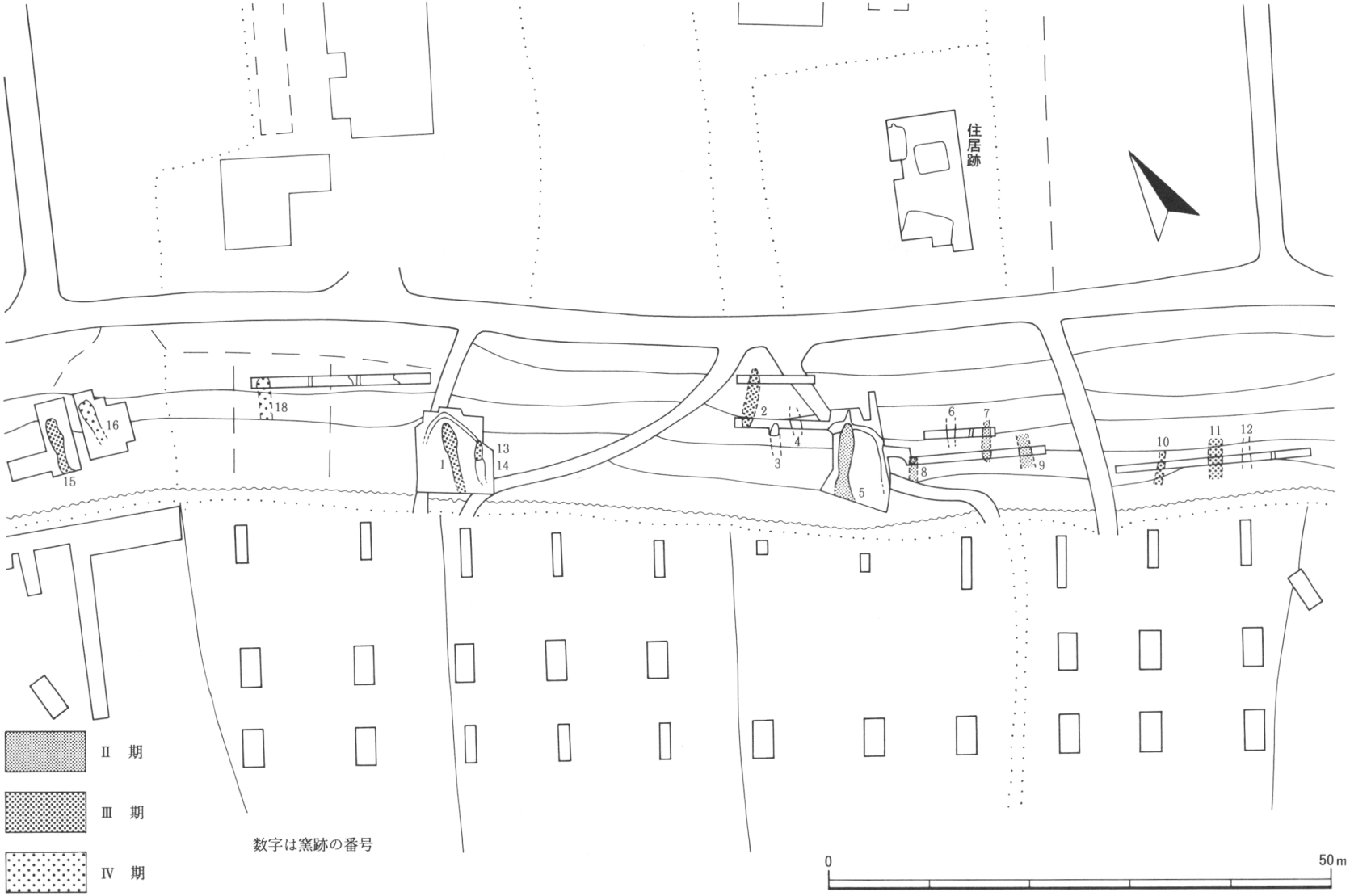
第77図は第６図のＤⅢ・ＤⅣグリッドの拡大図である。北側斜面には４基の窯がみられ（不入窯跡）、南側斜面（永田窯跡側）には１基の窯が存在する。南側斜面からⅠ期の窯が検出されており、さらにその東側に同じくⅠ期と考えられる別の窯の灰原とⅢ期の所産の灰原が検出されており、３基の窯跡の存在が想定できる。

北側斜面については、Ⅱ期の窯１基とⅢ期の窯３基がみられるほかに、水田面の確認グリッドから底部回転糸切り離し無調整の杯ⅣⅠが出土しており、Ⅳ期の窯の存在が考えられる。この区域にはⅠ期～Ⅳ期までの窯跡の存在を想定でき、非常に興味深い。この地点からは全部で８基以上の窯がある可能性が認められる。

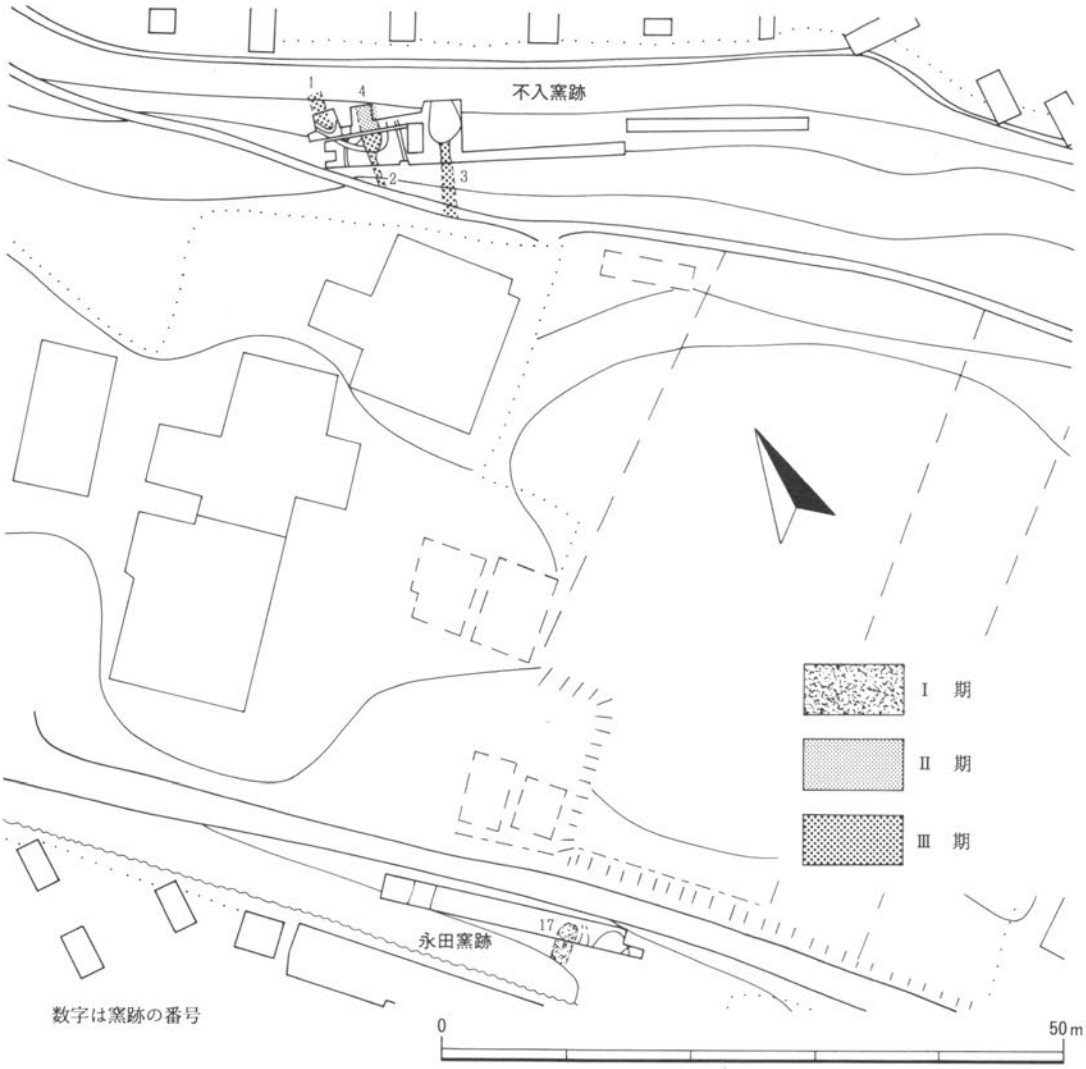
ＦⅡ～ＨⅡグリッドとＤⅢ・ＤⅣグリッドの窯跡群は260m以上離れている。両地点の窯跡の稠密さを考えると、同じような地形にもかかわらず窯があいだの区域からなぜ検出されないのか不思議である。水田面の灰原確認調査では灰原と考えられるものが検出されていないが、さらに斜面上面にトレンチを設定して有無を確認することも必要であろう。

なお、今回の永田・不入窯跡の再整理で注目されるのは永田５号窯跡３層から削り出し高台と考えられる椀の底部が１点検出されたことである。第78図の１（図版７－30）が削り出し高台の椀であるが、高台部は低いながら幅の広いしっかりした作りのものである。

削り出し高台は須恵器では非常にまれな技法であるが、いくつかの地域で認められる。第78図２～13は東海地域および関東地域の削り出し高台を有する須恵器を地域ごとに並べたものである。２は群馬県の保渡田遺跡（文献58）出土の高台付杯で、僅かに高台を削り出しているものであり、７世紀末から８世紀初頭にかけての遺物である。群馬県は８世紀前半の削り出し高台の出土例が比較的多く認められ、埼玉県北部にも群馬県産と考えられるものがいくつか認められる。これらの地域のものは、口縁部が直線的に外反しながら立ち上がり、高台の削り出しは非常にわずかな範囲となっているのが特徴である。３・４は栃木県佐野市北山窯跡（文献



第76図　永田窯跡FⅡ～HⅡグリッド時期別窯跡分布図

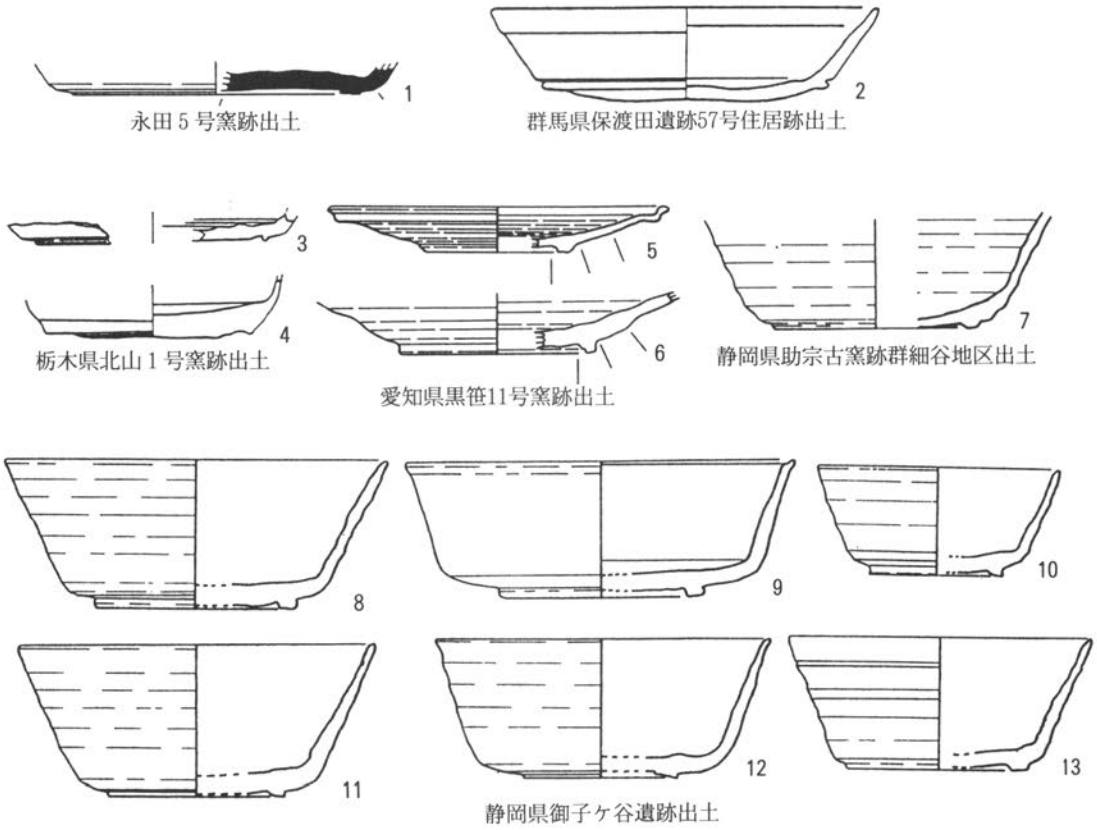


第77図　永田・不入窯跡DⅢ・DⅣグリッド時期別窯跡分布図

19）出土の高台付杯であり、栃木県で公表された資料としてはこの2例のみである。北山窯跡で出土したほかの高台付杯は張り付け高台であり、この2例は極めて例外的なものである。この例外的という点で永田・不入窯跡の削り出し高台のあり方と類似しており興味深いが、これも高台の削り出しはわずかで、幅も狭いものである。時期は8世紀前半と考えられる。

5・6は愛知県猿投山窯跡群の黒笹11号窯跡（文献94）から出土した高台付盤である。この盤も猿投山窯跡群の須恵器の中では例外的なものである。削り出しの幅は上記のものと比較して大きい。底部中央に回転糸切り離し痕跡を残すものもみられる。時期は9世紀初頭前後のものと考えられる。

7は静岡県藤枝市助宗窯跡（文献84）出土の高台付椀であり、高台は比較的幅が広く削り出



第78図　削り出し高台を有する須恵器

されている。８～13は藤枝市御子ケ谷遺跡（文献36）出土の高台付杯および高台付椀であり、これらは比較的高台部を幅広く削り出している。高台の高さは１～４㎜で、幅は５～９㎜である。この御子ケ谷遺跡は志太郡衙跡と考えられている遺跡であり、助宗窯跡からは４㎞の距離にある。この遺跡で出土している須恵器の大部分は助宗窯跡の製品であり、この削り出し高台の杯・椀も同窯跡の製品と考えられている。

このように周辺地域の削り出し高台は北関東では削りの幅が非常に狭く、その盛行する時期は８世紀前半であり、東海地域のものは削り出しの幅が広く、時期は９世紀初頭～前半にかけてのものである。

永田５号窯跡出土の製品は８世紀第３四半世紀の時期のものと考えられ、両者の時期とは異なるものである。しかしながら、形態・技法という観点でみていけば東海地域のものと類似点がみいだせることは明白であろう。とくに藤枝市の助宗窯跡の高台付椀と永田５号窯と高台付椀は削り出し高台の幅が広く、非常に類似している。あるいはこの助宗窯跡の周辺の地域でさらに８世紀中葉まで削り出し高台の技法が遡る窯があるのではないかとの想いに駆られるが、うがちすぎであろうか。いずれにしても、削り出し技法は今後永田・不入窯跡の出自を考える

ときには避けては通れない問題となろう。

さて、第Ⅱ章でも触れたように上総地域の石川窯跡・上名主ケ谷窯跡については永田・不入窯跡の系譜上にあるものであり、それぞれ変遷に当てはめることが基本的に可能である。また、南河原坂窯跡群についても一部の窯跡の製品に永田・不入窯跡と同様な形態で底部回転糸切り離し技法を有するものが存在し、対比が可能である。

石川窯跡については永田・不入窯跡の変遷のところでも述べたようにⅣ期の第１小期を中心とする時期として捉えられる。上名主ケ谷窯跡については永田・不入窯跡にみられない器種として椀ＩＣ・ＩＤ・ⅢＥが挙げられ、技法的には杯・椀の底部調整に手持ちヘラ削りがなされるものが多いという点が異なるが、そのほかはほぼ永田・不入窯跡と同様な技法・形態のものが多い。上名主ケ谷窯跡は確認調査で極めて限られた部分の発掘であるためそれぞれの窯跡の製品の数量的裏付けが乏しいが、底部の調整技法から考えると底部前面回転ヘラ削りが多いが、外周のみをヘラ削りするものもある程度認められることから、Ⅱ期～Ⅲ期にかけてのものと考えられる。また、器種の中に無台の盤が認められないことからⅢ期にさらに限定される可能性があるが、本窯跡に永田・不入窯跡の器種構成がすべて無条件に当てはまると考えるのは危険であろう。全体の形状から考えるとⅡ期後半からⅢ期にかけての遺物としておきたい。

南河原坂窯跡は限られた資料であるために多くを語ることはできないが、県内の窯業生産を考える上で多くの問題を投げかけている。一つは上総国分寺創建瓦と同型式の瓦焼成と須恵器の焼成があげられる。１号窯Ⅱ次窯床面には平瓦が焼き台として使用されていたことから須恵器生産が瓦生産と同時あるいは後出したのかが問題となる。また、窖窯が瓦陶兼業であったのか、須恵器生産は窖窯、瓦生産は有牀式平窯として、それぞれ分離して生産されていたのであろうか。正式報告書が刊行された段階で改めて検討を要する問題である。さらに、瓦陶兼業となる南河原坂窯跡は工人の組織を考える上でも重要である。須恵器杯には永田・不入窯跡群資料と共通する技法の回転糸切りを採用した製品と下総・常陸産須恵器と共通する技法の回転ヘラ切りを採用した製品の両者が存在する。このことは須恵器工人の中に、系譜を異にする集団が存在していたことを示唆している。

操業開始の時期は須恵器生産が上総国分寺創建瓦の焼成と同時に開始されたのであるならば、その開窯時期は天平13年（741年）を遡らない。さらに、１号窯灰原出土遺物の永田・不入タイプの杯底部の調整からみると、底部全面に回転ヘラ削りを施すものと、中央に回転糸切り痕跡を残すものの両者が認められることから永田・不入第Ⅱ・Ⅲ期に操業が開始されたものと考えられる。

瓦生産がいつまで継続したかは不明であるが、須恵器生産は開窯以降継続しており高台付椀形土器の形態からみて９世紀中頃まで操業されていたことがうかがえる。

坂ノ越窯跡、下片岡窯跡ともに、その操業年代を検討するにはあまりに資料が不足している

が、前者では杯の切り離しに回転糸切りが採用されていることから南河原坂窯跡よりも後出するものと考えられ、9世紀中頃から後半にかけての年代が想定できる。

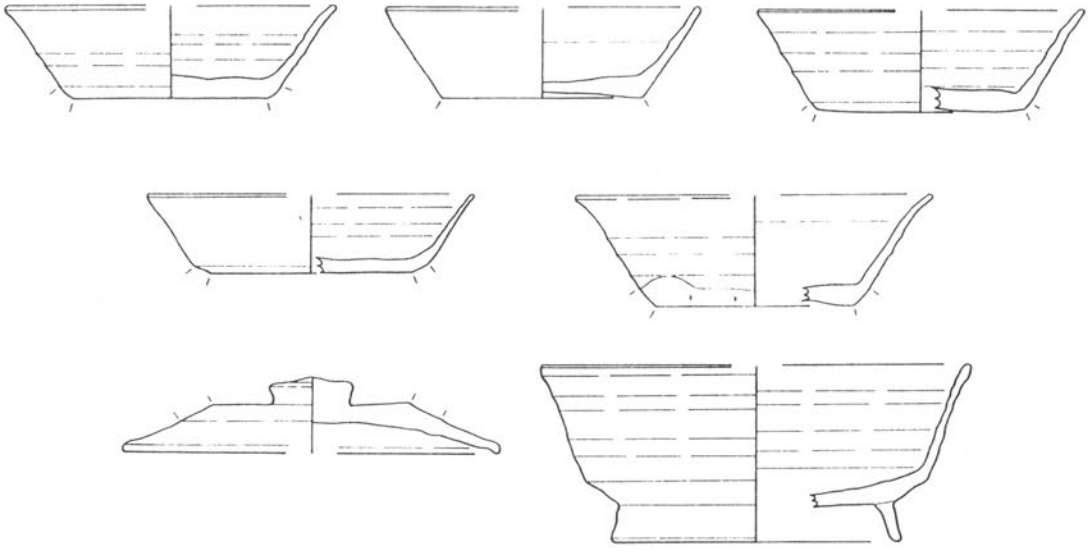
後者では中原窯杯M類、宇津志野窯杯D類に共通する形態の杯が認められることから9世紀前半代の操業と考えられる。

下総諸窯の変遷と年代観

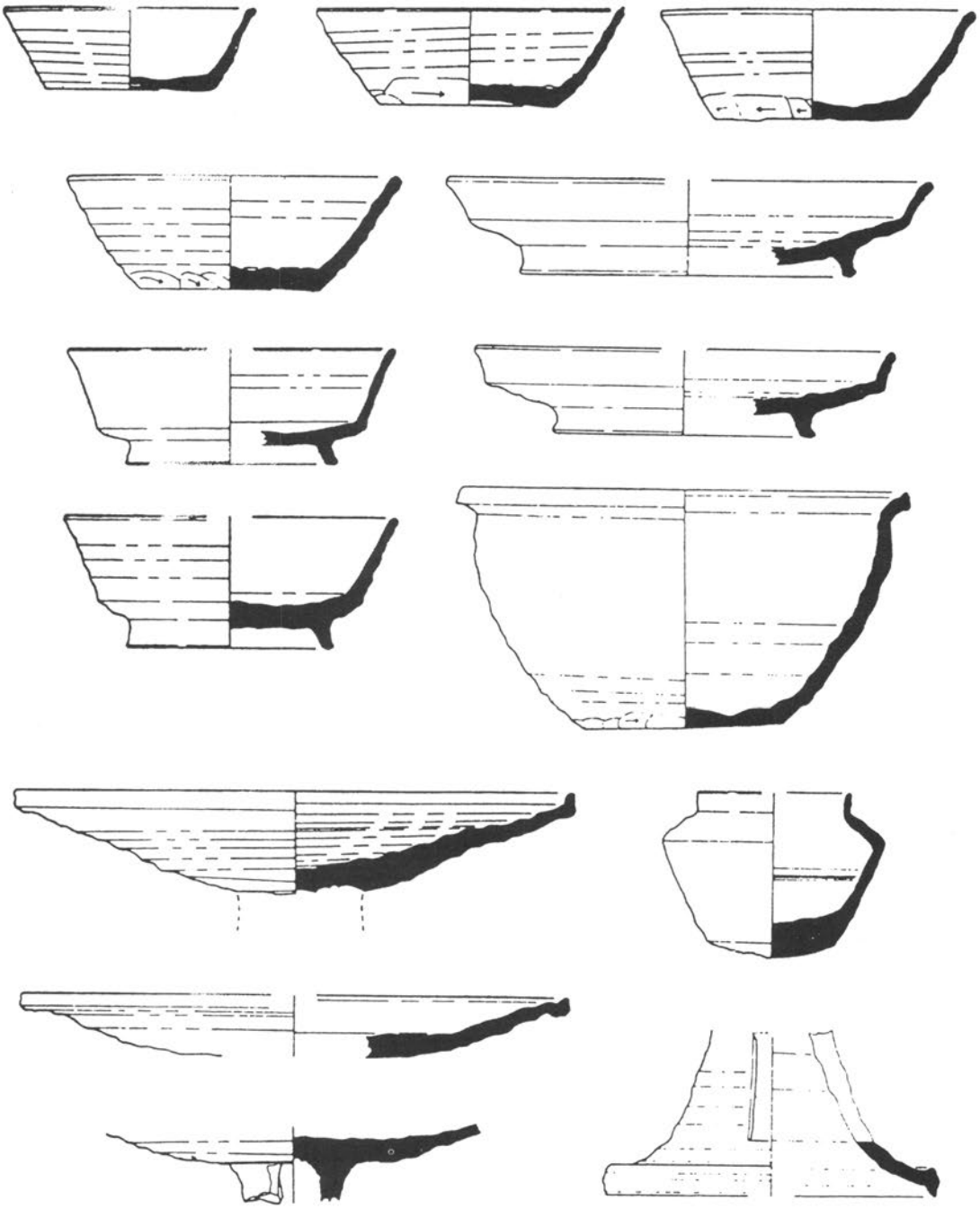
下総地域のなかで最も古く位置づけられるのは八辺窯であろう。杯・蓋・有台椀のかぎられた資料ではあるが、杯の口底径比は約1.5倍となり、有台椀は口径約19cmの大型のものである。蓋は口径約15cmで、偏平な擬宝珠状のつまみとなっている。これらの形状は新治窯跡群東城寺寄居前窯跡の資料のなかに類似性を求めることができる。東城寺寄居前窯跡の資料は表採品であるが、川井正一氏によれば少なくとも2時期に分けることが可能である（文献101）。これらはその古式に相当する杯b類、杯蓋b類、高台付杯c類に酷似したものである（第79図）。

実年代については、「勝宝」（天平勝宝年間749～756年）の年紀のある漆紙文書を共伴した鹿の子C遺跡146号工房跡出土須恵器（第80図）が、東城寺寄居前窯跡の古式段階の製品の法量と近いことから、8世紀末の年代を与えている。黒澤彰哉氏はこの鹿の子C遺跡146号工房跡の漆紙文書を反故にするまでの時間幅をさほど考える必要はないとして、8世紀第3四半期を中心として第4四半期におよぶまでの年代を考えている（文献44）。

下総の集落遺跡出土須恵器との対比を『房総における歴史時代土器の研究』（文献67）の成果を援用してみるならば、杯の口底径比1.5前後のものは8世紀中葉の年代を与えるものが多く、千葉市高沢遺跡ではⅣ期8世紀第3四半期、八千代市北海道遺跡のⅠ期8世紀中葉、成田



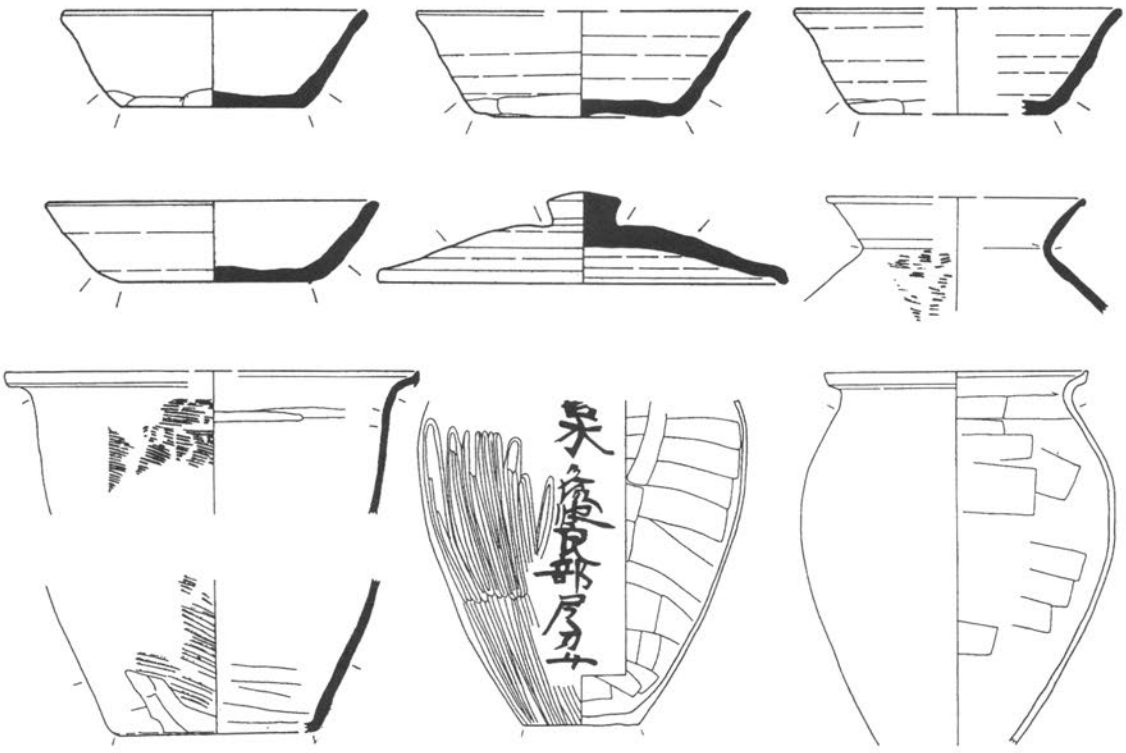
第79図　東城寺寄居窯跡出土遺物



第80図　鹿の子C遺跡146号住居跡出土遺物

市宗吾西鷺山遺跡のⅣ期、印旛郡栄町大畑・向台遺跡のⅦ期８世紀第３四半期前半、我孫子市新木東台遺跡Ⅲｂ期８世紀第３四半期が該当するであろう。

いずれも下総地域の実年代の根拠としてとりあげられる印西町木下別所廃寺３号住居跡出土



第81図　新木東台遺跡013Ａ住居跡出土遺物

の平城Ⅲの畿内産土師器を伴う一括遺物や、「久須波良部」の墨書をともなった我孫子市新木東台遺跡013Ａ住居跡出土の一括遺物（第81図）との類似性を指摘できる。

木下別所廃寺３号住居跡出土の須恵器杯は新木東台遺跡013Ａ住居跡出土須恵器杯に比して器高のやや低いものが多く、若干古い様相が認めら、平城Ⅲの年代観（文献95）から８世紀第２四半期を中心としたものと考えられる。

また、『続日本紀』天平宝字元年（757年）三月条に「藤原部」を「久須波良部」となす改姓勅がだされており、後者の土器群の上限年代を示している。

いずれにしろ、八辺窯の資料は量的に少ないためにこれ以上の言及はできないが、以上の成果を用いて８世紀第３四半期に位置づけること可能であろう。

次に吉川窯の操業が始まる。法量からみて中原・宇津志野・下片岡各窯製品との大きな違いは口底径比が２倍をこえるものがないことと、底部調整には回転ヘラ削りが顕著であることがあげられる。さらに細かくみるならば，Ｂ・Ｅ類のような口底径比が1.5～1.7、径高指数29以下の偏平な印象を与える一群とＡ・Ｃ・Ｄ類のような径高指数が30以上となる深みのタイプとに分けられる。実年代としては前段階の八辺窯と後続する中原窯との関係から８世紀第４四半期を中心としたものと考えたい。

５～８基の窯の存在が予想される中原窯では口径が底径の1.8倍前後のものと２倍前後のも

のがある。器高も4cmを大きくこえるものとそれ以下のものとがある。体部下端は回転ヘラ削りを施すものが多い。また少量ではあるが無高台の皿も焼成されている。以上のことから中原窯跡はある程度の時間幅を持って操業したものと考えられ、吉川窯に後続して9世紀初頭から9世紀第2四半期の製品と考えたい。

窯跡出土資料ではこのような年代観を持っているが、集落出土資料からはもう少し幅広い年代が考えられる。中原窯製品の杯底部には重ね焼きの痕跡が認められるものがある。この痕跡をとどめた製品は東金市久我台遺跡の奈良・平安時代Ⅳ期（8世紀第4四半期から9世紀初頭）に出現し、奈良・平安時代Ⅵ期（9世紀後半から10世紀初頭）まで認められるという（文献77)。久我台遺跡出土のこれらの杯がすべて中原窯の製品と断定することは現段階ではできないが、中原窯では調査した窯以外にも数基の窯の存在が予想されることから、9世紀全代にわたっての操業も考慮しなければならないかも知れない。

近接する宇津志野窯では3基の窯が予想される。杯類の法量は中原窯とほとんど同じであるが、体部下端に手持ちヘラ削りを施すものが主体となっており、技法的に新しい要素が認められる。このことから中原窯の操業時期と一部重なり9世紀第2四半期から第3四半期にかけての操業と考えられる。

八辺窯・吉川窯・中原窯・宇津志野窯の下総諸窯の操業年代観については積極的な根拠を持ち合わせていないために問題も残るが、今後、消費遺跡出土須恵器の産地推定を行いながら改めて実年代の検討を行うことを課題としておきたい。

2．須恵器生産の特徴と問題点

（1）県内須恵器窯跡の類型化と生産体制

第Ⅱ章でみた奈良・平安時代の県内須恵器窯跡について、窯数、操業期間、焼成品の器種構成に顕著な差が見いだせる。いくつかの特徴によって類型化が可能である。ここで整理しながらもう一度見直すこととする。

A類型：10基以上の窯跡から構成された、長期の操業となるもので、供膳具主体の生産を行う。
　　永田・不入窯跡

B類型：10基未満の窯跡からなり、短期間の操業で、供膳具と瓦の生産を主体とするもの。
　　上名主ヶ谷窯跡

C類型：10基以上の窯跡からなり、長期の操業となり、供膳・貯蔵・煮沸具と瓦の生産を行う。
　　南河原坂窯跡

D類型：10基未満の窯跡からなり、短期間の操業で、供膳具主体の生産を行う。
　　石川窯跡・坂ノ越窯跡

E類型：単独の窯跡からなり、限られた操業期間で、供膳・貯蔵・煮沸具主体の生産を行う。

八辺窯跡・吉川窯跡

F類型：10基未満の窯跡からなり、供膳・貯蔵・煮沸具主体の生産を行う。操業期間はE類型よりも長期となる。

中原窯跡・宇津志野窯跡

以上の6類型に該当しなかったものに下片岡窯跡がある。これは須恵器窯の存在はあきらかでありながらも、焼成器種や窯体数について判然としないためである。しかしながら、大規模な操業は考えられず、おそらくE・F類型のどちらかに属するとおもわれる。

A類型となる永田・不入窯跡では操業期間の中でその供給先の対象が変化していることが、焼成器種の変化からうかがえる。

永田・不入窯跡変遷の第Ⅰ期・第Ⅱ期では一般集落にほとんど供給されることのない盤と高台付杯を主体とした生産がなされている。特に第Ⅰ期の製品はきわめて良質なものであり、国府などの官衙への供給を目的としていたものと考えられる。第Ⅲ期以降、一般集落への供給が主体となりながら、水瓶、平瓶、円面硯等の特殊な製品も焼成されている。おそらく、国分寺などへの供給も同時に行っていたものであろう。第Ⅳ期になると杯を主体とした生産になり、一般集落への供給を目指したものへと変化している。

8世紀前半に開窯する地方窯は、地方官衙の成立による須恵器需要の増大が要因になると考えられ（文献52)、永田・不入窯の開窯もこれに該当するであろう。そして焼成器種の変化は律令体制の確立・弛緩という歴史の流れの呼応したものといえよう。

B類型となる上名主ヶ谷窯跡では短期間の中で須恵器専業・瓦陶兼業・瓦専業焼成という変化が認められる。瓦には軒先瓦がみられず、寺院補修瓦として生産された可能性が指摘されているが、熨斗瓦や隅切瓦などの道具瓦も多く出土していることから、計画的生産であったことがうかがえる。また須恵器と瓦が、それほどの時間差なく焼成されていることから、瓦生産にあたっては瓦工人指導のもとで須恵器工人が再編されたことも予想されるが、はたして実体はどうであったのだろうか。

C類型とした南河原坂窯については、何度も繰り返して述べたようにその詳細について不明な部分が現段階では多すぎる。B類型のように須恵器生産の中に特需的な瓦生産が導入されたものか、須恵器生産と瓦生産が同時に開始され、瓦の需要が低下した段階で、新たに須恵器工人の再編がなされたのか、また須恵器工人と土師器工人が再編されたものなのか今後の検討を要する課題である。

以上の3類型はすべて上総地域に認められるもので、房総地域においては大規模操業となるA・C類型と、須恵器のみならず瓦の生産も行うというB・C類型はいずれも強力な管掌者の存在なくしては成立し得ないものと考えられる。おそらく開窯にあたって郡司層が窯業生産の掌握主体となっていたものと思われる。さらに、国分寺所用瓦や国府供給の須恵器生産を認め

るならば服部敬史氏が考えるように郡司層を直接の管理者としながらも、国衙体制とも密接に結びついていた可能性が窺える（文献73）。

D・E・F類型はすべて8世紀後半以降に開窯するもので，当初から一般集落にむけた商品としての須恵器生産と考えられる。

D類型は核となる窯跡群に近接して形成された窯跡で、永田・不入窯に対する石川窯、南河原坂窯に対する坂ノ越窯跡という関係でなりたっており、核となる窯跡群の操業終末期の段階に開窯しているが、小規模な生産で終焉を迎えるものである。

E類型は八辺窯・吉川窯のように1基の窯だけでの生産で、きわめて短期間の操業となるものである。成整形技法からみると、製品としてはけっして稚拙なものではなく、なぜこのような短期間の操業で生産を停止したのか考えねばならない。

F類型は中原窯・宇津志野窯のように、近接した地域である程度のまとまりがあり長期の操業が考えられるものである。ただし、窯単位で編年が組み立てられる程の資料はなくその操業期間については確定しがたい。

両総地域における須恵器生産は以上の6類型が考えられ、上総地域ではA・C類型の核となる生産地域がまず形成され、その派生としてB・D類型が成立したものと考えられる。下総地域ではE・F類型としたもののように、房総の須恵器生産の中で後発的な開窯となっている。まさに、国ごとの地域差とも言うべき生産体制の違いが看取できる。

ここで奈良・平安時代の窯業生産体制について考えてみることにする。

上総地域に認められる特徴として須恵器窯跡内での瓦の焼成（瓦陶兼業）があげられる。武蔵の南比企窯跡群や末野窯跡群では国分寺瓦の生産にあたって須恵器工人が主としてたずさわっていたと考えられている（文献103）。しかしながら千葉県内で瓦陶兼業となっている上名主ヶ谷窯で須恵器工人が瓦の生産に関与していたことを示す積極的な根拠は何もなく現象として須恵器生産の中に瓦生産が認められるだけである。また、南河原坂窯では瓦焼成専用の窯も存在している。工人の問題を考えるならば、武蔵の諸窯と同様に瓦生産にあたって須恵器工人の参画を考えることが妥当とも思えるが、技術的な特徴に須恵器本来の技術が導入されているものか丹念に検証しなければならないであろう。

このような技術系譜について再考をうながすものとして花谷浩氏の研究があげられる。藤原宮の瓦生産について検討を加えた花谷氏によれば、従来須恵器工人の瓦生産への参画の現れとしてとらえられていた粘土紐技法も、瓦工人本来の所有した技法であることの可能性を指摘している（文献104）。畿内における瓦生産体制の一例をもって、一地方窯の窯業生産を類推することには無理があるかもしれないが、何をもって須恵器工人の参画を見いだすのか改めて検証していくことも必要である。

瓦生産というきわめて目的的生産にあたっては房総の中では須恵器工人との組織の再編とい

う形をとらず、独立した組織として成立していたことも考慮していかなければならないであろう。なぜならば、房総における瓦生産のほとんどは瓦専業窯として成立していることがあげられ、特に国分寺造営段階では両総国分寺ともに至近距離に窯場を設置している（文献48）。この事実から、上総・下総・常陸の東海道諸国の国分寺造営段階の瓦生産は国司主導型の造瓦体制がとられていたと考えられている（文献79）。このようななかで瓦陶兼業となっている南河原坂窯の生産体制は異質にうつる。

単弁二十四葉蓮華文軒丸瓦の焼成は南河原坂窯跡の西約6.4kmに位置する市原市川焼台瓦窯にも認められる。ここは瓦専業窯であり、ロストル窯での焼成であることが明らかになっている（註）。操業時期については今後の検討を要するが、村田川水系でつながるこの二つの窯跡では南河原坂窯跡から川焼台瓦窯へという流れも考えられよう。このように考えるならば、瓦工人の組織は須恵器工人との交流を持ちながらも、おたがいに独立した組織として成立していたのではないかと考えられる。

では、須恵器生産体制はどのようなものであったのだろうか。粘土採掘から成整形、焼成に至るまでの専門技術を要する窯業生産では専門工人の存在が不可欠である。この工人層を管掌したのは郡司層であり、郡司層は生産のみならず須恵器の交易までも関わっていたことが考えられている（文献103）。他国と比して小規模生産となっている須恵器生産ではあるが、県内消費遺跡において広範囲にわたって、ある程度の供給が認められることは、生産の管掌者なくしては考えられない。ただし、その管掌者がすべて郡司層であったかどうかは断定しがたい。前述したように上総地域の須恵器窯は、比較的まとまった規模をとり、ある程度の長期操業も考えられるが、下総地域の窯跡では規模のきわめて小さな窯跡が操業されている。このような差を理解するには、郡司層だけを管掌者として想定してよいものであろうか。

須恵器の需要は地方官衙成立に伴うことはきわめて慨然性が高いと考えるが、それに伴い須恵器窯を開窯するか否かはそれぞれのおかれた地域性というものが強く反映していると考える。

千葉県北西部地域の奈良時代の集落遺跡では、須恵器の占有率はきわめて高いにもかかわらず、須恵器生産の痕跡は認められない。下総でこれまでに数多くの調査が行われながら須恵器窯跡が検出されないという事実は、下総では大規模な須恵器生産が行われなっかたことを示している。下総で8世紀前半段階の須恵器窯が操業されない背景として、原料となる粘土の適正や煮沸具を主体とした焼成器種の選択（文献68）という問題だけでなく、鬼怒川水系に存在する新治窯跡群の製品を主体とした常陸産の須恵器が容易に入手できることに関係している。このことは下総での須恵器生産地が、この鬼怒川水系からややはずれた地域であることからも類推できるであろう。そして、下総の須恵器窯では、従来から杯の切り離し技法からみて常陸との関係を指摘されている。下総産の須恵器杯底部はすべてヘラ切り離しとなっており、形態からみても茨城県南部の新治窯跡群との関係が考えられる。下総での搬入須恵器の大半がこの地

のものと考えられることから、下総における須恵器生産そのものも鬼怒川水系を媒介とした隣接国の須恵器工人が深く関与していたと考えられよう。

この常陸との関連は律令体制確立以前の古墳時代から認められるもので下総地域の歴史的背景が大きく関与しているものと思われる。その例としては6世紀頃から9世紀まで認められる「常総型甕」の分布と奈良・平安時代の常陸産須恵器の分布がほぼ重なることからもいえるのである。

県内における須恵器生産は、常陸産の須恵器が入手できるか否かによって決定される。そして下総では、一国一郡単位という律令的行政区分よりも歴史的背景の地域性という、非律令的地域性がみてとれるのである。下総にかぎっていえば、生産手段を掌握することよりも交易としての容易さに重きをおいたために須恵器生産が希弱となっていたのであろう。

(註) 1993年10月に確認調査が実施され、ロストル窯を検出している。

(2) ロクロ土師器と須恵器

房総におけるロクロ土師器は内外面赤彩ロクロ土師器という8世紀前半から認められるものの系譜から継承されたもので、武蔵における盤状杯とことなり、盤状杯と同様な偏平な形態から、口底径比の小さな箱型を呈した杯、口底径比の大きな杯へという、房総独自の発展形態が認められる。ロクロ土師器の底部切り離し技法は、ヘラ切りも認められるが、その多くは糸切りとなっている。

ロクロ土師器そのものの成立には須恵器との技術交流なくしては考えられないといわれている。しかしながら、すべてが須恵器製作技術だけからの導入によっているのであろうか。下総地域における須恵器生産は8世紀前半まで遡るものは認められない。しかも、下総の須恵器杯の底部切り離し技法は常陸地域と同様にヘラ切りとなっており、技術的な違いが明瞭にあらわれている。

糸切り技術の系譜として造瓦技術との関連を指摘する意見もあるが(文献92)、下総地域のなかで造瓦工人との交流を示す資料は認められない。現段階で糸切り技術の源流を指摘することはできないが、先にも述べた藤原宮の粘土紐技法が初めから瓦生産の技術の一つであった可能性を考えるならば、糸切りも窯業生産という大きな範疇の中で、個々に持ち得た技術の一つといえないだろうか。このような窯業生産共通の技術の中で瓦・須恵器・土師器の個々の製作工人が主として駆使する技術か、そうでないかの違いであるという理解の仕方はできないであろうか。これは、工人の組織を考える上で、これまでの多くの研究に対して後退するような考え方かもしれないが、すべての人的交流を否定するものではなく、今一度それぞれの窯業生産の中の技術体系を整理して考え直すことも必要であると認識したからである。

下総では8世紀後半段階できわめて小規模な須恵器生産が行われながらも、時間的に継続性

が認められない。その一方で、同時期に他地域よりも早くロクロ土師器が盛行し、9世紀代では両総地域で全盛期をむかえている。

この9世紀段階での須恵器生産は極めて限られたものとなり、9世紀中葉から後葉にかけて操業されるものは中原・宇津志野・下片岡・南河原坂・坂ノ越の千葉市に所在する窯跡だけである。

これらの須恵器窯で生産された製品は酸化焔焼成のものが多くロクロ土師器との識別すら困難なものとなっている。焼成にあたっては窖窯が使用されていることから須恵器工人が関与していたことは間違いないであろうが、ロクロ土師器が普遍的に使用されている9世紀段階で、あえて須恵器窯を開窯する中原・宇津志野・下片岡窯はどのような背景のもとに成立したのであろうか。

今の段階ではその明確な解答を提示することはできないが、それを探る手がかりの一つに房総における9世紀段階の生産須恵器の器種があげられよう。中原窯・宇津志野窯では、杯・皿の供膳器種の焼成も認められるが、生産の主体は甕・甑の煮沸形態と考えられる。この煮沸形態の生産にこそ9世紀段階での開窯する目的があったのではないだろうか。

ロクロ土師器の生産体制について、服部敬史氏は富豪層の関与を想定している（文献51）。これに対して、佐久間豊氏はロクロ技術の導入については郡司・富豪層の強力な関与がありながらも、流通機構に対しての関与については否定的であり、東国におけるロクロ土師器出現期の斉一性と、鬼高期の斉一性を考え合わせて、ロクロ土師器の供給システムについては変化がなかったと考えている（文献63）。

おそらくロクロ土師器生産は須恵器生産よりも更に狭い範囲での生産・供給体制がとられたものと考えられる。これを検証するためには、今回とりあげた須恵器生産の検討と同様な視点にたって、土師器生産の遺構・遺物の検討を加える必要があろう。そして、両者の比較により房総地域の須恵器生産の位置づけが、より鮮明に浮かびあがるものと思われる。

3．須恵器産地推定と胎土分析結果

第II章の「胎土分析試料の概要」のなかで、分析に提供した試料のうち消費遺跡出土須恵器（試料No137～188）については、今回の担当執筆者3名の合議によってあらかじめ、できる限りの産地を推定した。これについては杯類を対象にして、第II章「基礎試料」で記述した各窯跡資料の分類とともに胎土、色調から判断している。

県内産須恵器の産地推定では大きな地域として次の3地域に分けた。

市原市域産…　市原市永田・不入窯を代表とするもので、同市石川窯、木更津市上名主ヶ谷窯の製品も含んでいる。

胎土には白色針状物を少量含むものと、ほとんど含まないものがあり、白色

鉱物の細粒も少量混入している。永田・不入窯の変遷からみるとⅠ期としたものには胎土、色調ともにきわめて良好な製品が多く、東海地方の製品との識別が困難なものもある。Ⅱ・Ⅲ期では従来、典型的な永田・不入窯の製品として認識されているものであり、前段階よりも砂粒の混入が多くなっている。木更津市上名主ヶ谷窯も同じ段階の製品であり、識別が難しい。Ⅳ期ではさらに砂粒の混入が多くなり、器面のざらつきが顕著である。色調は灰白色から青灰色を呈する。

焼成は古式のものほど堅緻であり、時代が下がるとともに軟質になる。

千葉市域産… 中原窯、宇津志野窯、南河原坂窯を代表とするもので、市原市下片岡窯野製品も同一地域のものとみなした。

白色鉱物の細粒を多く含み、黒褐色や赤褐色のスコリア粒も混入している。白色針状物質をわずかに含むものがある。砂粒の混入が多いために全体に器面がざらつく。また、器面にひび割れ状の痕跡を残すものも多く存在する。色調は赤褐色、灰褐色のものが多く、黒褐色のものも認められる。焼成は全体に堅緻である。

なお、中原窯産の杯底部外面には焼成時の重ね焼き痕跡が色調の変化として現れており、◐状に残っているものも存在する。

印旛郡域産… 印旛郡域で明かな窯跡は吉川窯だけであるため、吉川産と呼称してもよいかもしれない。

白色鉱物の細粒を含み、赤褐色のスコリアが混入するものが多い。千葉市域産と同様に、砂粒の混入が多いために器面がざらついている。色調は灰褐色、赤褐色、橙褐色、黒褐色などである。焼成は比較的堅緻である。

上記の千葉市域、印旛郡域産の須恵器は肉眼観察による胎土の差はさほど明瞭ではない。言葉で表現しても、その微妙な差は明らかにしがたく、まさに経験的勘ともいうような曖昧ないいかたにならざるを得ない。また、「在地産」としたものは全体に砂粒の混入が多く、白色鉱物の細粒も混入しているもので、県内の上記3地域に属さないものである。このため在地産というには問題が残るが、武蔵や常陸にも類例を見ないために「在地産」の言葉を使用した。

県外産須恵器については武蔵産と常陸産Ⅰ～Ⅳを設定した。常陸産須恵器は県外産須恵器として千葉県内に最も多く搬入しているもので、胎土分析試料を分類したものではなく、県内消費遺跡の一括資料を対象として産地推定分類を設定した。このため分析試料には以下の産地推定地すべてが提供されているわけではない。

武蔵産 … ここで武蔵産としたものは北武蔵をいい、南比企・東金子・末野の3窯が該当するが、白色針状物を含むものが多く、南比企産といい換えても良いかもしれない。

胎土には白色針状物を多量に含むものが多く、長石、石英などの白色鉱物の細かな粒子も混入している。色調は青灰色から灰色で、焼成は堅緻である。

常陸産Ⅰ… 長石・石英の大きな粒子を多量に含み、雲母末も少量、白色針状物をわずかに含んでいる。色調は青灰色から灰褐色で、焼成堅緻なものが多い。

下野産須恵器にも長石・石英の大きな粒子を多量に含むものがあるので、すべてを常陸産として断定することはできないかもしれない。

常陸産Ⅱ… 雲母片を多く含み、長石・石英の大きな粒子の混入は少ない。色調は灰白色、灰色、灰褐色を呈するものが多く、全体に軟質な印象をうける。

常陸産Ⅲ… 雲母末を少量含み、長石・石英の大きな粒子はほとんど含まない。色調は灰色から灰白色を呈し、茨城産Ⅱ類同様全体に軟質な印象をうける。

常陸産Ⅳ… 雲母末、雲母片を多く含み、茨城産Ⅰ類ほどではないが長石・石英も多く含む。色調は灰色から青灰色を呈するものが多く焼成は堅緻である。

常陸産Ⅰ・Ⅱ・Ⅳとみなした須恵器は、県内の集落遺跡では少なからず認められるものである。

以上の観察から推定したものと胎土分析結果とを照合してみる。

県内産須恵器として推定した千葉市域産については胎土分析結果とほとんど整合している。このことは、肉眼観察による産地推定によってもきわめて高い確率で供給範囲や供給量からの検討が可能であることを示唆しているといえよう。

千葉市域産と印旛郡域産の今回の分析結果では、相互識別できるほどのRb－Sr分布域差はあらわれていない。しかし、印旛郡域の吉川窯製品Rb－Sr分布には二つのまとまりが認められる。『紀要８』（文献57）で胎土分析を実施した際、千葉市域となる中原窯製品と印旛郡域になる吉川窯製品ではRb－Sr分布域の違いだけでなくFe量にも差が認められており、個体差によって分析結果にばらつきがあらわれるようである。

市原市域産と推定したものも胎土分析では石川窯跡との同定結果が得られていることから肉眼観察でもある程度推定が可能であることを裏付けている。ただし、Rb－Sr分布域に差の認められる市原群と木更津群については前述のように肉眼観察による識別は困難である。

県内産須恵器の産地推定は、今後も継続して科学的分析と考古学的識別の両者をクロスチェックして実施しなければならないが、現状では千葉市域と市原市域というマクロ的な識別を行い、調整・器形から見て、さらに微視的な産地推定を行う必要がある。

次に千葉県内に多量に搬入されていると考えられる常陸産須恵器と推定したものは、胎土分析では産地不明の須恵器Ⅰ群となるものが多い。報告でも茨城・群馬の一部地域あるいは東海地方の湖西群のいずれかを推定しているが、胎土に雲母を含む特徴的な須恵器は茨城産との共通項ではあり得ても群馬・湖西との共通項とはなり得ないものである。また、年代的にも８世紀中葉以降のものであることから湖西地域の製品とは考えがたい。おそらく茨城の須恵器窯と

しては小野窯跡群・東城寺窯跡群・小高窯跡群・永井寄居窯跡等の新治郡に所在する諸窯、岩瀬町に所在する堀ノ内窯跡群、三和町に所在する尾崎浜ノ台窯跡・古屋東窯跡・堀崎窯跡等が該当する可能性が高いであろう。

県外産須恵器の産地同定については、考古学的観察による産地推定と胎土分析による産地同定が必ずしも一致していない。特に常陸産須恵器については現段階ではデータの蓄積を重ねていくことが最も必要なことであろう。

Ⅳ まとめ

房総における最古の須恵器生産遺跡は、7世紀前半に操業された市原市大和田窯跡である。しかしながら、「草刈型土器」や「須恵器手法土器」とよばれる特異な土器群をみるかぎり須恵器工人の存在はさらに古い段階にまで遡ると考えられる。このことから、今後、古墳時代の須恵器生産遺跡が発見される可能性もあるが、その生産は微弱なものであることが予想される。

奈良・平安時代の須恵器生産遺跡はわずかに10遺跡しか確認されていないが、それら窯跡の共通性と相違性がある程度浮き彫りになったのではないかと考えている。

上総地域の須恵器生産については、奈良時代にいたり一部地域で生産が隆盛をむかえるが、それは律令体制が華やかなころの一時期のみであった。平安時代にいたるとその生産が停止し、やがてロクロ土師器の全盛をむかえる。

8世紀後半代には南河原坂窯跡のように同一の遺跡のなかで須恵器生産とロクロ土師器生産が同時期に営まれるという現象が認められるようになる。この現象が一つの遺跡にとどまるかあるいは上総地域のほかの遺跡にも広がるかは判然としない。しかし、やがてロクロ土師器の全盛をむかえることを考えるならば、この時期に須恵器と土師器の製作者集団が同一遺跡のなかで入れ混ざって行くことを想定することは不自然ではないであろう。

上総地域の須恵器生産の中核である永田・不入窯跡の出自の問題については、永田17号窯跡の杯類にヘラ切り技法が用いられていたことから、この技法をもつ窯跡群との関連も新たに考慮にいれる必要になった。出自の候補地としては、従来から考えられているように形態の類似性や杯の底部外面調整に回転ヘラ削りが入念に行われる例から東海地域があげられる。東海地域には美濃須衛窯跡群・猿投山窯跡群・湖西窯跡群の3大窯跡群があり、いずれもがヘラ切り技法を持つ。ただし、美濃須衛窯跡群についてはヘラ切り技法が10世紀になるまで一貫して存続しており、永田・不入窯跡のヘラ切りから糸切りへの移行とは異なったものとなっている。また、甕の内面当て具痕は永田・不入窯跡は無文であるが、同心円または十字の当て具痕がみられるという相違点があるので直接の影響は考えにくい。

猿投山窯跡群・湖西窯跡群については8世紀前半までは確実にヘラ切り技法がみられるが、8世紀半ばになると糸切り技法が用いられている。また、甕についても内面の当て具痕跡が無文のものがみられる。このように両窯跡群の技法と永田・不入窯跡の技法は多くの点で合致しており、これらの窯跡の影響が類推される。

後藤建一氏は、「永田・不入窯跡にも湖西須恵器生産者が深く関与していた」と考えている（文献98）。氏によれば730年代前後から湖西地域の須恵器生産者が湖西をはなれて清ヶ谷窯跡群や隣国の駿河国（具体的には志太郡衙の所在する隣地の滝ヶ谷窯跡）などに拡散しており、

福島県会津若松市大戸窯跡群にも湖西須恵器生産者の影響がみられるとしている。この提言は魅力的である。なぜならば、湖西地域の須恵器の技術拡散期と、永田・不入窯跡の操業開始時期にさほどの差異がないことがあげられるからである。

しかしながら、湖西地域のみの須恵器生産の影響を受けたと考えることは無理がある。それはすでに後藤氏も指摘しているように湖西地域の有段構造の窯が永田・不入窯跡にはみられないことや、製品の微妙な形態の差異や盤Dや皿A・Bなどのように湖西の須恵器のなかにはみられないものが存在していることからもいえるであろう。上名主ヶ谷窯跡との関連問題もふくめ、さらに検討すべきことがらである。

永田・不入窯跡成立の背景については、これまでの国分寺契機説では解決できないことがあきらかとなった。成立年代は国分寺造営の詔が発布される以前の可能性が強い。永田・不入窯跡の最古の段階と考える永田17号窯跡から出土した遺物群は仏器的なものでなく、平城宮跡などで出土する一群の須恵器との器種構成の類似性が認められる。それらは端正なつくりの盤・高盤・高台付杯・高台付椀などであり、永田・不入窯跡の操業初期のものについては国衙をはじめとする官衙などに主に供給されていた可能性を考えておきたい。

下総地域では8世紀後半から須恵器生産が開始されている。この時期には上総地域でも須恵器生産の拡散が認められ、一つの画期ともいえよう。しかしながらその生産も継続することなくきわめて短期間のうちに終焉を迎えている。このような下総地域での須恵器生産の弱体性を常陸南部地域の須恵器生産と流通に関係づけて考えてみた。すなわち、8世紀における須恵器生産は、近隣諸窯からの搬入（交易）に対抗し得るものではなく、むしろ下総独自の商品流通のあり方となったのであろう。このことは須恵器生産のみならずロクロ土師器の生産にも大きく関係して、他県よりもいち早くロクロ土師器が盛行していく大きな要因ともなったと考えられる。

また、須恵器生産だけにとどまらず、瓦生産や土師器生産の窯業生産全体との関係を考える必要性を痛感した。これらをすべて含めて、技術の交流、生産組織の体制等の問題についてあらためて考えなければならない。

胎土分析では県内産須恵器の認定はほぼ確実におこなえるといえる。また、肉眼観察によっても県内産か否かの認定は高い確率で可能なものとなる。これからの課題として、供給先・供給量などを消費遺跡の側から検討することが急務となる。また、消費遺跡での須恵器の産地同定が進めば、生産地における操業年代についても詳細な検討が更に深化するであろう。

県外産須恵器も県内に多量に持ち込まれているが、これまでの消費遺跡の分析では八世紀初頭に湖西産、常陸産の須恵器が搬入され、それ以降9世紀中ごろまで常陸産須恵器が供給源となっていたものと考えられる。しかしながら、胎土分析では明確な産地同定までには至らなかった。常陸産須恵器の基礎データの増加が今後必要となってくるであろう。

図　　版

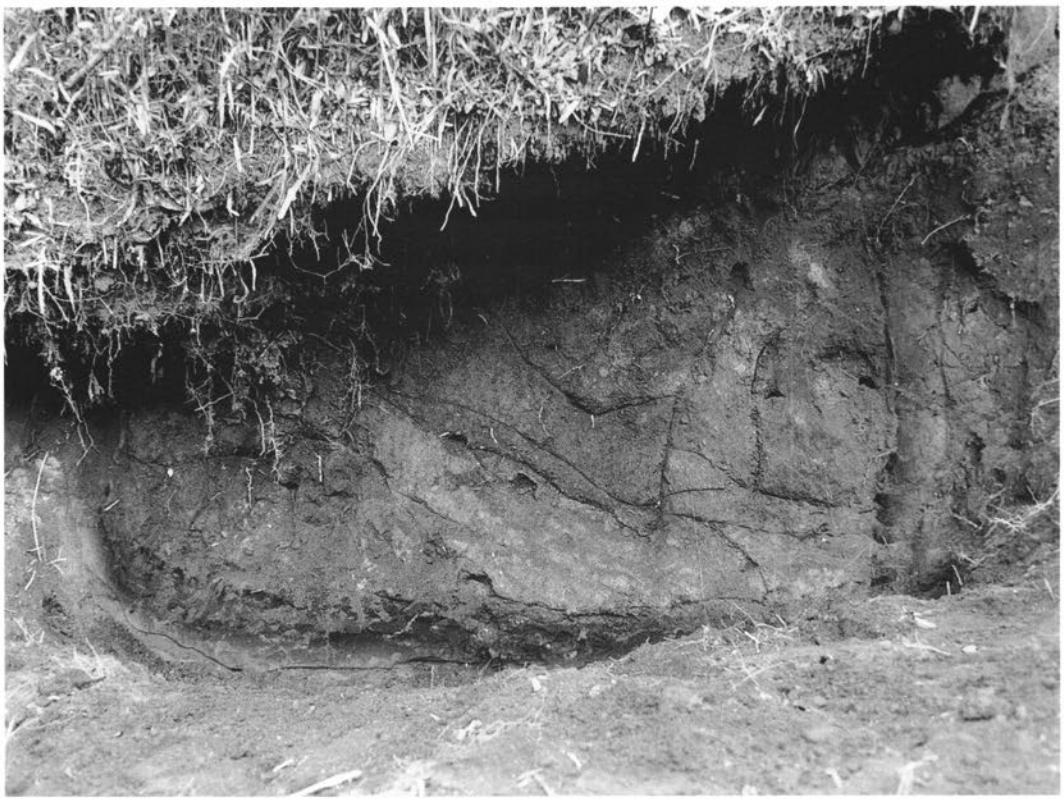
大和田窯跡窯体および焼台検出状況

大和田窯跡煙道部および天井部残存状況

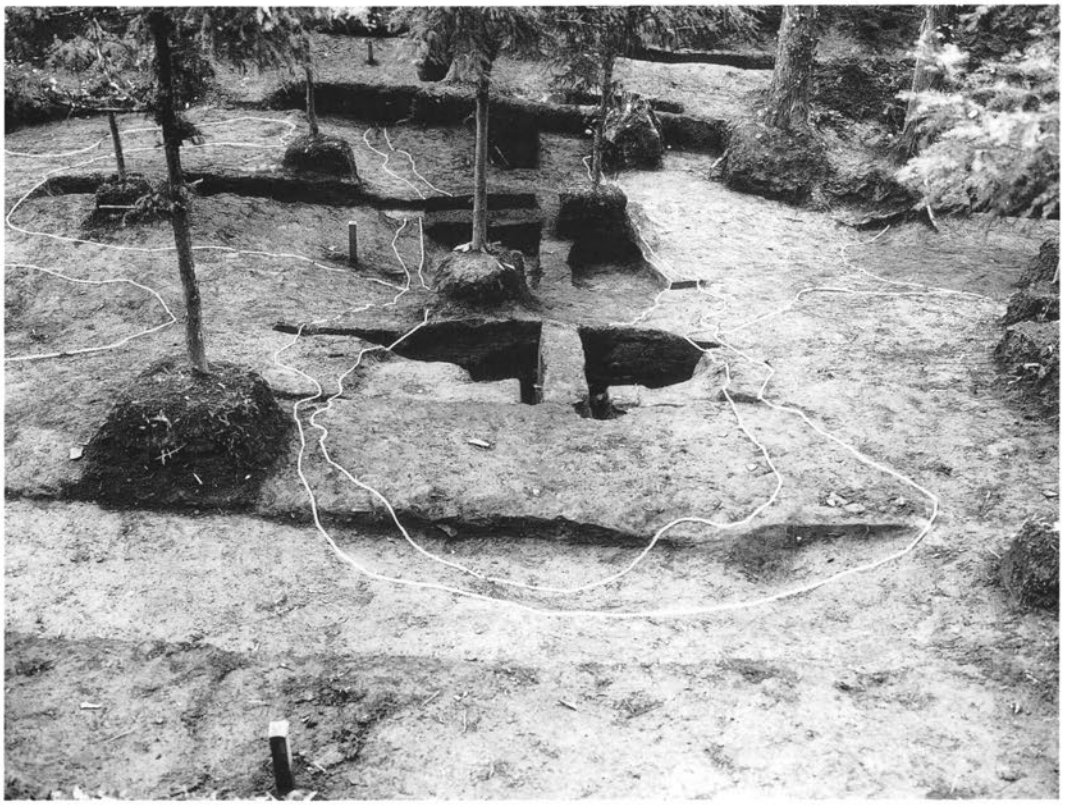
永田窯跡遠景

永田17号窯跡窯体断面

上名主ヶ谷窯跡窯体検出状況

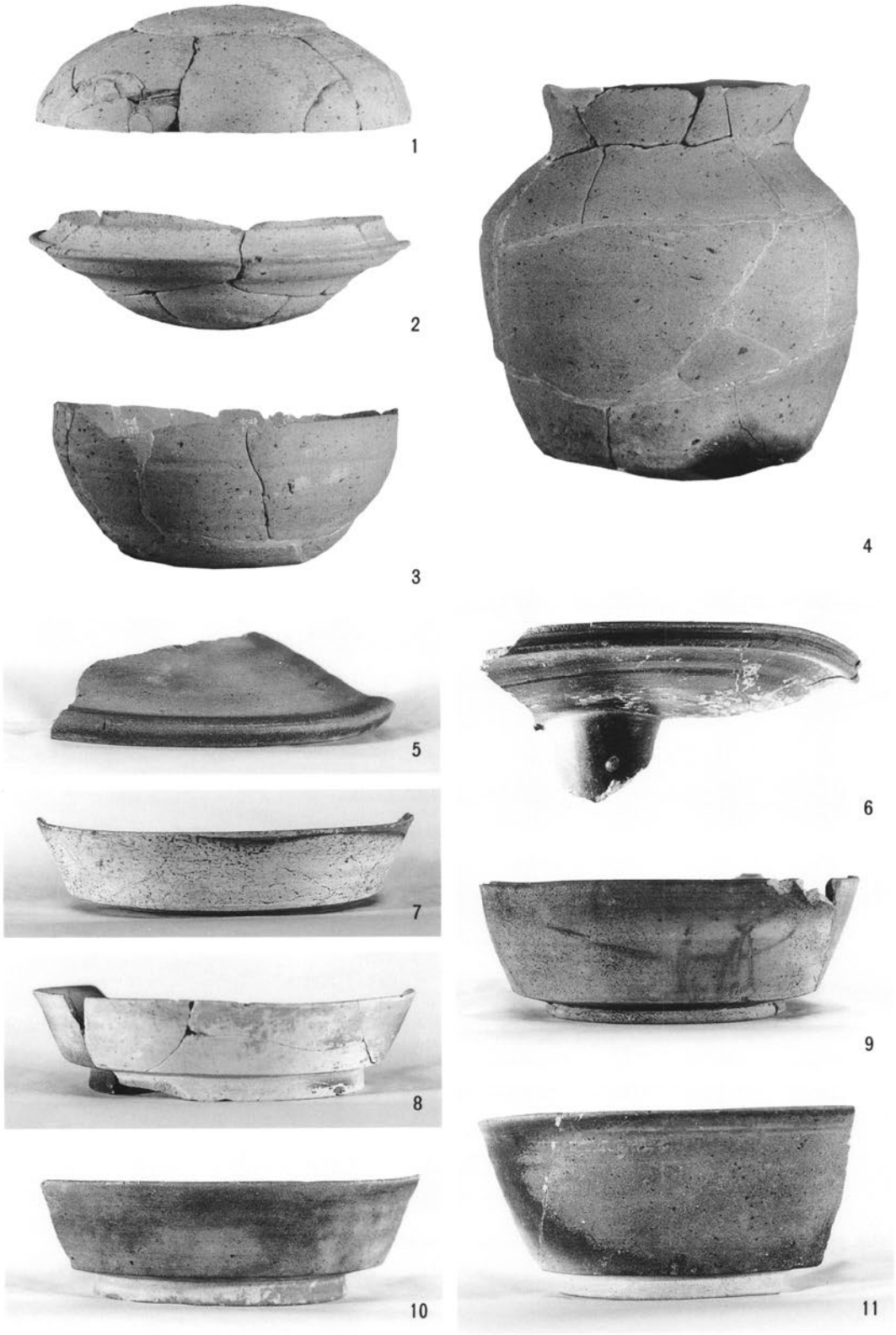


下片岡窯跡窯体断面



宇津志野窯跡窯体検出状況

吉川窯跡窯床検出状況



大和田窯跡出土遺物（1～4）・永田17号窯跡出土遺物（5～11）

12

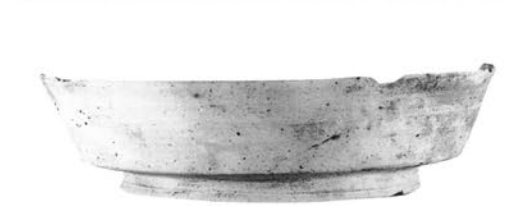
13

14

15

16

17



18

19

永田17号窯跡出土遺物（12～19）

20

21

22

23

24

25

27

26

28

29

30

永田17号窯跡出土遺物(20～22)・永田 5 号窯跡出土遺物(23～30)

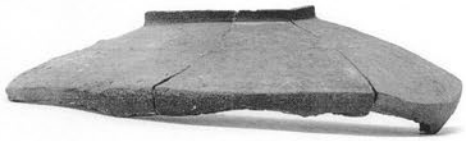
31

32

33

34

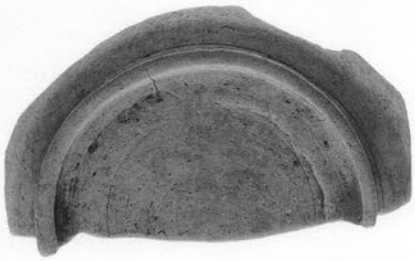
35



36

37

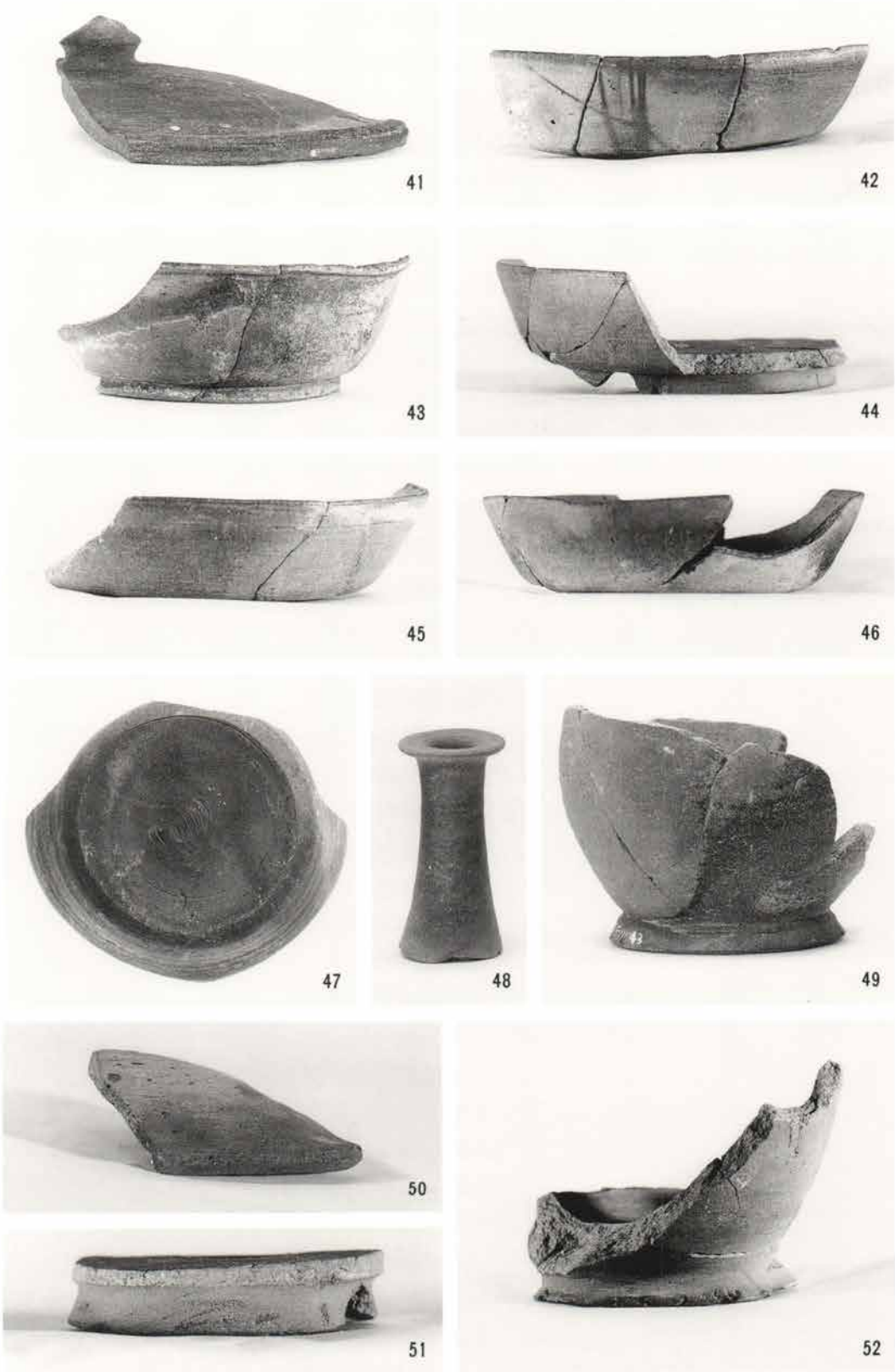
38



39

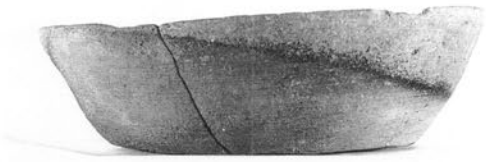
40

永田14号窯跡出土遺物（31～40）



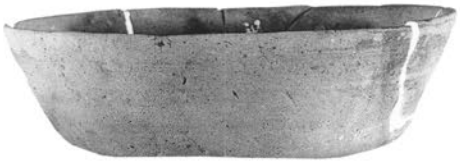
永田15号窯跡出土遺物(41～46)・不入 2 号窯跡出土遺物(47～49)・永田16号窯跡出土遺物(50～52)

53



54

55



56

57

58

59

60

永田16号窯跡出土遺物（53～60）

61

62

63

64

65

66

67

68

69

70

石川窯跡出土遺物（61～70）

71

72

73

74

75

76

77

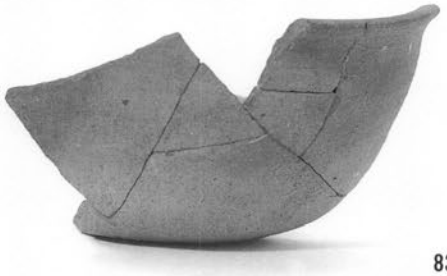
石川窯跡出土遺物（71～77）

78

79

80

81


83

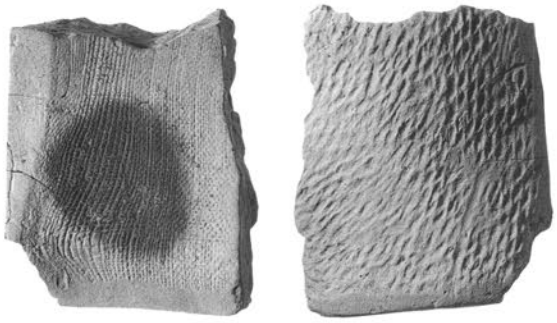
82

84

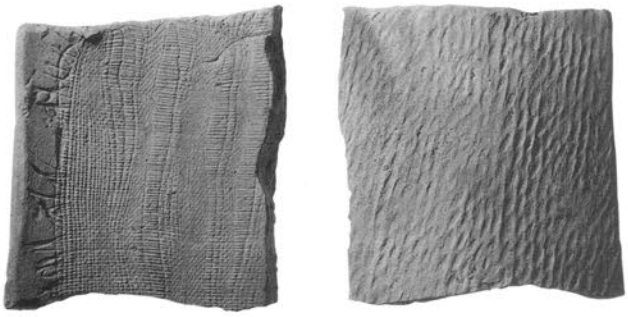
85

86

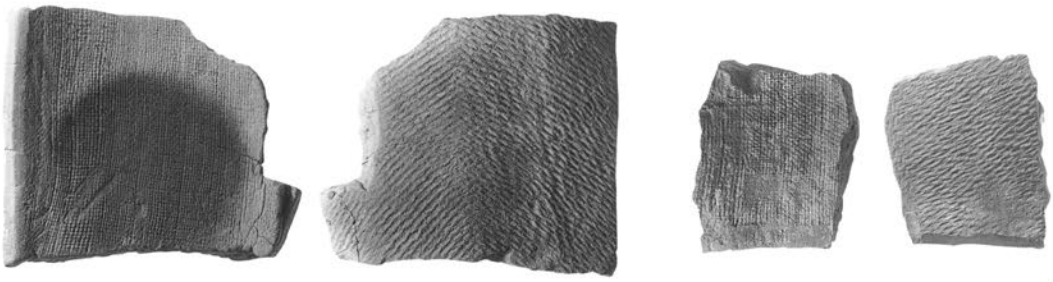
上名主ヶ谷窯跡出土遺物（78～86）



87



88



89

90

91

上名主ヶ谷窯跡出土遺物（87～91）

92

93

94

95

96

97

98

99

100

101

102

103

中原窯跡出土遺物（92～103）

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

中原窯跡出土遺物（104～115）

116

117

118

119

121

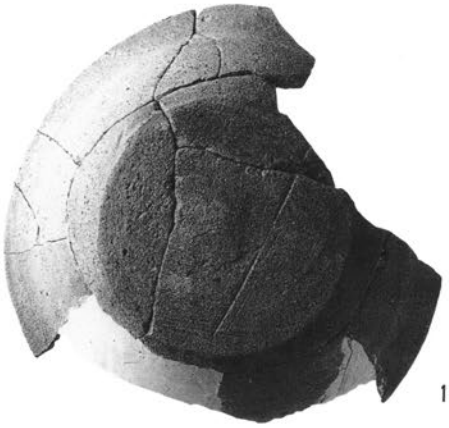
120

中原窯跡出土遺物（116～121）

122

123

125


124

126

127

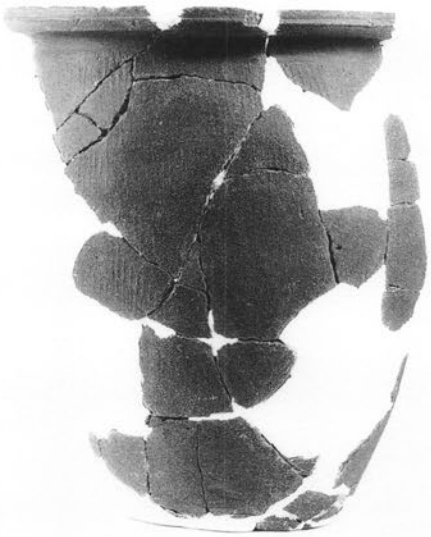
129

128

130

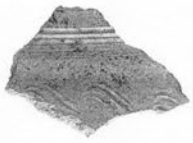
宇津志野窯跡出土遺物（122～130）

131

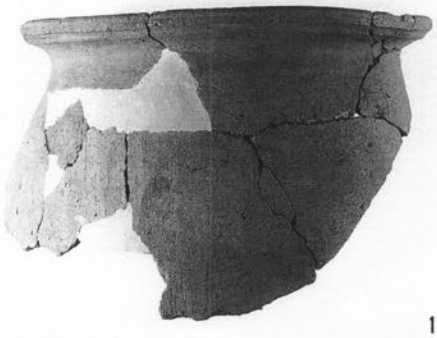


132

133



134



135

136

137

138

宇津志野窯跡出土遺物（131～138）

139

140

141

142

143

144

吉川窯跡出土遺物（139～144）

145

146

147

148

吉川窯跡出土遺物（145～148）

千葉県文化財センター研究紀要14

平成５年12月27日　発行

発　行　者　財団法人　千葉県文化財センター
千葉県四街道市鹿渡809－2
電話　043（422）８８１１

印　刷　所　株式会社　弘　報　社　印　刷
千葉市緑区古市場町474－268